

博 士 論 文

日本人英語学習者による英文の容認性判断に影響を及ぼす
サテライトフレーム言語・動詞フレーム言語としての言語特性
ー移動構文と結果構文を中心にー

2017年（平成29年）度

広島大学大学院教育学研究科

文化教育開発専攻 英語文化教育学分野

平野 洋平

謝辞

本論文は、筆者が広島大学大学院教育学研究科文化教育開発専攻博士課程後期に在籍中の研究成果をまとめたものです。本研究を遂行し、学位論文としてその成果をまとめるにあたり、実に多くのご支援とご指導を賜りました。

広島大学大学院教育学研究科教授 柳瀬陽介先生には、筆者が同研究科に進学する1年以上前から、進学に向けて親身に相談に乗っていただきました。在学中は、主任指導教員を引き受けていただきました。研究が順調に前進・発展するようご指摘やご助言を常に賜りましたし、学会発表や論文執筆において聴衆や読者を意識することの重要性も教えていただきました。また、適切な自己管理をしながら研究を進めることができましたのも、先生からのご指導やご配慮があったからに他なりません。心より深く感謝申し上げます。

広島大学大学院教育学研究科教授 松見法男先生、同研究科教授 深澤清治先生のご両名には、副指導教員を引き受けていただき、本論文の細部にわたりご指導をいただきました。松見先生には、副指導教員を引き受けていただく以前から何度もお時間を割いていただき、統計手法や実験内容に関することを中心に、実に多岐に渡るご指導とご助言を賜りました。深澤先生には、様々な仮説を基に考察を深めることを中心に、研究の幅を広げる上で貴重なご指摘やご助言を賜りました。また、他者のために研究をすることの重要性についてもご指導をいただきました。両先生に、心より感謝申し上げます。

広島大学大学院教育学研究科名誉教授（現 福山大学大学教育センター教授）中尾佳行先生には、定年を迎えられるまでの間、副指導教員を務めていただきました。先生からは、実に多くのご指導とご助言を賜りました。特に、幅広い言語理論を基に様々な観点から言語を観察し、常に学習者を意識することにより、理論面と実証面の双方から研究を進展・発展させることの重要性を教えていただきました。ここに記して、感謝の意を表します。

広島大学大学院教育学研究科教授 小野章先生からは、ゼミでの発表のたびに鋭い指摘をしていただき、研究の不備を補う上での様々なご助言を賜りました。また、先生からまれにいただくお褒めの言葉も研究を進める上で励みとなりました。心より感謝申し上げます。

同志社大学グローバル地域文化学部グローバル地域文化学科准教授 稲垣俊史先生には、第二言語習得研究の世界に飛び込むきっかけを与えていただきました。また、本研究を遂行するにあたり、様々なご助言と多くの情報を提供していただきました。深謝いたします。

日本第二言語習得学会会長 若林茂則先生を始め、同学会の会員の先生方には、2014年の夏季セミナーに始まり、2015年の年次大会など、様々なご指摘やご助言をしていただく機会に恵まれました。また、「J-SLA 優秀口頭発表賞」という身に余る評価をしていただきましたことも、その後の研究を進める上で大きな励みになりました。感謝いたします。

東京工業大学大学院生・日本学術振興会特別研究員 鈴木一徳氏には、同氏が共同執筆者としてかかわった研究—Yotsuya et al. (2014)—の実験資料について、筆頭著者の四谷厚子氏や共同執筆者の平川真規子先生などの了承を得た上で、その全てをお送りいただいた。鈴木氏を始め、Yotsuya et al. (2014) の執筆者の皆様のご理解とご協力に深謝いたします。

在学中、同期（とはいえ、人生の大先輩）である宮奥正道氏を始め、広島大学の大学院生の存在は、研究を進めていく上で大きな刺激と励みになりました。感謝申し上げます。

実験の実施にあたり、協力をしてくださった方々にもお礼申し上げます。皆様のご協力が無ければ、本研究が実を結ぶことはありませんでした。ありがとうございました。

有限会社勝田英数教室代表 勝田祐史氏には、仕事を継続しながらの博士課程への挑戦をご快諾していただいたにもかかわらず、ときに学業を優先するあまり、多大なるご迷惑をおかけしました。ここに記してお詫びいたしますと共に、同氏のご厚意に深謝いたします。

高知大学名誉教授・関西外国語大学名誉教授 大島新先生には、博士課程前期の修了式の日、「いつか博士に挑戦しなさいね」というお言葉をかけていただいて以来、折に触れ、激励の言葉を頂戴しました。あ那时的先生のお言葉に対し、「はい」とお返事した約束をようやく果たすことができます。先生からの絶え間ない激励に感謝いたします。

また、本研究を遂行し、本論文としてまとめるにあたり、ご支援やご協力を賜りながら、ここにお名前を記すことができなかった多くの方々にも、心より感謝申し上げます。

最後に、30代後半からの博士課程進学を、「一度しかない人生だから」と快く承諾し、実験資料の全てのイラストを描く（そして何度となく描き直す）など、常に応援し続け、心身の両面で支え続けてくれたすばらしい妻 夕子に心から感謝します。本当にありがとう。

目次

| | |
|---|-----------|
| 謝辞..... | ii |
| 図表題目一覧..... | vi |
| 第1章 序論 | 1 |
| 1.1. 本研究の背景..... | 1 |
| 1.1.1. 理論言語学・第二言語習得研究における知見の導入と学習英文法の見直し..... | 1 |
| 1.1.2. 文型から見る項と付加詞の区別..... | 2 |
| 1.1.3. 第二言語習得研究における項の取り扱い..... | 4 |
| 1.2. 本研究の対象とする英語表現..... | 6 |
| 1.2.1. 移動表現における日英語間の項構造の現れ方の差異..... | 6 |
| 1.2.2. 状態変化表現における日英語間の項構造の現れ方の差異..... | 10 |
| 1.3. 用語の定義と類型論的整理..... | 14 |
| 1.3.1. 移動事象の類型論的整理..... | 16 |
| 1.3.2. 状態変化事象の類型論的整理..... | 20 |
| 1.4. 本論文の構成..... | 25 |
| 注釈..... | 27 |
| 第2章 先行研究の概観 | 30 |
| 2.1. 先行研究における検証方法と検証結果の不一致..... | 30 |
| 2.1.1. 着点読みと場所読みの解釈を伴う移動構文の習得研究..... | 31 |
| 2.1.1.1. Inagaki (2002)..... | 31 |
| 2.1.1.2. Yotsuya et al. (2014)..... | 35 |
| 2.1.2. 弱い結果構文と強い結果構文の習得研究..... | 38 |
| 2.1.2.1. Yotsuya et al. (2014)..... | 38 |
| 2.1.2.2. 平野 (2016)..... | 41 |
| 2.1.2.3. スプリング (2015)..... | 47 |
| 2.2. 検証方法上の限界点..... | 52 |
| 2.2.1. 比較選択の問題..... | 52 |
| 2.2.2. 双極法の抱える問題..... | 55 |
| 2.3. 未検証の課題..... | 56 |
| 2.3.1. 統一的に検証されていない課題..... | 56 |
| 2.3.2. 結果構文の迂言的表現..... | 58 |
| 注釈..... | 63 |

| | | |
|-------------------|-------------------------------|------------|
| 第3章 | 実験的検討 | 64 |
| 3.1. | 実験参加者..... | 64 |
| 3.2. | 検証実験..... | 65 |
| 3.2.1. | 実験の概要..... | 65 |
| 3.2.2. | タスクの種類と数..... | 66 |
| 3.3. | 実験結果..... | 77 |
| 3.4. | 検証と考察..... | 86 |
| 3.4.1. | 移動構文に関する課題の検証結果と考察..... | 87 |
| 3.4.2. | 結果構文に関する課題の検証結果と考察..... | 95 |
| 3.4.3. | 迂言的表現に関する課題の検証結果と考察..... | 105 |
| 3.4.3.1. | 移動構文の迂言的表現について..... | 105 |
| 3.4.3.2. | 結果構文の迂言的表現について..... | 108 |
| 3.4.3.3. | 英語母語話者による判断..... | 115 |
| | | |
| 第4章 | 結論と今後の展望 | 120 |
| 4.1. | 本論文の要約..... | 120 |
| 4.1.1. | 移動事象・状態変化事象における日英語間の差異..... | 120 |
| 4.1.2. | 先行研究を補った点..... | 121 |
| 4.1.3. | 本論文の結論..... | 123 |
| 4.1.3.1. | 移動構文に対する小課題の結果..... | 124 |
| 4.1.3.2. | 結果構文に対する小課題の結果..... | 125 |
| 4.1.3.3. | 迂言的表現に対する小課題の結果..... | 126 |
| 4.1.3.4. | 研究課題に対する総括..... | 127 |
| 4.2. | 英語教育への示唆..... | 129 |
| 4.3. | 第二言語習得研究の展望..... | 133 |
| 4.3.1. | 使役移動構文の習得..... | 133 |
| 4.3.1.1. | 位置づけ..... | 133 |
| 4.3.1.2. | アスペクト仮説に基づく検証..... | 136 |
| 4.3.2. | 受動構文の習得との比較..... | 138 |
| | | |
| | 参考文献..... | 142 |
| | | |
| Appendix 1 | タスクの説明と練習課題..... | 149 |
| Appendix 2 | 移動表現のタスクに使用したテスト文とイラスト..... | 157 |
| Appendix 3 | 状態変化表現のタスクに使用したテスト文とイラスト..... | 185 |
| Appendix 4 | 授受構文のタスクに使用したテスト文とイラスト..... | 214 |
| Appendix 5 | 計算問題のタスク..... | 225 |

図表題目一覧

第1章

- 図 1-1 L1 が L2 よりも多様に項構造の現れ方を認める場合の L1 と L2 の関係
- 図 1-2 L2 が L1 よりも多様に項構造の現れ方を認める場合の L1 と L2 の関係
- 図 1-3 到着点を項に取ることのできる動詞の種類についての日英語間の差異
- 図 1-4 結果述語を項に取ることができ動詞の種類についての日英語間の差異
- 図 1-5 事象の構成と構成要素の関係
- 図 1-6 移動事象（位置の変化あり）における日英語の構成概念の表出の仕方
- 図 1-7 移動事象（位置の変化なし）における日英語の構成概念の表出の仕方
- 図 1-8 移動事象（位置の変化あり）における英語の構成概念の表出の仕方
- 図 1-9 状態変件事象の日英語の構成概念の表出の仕方（直訳できる場合）
- 図 1-10 状態変件事象の日英語の構成概念の表出の仕方（直訳できない場合）
- 図 1-11 結果述語を伴わない状態変件事象における構成概念の表出の仕方
- 図 1-12 移動事象・状態変件事象の日英語の構成概念の表出の仕方

第2章

- 図 2-1 Inagaki (2002) による絵図一文照合タスクの例
 - 図 2-2 Inagaki (2002) における JLE と NSE による様態+場所句型の移動構文に対する解釈の判断結果
 - 図 2-3 Yotsuya et al. (2014) における JLE と NSE による様態+場所句型の移動構文に対する解釈の判断結果
 - 図 2-4 Yotsuya et al. (2014) の真偽値判断タスクのイラスト例
 - 図 2-5 Yotsuya et al.(2014) における JLE と NSE による真偽値判断タスクの結果
 - 図 2-6 Yotsuya et al.(2014) における JLE と NSE による強い結果構文と弱い結果構文の容認性判断タスクの結果
 - 図 2-7 平野 (2016) の容認性判断タスクの例
 - 図 2-8 平野 (2016) における各種結果構文の容認度の結果
 - 図 2-9 スプリング (2015) のタスク例
 - 図 2-10 スプリング (2015) における動詞フレーム表現に対する評価
 - 図 2-11 スプリング (2015) におけるサテライトフレーム表現に対する評価
 - 図 2-12 Inagaki (2001) による容認性判断タスクの例
 - 図 2-13 Inagaki (2001) における容認性判断タスクの結果
-
- 表 2-1 Inagaki (2002) の絵図一文照合タスクに含まれたテスト文
 - 表 2-2 Inagaki (2002) における JLE と NSE による様態+場所句型の移動構文に対する解釈の判断結果
 - 表 2-3 Inagaki (2002) において、様態+場所句型の移動構文に対して、着点読みの解釈のみ、または、着点読みと場所読み双方の解釈を容認した回答者の数とその割合
 - 表 2-4 Yotsuya et al. (2014) における容認性判断テストの例文

第3章

- 図 3-1 移動構文（着点読み）とその迂言的表現用のイラストの例
- 図 3-2 移動構文（場所読み）用のタスクのイラストの例
- 図 3-3 結果構文とその迂言的表現用タスクのイラストの例
- 図 3-4 授受構文とその書き換え表現用タスクのイラスト例
- 図 3-5 移動構文とその迂言的表現に対する容認性判断の結果と各回答の占める割合
- 図 3-6 結果構文 [2 分類] に対する容認性判断の結果と各回答の占める割合
- 図 3-7 結果構文 [4 分類] に対する容認性判断の結果と各回答の占める割合
- 図 3-8 結果構文の迂言的表現に対する容認性判断の結果と各回答の占める割合
- 図 3-9 Inagaki (2001) における容認性判断タスクの結果（楢円付）
- 図 3-10 移動構文とその迂言的表現に対する容認性判断の結果と各回答の占める割合（楢円付）
- 図 3-11 結果構文の迂言的表現に対する容認性判断の結果と各回答の占める割合（再掲用）
- 図 3-12 NSE による移動構文の迂言的表現（and 型）の捉え方
- 図 3-13 NSE による結果構文の迂言的表現（and 型）の捉え方

- 表 3-1 実験群の背景情報のまとめ
- 表 3-2 タスクに含めた移動構文
- 表 3-3 タスクに含めた移動構文の迂言的表現
- 表 3-4 タスクに含めた結果構文
- 表 3-5 タスクに含めた結果構文の迂言的表現
- 表 3-6 タスクに含めた授受構文とその書き換え表現
- 表 3-7 移動構文と移動構文の迂言的表現に対する容認性判断の結果（平均値と標準偏差）
- 表 3-8 各実験群の各テスト文に対する各回答の占める割合（移動構文とその迂言的表現）
- 表 3-9 結果構文 [2 分類] に対する容認性判断の結果（平均値と標準偏差）
- 表 3-10 結果構文 [4 分類] に対する容認性判断の結果（平均値と標準偏差）
- 表 3-11 各実験群の各テスト文に対する各回答の占める割合（結果構文 [2 分類]）
- 表 3-12 各実験群の各テスト文に対する各回答の占める割合（結果構文 [4 分類]）
- 表 3-13 結果構文の迂言的表現に対する容認性判断の結果（平均値と標準偏差）
- 表 3-14 各実験群の各テスト文に対する各回答の占める割合（結果構文の迂言的表現）
- 表 3-15 1 元配置分散分析の結果（移動表現）
- 表 3-16 多重比較の結果（移動表現）
- 表 3-17 Inagaki (2002) において、様態+場所句型の移動構文に対して、着点読みの解釈のみ、または、着点読みと場所読み双方の解釈を容認した回答者の数とその割合
- 表 3-18 本研究において様態+場所句型の移動構文に対して、着点読みの解釈、または、着点読みと場所読み双方の解釈を容認した回答者数
- 表 3-19 移動構文の容認度を真偽値に換算した結果その真偽値の占める割合[1]
- 表 3-20 移動構文の容認度を真偽値に換算した結果その真偽値の占める割合[2]

- 表 3-21 分散分析の結果（結果構文 [2 分類]）
- 表 3-22 多重比較の結果（結果構文 [4 分類]）
- 表 3-23 結果構文の容認度を真偽値に換算した結果その真偽値の占める割合[1]
- 表 3-24 結果構文の容認度を真偽値に換算した結果その真偽値の占める割合[2]
- 表 3-25 実験群 B の学年ごとの容認性判断の結果 [結果構文]
- 表 3-26 実験群 B の学年ごとの容認性判断の結果 [移動構文]
- 表 3-27 実験群 B の学年ごとの容認性判断の結果 [移動構文の迂言的表現]
- 表 3-28 実験群 B の学年ごとの容認性判断の結果 [結果構文の迂言的表現]
- 表 3-29 タスクに含めた結果構文とその主動詞が表す共事象の構成要素

第 4 章

- 図 4-1 移動事象・状態変化事象の日英語の構成概念の表出の仕方
- 図 4-2 結果述語を項に取ることができる動詞の種類についての日英語間の差異
- 図 4-3 移動させる対象物の起点や到着点を表す語句を項に取ることができる動詞の種類についての日英語間の差異
- 図 4-4 日英語間で成立する受動構文の差異

第1章

序論

1.1. 本研究の背景

1.1.1. 理論言語学・第二言語習得研究における知見の導入と学習英文法の見直し

近年、理論言語学における知見を日本の英語教育に活用することが改めて積極的に論じられるようになり（藤田・松本・児玉・谷口（編），2012、今尾・岡田・小口・早瀬（編），2017、岡田・南出・梅咲（編），2010）、第二言語習得（以下、SLA (second language acquisition)）研究の成果を指導や学習に取り入れることの重要性や有効性も論じられている（廣森，2015、村野井，2006、白畑，2015、鈴木（編），2017）。また、英語授業の在り方と併せて、学習英文法に対する見直しの声も高まっている（加賀・大橋，2017、大津（編），2012、中島，2017、佐藤・田中，2009、上山，2016）。

昨今の日本の英語教育では、コミュニケーション力を重視する指導や学習への転換が叫ばれる中、英文法の指導や学習があたかも弊害であるかのように論じられることは少なくない。その点に配慮してのことか、中学校や高等学校の学習指導要領では、「文法については、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動と効果的に関連付けて指導すること。」と指導上の位置づけが示され、「(前略)用語や用法の区別などの指導が中心とならないように配慮し、実際に活用できるように指導すること。また、語順や修飾関係などにおける日本語との違いに留意して指導すること。」と、指導の在り方についても指摘がなされている。確かに、文法事項の理解だけを目的とした学習を進めていても学習者がしっかりと英語運用力を身に着けることは難しいことは言うまでもない。しかしながら、これは英語運用力を身に着ける上で、英文法の学習が十分なものではないということの意味するだけであり、その必要性までも否定するものではない。ただし、中学校学習指導要領の中に、「英語の特質を理解させるために、関連のある文法事項はまとまりをもって整理するなど、効果的な指導ができるよう『工夫』すること。（『 』は筆者による加筆）」とあるように、従来の学習英文法の指導の在り方については改善が求められている。

これまでの英文法指導の在り方が、必ずしも学習者に「体現される文法」(柳瀬, 2012: 53)に焦点を当ててきたものではなかったという点を反省し、今後も継続的に改善点を模索し続ける必要があると言えよう。

1.1.2. 文型から見る項と付加詞の区別

上述のとおり、指導要領の中で「語順や修飾関係などにおける日本語との違いに留意して指導すること」という指摘がなされているが、日本語と英語(以下、日英語)の間で、語順や修飾関係などにおける違いが顕著となる文法事項は少なくない。何と云っても、(1)に示すように、英語は各句の主要部(動詞句なら動詞、名詞句なら名詞のように、各句の中心的な要素)が各句の先頭に位置する「**主要部先頭言語**」(head-initial language)であるのに対し、日本語は主要部が各句の末尾に位置する「**主要部終端言語**」(head-final language)言語であるのだから、学習者は学習の初期段階から日英語間の構造上の違いを目の当たりにすることになると言える¹⁾。

| (1) | 英語 | 日本語 |
|-------|-------------------------------|----------------|
| a. V: | <u>study</u> linguistics | 言語学を <u>学ぶ</u> |
| b. N: | <u>student</u> of linguistics | 言語学の <u>学生</u> |
| c. A: | <u>afraid</u> of dogs | イヌが <u>怖い</u> |
| d. P: | <u>from</u> Boston | ボストン <u>から</u> |

(牛江, 2002: 113)

その初期段階の学習者が、英文の基本的な構造パターンを把握する上で、「**文型**²⁾」(sentence type)の指導や学習がこれまでに果たしてきた役割は大きいと考えられる(安藤, 2008、大橋・草山, 2017、安井, 2012)。従来、中学校や高等学校で指導されてきた文型は主に5文型であり、これは文が成立する上で動詞が必要とする主語・補語・目的語といった要素の現れ方を5つの型に分類したものであった。現在の学習指導要領の中に記載されている「**文構造**」もこの5文型に基づいていると言って差し支えないものと思われる。

- (2) a. SV 型 : Birds fly.
 b. SVC 型 : Mary became a teacher.
 c. SVO 型 : I've lost my key.
 d. SVOO 型 : She gave me the book.
 e. SVOC 型 : They call him Jack. (安藤, 2008: 9 より抜粋)

この 5 文型の枠組みでは、名詞または（叙述用法の）形容詞を動詞が要求する不可欠な — 省略することができない — 要素として取り扱い、副詞（句・節）や前置詞句などは文を成立させる上で動詞が必ずしも必要としない — 取り去っても文の良し悪しには影響が無い — 要素として扱われてきた。以下、動詞が要求する不可欠な要素を「項」(argument) と呼び、動詞が必ずしも必要としない要素を「付加詞³」(adjunct) と呼ぶ。この枠組みの問題点の 1 つとして、副詞や前置詞句の中には省略すると文を成立させられないものがあるにもかかわらず、それらもまとめて付加詞として取り扱われる点が挙げられる。その点に配慮し、7 文型や 8 文型などの提案がなされてきた。以下に 8 文型の例を示す。

- (3) a. SV 型 (1 項動詞) : The sun rose.
 b. SVC 型 (1 項動詞) : John is a teacher.
 c. SVO 型 (2 項動詞) : I like apples.
 d. SVOO 型 (3 項動詞) : Bill gave Sally a book.
 e. SVOC 型 (3 項動詞) : They named the baby Kate.
 f. SVA 型 (2 項動詞) : Mary is here/in the garden.
 g. SVCA 型 (2 項形容詞) : John is very fond of cats.
 h. SVOA 型 : (3 項動詞) : He put the key in his pocket.

(安藤, 2008: 13-14 より抜粋 [下線は筆者による加筆])

上記 (3f-h) の下線部のような表現は、5 文型では付加詞として扱われてきたものの、文の成立には必要不可欠な要素である。本研究では、文が成立する上で必要不可欠なこれらの副詞的要素や前置詞句も「項」とみなして議論を進める。

項としても付加詞としても機能しうる英語表現に、場所を示す前置詞句が含まれるが、この前置詞句を含む英文を日本語に訳した場合、項の場合と付加詞の場合とで次のような違いがあることが指摘されている。

(4) a. There are two grand pianos in the room.

(その部屋にグランドピアノが 2 台ある)

b. The boy was hiding behind the door.

(少年はドアの後ろに隠れていた。)

(5) a. He studied English at the University of London.

(彼はロンドン大学で英語を勉強した)

b. The actors are chatting behind the curtain.

(俳優たちは幕の裏側でおしゃべりをしている) (上野・影山, 2001: 42)

上野・影山 (2001) によると、(4) の下線部は項であり、(5) の下線部は付加詞である。それぞれ英文とそれを日本語に訳した文とを照らし合わせてみると、日本語では、(4) 項の場合は「～に」、(5) 付加詞の場合は「～で」という助詞の形ではっきりと区別されることが分かる。このように、助詞で項と付加詞を区別する日本語を母語とする学習者にとって、表面上 (発音を含む) 同じ副詞や前置詞句が項としても付加詞としても機能しうるという英語の特性は、英文が文として成立する上で必要な要素とそうでない要素を認識する上で躓きのポイントになるかも知れない。

1.1.3. 第二言語習得研究における項の取り扱い

5 文型であれ 8 文型であれ、様々な英語表現が項の現れ方によっていくつかの基本的な

型に分類されることについては、(項という用語は用いないにせよ) 学習者の多くが明示的に指導を受けることと思われる。しかし、その指導が施される際、学習者の母語である日本語における項の現れ方についてはどのように注意が払われているであろうか。項が複数の言語間(またはある1つの言語内)でどのように現れうるのかという「項構造」(argument structure)の問題は、母語(以下、L1)と対象言語(以下、L2)の項構造の現れ方の違いが対象言語の習得に及ぼす影響(転移)を検証する観点から、SLA研究における研究対象として重要な地位を占めてきた(White, 2003)。

当然のことながら、L1とL2の項構造の現れ方は必ずしも一致するわけではない。図1-1に示すように、L1がL2よりも項構造の現れ方を多様に認める表現もあれば、図1-2に示すように、L2がL1よりも項構造の現れ方を多様に認める表現もある。前者(図1-1)の場合、L1では認められるがL2では認められない項構造の現れ方を示す肯定証拠がインプットの中に存在しないために、学習者は、L1に認められる項構造の現れ方の内、本来L2では認められないものさえもL2に認めるという過剰一般化をしてしまう可能性がある。また、後者(図1-2)の場合、学習者はL1で認められる項構造の現れ方に相当するL2表現だけを習得し、L1では認められないような項構造の現れ方に相当するL2表現を、それがインプットに含まれているにもかかわらず、習得し損ねてしまう可能性がある。

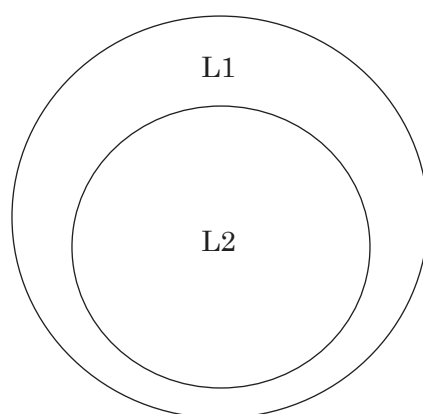


図 1-1 L1 が L2 よりも多様に項構造の現れ方を認める場合の L1 と L2 の関係
(Inagaki (2010), p.12, Figure 1.7. [一部修正])

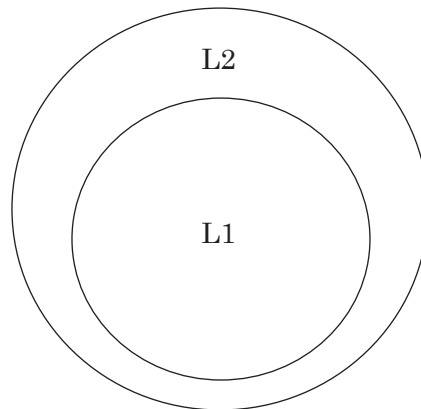


図 1-2 L2 が L1 よりも多様に項構造の現れ方を認める場合の L1 と L2 の関係
(Inagaki (2010), p.11, Figure 1.6. [一部修正])

さて、項構造の現れ方の差異に基づく SLA 研究の知見は、日本の英語教育が抱えている現実的な問題を十分的確に捉えてきたであろうか。当然、日英語間においても、日本語の方が多様に項構造を認める表現もあれば、英語の方が多様に項構造を認める表現もある。また、日本語を母語とする英語学習者の大半は、外国語として英語を学習する環境 — いわゆる EFL (English as a foreign language) 環境 — に置かれており、日英語間の「言語距離」(language distance) が大きいことも確かである。それゆえ、学習者は母語である日本語を拠り所としながら英語学習を進めていく場合がその大半であると言って差し支えないだろう。そして、それだけ一層、日本語の特性に影響を受ける可能性が高いと言えるかもしれない。これらの点を踏まえると、日英語間の項構造の現れ方の違いに留意しながら指導や学習を進めることは非常に大切なことと思われる。また、日英語間で項構造の現れ方の異なる英語表現を学習者が身に着けていく上で、どのような影響を受ける（あるいは受けない）のかを検証していくことは、その指導や学習の在り方に効果的な示唆を提供する上でも学習英文法の見直しを図る上でも有意義なことと考える。

1.2. 本研究の対象とする英語表現

1.2.1. 移動表現における日英語間の項構造の現れ方の差異

英語学習者が母語である日本語を拠り所としながら学習を進める上で、日本語に直接置

き換えること（以下、直訳）のできない英語表現が学習者にとって習得の難しい表現となる可能性は十分に考えられる。日本語に直訳することができない英語表現で、かつそこに日英語間の項構造の現れ方の差異を確認できる表現の中に、位置の変化を表す表現（以下、移動表現）と状態の変化を表す表現（以下、状態変化表現）がある。まず、移動表現の例として、次の文を参照されたい。

(6) a. Tom came/went to the station.

b. トムは 駅に 来た／行った。

(7) a. Tom ran to the park.

b. *トムは 公園に 走った。⁴

c. トムは 公園に 走って 来た／行った。

学習者の多くは、特に学習初期のころに、英語の動詞を、go は「行く」、run は「走る」のように、それに対応する日本語表現と一致させながら暗記する作業を行った経験があるだろう。これは EFL 環境で学習を進める日本語話者学習者には避けられないことであると思われる。しかし、上の例文を見るだけでも、学習者が学習初期の内から触れると思われる英語表現の中に、日英語間で使われ方が異なる場合があることが分かる。言うまでもなく、(6a) と (7a) はそれぞれ主語の Tom が駅と公園に移動したことを意味している。このように位置の変化を意味する場合、移動の起点・中間点・到着点を示す空間表現（経路）の内、少なくとも1つが項として要求される。上記の例は到着点が項として機能している例である。(6a) と (7a) は、いずれも移動を表す表現ではあるが、双方の主動詞に着目すると、(6a) では Tom がどのように移動したか（以下、様態）が明示されていないのに対し、(7a) では「走る」という行為によって移動したことが示されていることが分かる。以下では、walk／歩く や run／走る などの移動の様態を表す動詞を「**移動様態動詞**」(manner-of-motion verb)、と呼び、come／来る や go／行く などの移動の様態を含意しない動詞を「**有方向移動動詞**」(directed motion verb) と呼ぶことにする⁵。

また、(6b) と (7b) を見ると、(5a) が日本語に直訳できるのに対し、(7a) が直訳できないことが分かる。(7a) のような英語表現を自然な日本語表現として訳すには、(7c) の「走って来た／行った」のように有方向移動動詞を併せて用いる必要がある。ここまでの議論から、英語は移動様態動詞も有方向動詞も到着点を項構造に取ることができるのに対し、日本語は移動様態動詞が到着点を項構造に取ることができないと言える。このように、移動表現における項構造の現れ方は、より多くのタイプの動詞が到着点を項構造に含めることができるという点で、英語の方が日本語よりも多様であると言える。この日英語間の関係を図 1-3 に示す。(日本語を母語とする英語学習者にとっての母語と対象言語を示すため、日本語を L1、英語を L2 と表記する。)

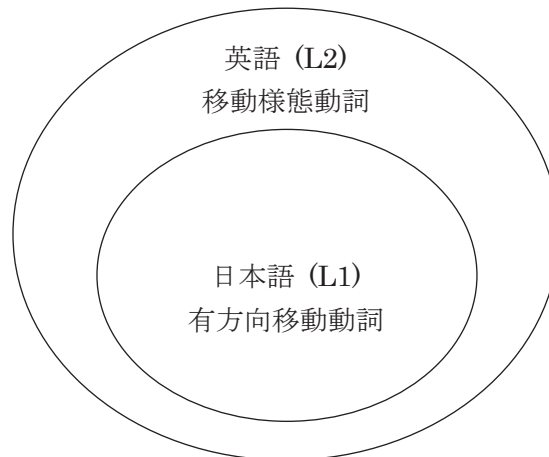


図 1-3 到着点を項に取ることのできる動詞の種類についての日英語間の差異
(Inagaki (2010), p.66, Figure 3.1. [一部修正])

なお、(7c) の「走って来た／行った」のような日本語表現を直接英語に置き換えた (8a, b) のような表現を位置変化の「**迂言的表現**」(periphrastic expression) と呼ぶことにする。(8a) は移動様態動詞と有方向移動動詞を and で並列させた表現であり、(8b) は主動詞に有方向移動動詞を用い、移動の様態を文末の by -ing で表現したものである。

- (8) a. Tom ran and came/went to the park.
b. Tom came/went to the park by running.

ここで、動詞の性質と併せて到着点を示す表現にも焦点を当てたい。(6) に示した *came/went (come/go)* などの有方向移動動詞は、本来的に方向性ないし起点・着点を含意する動詞とみなされ、到着点を示す語句を項として取ることが多い(上野・影山, 2001)。実際、これらの動詞が本来は行為や活動の行われる場所を示す *in* や *under* などの前置詞句と共起した場合にも、その前置詞句を到着点として解釈することが可能である⁶。

(9) a. *The mouse went under the table.*

b. ねずみはテーブルの下へ行った。 (米山, 2009: 37)

また、移動様態動詞がこれらの前置詞句と共起した場合、その前置詞句を到着点としても解釈することも、行為や活動が行われている場所として解釈することも可能であることが知られている。

(10) a. *John swam under the bridge.* (着点読み／場所読み)

b. *John ran behind the wall.* (着点読み／場所読み)

c. *John jumped in the water.* (着点読み／場所読み) (Inagaki, 2002: 13)

(10a) 中の *under the bridge* は、*John* が泳いで到着した場所として解釈することも、*John* が泳ぐという行為を行った場所として解釈することも可能である。以下、到着点としての解釈を「着点読み」(directional reading)、場所としての解釈を「場所読み」(locational reading) と呼ぶことにする⁷。また、到着点を表す表現と行為を行った場所を表す表現をそれぞれ「着点句」、「場所句」と呼ぶことにする。上の例は、1 つの英語の前置詞句が着点句としても場所句としても機能し得ることを示している。なお、着点句の場合、これらの前置詞句は項として機能し、場所句の場合、これらの前置詞句は付加詞として機能する。

ここで、(10) の英文を日本語に直訳したものを示し、日英語間の差異を確認する。

- (11) a. ジョンは 橋の 下で /*に 泳いだ。 (場所読みのみ)
 b. ジョンは 壁の 後ろで /*に 走った。 (場所読みのみ)
 c. ジョンは プールの 中で /*に 跳んだ。 (場所読みのみ)

(Inagaki, 2002: 14 [下線部は筆者による加筆])

これらの日本語表現から、(10) の英文とは対照的に、日本語において移動様態動詞が場所句と共起した場合、場所読みの解釈しかできないことが分かる。(10) の英文を着点読みの表現として日本語に訳出するには、(7) で示した場合と同様、「橋の下に泳いで来た／行った」のように、有方向移動動詞を併せて用いる必要がある。このようにして見ると、英語は日本語に比べ、より多くのタイプの動詞が到着点を項構造に取ることができるだけでなく、到着点として機能する表現の中に本来は場所を表す表現が含まれるという点で、より多くのバリエーションがあることが分かる。なお、(11) の日本語の場合、場所句が「～で」という助詞で表現されていることから、この場所句が付加詞であることが確認できる。

1.2.2. 状態変化表現における日英語間の項構造の現れ方の差異

ここまで移動表現に関する日英語間の違いを概観してきたが、これに類似した違いが、状態変化表現においても確認できることが知られている。次に、状態変化表現の例文として以下の文を参照されたい。

- (12) a. Mike painted the wall black.
 b. マイクが 壁を 黒く 塗った。
 c. John broke the glass into pieces.
 d. ジョンは グラスを 粉々に 壊した。
- (13) a. Paul kicked the door open.
 b. *ポールは ドアを オープンに 蹴った。

- c. ポールは ドアを 蹴って 開けた。(蹴り開けた)
- d. Bob stabbed the man to death.
- e. *ボブは 男性を 死に 刺した。
- f. ボブは 父親を 刺して 殺した。(刺し殺した)

(12a, c) と (13a, d) はそれぞれ、主語の Mike、John、Paul、Bob が行った行為や活動によって、壁、ガラス、ドア、男性の状態が何かしら変化したことを意味している。このように、状態の変化を意味する場合、その対象を表す語句と変化した状態（以下、結果）を示す語句が項として要求される⁸。(12a, c) と (13a, d) はいずれも状態変化を表す表現ではあるものの、それぞれの主動詞に着目すると、(12a, c) は状態の変化を含意する動詞（以下、「**状態変化動詞**」(change-of-state verb)）が用いられている一方、(13a, d) はそういう含意がない動詞（以下、「**働きかけ動詞**」(act-on verb)）が用いられていることが分かる⁹。その証拠に、文末の結果を示す語句（以下、「**結果述語**」(resultative predicate)）を省略すると、(14) は依然ガラス（の形状）や壁（の色）が変化したことを意味するのに対し、(15) はドアや父親の状態が何かしら変化したことを必ずしも意味するものではなくになってしまう¹⁰。

(14) (11a, c) の結果述語を省略

- a. Mike painted the wall.
- b. John broke the glass.

(15) (12a, d) の結果述語を省略

- a. Paul kicked the door.
- b. Bob stabbed the man.

また、(12b, d) と (13b, e) を見ると、(12a, c) が日本語に直訳できるのに対し、(13a, d) が直訳できないことが分かる。(13a, d) のような英語表現を自然な日本語表現として訳す

には、(13c, f) の「蹴って開けた (蹴り開けた)」、「刺して殺した (刺し殺した)」のように状態変化動詞を併せて用いる必要がある。ここまでの議論から、英語は状態変化動詞も働きかけ動詞も結果述語を項に取ることができるのに対し、日本語は働きかけ動詞は結果述語を項に取ることができないと言える。このように、状態変化表現における項構造の現れ方は、英語の方がより多くのタイプの動詞が結果述語を項構造に含めることができるという点で、日本語よりも多様であると言える。この日英語間関係を図 1-4 に示す。

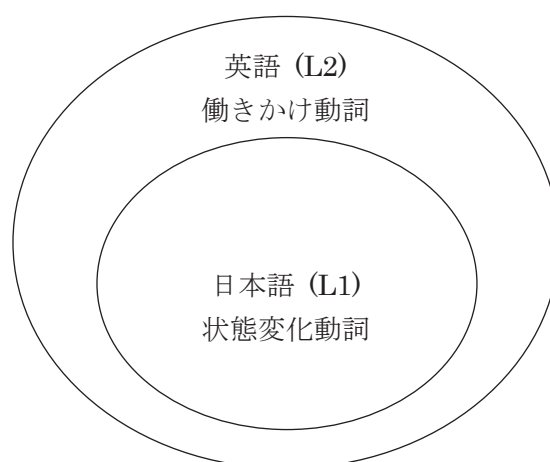


図 1-4 結果述語を項に取ることができる動詞の種類についての日英語間の差異
(稲垣俊史, 私信, 2014 年 7 月 9 日 [一部修正])

図 1-4 を図 1-3 と比較してみると、移動表現においても状態変化表現においても、項構造の現れ方の日英語間の差異が同様のものであることが分かる。なお、(16) のように使役動詞 *make*、*get* を主動詞として用いて状態変化を表す表現を、以下では状態変化表現の「**迂言的表現**」と呼ぶことにする。(16a, c) は結果構文の主動詞と使役動詞 (*make* または *get*) を *and* で並列させた表現であり、(16b, d) は主動詞に使役動詞を用い、結果構文の主動詞を文末の *by -ing* で表現したものである。これらの迂言的表現における使役動詞 *make* と *get* の使い分けは、結果述語が形容詞句のものについては *make* を用い、前置詞句のものについては *get* を用いるのが典型的であるという指摘が Jackendoff (1990) によってなされている。

- (16) a. Paul kicked and made the door open.
b. Paul made the door open by kicking it.
c. Bob stabbed and got the man to death.
d. Bob got the man to death by stabbing him.

ここで、主動詞に当てていた焦点を、変化した状態を示す結果述語に移したい。状態変化を位置変化が意味的に拡張したメタファー表現としてみなす考え方 (Goldberg, 1995、Talmy, 2000) から、抽象的な状態が物理的な位置と同様に扱われることは言語ではよく見られる。その観点から見ると、(6a) *to the station* や (7a) *to the park* の前置詞 *to* が到着点までの方向性を表しているように、(12c) *into pieces* や (13d) *to death* の前置詞 (in)to も変化した状態 (結果) までの方向性を表していると見ることができる。しかしながら、(12a) の *black* や (13a) の *open* などは、変化した状態 (結果) を表しているものの、その状態に至るまでの方向性が形態的にも統語的にも示されていない (宮腰, 2009)。また、結果述語が日本語でどのように訳出されるかに着目しながら、再度 (12b, d) を見てみると、「黒く」のような「〜く」形の表現と、「粉々に」のような「〜に」形の表現として訳されていることが分かる。必ずしも英語における形容詞句型の結果表現が「〜く」形で訳され、前置詞句型の結果表現が「〜に」形で訳されるというわけではないが、これらの表現は明示的に結果を示す上で不可欠な表現であると言える¹¹。このようにして見ると、状態変化表現において、英語は日本語に比べ、より多くのタイプの動詞が結果述語を項に取ることができるだけでなく、結果述語として機能する表現に変化の方向性を明示する表現としない表現が含まれるという点で、より多くのバリエーションがあることが分かる。

ここまで移動表現と状態変化表現における日英語間の差異を概観してきた。このような日英語間の差異は学習者にどのような影響を及ぼす (あるいは及ぼさない) であろうか。本研究は、日本語を母語とする英語学習者が、ここまで概観したような英語の移動表現や状態変化表現をどの程度自然な表現であると感じるかを検証するとともに、その判断に影響を及ぼす日本語と英語の特性を明らかにしようとするものである。また、その検証結果

に基づき、英語にはない日本語の特性、あるいは日本語にはない英語の特性をどのように英語の指導や学習に取り入れるかについて新たな示唆を提供することを目的とする。

1.3. 用語の定義と類型論的整理

ここまで概観してきた移動表現と状態変化表現における日英語間の差異は、Talmy (2000) によって提唱される言語類型論の観点から類似的にとらえられてきた(小野, 2004, 2012, Talmy, 2000, 米山, 2009)。本節では、本論文における用語の定義を行いながら、上述の日英語間の差異を類型論的な観点から再整理する。

まず、これまでに見た表現の内、(6a) (7a) (10) のような「主語+動詞+前置詞句」型の移動表現を「**移動構文**」(motion construction) と呼ぶことにする。さらに、移動構文の動詞と前置詞句の性質に着目し、(6a) タイプを「**方向+着点句**」型、(7a) タイプを「**様態+着点句**」型、(10) のタイプを「**様態+場所句**」型と呼ぶことにする。

(17) 移動構文

- a. Tom came/went to the station. (= (6a)) 「**方向+着点句**」型
- b. Tom ran to the park. (= (7a)) 「**様態+着点句**」型
- c. John swam under the bridge. (= (10a)) 「**様態+場所句**」型

また、(12a, c) や (13a, d) のような「主語+動詞+目的語+結果述語」型の状態変化表現を「**結果構文**」(resultative construction) と呼ぶことにする。結果構文の内、(12a, c) のように主動詞が状態変化動詞のものを「**弱い結果構文**」(weak resultative construction) と呼び、(13a, d) のように主動詞が働きかけ動詞のものを「**強い結果構文**」(strong resultative construction) と呼ぶことにする¹²。前者の弱い結果構文は、主動詞自体が状態変化を含意するために、主動詞の表す行為と結果述語の表す結果との間にある因果関係を認識するのに要する推論が「弱い」もので済むのに対し、後者の強い結果構文は、主動詞が状態変化を含意しないために、行為と結果の因果関係を認識するのに「強い」推論を

要する構文であると考えられる。さらに、結果述語の品詞を考慮に入れ、(12a) を形容詞句型の弱い結果構文、(12c) を前置詞句型の弱い結果構文、(13a) を形容詞型の強い結果構文、(13d) を前置詞句型の強い結果構文と分類し、それぞれ「弱一形」「弱一前」「強一形」「強一前」のように表記する。

(18) 弱い結果構文

- a. Mike painted the wall black. (= (12a)) [形容詞句型] (弱一形)
- b. John broke the glass into pieces. (= (12c)) [前置詞句型] (弱一前)

(19) 強い結果構文

- a. Paul kicked the door open. (= (13a)) [形容詞句型] (強一形)
- b. Bob stabbed the man to death. (= (13d)) [前置詞句型] (強一前)

では、これらの構文を含めた移動表現や状態変化表現における日英語間の差異を、Talmy (2000) の提唱する類型論の観点からまとめていく。まず、以下では、移動や状態変化を表す1つ1つの出来事を「**マクロ事象**」(macro event) と呼ぶことにする¹³。Talmy (2000) による言語類型論では、ある1つのマクロ事象は「**枠付け事象**」(framing event) と「**共事象**」(co-event) という大きく2つの下位事象に分けられる。マクロ事象を構成するこれら2つの下位事象の内、「枠付け事象」がマクロ事象の中心的な役割を果たすものであり、(20) に示す4つの概念要素によって成り立っているとされる。また、「共事象」はマクロ事象における随意的な事象で、枠付け事象を支持する補助的な機能を果たすものであり、「様態」「原因」などの概念要素からなる。

- (20) a. 図 (Figure) となるもの (figural entity)
- b. 地 (Ground) となるもの (ground entity)
- c. 活性化過程 (activating process) :
 変化 (transition)

安定 (fixity)

d. 関連付け関数 (association function)

これら 4 つ概念要素の内、「関連付け関数」が、図と地の関連付けを行うという意味で最も重要な役割を果たしていると考えられる。この関連付け関数のみ、あるいは、地となるものと一緒になった関連付け関数を「**中核的スキーマ**」(core schema) と呼ぶ。ここまでを整理すると、以下のようにまとめられる。

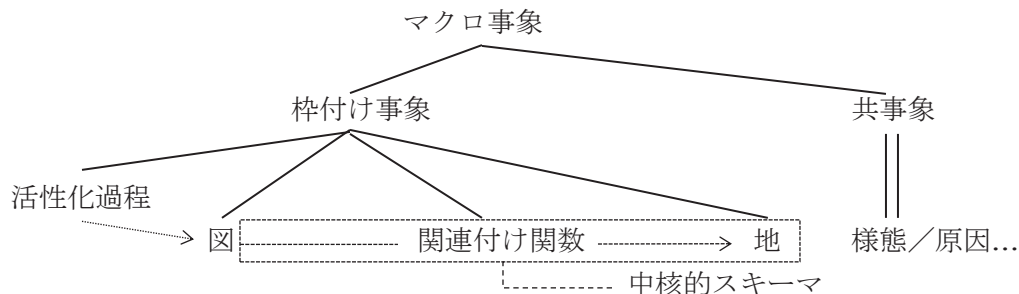


図 1-5 事象の構成と構成要素の関係 (出水, 2012: 40 [一部改編])

Talmy (2000) の類型論では、この中核的スキーマがどのような統語的 (または形態的) 要素によって言語表出されるかによって、言語が大きく 2 つのタイプに分けられるとされる。1 つは中核的スキーマが主動詞によって表される「**動詞フレーム言語**」(verb-framed language) であり、もう 1 つは中核的スキーマが前置詞句や副詞句といった主動詞以外の要素 (以下、サテライト) によって表される「**サテライトフレーム言語**」(satellite-framed language) である。以下、移動事象と状態変化事象の順にそれぞれ具体的に整理を行い、日本語が「動詞フレーム言語」に属し、英語は「サテライトフレーム言語」に属することを見る。

1.3.1. 移動事象の類型論的整理

まず、移動事象では、枠付け事象を構成する 4 つの概念要素は以下のものとされる。

- (21) a. 図 (Figure) となるもの (figural entity) = 移動するもの
 b. 地 (Ground) となるもの (ground entity) = 図の位置
 c. 活性化過程 (activating process) :
 変化 (transition) = 移動 (motion) [事象における位置の変化あり]
 安定 (fixity) = 静止 (stationariness) [事象における位置の変化なし]
 d. 関連付け関数 (association function) = 経路 (path) / 場所 (site)

これら 4 つの概念の中で移動事象における最も中心的な概念 (中核的スキーマ) は、着点読みの場合は「経路 (+地)」であり、場所読みの場合は「場所 (+地)」である。まず、着点読みの場合について見ていくと、上の (7) で見たとおり、様態を伴う移動を表す場合、英語は移動様態動詞が着点句を項に取ることができる一方、日本語はそれができず、有方向移動動詞を主動詞として用いなければならない。

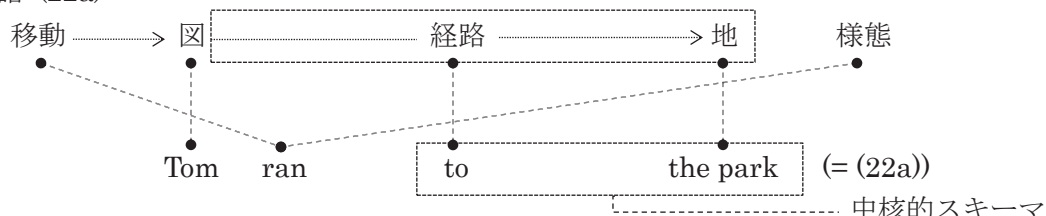
- (22) (= (7)) a. Tom ran to the park.
 b. *トムは 公園に 走った。
 c. トムは 公園に 走って 来た / 行った。

このような着点読みの移動事象では、Tom / トム (= 図) の位置の変化が生じることが「移動」(motion) (= 活性化過程) で示され、Tom / トムの the park / 公園 (= 地) に対する関係が「経路」(path) (= 関連付け関数) によって定められると考える。図式化すると、(22) の英語と日本語の表現は図 1-6 のように表すことができる。

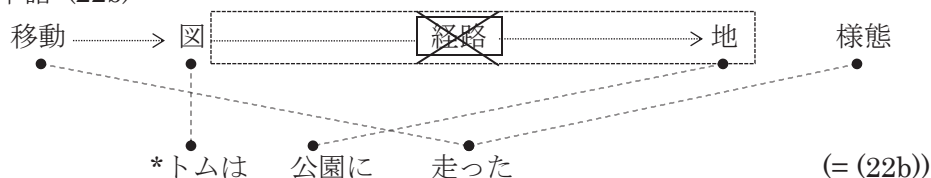
このように、移動事象の中核的スキーマである「経路 (+地)」が英語では前置詞が中心となる表現で表され、日本語では主動詞が中心となる表現で表されていることから、英語が「サテライトフレーム言語」に属し、日本語が「動詞フレーム言語」に属するものと判断できる。(22b) の日本語が非文となるのは、「経路」を表す統語的要素を欠いているからであると考えられる。また、共事象を構成する要素 (「様態」) に着目すると、英語では主

節の中心的な働きをする動詞で表されているのに対し、日本語では副詞的な要素(付加詞)として表されていることを捉えることができる。

A. 英語 (22a)



B. 日本語 (22b)



C. 日本語 (22c)

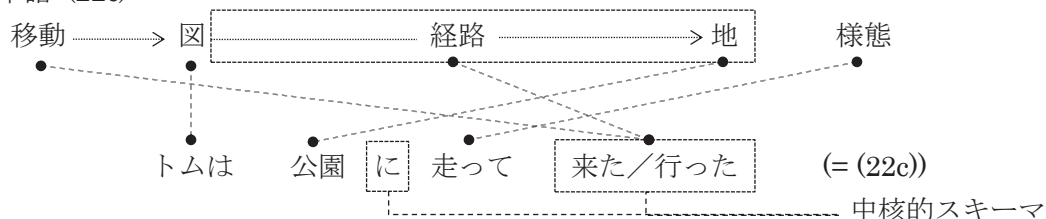
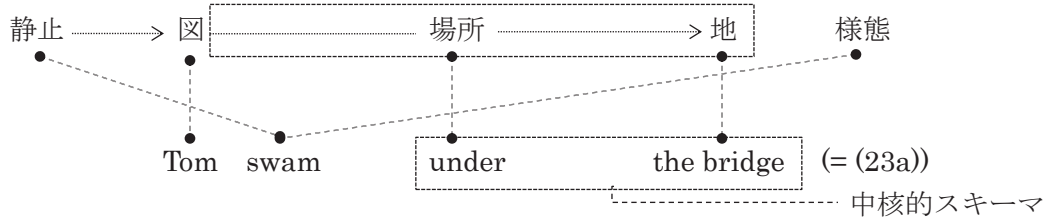


図 1-6 移動事象 (位置の変化あり) における日英語の構成概念の表出の仕方

次に、場所読みの場合を見ていく。位置の変化を表さない (10) や (12) の移動事象では、Tom/トム (=図) がある位置に留まっていることが「静止」(stationariness) (=活性化過程) で示され、Tom/トムの the bridge/橋 (=地) に対する関係が「場所」(site) (=関連付け関数) によって定められると考えられ、図 1-7 のようにまとめられる。日英語の双方において、中核的スキーマが同じように表出されていることが分かる。

- (23) (= (10)) a. John swam under the bridge.
 b. ジョンは 橋の 下で / *に 泳いだ。

A. 英語 (23a)



B. 日本語 (23b)

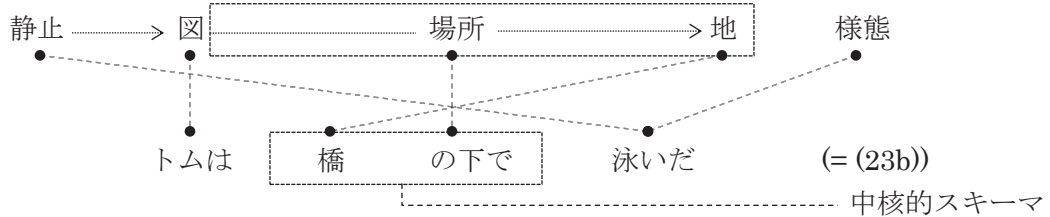


図 1-7 移動事象（位置の変化なし）における日英語の構成概念の表出の仕方

ここで、(23a) の英文は着点読みの解釈が可能であることを思い出されたい。この場合、移動事象の構成概念は図 1-8 のように表出するものと考えられる。

英語 (23a)

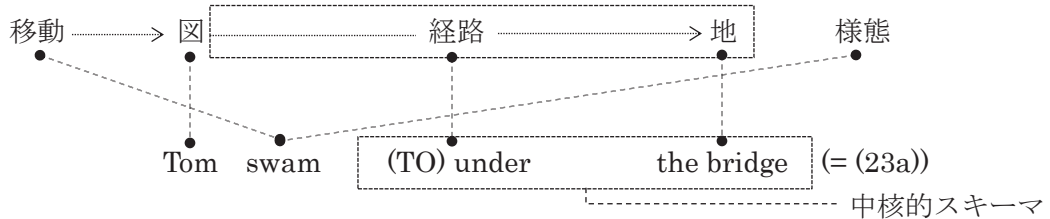


図 1-8 移動事象（位置の変化あり）における英語の構成概念の表出の仕方

ここで着目すべきは、経路を表す前置詞 (TO) under の部分である。Jackendoff (1983, 1990) による語彙概念構造の提案がなされて以降、本来場所句として機能する前置詞句が着点読みの解釈を伴う場合、その前置詞が持つ概念構造の中に TO という要素が含まれているという考え方が広く受け入れられてきた (Inagaki, 2002、米山, 2009)。この場合の前置詞句の統語的な内部構造を示したものが以下の (24) である。

(24) [Path TO ([Place UNDER ([Thing BRIDGE])])]

なお、この TO は移動の「経路」を表す概念上の要素であり、基本的に音形や形態を持たない。ただし、この概念が語として表出したものが前置詞 to であり、前置詞 to は到着点に至るまでの方向性（経路）を表す典型的表現であると考えられる。また、into the cave や onto the stage のような前置詞句は、以下の (25) のような統語構造を持ち、TO が前置詞 to として表出されたと想定される。

- (25) a. [Path TO ([Place IN ([Thing CAVE])])]
b. [Path TO ([Place ON ([Thing STAGE])])]

ここまでの点を踏まえると、これまでに概観した移動表現における日英語間の差異は、以下のようにまとめられる。

- (26) a. 英語（≒サテライトフレーム言語）

移動事象の中核的スキーマ「経路（+地）」が前置詞句（などの主動詞以外の要素）で表現され、「様態」などの共事象を構成する概念が主動詞で表現される。

（また、「経路」を表す要素も明示的なものと非明示的なものがある。）

- b. 日本語（≒動詞フレーム言語）

移動事象の中核的スキーマ「経路（+地）」が主動詞で表現され、「様態」などの共事象を構成する概念が副詞的要素で表現される。

1.3.2. 状態変件事象の類型論的整理

次に、状態変件事象について見ていく。状態変件事象では、枠付け事象を構成する4つの概念要素は以下のものとされる。

- (27) a. 図 (Figure) となるもの (figural entity) = 状態変化するもの
b. 地 (Ground) となるもの (ground entity) = 図の状態 (state)

c. 活性化過程 (activating process) :

変化 (transition) = 変化 (change) [事象における状態の変化あり]

安定 (fixity) = 安定状態 (stasis) [事象における状態の変化なし]

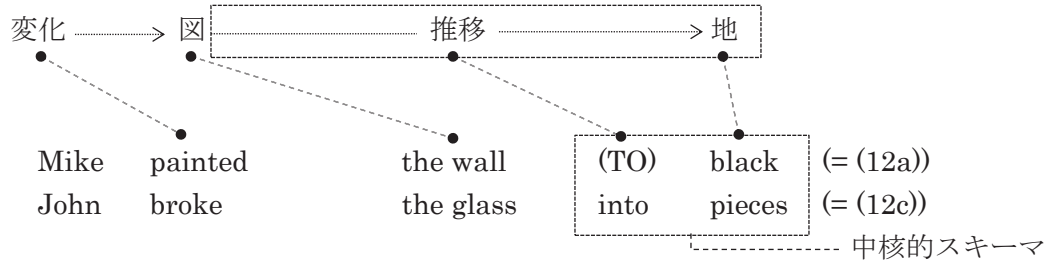
d. 関連付け関数 (association function) = 推移 (transition type) / (状態 (state))

これら 4 つの概念の中で、状態変化事象における中核的スキーマは「推移 (+地)」である。ここで留意されたいのは、上述の移動事象では位置の変化が生じる場合と生じない場合があったが、本論文で取り扱う状態変化表現は、その名の示すとおり、常に何かしらの状態の変化を示す文であるということである。よって、議論に上がる活性化過程と関連付け関数は、それぞれ「変化」(change) と「推移」(transition type) のみとなる。

状態変化事象では、図の状態の変化が生じることが「変化」(change) (=活性化過程) で示され、図の変化した状態 (=地) に対する関係が「推移」(transition type) (=関連付け関数) によって定められると考える。上の (12) (13) で見たとおり、英語の結果構文は、主動詞が「状態変化動詞」であるか「働きかけ動詞」であるか — つまり、「弱い結果構文」であるか「強い結果構文」であるか — によって、日本語への直訳ができるかできないかが分かれる。まず、弱い結果構文とその直訳表現における事象と構成概念の表出の仕方を図式化すると、次頁の図 1-9 のように表すことができる。

このように、状態変化事象の中核的スキーマである「推移 (+地)」が英語では結果述語で表され、日本語では主動詞で表されていることから、英語が「サテライトフレーム言語」に属し、日本語が「動詞フレーム言語」に属するものと判断できる。日本語の方は、形容詞や形容動詞の連用形を示す「〜く」「〜に」が補助的に推移を表している可能性もある。しかし、「パンを (焼いて) 黒く焦がした」や「グラスを (落として) 粉々に割った」とは言えても、「パンを黒く焼いた」や「グラスを粉々に落とした」とは言えないことから、やはり中核的スキーマを表す中心的な役割を果たしているのは主動詞であると考えられる。

A. 英語 (12a, c) 弱い結果構文



B. 日本語 (12b, d)

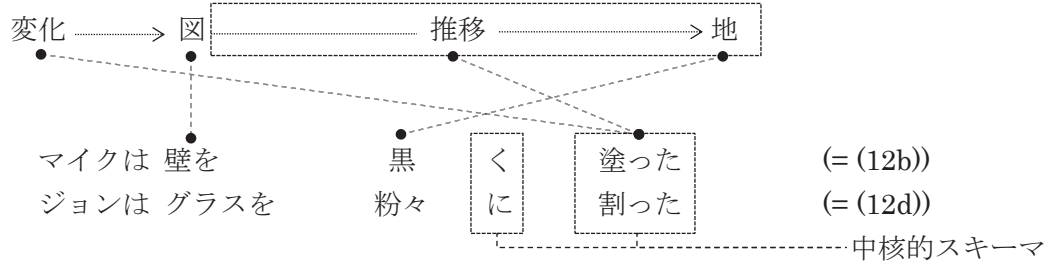
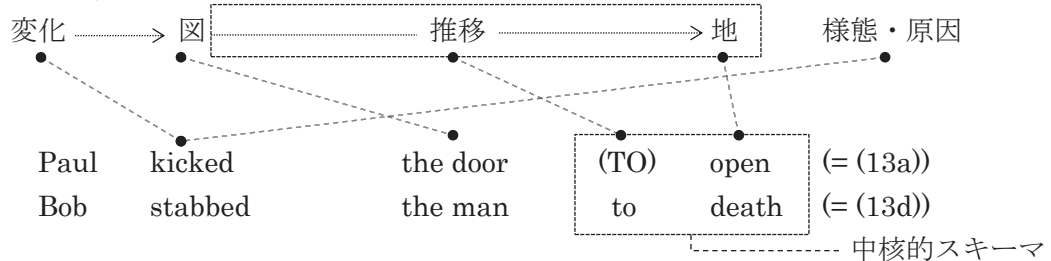


図 1-9 状態変化事象の日英語の構成概念の表出の仕方 (直訳できる場合)

次に、強い結果構文とそれを自然な日本語に直した表現における事象と構成概念の表出の仕方を見る。図式化すると、以下のように表すことができる。

A. 英語 (13a, d) 強い結果構文



B. 日本語 (13c, f)

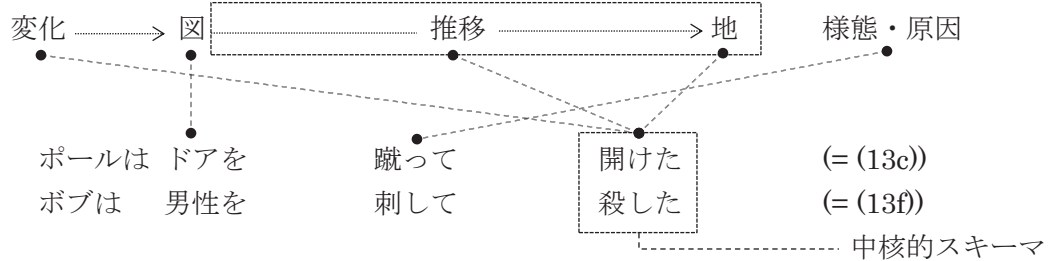


図 1-10 状態変化事象の日英語の構成概念の表出の仕方 (直訳できない場合)

この場合も図 1-9 と同様に、中核的スキーマである「推移 (+地)」が英語では結果述語で表され、日本語では主動詞で表されることが分かる。また、共事象を構成する要素(「様態」「原因」)に着目すると、英語では主節の中心的な働きをする動詞で表されているのに対し、日本語では副詞的な要素(付加詞)として表されていることを捉えることができる。

なお、上の (14) (15) で見たように、**paint** や **break** は状態変化動詞である一方で、**kick** や **stab** は働きかけ動詞である。それにもかかわらず、図 1-9、図 1-10 を見ると、いずれの動詞も活性化過程である「変化」を表出したものとなっていることから、矛盾が生じているように見える。しかし、これはそうではない。この活性化過程はあくまでも事象全体に状態の変化があることを定めるものであり、言うなれば、動詞句全体の項構造において状態の変化があることを意味するものである。それでは、「状態変化動詞が『状態変化』を含意する」とはどういうことなのか問題となるが、これは、図 1-11 に示すとおり、状態変化動詞がそれ自体の意味に、状態変化事象の中心的概念である「推移」を内包していると言い換えることができるであろう。

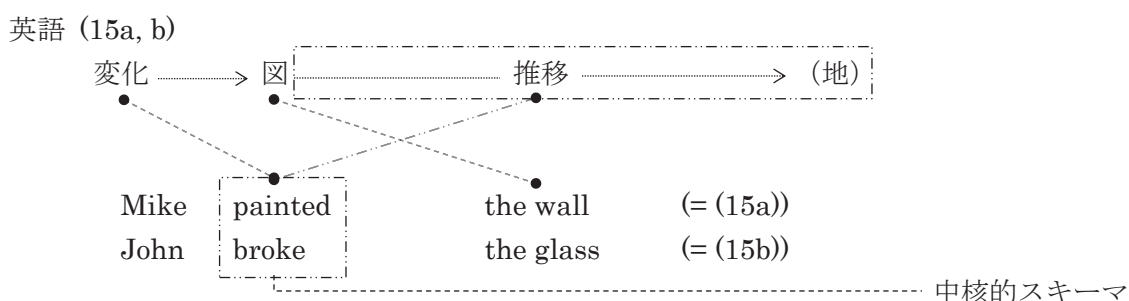


図 1-11 結果述語を伴わない状態変化事象における構成概念の表出の仕方

ここで、主動詞から結果述語に焦点を移そう。状態変化は位置変化の拡張的メタファー表現として捉えられることが多いことを上で述べたが、移動事象において前置詞 **to** を位置変化の「経路」を示す典型的な表現として捉えたように、状態変化事象においても前置詞 **to** を状態変化の「推移」を示す典型的な表現として捉えることで、これら 2 つの事象を並行的に捉えることができる(図 1-9 (12c)、図 1-10 (13d) 参照)。ただし、(12a) や (13c) にあるような形容詞型の結果述語は、一見すると、これらが **the wall** や **the door** (図)

の変化した状態（地）を表してはいるものの、その状態に至った「推移」を表していないように思われる。ここで、(10) で示したように、本来行為や活動の行われる場所を示す前置詞句が「着点句」としても機能することを思い出されたい。その際、図 1-8 で示したように、「経路」を表す概念上の要素 TO を想定することで、通常場所句として機能する前置詞句が着点句としても機能することをとらえることができた。これと同様に、形容詞型の結果述語においても「推移」を示す概念上の要素 TO を想定することで、本来何かしらの安定した状態（地）を表す形容詞が、この要素と共に中核的スキーマを構成していると捉えることが可能になる（影山, 2007、Snyder, 1995、Suzuki (2012)、Talmy, 2000）¹⁴。

ここまでの点を踏まえると、ここまで概観した状態変化表現における日英語間の差異は以下のようにまとめられる。

(28) a. 英語（⊆サテライトフレーム言語）

状態変化事象の中心的概念「推移（+地）」が結果述語（主動詞以外の要素）で表現され、「様態」などの共事象を構成する概念が主動詞で表現される。

（また、「推移」を表す要素も明示的なものと非明示的なものがある。）

b. 日本語（⊆動詞フレーム言語）

状態事象の中心的概念「推移（+地）」が主動詞で表現され、「様態」などの共事象を構成する概念が副詞的要素で表現される。

さらに、この状態変化事象のまとめを (26) 移動事象のまとめと併せて整理すると、(29) のようにまとめられ、図 1-12 のように図式化できる。

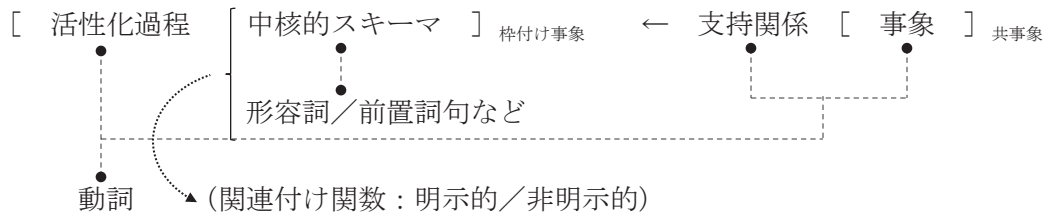
(29) a. 英語（⊆サテライトフレーム言語）

マクロ事象の中核的スキーマが主動詞以外の要素で表現され、「様態」などの共事象を構成する概念が主動詞で表現される。また、関連付け関数が明示的なものとそうでないものがある。

b. 日本語 (≒動詞フレーム言語)

マクロ事象の中核的スキーマが主動詞で表現され、「様態」などの共事象を構成する概念が副詞的要素で表現される。

A. 英語 (≒サテライトフレーム言語)



B. 日本語 (≒動詞フレーム言語)

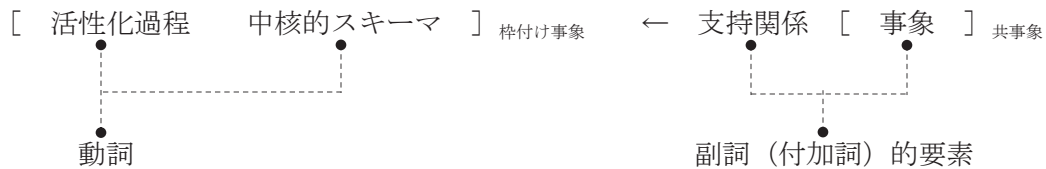


図 1-12 移動事象・状態変化事象の日英語の構成概念の表出の仕方

ここまで、移動表現と状態変化表現における日英語間の表現方法の差異を概観し、その差異が言語類型論的な観点から捉えられることを述べた。しかしながら、こうした類型論的な差異を踏まえた上で、日本語を母語とする英語学習者による英語の移動表現や状態変化表現の習得を取り扱った SLA 研究はあまり多くない。とりわけ、移動表現と状態変化表現の双方を同時に取り扱っている先行研究は極めて少なく(次章参照)、継続的な研究が望まれると考える。

1.4. 本論文の構成

ここまで議論した日英語間の差異を踏まえ、本章第 2 節で述べた目的を達成するために、本論文を以下のように構成した。まず、次の第 2 章「先行研究の概観」では、SLA 研究分野において、日本語を母語とする英語学習者を対象に英語の移動表現や状態変化表現の習得を取り扱った先行研究を概観し、先行研究が抱える課題点として主に以下の 3 点を示す。

1 点目として、検証方法・検証結果の不一致の問題について述べる。ここでは、類似の研

究課題に対して先行研究ごとに異なる検証方法が採用されており、検証結果が一致していないことを指摘する。また、各先行研究の検証実験において測られているものが異質なものである点にも着目する。2点目として、検証方法上の限界点について述べる。ここでは、先行研究において採用されている検証方法上の限界点を大きく2つの観点から指摘する。まず1つ目として、実験参加者に取り組んでもらうタスクにおいて、テスト文やイラストを提示する方法に改善すべき点があることを指摘する。2つ目としては、実験参加者が回答するタスクの回答項目の設定に改善すべき点があることを指摘する。最後に、課題点の3点目として、未検証の課題について述べる。ここでは、先行研究において個別の研究課題としては取り上げられているものの統一的な検証方法を用いて取り組まれていない課題が存在すること、ならびに先行研究では取り扱われていない結果構文の迂言的表現が存在することを概観する。これらの課題点を踏まえた上で、本研究の研究課題とそれに応えるために取り組む5つの小課題を提示する。続く第3章「実験的検討」では、まず、本研究で行った検証実験について説明する。実験参加者、実験内容（実験材料と手順）を示し、先行研究における検証実験のどの部分を改善したのかを明確にする。その上で、実験結果を示すとともに、その結果を基にして行う各小課題の検証（分析）の手続きについて説明する。それに続き、移動構文に関する小課題、結果構文に関する小課題、両構文の迂言的表現に対する小課題の順に検証結果を提示し、それぞれの結果に考察を加える。最終章の第4章「結論と今後の展望」では、まず本研究を総括し、日本語を母語とする英語学習者が英語の移動表現と状態変化表現の容認性を判断する際に、言語類型論に基づく日英語間の言語特性が影響を及ぼすこと、また、その特性を整理する。次に、学習者に影響を及ぼすことが明らかになった特性を踏まえ、学習者がより英語らしい表現を身に着ける上で効果的だと思われる日英語間の特性を利用した学習法・指導法を提案する。最後に、今後の展望について触れ、本論文を締め括る。

第1章 注釈

1. 学習英文法における「句」の取り扱いに対する問題点、特に、「範疇」、「機能」、「意味」の厳密な区別がなされないまま分類や説明が行われることに対する問題点を、中村(2012)が指摘している。また、句構造に関する知識の有用性についても論じている。
2. 高等学校学習指導要領(平成22年度発行)の中では、「文型」に替えて「文構造」という語を用いている。その理由として以下のように書かれている。

これは、文を「文型」という方によって分類するような指導に陥らないように配慮し、文の構造自体に目を向けることを意図してのことである。正確な文を話したり書いたりしようとすれば、(中略)構造に注意を向ける必要がある。このようなことなどにも目を向けることを意図して、より広い意味を表すものとして「文構造」という語を用いたのである。

本論では、先行研究で使用されている「文型」という語を用いるが、学習指導要領中の「文構造のうち、運用度の高いもの」に相当するものとして用いる。

3. 文が成立する上で動詞にとって必要不可欠ではない要素は「修飾語」(Modifier)として指導されることもあるが、学習指導要領に記載がある「修飾関係」とはいわゆる前置修飾なのか後置修飾なのかという語順の問題のことを指しており、用語の混乱を避けるために本論では「付加詞」として議論を進める。
4. 着点を表す表現として、日本語では「～まで」を用いることで、到着までを含意する表現として容認されそうに思える。しかしながら、上野・影山(2001)では、日本語の「～まで」句は、非有界的な時間句と共起できることから、英語の to のような純粋に到達を表す前置詞句と同等に扱うことはできないと述べられている。

(i) John ran to the railroad station { *for / in } 30 minutes.

ジョンは駅まで { 30 分間 / 30 分で } 走った。 (Yoneyama, 1986)

同様の理由から、「～へと」という表現も着点句としては取り扱わない。本論文では、英語の着点句に相当する日本語表現を「～に」とみなして議論を進める。

なお、影山・由本(1997)は、「～まで」は着点ではなく、移動の及ぶ到達範囲であると述べている。これと同様の指摘が三宅(2007)でもなされており、「～まで」は「範囲の終点」であり、「移動の着点」ではないと述べられている。三宅(2007)では、以下(ii)～(v)の例を示しながら、「移動の着点」＝「移動の結果、到着する場所」は、「範囲の終点」＝「移動という行為が終わる場所」は似ているようで違うとしている。

(ii) 東京まで新幹線で行き、東京から札幌までは飛行機で行った。

(iii) 私は東京と大阪に/*まで行った。

(iv) 駅 { まで / *に } 歩く / 向こう岸 { まで / *に } 泳ぐ

(v) *次郎は東京まで着いた。

まず、(ii)は、「～まで」がそれぞれの方法による移動が終わる終点を示すだけで、「着点」ではないことを示している。(iii)は、複数の異なった移動の行程がある場合、それぞれが「着点」ということになるので「～まで」が使えないことを示している。また、(iv)のように、移動様態動詞は「着点」を取ることができないが、「～まで」なら取れることを示している。最後に、(v)は、「～まで」が、着点のみに焦点を当てそ

ここに至る移動の過程を問題にしないような動詞と用いることができないことを示している。また、これとは別に、Tsujiura (1994) は、「～まで」を「～へ、に」とは異なり、二次述語として分析する提案をしている。

5. 「移動様態動詞」、「有方向移動動詞」という用語は、上野・影山 (2001) に従った。
6. (7) に示したタイプの英文は、「ねずみがテーブルの下を通り抜けた。」という意味で、前置詞句を「通過点」として解釈できることも知られており、その場合、前置詞句が持つ概念構造の中に VIA という音形や形態を持たない要素が含まれているものと考えられている。

(i) [Path VIA ([Place UNDER ([Thing TABLE])])]

本研究では、行為や活動の行われた「場所」としての解釈と「到着点」としての解釈を取り扱った先行研究の研究課題を検証し直すことを目的の1つにすることから、この「通過点」の解釈は取り扱わない。

7. 様態+場所句型の英語移動構文の2通りの解釈 (Directional Reading, Locational Reading) に対する「着点読み」、「場所読み」という訳語は、米山 (2009) に従った。
8. 状態変化を表す表現には、以下のように主語の状態が変化したことを表す自動詞型のものもある。

(i) The stained glass broke to pieces.

(ステンドグラスが粉々に壊れた。)

(影山, 2001)

(ii) The river froze solid.

(川がカチカチに凍った。)

(影山, 1996)

また、本来自動詞として用いられる動詞が、通常は取らないような目的語 (疑似目的語) と結果を示す表現を伴って、状態変化を表す以下のような表現もある。

(iii) a. Tom ran himself tired. (疑似=再帰形)

b. *トムは (自分を) クタクタに 走った。

c. トムは クタクタに なるまで 走った。

(iv) a. Tom ran his shoes ragged. (疑似≠再帰形)

b. *トムは 靴を ボロボロに 走った。

c. トムは 靴が ボロボロに なるまで 走った。

本論文では、類型論的な観点から移動表現との類似点が指摘されてきた他動詞型の状態変化表現のみを取り扱う。日本語を母語とする英語学習者による (iii) タイプや (iv) タイプの状態変化表現の習得に関する研究については、平野 (2016) を参照されたい。

9. 状態変化を含意する動詞が用いられた場合、結果を示す語句が無くても状態変化を表す文として文が成立することから、結果を示す語句を付加詞とする見方もある (Iwata, 2006, 岩田, 2009)。しかしながら、結果を示す語句が、以下の下線部分のような場所を示す付加詞よりも、動詞と意味的に強い結びつきがあることは明らかであるため、本論文では、項として議論を進める。

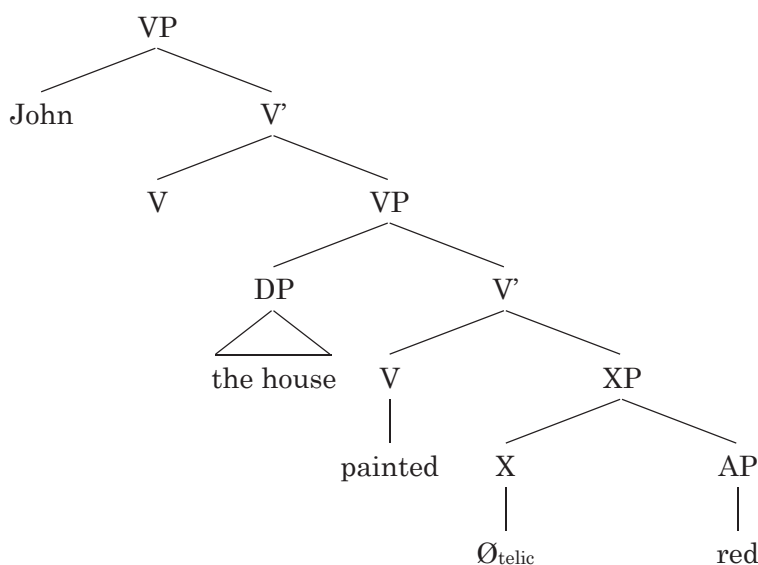
(i) Tom broke the glass into pieces in the kitchen.

また、本文中の (14a) の英文には「トムが壁の絵を描いた。」という解釈もありえようが、本論文は動詞の多義性を扱うものではないため、議論の対象としない。

10. 「状態変化動詞」、「働きかけ動詞」という用語は、影山 (1996, 2001) に従った。
11. これらの「～く」形と「～に」形の表現はそれぞれ形容詞と形容動詞の連用形とみなされるが、これらは日本語の「副詞」と形態的に区別ができにくいことに注意すべきであろう (宮腰, 2009、小野, 2009)。
12. 「弱い結果構文—強い結構文」という用語は、Washio (1997) の用語である。これに相当する表現として、影山による一連の研究 (影山, 1996, 2001, 2009) では「本来的結果構文—派生的結果構文」という用語が用いられている。厳密にはこれらの定義には以下に示すような違いがあるが、本論文ではこれらを同等のものとし、第 2 章で言及する先行研究でも引用されている Washio の用語を用いることにする。詳しくは齊木・鷺尾 (2009) を参照されたい。

| Washio (1997) | 影山 (1996, 2001, 2009) |
|---|--|
| ・弱い結果構文 動詞の意味と結果述語の表す意味の間に何かしらの予測可能な関連性があるもの。 | ・本来的結果構文 動詞の意味に始めから結果状態が含意され、それを結果述語が記述するもの。 |
| ・強い結果構文 動詞の意味と結果述語の表す意味が完全に独立して関連性を予測するのが不可能であるもの。 | ・派生的結果構文 行為や様態や「働きかけ」を表す動詞に「状態変化」と「結果」を表す結果述語が継ぎ足されたもの。 |

13. Talmy (2000) では、移動事象と状態変化事象を、さらに別の事象である「時間形」(temporal contouring)、「行為相関」(action correlating)、「行為の実現」(realization) と関連付け、これら 5 種類の事象の総称として、「マクロ事象」という用語を用いている。
14. このような音形や形態を持たない要素は、結果構文の分析において、結果を表す事象の終点を示すアスペクト的な働きをするものとして、意味概念だけでなく、統語構造にも反映されるという主張がなされている (影山, 2009、Snyder, 1995)。ただし、表記の仕方は TO とは限らない。



(Snyder, 1995: 460)

第2章

先行研究の概観

本章では、日本語を母語とする英語学習者(以下、JLE (Japanese learners of English))による英語の移動構文や結果構文の習得を取り扱っている先行研究を概観し、先行研究が抱える問題点や課題点を指摘する。その上で、本研究の研究課題を提示する。主に以下の3点に焦点を絞って議論を進める。1点目として、先行研究間で類似の研究課題に対して検証結果が一致していないものがあることを確認する。その際、その原因の1つとして、各先行研究で異なる検証方法が採用されており、測られているものがそれぞれ異質なものである点に着目する。まず、移動構文の習得に関する先行研究について触れ、その後に、結果構文の習得に関する先行研究を概観する。2点目として、先行研究で採用されている検証方法が抱える限界点や問題点を指摘する。ここでは、実験参加者にテスト文やイラストを提示する際の提示方法に関連する「比較選択の問題」と、容認性判断テストの回答項目の設定に関する「双極法」の抱える問題について指摘する。そして最後に3点目として、先行研究では取り上げられていない未検証の課題について言及する。ここでは、先行研究において個別の課題として検証されてはいるものの、統一された方法で検証されていない複数の課題と、移動表現の習得研究では取り扱われているものの、状態変化表現の習得研究では取り扱われてこなかった迂言的表現の習得について言及する。

2.1. 先行研究における検証方法と検証結果の不一致

本節では、JLEを対象とした英語の習得に関する先行研究として、まず、移動構文を取り扱った Inagaki (2002) と Yotsuya et al. (2014) を取り上げ、その次に、結果構文を取り扱った Yotsuya et al. (2014)、平野 (2016)、スプリング (2015) を取り上げる¹。それぞれの構文について、類似の研究課題に対して先行研究ごとに異なる検証方法が採用されており、検証結果が一致していないことを概観する。また、それらの検証結果の違いが、各検証方法で測られているものが異質なものであることに起因する点を指摘するとともに、適宜、それぞれの検証方法の抱える限界点や問題点についても指摘を加えていく。

2.1.1. 着点読みと場所読みの解釈を伴う移動構文の習得研究

移動構文の内、以下に示すような、移動様態動詞が場所句と共起するタイプ（以下、様態+場所句型）は、「着点読み」と「場所読み」の解釈が可能となる。例えば、(1a)では「橋の下に泳いで行った。」という解釈（着点読み）と「橋の下で泳いだ。」という解釈（場所読み）が可能であり、(1b)も同様に、「木の上に飛んで行った。」という解釈（着点読み）と「木の上を飛び回った」という解釈（場所読み）が可能となる。

(1) a. Mike swam under the bridge.

b. The bird flew above the tree.

このような移動構文が持つ2つの解釈の内、どちらの解釈をJLEが容認しやすいのかを検証した先行研究に、Inagaki (2002) と Yotsuya et al. (2014) がある。検証方法として、Inagaki (2002) は「絵図一文照合タスク」を採用しており、Yotsuya et al. (2014) は「イラスト付き真偽値判断タスク」を採用している。またこれら2つ研究の検証結果も一致していない。以下、それぞれの検証方法と検証結果を概観する。

2.1.1.1. Inagaki (2002)

Inagaki (2002) が採用した絵図一文照合タスクでは、実験参加者に対して、様態+場所句型の英文1文と併せて、着点読みの解釈を示すイラスト1枚と場所読みの解釈を示すイラスト1枚が同時に提示された（図2-1参照）。実験参加者は、その英文がどちらの解釈を表すものなのか、あるいはその双方の解釈を表すものなのかを、提示されたイラストを選択することで回答した。この実験に含められたテスト文は表2-1に示すとおりであった。

Mike swam under the bridge.

1 only

2 only

either 1 or 2

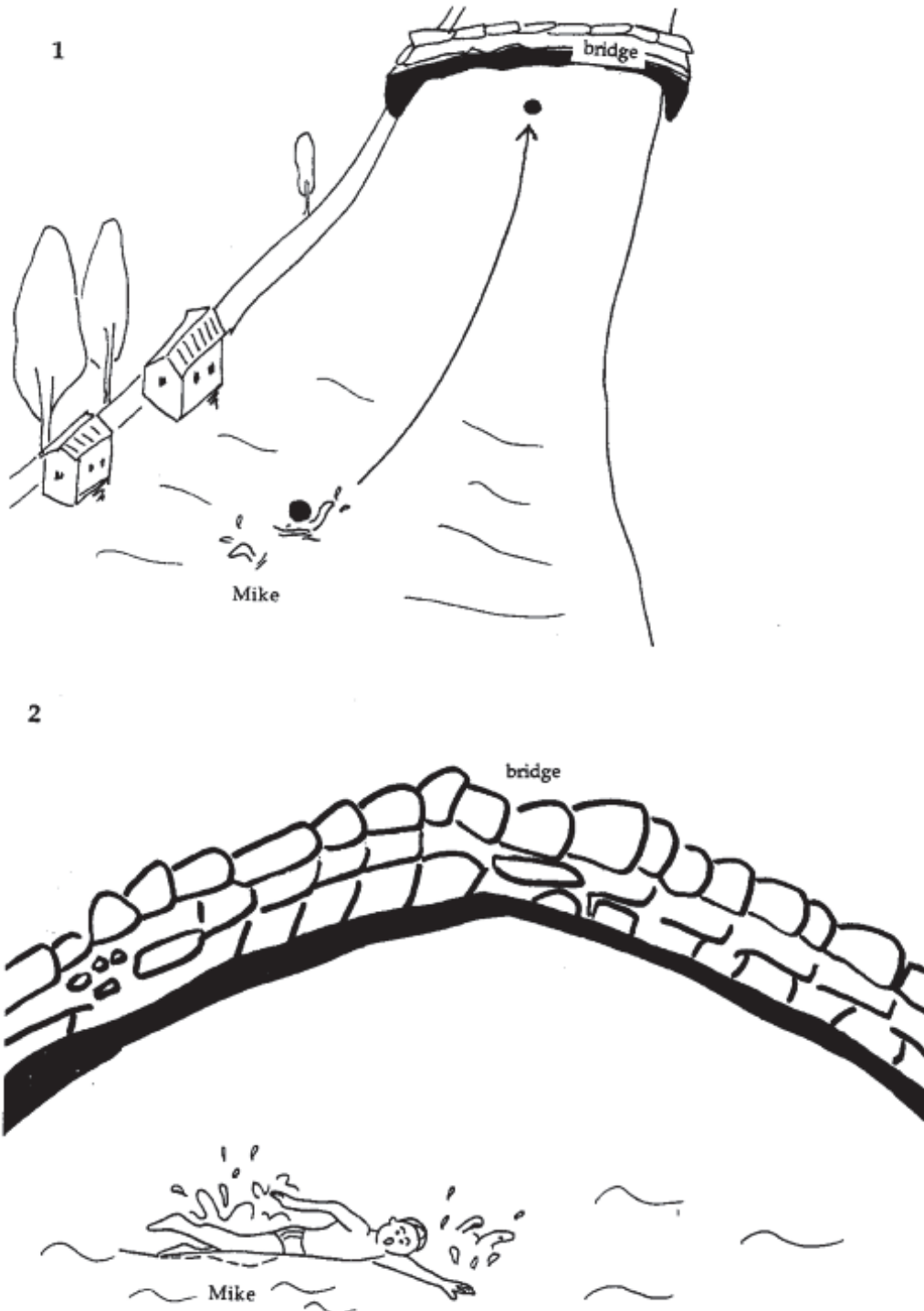


図 2-1 Inagaki (2002) による絵図一文照合タスクの例
(Inagaki (2002), p.26, Appendix 1)

表 2-1 Inagaki (2002) の絵図一文照合タスクに含められたテスト文
(Inagaki (2002), p.27, Appendix 2)

| A: Test sentences | B: Distractors |
|--------------------------------------|---------------------------------|
| 1. Jim walked behind the house. | <i>Directional only</i> |
| 2. Bob walked in the store. | |
| 3. John ran inside the gym. | |
| 4. Ted ran behind the wall. | <i>Locational only</i> |
| 5. Mark ran in the house. | |
| 6. Peter swam inside the cave. | |
| 7. Mike swam under the bridge. | <i>Ambiguous</i> |
| 8. The baby crawled under the table. | |
| 9. The mouse crawled on the table. | |
| 10. Paul jumped on the bed. | |
| 11. Fred jumped in the pool. | |
| 12. The bird flew above the tree. | 8. The chicken is ready to eat. |

この実験の参加者は、JLE が 35 名、英語母語話者（以下、NSE (Native speakers of English)) が 23 名であった。JLE は某公立大学の非英語専攻の 1 年生であり、1 カ月以上英語圏に滞在した経験がある者はいなかった。また、NSE は日本の大学に勤務する教員とアメリカで TESL を専攻する大学院生であった。この実験の結果を表 2-2 と図 2-2 に示す。表 2-2 の数値は、様態+場所句型の移動構文に対する判断の内、場所読みの解釈のみを容認するという判断、着点読みの解釈のみを容認するという判断、場所読みと着点読み双方の解釈を容認するという判断の占める割合を示している。丸括弧内の数値は標準偏差を示している。図 2-2 は各回答の占める割合をグラフにしたものである。

表 2-2 Inagaki (2002) における JLE と NSE による様態+場所句型の移動構文に対する解釈の判断結果 (Inagaki (2002), p.19, Table 2)

| | 場所読み | 着点読み | 場所読みと着点読み |
|-----|---------------|---------------|---------------|
| JLE | 70.24 (14.19) | 8.09 (9.58) | 21.67 (13.74) |
| NSE | 18.54 (16.84) | 14.49 (26.14) | 66.97 (27.19) |

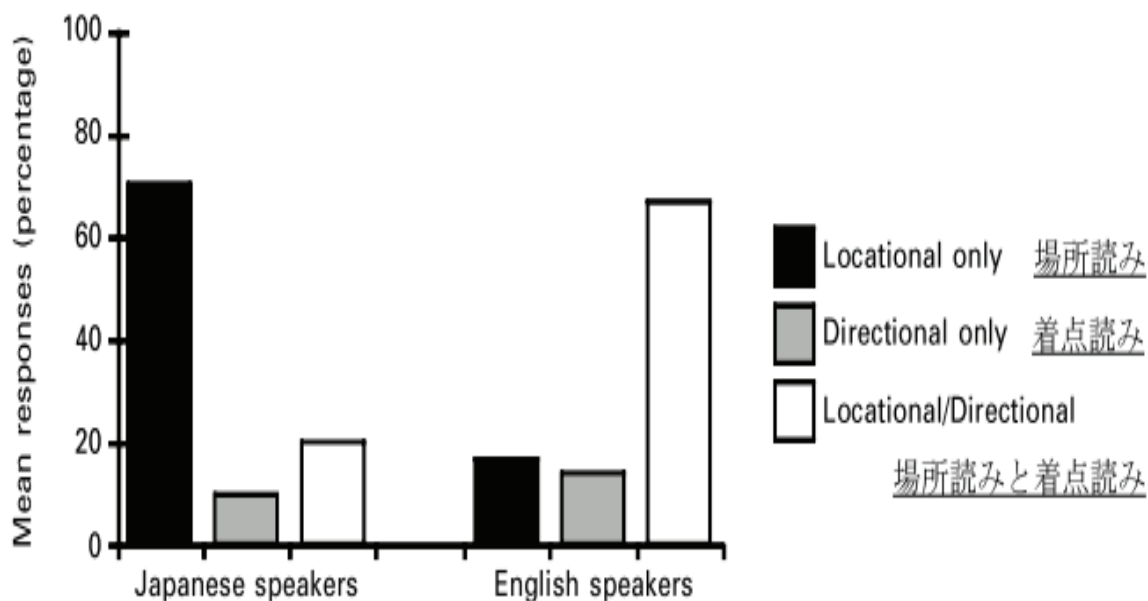


図 2-2 Inagaki (2002) における JLE と NSE による様態+場所句型の移動構文に対する解釈の判断結果 (Inagaki (2002), p.20, Figure 6 [下線部は筆者による加筆])

また、Inagaki (2002) は、12 個のテスト文 (表 2-1 A 参照) に対して、着点読みの解釈のみを容認した者ないし着点読みと場所読みの解釈の双方を容認した者の数を JLE と NSE の間で比較し、その結果を表 2-3 のようにまとめている。

表 2-3 Inagaki (2002) において、様態+場所句型の移動構文に対して、着点読みの解釈のみ、または、着点読みと場所読み双方の解釈を容認した回答者の数とその割合 (Inagaki (2002), p.21, Table 3 (下線部は筆者による加筆²⁾)

| 着点読みのみ、または、着点読みと場所読みの両方を容認した回答数 (全回答数 = 12) | JLE (n = 35) | NSE (n = 23) |
|---|------------------|------------------|
| 0-3 | 18 <u>51.42%</u> | 0 <u>0.00%</u> |
| 4-6 | 17 <u>48.57%</u> | 2 <u>8.69%</u> |
| 7-9 | 0 <u>0.00%</u> | 8 <u>34.78%</u> |
| 10-12 | 0 <u>0.00%</u> | 13 <u>56.52%</u> |

これらの結果から、Inagaki (2002) は、JLE が「様態+場所句」型の移動構文に対して着点読みの解釈を容認することが難しく、場所読みの解釈を容認しやすいと結論付けている。

2.1.1.2. Yotsuya et al. (2014)

一方、Yotsuya et al. (2014) が採用したイラスト付き真偽値判断タスクでは、実験参加者に対して、着点読み、または、場所読みの解釈を示す左右に並べられた 2 枚 1 組のイラストと、様態+場所句型の英文 1 文とが、次のような形で提示された。まず、左側に移動開始時のイラストが 2 秒間提示される。その後、右向きの矢印がその右隣に 2 秒間提示される。さらにその後、矢印の右側に移動後の様子を示すイラストが 2 秒間提示される。この移動後の場所を示すイラスト次第で、着点読みの解釈になるか場所読みの解釈になるかが分かる。そして、全てのイラストが提示された 4 秒後に左側のイラストが消え、中央の矢印と右側のイラストだけが残る。それと同時に、様態+場所句型の英文がイラストの下に音声と共に提示される。実験参加者は、その英文が先に提示された 2 枚 1 組のイラストが示す状況を表す英文として正しいかどうかを **True** または **False** で回答した。

この実験の参加者は、JLE が 81 名で、NSE が 10 名であった。JLE の参加者は日本のある大学の 1 年生と 2 年生であった。実験に先立って実施していたクローズテストの結果により、3 つのグループ (Low: 23 名、Middle: 35 名、Advanced: 23 名) に分類して分析がおこなわれた。この実験の結果を図 2-3 に示す。なお、図 2-3 は、着点読み (Direction) の解釈と場所読み (Location) の解釈のそれぞれに対して、**True** と判断された回答数の占める割合を表している。

なお、Yotsuya et al. (2014) の論文中には、実験に使用されたイラストが 1 組しか掲載されておらず (本論文の 2.1.2.1. において、図 2-4 として掲載)、そのイラストも状態変化事象を描写するものであり、移動事象を描写したイラストは掲載されていない。しかし、幸いなことに、Yotsuya et al. (2014) の共同執筆者の一人である鈴木一徳氏を通じて、筆頭著者の四谷厚子氏や共同執筆者の平川真規子氏などの了承を得ていただき、実験に使用された全ての資料をお送りいただいた。鈴木氏を始め、Yotsuya et al. (2014) の執筆者の皆様のご理解とご協力に改めて深く感謝申し上げます³。

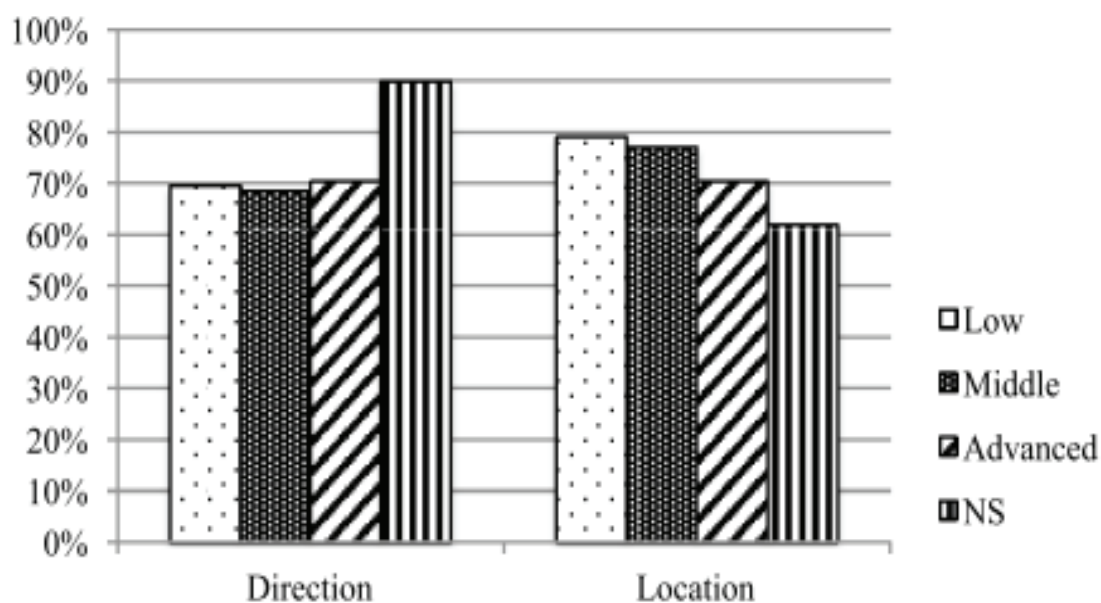


図 2-3 Yotsuya et al. (2014) における JLE と NSE による 様態+場所句型の移動構文に対する解釈の判断結果 (Yotsuya et al. (2014), p.97, Figure 2)

図 2-3 に示す実験結果から、Yotsuya et al. (2014) は、JLE が様態+場所句型の英文に対して着点読みと場所読み双方の解釈を容認すると結論づけている。これは、JLE が着点読みの解釈を容認することが難しく場所読みの解釈を容認しやすいとする、Inagaki (2002) の結論とは大きく異なるものである。以下、この項のまとめとして、Inagaki (2002) と Yotsuya et al. (2014) との間で検証結果が大きく異なっている原因とそれぞれの検証方法上の問題点について考えることにする。

上記 2 つの先行研究における検証結果の差異は、それぞれの先行研究で採用されている検証方法に違いがあり、測られているものが異質なものになっていることに起因することが考えられる。Inagaki (2002) の実験は、参加者に形式から意味への判断を求めた実験であると言える。参加者は、テスト文を文法的に正しい英文として提示された上で、その文が表す状況を描写していると思われるイラストを選択することを求められた。よって、参加者はテスト文の文法性や表現上の適切性を判断したというよりは、その英文が表しうる状況（解釈）に対する判断を求められたものと考えられる。一方、Yotsuya et al. (2014) の実験は、参加者に意味から形式への判断を求めた実験であると考えられる。参加者は、ある状況を設定するイラストを提示された上で、その状況を表す表現として提示されたテス

ト文が適切なものであるかどうかの判断を求められている。よって、参加者はテスト文の文法性や表現上の適切性を判断したものと考えられる。このように、同じ「容認」(acceptability) という用語に対して、Inagaki (2002) と Yotsuya et al. (2014) が異なる定義を基に検証を行っていることが分かる。

それぞれの検証結果から、JLE は、様態+場所句型の移動構文に対して着点読みか場所読みかの解釈を求められれば、場所読みの解釈をより自然な解釈として受け入れる一方で、いずれの解釈であれ予め状況が設定されれば、様態+場所句型の英文を適切な表現として受け入れやすいということが分かる。ただし、これらの先行研究における検証方法には、次のような限界点があるものと思われる。まず、Inagaki (2002) の実験では、1つのテスト文に対して2枚のイラストが同時に提示されている。これにより、実験参加者が2枚のイラストの内、より好ましいものを選択してしまう可能性が残留するものと考えられる(次節参照)。つまり、着点読みの解釈をある程度容認できるものの、場所読みの解釈の方がより自然であると感じた場合に、その双方を選択するのではなく、場所読みの解釈のみを選択してしまう可能性が考えられる。また、Yotsuya et al. (2014) の実験では、実験参加者は True か False かという二者択一の回答を求められるため、True と判断されたものの中にも、その表現を適切だと感じる度合いには揺れがあり、一様の判断であるとは考えにくい。つまり、テスト文がイラストの示す状況を表す表現として完全に適切なものと判断された場合も、ある程度適切なものと判断された場合にも True が選択され、結果として True という回答の占める割合が過剰に高くなる可能性が残留するものと考えられる。

これらの限界点を補った検証方法を用いて再度検証を試みることは、この課題に対するより明確な検証結果につながるものであり、有意義なことと考える。具体的には、着点読みなら着点読みの状況のみ、場所読みなら場所読みの状況のみ、というように、ある1つの状況を設定し、その状況を描写する英文として JLE がテスト文を自然な表現として受け入れるかを検証できる方法にすること、また、その受け入れる度合いの差を検証できる方法にすることが、改善策として重要な点になると言えよう。この点を踏まえた本研究の検証方法については次章の 3.2. で詳述する。

ここまで、JLEによる英語移動構文の習得に関して、先行研究間で検証方法と検証結果に違いがあることを概観してきた。次項では、JLEによる英語結果構文の習得に関する先行研究を概観し、その検証方法と検証結果の違い、ならびに改善すべき点を指摘する。

2.1.2. 弱い結果構文と強い結果構文の習得研究

結果構文の内、主動詞に状態変化を含意する動詞が用いられた結果構文を「弱い結果構文」と呼び、主動詞にそのような含意のない動詞が用いられた結果構文を「強い結果構文」と呼ぶ。それぞれ、結果述語が前置詞句のものと形容詞句のものを再掲する。

(2) 弱い結果構文

a. Mike painted the wall black. (形容詞句型) [弱-形]

b. John broke the glass into pieces. (前置詞句型) [弱-前]

(3) 強い結果構文

a. Paul kicked the door open. (形容詞句型) [強-形]

b. Bob stabbed the man to death. (前置詞句型) [強-前]

以下、JLEによる結果構文の習得を取り扱った先行研究として、Yotsuya et al. (2014)、平野 (2016)、スプリング (2015) を取り上げる。まず、JLEが弱い結果構文と強い結果構文のどちらの解釈を容認しやすいのかを検証した先行研究として、Yotsuya et al. (2014) と平野 (2016) の2つを概観し、検証方法と検証結果が一致していない点を確認し、それぞれの検証方法の抱える問題点を指摘する。その上で、スプリング (2015) を取り上げ、結果述語に着目しながら習得の研究を進める必要性を指摘する。

2.1.2.1. Yotsuya et al. (2014)

Yotsuya et al. (2014) は、まずJLEが結果構文を知っているかどうかを確認する実験としてイラスト付き真偽値判断タスクを採用している。このタスクは、前項で述べた Yotsuya

et al. (2014) のタスクと同じタスクであり、これら結果構文に関するタスクと前項の移動構文に関するタスクがランダムな順序でおこなわれたものである。結果構文については、図 2-4 に示すような 2 枚 1 組のイラストとテスト文が、前項の 2.1.1.2. で述べたのと同様の手順で提示された。実験参加者はそのイラストが示す状況を表す英文としてテスト文が正しいかどうかを **True** または **False** で回答した。テスト文は “**John painted the wall black.**” のようなものである。図 2-4 のイラストでは、黒く塗られたのは目的語の壁であり、テスト文はこの状況を正しく表している。これとは別に、壁を塗っている動作主の **John** が真っ黒になったイラストが提示された場合にも、同じテスト文がその状況を表す英文として適切なものかどうかを問う実験となっている。もちろん、この文はそうした状況を表すものとしては適切ではない。

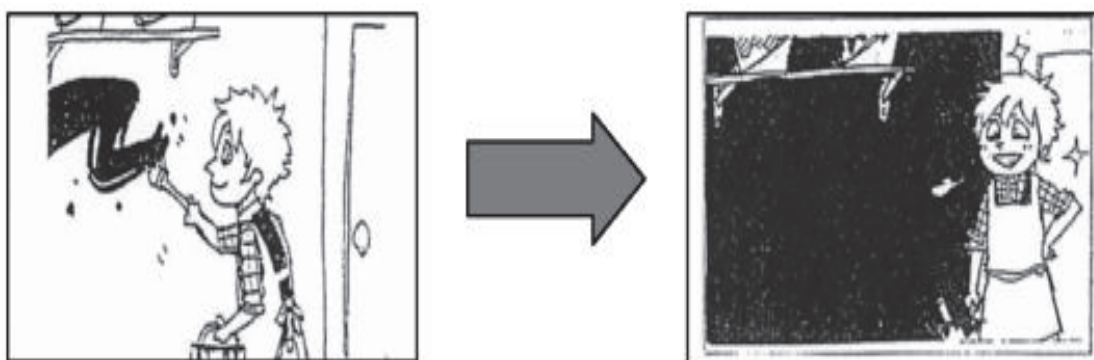


図 2-4 Yotsuya et al. (2014) の真偽値判断タスクのイラスト例
(Yotsuya et al. (2014), p.95, (8a))

実験参加者の回答をまとめたものを図 2-5 として示す。これは、各実験群の判断の内、壁などの目的語 (transitive object) に変化が生じた場合と、**John** などの主語 (transitive subject) に変化が生じた場合のそれぞれにおいて、**True** と判断された回答の占める割合を表したものである。

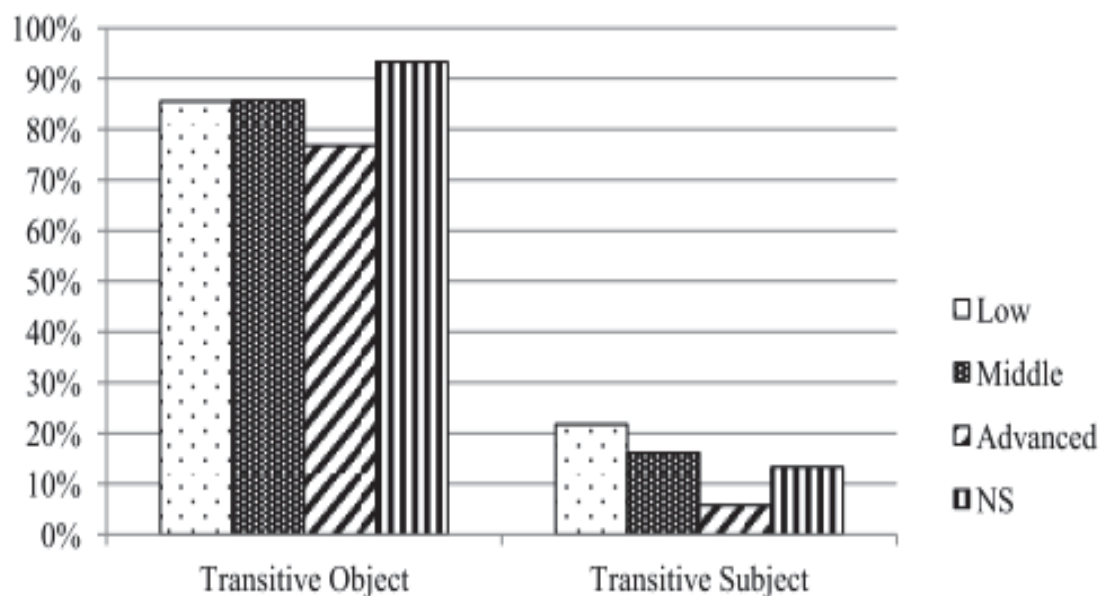


図 2-5 Yotsuya et al.(2014) における JLE と NSE による真偽値判断タスクの結果
(Yotsuya et al. (2014), p.96, Figure 1)

Yotsuya et al. (2014) は、この真偽値判断タスクの結果から JLE が結果構文を知っていると判断した上で、さらに「JLE は英語の弱い結果構文を容認するが強い結果構文を容認しない」という仮説を検証するために、以下に述べるような容認性判断タスクを実施した。

この容認性判断タスクでは、表 2-4 に示すように、弱い結果構文と強い結果構文をそれぞれ自然な文脈と不自然な文脈に当てはめ、それぞれの文脈に当てはめられた弱い結果構文と強い結果構文がどの程度自然なものであると感じるかを 4 件法 (1「不自然」、2「やや不自然」、3「やや自然」、4「自然」) で答えるように参加者に求めた。各実験群の平均値をまとめたものを図 2-6 として示す。

表 2-4 Yotsuya et al. (2014) における容認性判断テストの例文
(Yotsuya et al. (2014), p.96, Table 4)

| 文脈 | 強い結果構文 | 弱い結果構文 |
|-----------|--|--|
| 自然／ 真 | Jack decided to make a name plate. First ... <u>he hammered the metal flat.</u> | The window was dirty, so ... <u>John wiped the window clean.</u> |
| 不自然／ 偽 | John decided to make a wooden shelf. First ... <u>he hammered the metal flat.</u> | The window was broken, so ... <u>John wiped the window clean.</u> |

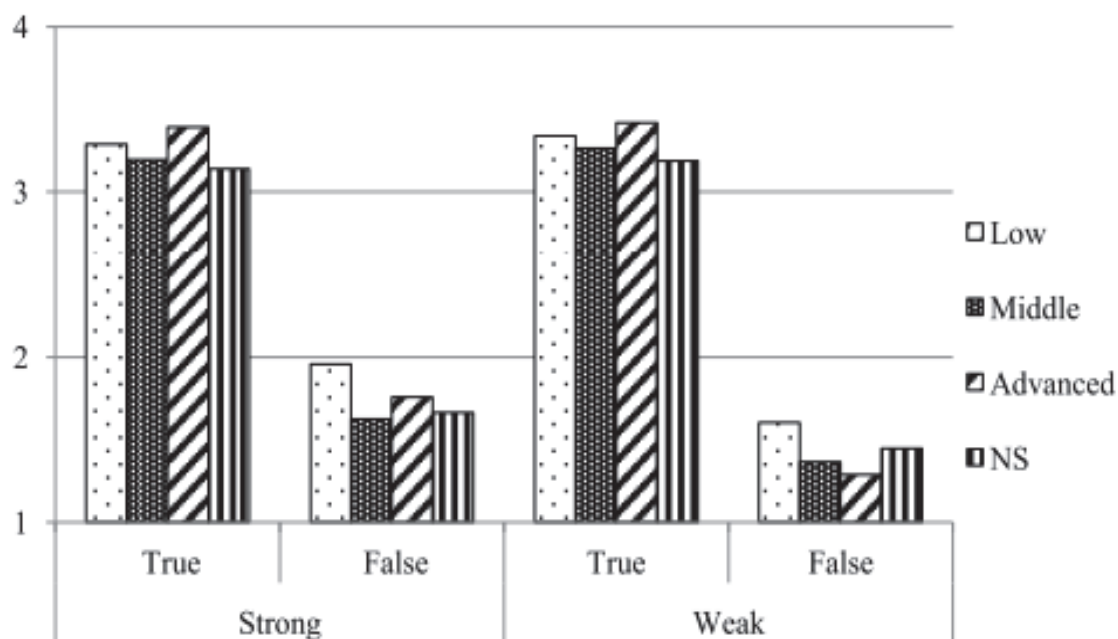
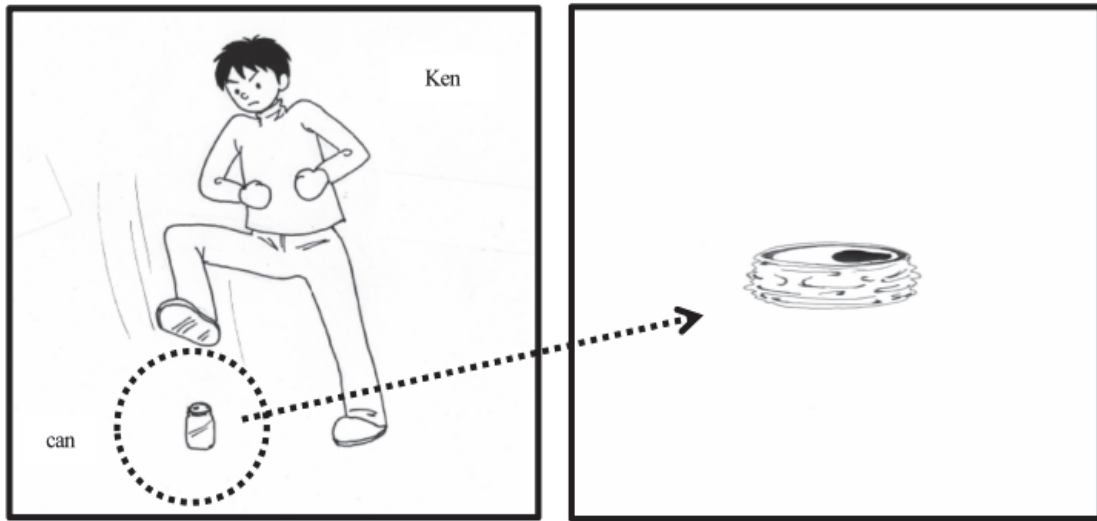


図 2-6 Yotsuya et al.(2014) における JLE と NSE による強い結果構文と弱い結果構文の容認性判断タスクの結果 (Yotsuya et al. (2014), p.97, Figure 3)

この実験の結果から、Yotsuya et al. (2014) は、JLE による英語結果構文に対する容認度は総じて高く、弱い結果構文と強い結果構文を同程度に容認するという結論を出している。これは、「JLE が、(自然な文脈において) 弱い結果構文を自然な表現として受け入れるが強い結果構文は受け入れない」という Yotsuya et al. (2014) の仮説に反する結果であった。

2.1.2.2. 平野 (2016)

一方、平野 (2016) は、結果構文を以下の (4)-(6) の 3 種類に分類し、図 2-7 に示すようなイラストとテスト文を用いたイラスト付き容認性判断タスクを用いて、JLE がこれらの結果構文に対する容認性を判断する上で、その判断に影響を及ぼす言語的要因を検証している⁴。なお、(6) のような自動詞型の結果構文において、目的語位置を占めている“himself”や“his shoes”などの語を「疑似目的語」(fake object) と呼ぶことにする。



(A) Ken crushed the can.

As a result, (B) the can became flat.

完全に不自然 かなり不自然 やや不自然 判断できない やや自然 かなり自然 完全に自然

| | | (-3) | (-2) | (-1) | (0) | (+1) | (+2) | (+3) |
|----|--|------|------|------|-----|------|------|------|
| 1. | Ken crushed the can flat. | | | | | | | |
| 2. | Ken made the can flat by crushing it. | | | | | | | |
| 3. | Ken crushed and made the can flat. | | | | | | | |
| 4. | The can became flat by Ken's crushing it. | | | | | | | |
| 5. | The can was crushed flat by Ken. | | | | | | | |
| 6. | The can was made flat by crushing it by Ken. | | | | | | | |

図 2-7 平野 (2016) の容認性判断タスクの例

(4) 弱い結果構文

- a. Ken crushed the can flat. (形容詞句型)
- b. John broke the glass into pieces. (前置詞句型)

(5) 強い結果構文 [他動詞型]

- a. Paul kicked the door open. (衝撃を伴う接触動詞)
- b. Mike shook his father awake. (衝撃を伴わない接触動詞)

(6) 強い結果構文 [自動詞型]

a. Ken ran himself tired. (疑似目的語＝再帰代名詞)

b. Ken ran his shoes ragged. (疑似目的語≠再帰代名詞)

このタスクは、実験参加者に 2 枚 1 組のイラストと複数のテスト文を同時に提示し、2 枚 1 組のイラストが表す一連の状況を描写する英文として、併せて提示されたそれぞれのテスト文がどの程度自然な表現であると感じるかを 7 段階で回答してもらうものであった。7 段階の回答項目は、移動構文の容認性判断を取り扱った先行研究 Inagaki (2001) を踏まえ、-3「完全に不自然」、-2「かなり不自然」、-1「やや不自然」、0「判断できない」、+1「やや自然」、+2「かなり自然」、+3「完全に自然」とされた。テスト文には、結果構文だけでなく、使役動詞の **make** などを用いて同構文を書き換えた迂言的な表現などが含まれ、ランダムな順に並べて提示された。2 枚 1 組のイラストの内、左側の 1 枚は結果構文の主動詞が表す行為・活動を（疑似）目的語と共に描写するものであり、右側の 1 枚は結果述語が表す結果状態を描写するものであった。各イラストの下にその状況を表す 1 文が添えられた。図 2-7 の場合、左側のイラストの下には“**Ken crushed the can.**”という 1 文が、右側のイラストには“**As a result, the can became flat.**”という 1 文が添えられた。また、イラスト内に点線の丸印や矢印を加えることで、状態の変化した人・物（＝図 (Figure)）ならびに結果状態（＝地 (Ground)）に至るまでの推移が表された (Talmy, 2000)。なお、実験参加者は、JLE28 名と NSE10 名であった。JLE は某国立大学の英語専攻の 1 年生であり、NSE は 9 名が日本の大学に勤務する教員であり、1 名は教員の配偶者であった。JLE の英語のレベルは TOEIC で 475-860 点（平均 641.8 点）であった。各実験の回答の平均値と標準偏差を図 2-8 に示す。

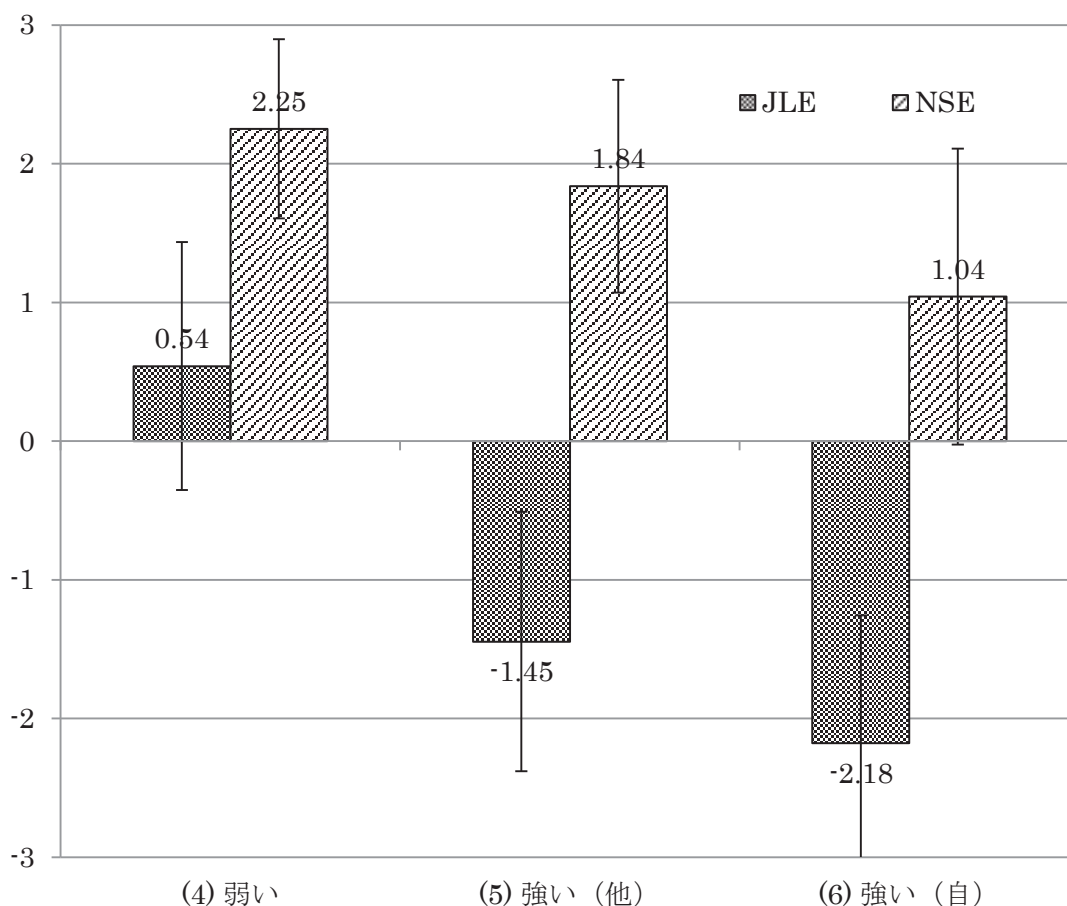


図 2-8 平野 (2016) における各種結果構文の容認度の結果
(平野 (2016), p.164, 図 3 改変)

この実験の結果から、平野 (2016) は、英語結果構文は総じて JLE に容認されにくく、中でも、強い結果構文に対する非容認性が高く、弱い結果構文が比較的容認されやすいものと報告している。このことから、JLE による英語結果構文の容認性判断は、主動詞が状態変化を含意するかどうかに影響を受けるものと結論付けている⁵。これは、英語結果構文が JLE に容認される度合いが総じて高く、かつ、弱い結果構文と強い結果構文が同程度に容認されると結論付けている Yotsuya et al. (2014) の検証結果とは大きく異なる結果である。このように検証結果が異なる原因として、前項で Inagaki (2002) と Yotsuya et al. (2014) における検証方法の差異について指摘したのと同様、Yotsuya et al. (2014) と平野 (2016) で採用されている検証方法が異なるものであり、それぞれ測られているものが異質なものになっていることが考えられる。

Yotsuya et al. (2014) の実験は、結果構文が文脈に沿うものであるかどうかの判断を JLE に求めていた。それに対し、平野 (2016) の実験は、結果構文を単文としてどの程度自然な表現と判断するかを JLE に尋ねていた。このように、同じ「容認」(acceptability) という用語に対して、Yotsuya et al. (2014) と平野 (2016) が異なる定義を基に検証を行っていることが分かる。それぞれの検証結果から、JLE は結果構文を文法的な文として提示された場合は、それが弱い結果構文であれ強い結果構文であれ、その解釈に困難を来たすことはないが、単文としてその容認性を問われた場合は、総じて自然な表現としては受け入れにくく、中でも強い結果構文を一層不自然な表現であると感じる傾向があることが示されたものと言えよう。しかし、Yotsuya et al. (2014) と平野 (2016) が採用している検証方法にはそれぞれ克服すべき限界点や問題点が散見される。以下、それぞれの検証方法が抱える限界点や問題点を指摘していく。

まず、Yotsuya et al. (2014) が、真偽値判断タスクと容認性判断タスクという 2 つのタスクを採用していたことを思い出されたい。Yotsuya et al. (2014) は、最初の真偽値判断タスクを、JLE が英語結果構文を知っているかどうかを確認するためのものであるとしており、後の容認性判断タスクを結果構文の容認性を測るためのものとしているが、それぞれ次のような限界点があるものとする。前者の真偽値判断タスクについては、次の点で、JLE が英語結果構文を知っているかどうかを確認する上で十分なタスクとは言いがたい。この実験で確認できるのは、結果構文において結果述語が叙述するものは直接目的語であるという「直接目的語の制限」(Levin and Rappaport Hovav, 1995) の知識に過ぎない。さらに言えば、いわゆる SVOC の第 5 文型において、C が叙述する対象が S ではなく O であるということに対する知識を確認したに過ぎない。また、前項でも指摘したとおり、参加者が True か False で回答するタスクであるため、テスト文が完全に不適切なものであると感じない限り、つまり、ある程度適切な表現であると感じた場合にも、その表現を True と判断し、結果として True の回答が過剰に多くなる可能性を多分に含むタスクであると考えられる。また、後者の容認性判断タスクについても、このタスクが結果構文に対する文法性や表現上の適切性を測る検証方法として十分なものとは言いがたい。このタス

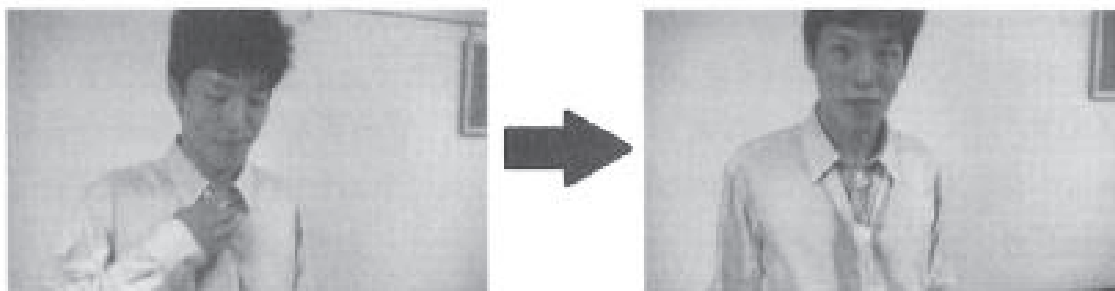
クでは結果構文が文法的に正しい文として提示されている。それゆえ、学習者はあくまでも、結果構文が文脈に沿うものであるかの判断をしたに過ぎず、結果構文をどの程度文法的なものとして容認できるか、あるいは、どの程度自然な表現として容認できるかの判断をしたとは考えにくい。また、文脈に沿うかどうかの判断も、結果構文に対する判断というよりは文中の一部の語彙のみに基づく判断になってしまっている可能性が否めない。例えば、**dirty** と **clean** という語の関係が **broken** と **clean** という語の関係よりも自然だと判断されたり、**a name plate** と **the metal** という語の関係が **a wooden shelf** と **the metal** という語の関係よりも自然だと判断されたりする可能性が考えられる (表 2-4 参照)。前項で指摘したように、1つの状況を描写する英文として、**JLE** がテスト文をどの程度自然な表現として受け入れるかを検証できる方法にすることで、検証方法上の改善が図れるだけでなく、移動構文と結果構文2つの構文について統一された検証方法を用いた実験が行えるという利点が得られるものと考ええる。

次に、平野 (2016) の検証方法における改善すべき点を指摘する。平野 (2016) では、実験で用いたテスト文として、弱い結果構文については、(4a), (4b) のように、結果述語が前置詞句型のものと形容詞句型のものが含まれているのに対して、強い結果構文については、結果述語が形容詞句型のものしか含まれていない。さらに、平野 (2016) では、**JLE** による弱い結果構文の容認性判断において、(4a) の前置詞句型のものと (4b) の形容詞句型のものとの間に有意差が確認されている。よって、**JLE** が弱い結果構文を強い結果構文よりも自然な表現として受け入れやすいという検証結果が、結果 (状態変化) を含意するか否かという主動詞の性質に起因する可能性もあれば、結果述語が形容詞句型か前置詞句型かという違いに起因する可能性も残される。そのため、弱い結果構文と強い結果構文の双方において結果述語が前置詞句型と形容詞句型を共に含めて再度検証を試みることは、**JLE** が結果構文をどの程度自然な英文であると感じるかに影響を及ぼす要因をより明らかにすることにつながり、有意義なことと考える。また、Yotsuya et al. (2014) では、弱い結果構文と強い結果構文のいずれも、形容詞句型の結果構文しか分析の対象とされていないため、前置詞句型を含めて再度検証を試みることで、先行研究における検証結果の不

一致が検証方法の違いによるものなのか、含めたテスト文の影響によるものなのかを含め、JLE による英語結果構文の習得に関してより詳細な実態を把握することが可能になるものと思われる。

2.1.2.3. スプリング (2015)

JLE による英語結果構文の習得を取り扱った研究の内、結果述語のタイプにも着目した検証方法を採用している先行研究として、スプリング (2015) がある。スプリング (2015) は、次のような実験を実施している。実験参加者に短い動画を 14 編見せ、各動画について英文を 5 つずつ提示している。その上で、各英文が動画の内容を正しく表しているか(動画の内容と一致し、かつ文法的に正しい)を 1 (文が正しくない) ~ 5 (文が正しい) の 5 段階で評価してもらっている (図 2-9 参照)。



(Evaluation)

- _____ He loosened his tie.
- _____ His tie was loose.
- _____ He pulled his tie loose.
- _____ He loosened his tie with a pull.
- _____ He tied his tie.

図 2-9 スプリング (2015) のタスク例 (スプリング (2015), p.417, 図 1)

実験参加者は、中国人学習者 24 名、日本人学習者 26 名、英語母語話者 19 名であった。中国人学習者は武漢にある大学の英語学部の 1 年生、日本人学習者は仙台にある大学の英語学部の 1 年生、英語母語話者はアメリカ合衆国のノースカロライナ州にある大学の学生

で、学年は 1 年生から 4 年生まで様々であった。なお、各動画に伴うテスト文は、以下 (7)-(12) のようなタイプに分類されている。

(7) 動詞フレーム文 (様態・原因なし)

a. He loosened his tie. (スプリング (2015), p.418, (8a))

b. She opened the door. (*Ibid.*, p.418, (8b))

(8) 動詞フレーム文 (様態・原因を修飾語で表す)

a. He loosened his tie with a pull. (*Ibid.*, p.418, (9a))

b. She opened the door by kicking it. (*Ibid.*, p.418, (9b))

(9) サテライトフレーム文 (変化を前置詞句で表す)

a. He cut the apple in half. (*Ibid.*, p.418, (10a))

b. He ripped the paper into two pieces. (*Ibid.*, p.418, (10b))

(10) サテライトフレーム文 (変化を不変化詞で表す)

a. He pulled the tie down. (*Ibid.*, p.418, (11a))

b. He brushed the flour off. (*Ibid.*, p.418, (11b))

(11) サテライトフレーム文 (変化を形容詞で表す)

a. He pulled the tie loose. (*Ibid.*, p.418, (12a))

b. She kicked the door open. (*Ibid.*, p.418, (12b))

(12) ダミー問題

His tie was loose. (*Ibid.*, p.418, (13))

この実験の結果は図 2-10 と図 2-11 のとおりであった。これらの結果から、スプリング (2015) は動詞フレーム表現に対しては、3 つのグループ間で大きな差が見られないものの、(8) のように様態・原因を修飾語で表した表現については、学習者と英語母語話者の間に有意差が確認されたことを報告している。この点については、本章の最終節・最終項で言及する。

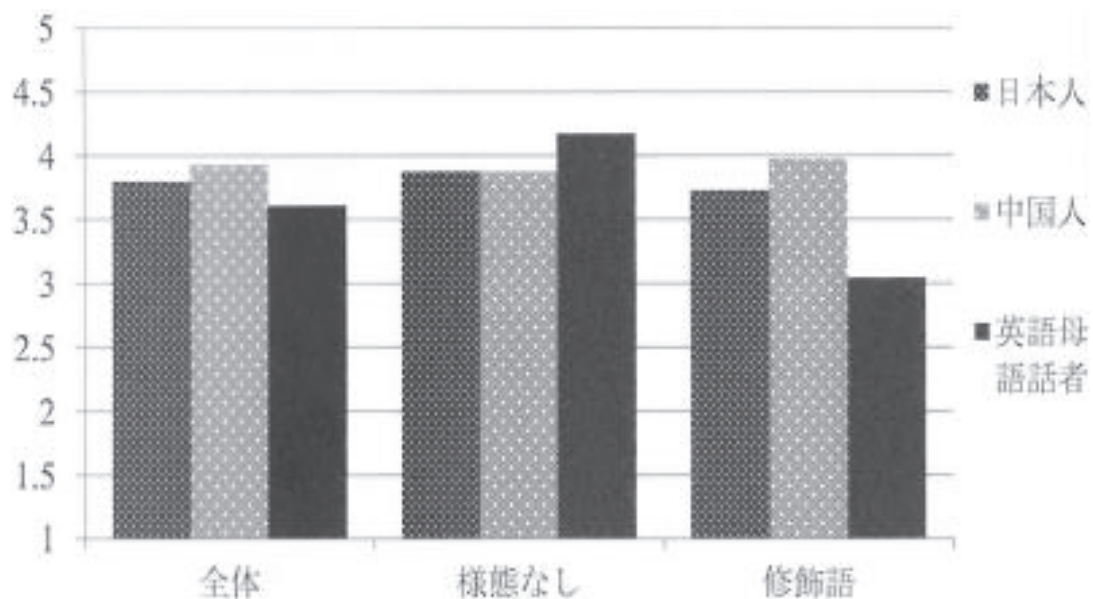


図 2-10 スプリング (2015) における動詞フレーム表現に対する評価
(スプリング (2015), p.419, 図 2)

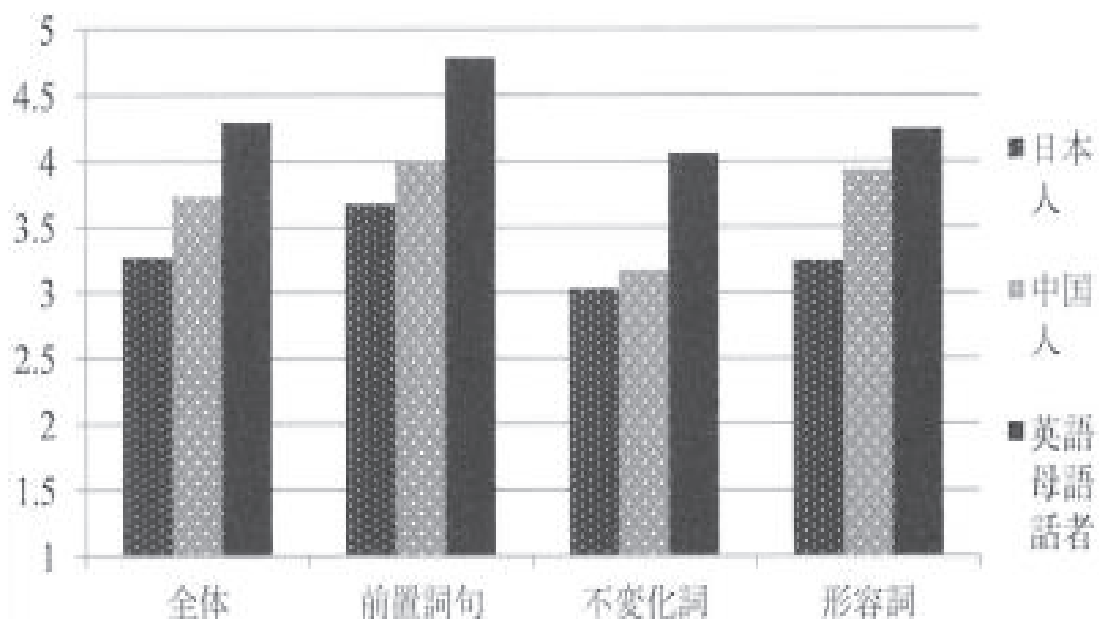


図 2-11 スプリング (2015) におけるサテライトフレーム表現に対する評価
(スプリング (2015), p.420, 図 3)

また、サテライトフレーム表現に対しては、学習者と英語母語話者の間で有意差が確認されたことを報告しており、特に、日本人学習者と英語母語話者の間では、(9) 変化を前

置詞句で表したタイプ、(10) 変化を不変化詞で表したタイプ、(11) 変化を形容詞で表したタイプの全てにおいて有意差が確認されていることから、日本人学習者にとって、サテライトフレーム表現の解釈には比較的困難を要することがうかがえる。さらには、(9) 変化を前置詞句で表したタイプと (10) 変化を不変化詞で表したタイプにおいては、日本人学習者と中国人学習者の間には有意差が確認されず、学習者全体と英語母語話者の間では有意差が確認されたのに対し、(11) 変化を形容詞で表すタイプにおいては、中国人学習者と日本人学習者の間に有意差が確認され、中国人学習者と英語母語話者との間に有意差は確認されなかった。このことから日英語間のフレームタイプの差異が (11) のように変化を形容詞で表すタイプの解釈において影響を及ぼしやすい可能性が考えられる。これは、前項の平野 (2016) の議論において、弱い結果構文の (4a) 前置詞句タイプのものと (4b) 形容詞タイプのものとの間に有意差が確認されたという結果と類似している。

しかしながら、スプリング (2015) において分類されたテスト文の中には、弱い結果構文・強い結果構文という観点から眺めてみると、正しく分類されたとは言いがたい文が見受けられる。ここで (9) サテライトフレーム文 (変化を前置詞句で表したもの) として示されている “He cut the apple in half.” と “He ripped the paper into two pieces.” の 2 文に再度注目する。一見、これらの文は前置詞句が変化を表しているように見える。しかしながら、これらの主動詞を見てみると、cut と rip というそれ単独で状態変化を表しうる動詞が使われている。つまり、前置詞句を省略した “He cut the apple.” と “He ripped the paper.” でも、リンゴや紙に変化が生じたことが含意される。よって、(9) に分類されている英文は、(4a (= 2a)) 弱い結果構文の前置詞句型に属するものであり、(3a) 強い結果構文の前置詞句型に属するものではない。言い換えれば、「サテライトフレーム文 (変化を前置詞句で表したもの)」として示されている (9) のような英文は、むしろ「動詞フレーム文 (変化を前置詞句で補足したもの)」という新たな分類に該当する英文のように思われる。一方、(11) サテライトフレーム文 (変化を形容詞で表す) として示されている “He pulled the tie loose.” と “She kicked the door open.” の 2 文では、主動詞には状態変化を含意しない pull と kick が用いられている。つまり、これらは (3b) 強い結果構文の形

容詞句型に属するタイプである。よって、スプリング (2015) の実験結果 (図 2-11) において、前置詞句で変化を表したとする (9) のような英文に対する日本人学習者の解釈が、(10) 不変化詞で変化を表した英文や (11) 形容詞句で変化を表した英文よりも平均値として上回っている原因としては、結果の表し方 (結果述語) が前置詞句、不変化詞、形容詞のいずれかであるかだけでなく、主動詞の含意する状態変化の有無が影響を及ぼしていた可能性も検討する必要がある。その意味では、(9) サテライトフレーム文 (変化を前置詞句で表したもの) に分類される英文としては、(4a (= 2a)) 弱い結果構文 (前置詞句型) ではなく、(3a) 強い結果構文 (前置詞句型) を含めて再検討することは有意義なことだと思われる。

ここまで、JLE による英語移動構文と結果構文の習得 (認知や理解) に関する先行研究間で、検証方法が異なることと検証結果が必ずしも一致していないことを見てきた。移動構文に関しては、絵図一文照合タスクを採用した Inagaki (2002) とイラスト付き真偽値判断タスクを採用した Yotsuya et al. (2014) を取り上げ、(1) 様態+着点型の移動構文に対して、Inagaki (2002) は、JLE が場所読みの解釈を容認しやすいとする一方で、Yotsuya et al. (2014) は、JLE が場所読みの解釈も着点読みの解釈もほぼ同程度容認すると結論付けていることを見た。また、結果構文については、文脈内での容認性判断タスクを採用した Yotsuya et al (2014)、イラスト付き容認性判断タスクを採用した平野 (2016)、動画を用いた容認性判断タスクを採用したスプリング (2015) を概観した。その内、Yotsuya et al (2014) は、JLE が弱い結果構文と強い結果構文を同程度に、しかも高い度合いで容認すると主張しているのに対し、平野 (2016) は、JLE が総じて英語結果構文を容認しにくく、とりわけ、強い結果構文の場合に容認しない度合いが強いと主張していることを確認した。また、スプリング (2015) が、JLE がサテライトフレーム文を動詞フレーム文よりも容認しにくい傾向があると結論付けていることを確認した。ただし、先行研究間で、JLE が移動構文や結果構文を「容認する」ということに対して異なる定義を基に検証が行われており、測られているものが異質なものになってしまっていたことに留意しなければならない。さらに、先行研究で採用されているテスト文の動詞のタイプと結果述語のタイプにばらつ

きがあることを確認した。これらの点を改善・統一した上で、各種構文に対する JLE の容認性判断を再度検証することが求められるものとする。次節では、先行研究の検証方法が抱えるその他の限界点・問題点を指摘する。

2.2. 検証方法上の限界点

本節では、先行研究の検証方法が抱えるその他の限界点・問題点として、「比較選択の問題」と呼ばれる問題と「双極法」が抱える問題について、それぞれ言及する。

2.2.1. 比較選択の問題

先行研究の中には検証方法として絵図一文照合タスクや容認性判断タスクを採用しているものがあり、その中には、タスクを実施する際、実験参加者に対して複数のテスト文やイラストを同時に提示されているものがある。複数のテスト文が同時に提示される場合、実験参加者は提示された 1 つ 1 つのテスト文の容認性を判断しているつもりが、同時に提示された複数のテスト文同士での優劣をつけることで、1 つ 1 つのテスト文の容認性が正確に測れていない可能性が残る。また、1 つのテスト文に対して複数のイラストを提示し、そのテスト文が表す状況を描いたイラストとして適切なものを選択させるようなタスクにおいても、テスト文の表す内容を 1 枚 1 枚のイラストが描写する状況と照らし合わせて判断したりしているつもりが、同時に提示された複数のイラスト同士でどちらがそのテスト文の内容により合致するものであるかという優劣をつけてしまい、1 つのテスト文が描写しうる 1 つ 1 つの状況を正確に判断できていない可能性が残る。これを「比較選択の問題」と呼ぶことにする。この比較選択の問題を抱える先行研究として、前節で言及した Inagaki (2002)、平野 (2016)、スプリング (2015) が含まれる。Inagaki (2002) では、図 2-1 に示したように、着点読みの解釈を伴うイラストと場所読みの解釈を伴うイラストが同時に提示されている。平野 (2016) とスプリング (2015) では、それぞれ図 2-7 と図 2-9 に示したように、2 枚 1 組のイラストに対し複数のテスト文が同時に提示されている。

これら 3 つの先行研究に加え、同じく比較選択の問題を抱える先行研究として、Inagaki

(2001) が挙げられる。Inagaki (2001) は、大阪府立大学の工学部の学生 42 名を対象に、
 図 2-12 に示すようなイラスト付き容認性判断タスクを採用している⁶。



| | | | | | |
|---|----|----|---|---|---|
| 1. Sam entered the house by walking. | -2 | -1 | 0 | 1 | 2 |
| 2. Sam walked and went into the house. | -2 | -1 | 0 | 1 | 2 |
| 3. Sam went into the house by walking. | -2 | -1 | 0 | 1 | 2 |
| 4. Sam went into the house walking. | -2 | -1 | 0 | 1 | 2 |
| 5. Sam walked in the house for 5 minutes. | -2 | -1 | 0 | 1 | 2 |
| 6. Sam entered the house walking. | -2 | -1 | 0 | 1 | 2 |
| 7. Sam walked and entered the house. | -2 | -1 | 0 | 1 | 2 |
| 8. Sam walked into the house. | -2 | -1 | 0 | 1 | 2 |

図 2-12 Inagaki (2001) による容認性判断タスクの例 (Inagaki (2001), p.169, Figure B1)

このタスクでは、実験参加者は、イラストが示す状況を表す英文として、併せて提示されたテスト文がどの程度自然な表現であると感じられるかを -2 (completely unnatural) から +2 (completely natural) までの 5 件法で回答することを求められている。テスト文には、(13) のような様態+着点句型の移動構文や、(14) のような移動構文の迂言的表現などが含まれている。この実験の結果を図 2-13 に示す。

(13) 移動構文 (様態+着点句型)

Sam walked into the house.

(14) 移動構文の迂言的表現

a. Sam walked and went into/entered the house.

b. Sam went into/entered the house by walking.

c. サムは家に歩いて入って行った (入った)。

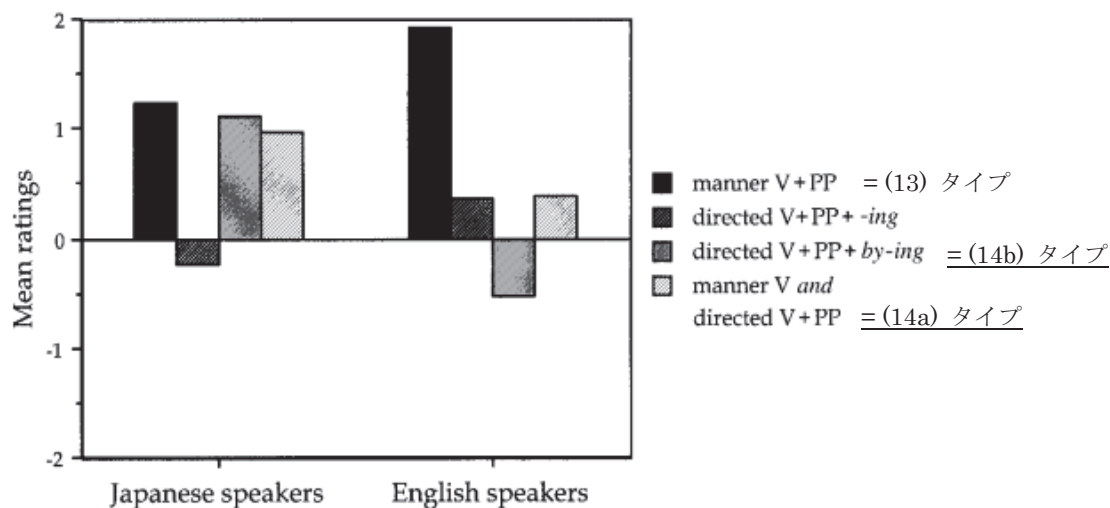


図 2-13 Inagaki (2001) における容認性判断タスクの結果 (Inagaki (2001), p.160, Figure 1 [下線部は筆者による加筆])

この実験の結果から、Inagaki (2001) は、JLE が (13) 様態+着点句型の英語移動構文をある程度容認するものの、(14a, b) 迂言的表現の英文を、(2c) タイプの日本語表現に相当するものとみなすために過剰に容認してしまうと結論付けている。しかしながら、実験

参加者に複数のテスト文を同時に提示する方法で実験を実施しているために、テスト文同士での比較が行われた上での判断になってしまっている可能性が残留してしまっていることは否めない。よって、JLE が (13) 様態+着点句型の移動構文や (14a, b) 迂言的表現を個別に判断する場合にも同様の検証結果が得られるかどうかは、再度検証するに値する課題であると思われる。同様に、前節で取り上げたとおり、結果構文の習得を取り扱った平野 (2016) や スプリング (2015) の実験においても参加者に複数のテスト文が同時に提示されているため、参加者が各種結果構文やその迂言的表現を 1 文ずつ個別に判断する場合にも同様の結果が得られるかは、再度検証するに値する課題と言えよう。

2.2.2. 双極法の抱える問題

これまでに言及した先行研究の内、容認性判断タスクを採用しているものの中には、平野 (2016) や Inagaki (2001) のように、参加者に求める回答の中に正の数と負の数の両方が含まれているもの (図 2-7、図 2-12 参照) と、Yotusya et al.(2014) や スプリング (2015) のように、負の数を用いていないもの (図 2-6、図 2-10、図 2-11 参照) とがある。前者の手法を「双極法」と呼び、後者の手法を「単極法」と呼ぶことにする。以下、前者の双極法が抱える限界点について言及する。

双極法が抱える問題として以下の 2 点が考えられる。1 点目は、5 件法ないしは 7 件法における真ん中の 0 が意味するものが曖昧な点である。平野 (2016) では、0 の項目名は「判断できない」となっており、Inagaki (2001) では“not sure”となっている。これらの回答項目については、実験参加者のテスト文に対して感じる自然さが中間くらいのものであると判断した場合と、どの程度の自然さであるかの判断そのものに迷った場合との回答が混ざってしまっている可能性が考えられる。2 点目は、正の数側の項目名と負の数側の項目名の内、意味的に重複している内容のものが含まれていると考えられる点である。例えば、平野 (2016) では、図 2-7 に示したとおり、(-2) の項目名を「かなり不自然」としているが、「かなり不自然」であると感じるが完全に不自然とは感じないということであれば、それは「少し自然」であると感じていることになり、(+1) の項目名がそれに該当し、

(-2) と (+1) の違いが明確ではない。同様に、Inagaki (2001) における 5 件法では、-1 と +1 の回答項目に対して項目名の記載がないのだが、仮にそれぞれに -1 (somewhat unnatural 「ある程度不自然」)、+1 (somewhat natural 「ある程度自然」) とでも回答項目名を付けたならば、「ある程度自然」であるということと「ある程度不自然」であるということは意味的には重複する内容になってしまっているとも考えられる。本研究では、これらの点を考慮し、かつ、参加者がテスト文をどの程度自然な表現として受け入れるかを測る上で、単極法の実験を行った (次章 3.2. 参照)。

ここまで先行研究における検証方法の差異を概観し、それぞれの検証方法の抱える問題を指摘してきたが、その中でもイラスト付き容認性判断テストは、比較選択の問題や双極法の問題を解決すれば、上述の絵図一文照合テストや真偽値判断テストが抱える問題を考慮する必要がなく、各テスト文の容認性を調査する上で信頼性と妥当性の高い実験手法になるものとする。

2.3. 未検証の課題

本章の最後として、先行研究では取り組まれていない未検証の課題があることについて触れておきたい。未検証の課題として、以下の 2 点を取り上げる。1 点目として、先行研究において個別に取り扱われてきたものの、統一された手法で検証されていない課題について取り上げ、2 点目として、管見の限りでは、先行研究においてほとんど取り扱われていない結果構文の迂言的表現の存在について取り上げる。

2.3.1. 統一的に検証されていない課題

2.1.1. において、JLE が (1) 様態+場所句型の移動構文に対して着点読みと場所読み双方の解釈を容認するかどうかという研究課題については、Inagaki (2002) や Yotsuya et al. (2014) がそれぞれ独自の検証方法を用いて取り組んでいることを述べた。また、3.2.1. において、JLE が (13) 様態+着点句型の移動構文や (14a, b) 迂言的表現をどの程度自然な表現であると感じるかという研究課題については、Inagaki (2001) によって取り組まれ

ていることを述べた。しかしながら、これまでの先行研究ではこれらの課題が個別に取り扱われており、JLE が、移動を表す英語表現として、(1) 様態+着点句型、(13) 様態+場所句型、(14a, b) 迂言的表現をそれぞれどの程度自然な表現であると感じるかを統一された検証方法で調査した先行研究は管見の限りでは見当たらない。

また、結果構文についても、統一的に検証されていない課題が見受けられる。各先行研究で取り扱っているテスト文に着目すると、Yotsuya et al. (2014) では、弱い結果構文と強い結果構文が取り扱われているものの、対象となっているのは結果述語が形容詞句のものだけである(表 2-4 参照)。平野 (2016) では、弱い結果構文においては前置詞句型のものと形容詞句型のものが含まれているものの、強い結果構文は形容詞句型のもののみである((4)-(6) 参照)。スプリング (2015) では、結果述語は前置詞句型のものも形容詞句型のものも取り扱われているものの、主動詞が結果態を含意するかどうかという点には十分な配慮がなされておらず、弱い結果構文・強い結果構文という観点からは十分な分類がなされていない((7)-(12) 参照)。(2a, b) と (3a, b) に示したような、弱い結果構文と強い結果構文の双方において結果述語が前置詞句型のものと形容詞句型のものを同程度含めて JLE による容認性判断の検証を再度行うことは、JLE による英語結果構文の習得(容認性判断)に主動詞と結果述語の双方が及ぼす影響をより詳細に把握することができるという意味において、有意義なことであると言えよう。

さらには、これまで理論言語学の分野において、移動構文と結果構文の両構文はサテライトフレーム言語・動詞フレーム言語の類型論に基づく日英語間の特性を反映する代表的な構文として議論されてきたにもかかわらず(小野, 2012; Talmy, 2000; 米山, 2009)、JLE によるこれら両構文の習得を同時に取り扱っている先行研究は、管見の限りでは、上述の Yotsuya et al. (2014) のみである。しかし、その Yotsuya et al. (2014) においても、移動構文については真偽値判断タスクの結果に基づく分析がなされ、結果構文については容認性判断タスクに基づく分析がなされており、JLE による両構文の容認性が統一的な検証方法で測られてはいない。JLE によるこれら両構文やその迂言的表現に対する容認性を統一された方法で検証することで、ここまで述べてきた各先行研究の限界点を補うとともに、

JLEによる英語移動構文と英語結果構文の2つの構文の習得に関する共通点や相違点を確認することが期待できるものとする。これらの点から、両構文に対するJLEの容認性判断を統一・改善された検証方法で測ることは有意義なことと言えよう。

2.3.2. 結果構文の迂言的表現

本節の最後に、これまでの先行研究において、結果構文の迂言的表現についての取り扱いが十分ではないことについて述べておく。2.2.1. で述べたとおり、移動構文の迂言的表現については、Inagaki (2001) で取り扱われており、JLEが(14a, b)のような迂言的表現を(14c)の日本語表現に相当するものとみなすために、(14a, b)のような表現を過剰に容認してしまうと結論付けている。同様の現象が結果構文においても該当するか否かという点についてはほとんど着手されていないように思われる。上述のとおり、スプリング(2015)においては、(8a, b)で示したように、様態や原因を修飾語で表した表現が取り扱われており、これらが結果構文を別の表現に書き換えた表現であるとは言えるものの、修飾語のタイプが統一されておらず、修飾語の中にJLEが容認しやすい表現と容認しにくい表現が混在している可能性が考えられる。また、平野(2015c)、Hirano(2015)は、JLEが結果構文を使役動詞“make”を用いて書き換えた迂言的表現を過剰に容認することを指摘しているが、検証方法に関して2.1.2.2. と2.2.1. で指摘した限界点が見受けられる。仮に、Inagaki(2001)が指摘しているように、JLEが(14a, b)のような移動構文の迂言的表現を過剰に容認する原因の1つとして、(14a)“Sam walked and went into/entered the house.”の“and”や(14b)“Sam went into/entered the house by walking.”の“by-ing”を、(14c)「サムは家に歩いて入って行った(入った)。」の「(歩い)て」のような「-て(で)」形表現に相当するものとみなすことが挙げられるとすれば、結果構文の迂言的表現でも同様の現象が確認できるはずである。これを検証してみることは、母語が与える影響を移動構文とは別の構文の習得においても確認できるという意味において価値のあることだと言えよう。

ここで、結果構文の迂言的表現として、安藤(2005)やJackendoff(1990)で言及され

ている結果構文のパラフレーズ表現について触れておく。以下の (16a) と (16b) は、それぞれ使役動詞 **make** と **get** を主動詞にして、(15a) と (15b) を書き換えた迂言的表現である。

(15) (強い) 結果構文

- a. The gardener watered the tulips flat. (形容詞句型)
(Jackendoff, (1990), p.226, (36a))
- b. Charlie laughed himself into a stupor. (前置詞句型) (*Ibid.*, p.227, (39a))

(16) 結果構文の迂言的表現

- a. The gardener made the tulips flat by watering them. (*Ibid.*, p.228, (41a))
- b. Charlie got himself into a stupor by laughing. (*Ibid.*, p.228, (41c))

Jackendoff (1990) によれば、これら迂言的表現の主動詞である使役動詞の選択については、形容詞句型の結果構文に対しては **make** を用いてパラフレーズすること、前置詞句型の結果構文に対しては **get** を用いてパラフレーズすることが最適である。

移動構文の迂言的表現について Inagaki (2001) が指摘するように、JLE が英語の **by -ing** を日本語の「～(し)て」形の表現と同等のものみなすとすれば、JLE は (16a, b) のような表現も容認しやすいことが期待できよう。しかしながら、(16a, b) のような表現を NSE がどの程度自然な表現であるとみなすかの検証は着手されておらず、(14b) “Sam went into/entered the house by walking.” のような移動構文の迂言的表現と同様に、JLE による判断が NSE の判断と比べて過剰なものになるかどうかは検証してみる価値があると言えよう。また、JLE が (14a) “Sam walked and went into/entered the house.” のような、移動様態動詞と有方向移動動詞を **and** で並列させた表現を過剰に容認した現象と比較するという意味において、結果構文においても、以下の (17a, b) のように、状態変化を含意しない動詞と上記の使役動詞とを **and** で並列させた表現を JLE と NSE がどの程度自然な表現として容認するかを検証してみる価値は十分にあるものと思われる。

(17) 結果構文の迂言的表現 (and 型)

- a. The gardener watered and made the tulips flat. (形容詞句型)
- b. Charlie laughed and got himself into a stupor. (前置詞句型)

Inagaki (2001) によれば、NSE が (14a) “Sam walked and went into/entered the house.” のような英語表現を容認しにくいという結果に至った要因の1つとして、(14a) のような英文は移動様態動詞と有方向移動動詞のそれぞれが表す2つの事象を描写しているため、実験で提示された1つの事象を描写しているイラストと合致しなかった可能性があるとしている。その点を考慮すると2つの疑問が湧いてくる。1つは、提示されるイラストが上記2つの事象を描写したものであれば、NSE は (14a) のような表現を自然な表現として容認するのだろうかという疑問である。2つ目は、2つの事象（主動詞が表す「起因事象」と結果述語が表す「結果事象」）からなる構文として議論されてきた結果構文を (14a) と同様のやり方で書き換えた (17a, b) のような迂言的表現を NSE はどう判断するであろうかという疑問である。(16a, b) や (17a, b) のような結果構文の迂言的表現に対する NSE と JLE の判断を比較することで、Inagaki (2001) において移動表現を中心になされた考察を、状態変化表現にも適用することが可能であるかどうかを検証することは有意義なことと考える。

ここまで、JLE による移動構文と結果構文の習得に関する先行研究において、先行研究間で類似の研究課題に対する検証方法と検証結果が一致していないこと、検証方法には様々な限界点や課題点が含まれていること、そして、統一的な手法で検証されていない課題が存在することを指摘してきた。本研究は、これらの点と第1章で概観した移動表現と状態変化表現における日英語間の差異を踏まえ、統一・改善された検証方法を採用し、同一の実験参加者を対象に、英語の移動構文と結果構文および両構文の迂言的表現に対する容認性判断を検証する。以下、本章の内容を振り返りながら、具体的な検証内容について述べる。

まず、2.1.1. では Inagaki (2002) と Yotsuya et al. (2014) を比較し、2.1.2. では Yotsuya et al. (2014) と平野 (2016) を比較した。いずれの項でも、先行研究間で検証結果が一致していないことを確認した。2.1.1. の先行研究では、JLE が「様態+場所句」型の移動構文 (例: Tom swam inside the cave.) に対して「着点読み」と「場所読み」のいずれの解釈を容認するか、あるいは、両方を容認するかという課題が検証され、2.1.2. の先行研究では、JLE が弱い結果構文 (例: Mike painted the wall black.) と強い結果構文 (例: Paul kicked the door open.) のどちらを容認しやすいかという課題が検証された。本研究では、これらの先行研究間で異なる検証方法が採用されていた点や、それにより異質なものが測られていた点、さらには、「比較選択の問題」や「双極法」の抱える問題といった検証方法上の限界点を踏まえ、検証方法を統一・改善して (第 3 章にて詳述)、検証結果の一致していないこれらの課題に改めて取り組む。また、その際に、これまで統一的に取り扱われてこなかった構文や、先行研究のテスト文の分類に不備があったことに留意し、移動構文については「様態+着点句」型のもの (例: Tom swam into the cave.) を含め、結果構文については、「弱い-強い」の分類の加え、結果述語が形容詞句型のもの (例: Mike painted the wall black. (弱-形) / Paul kicked the door open. (強-形)) と前置詞句型のもの (例: John broke the glass into pieces. (弱-前) / Bob stabbed the man to death. (強-前)) を含めて検証を行う (テスト文の詳細は第 3 章にて後述)。これにより、それぞれの構文の主動詞の性質や日英語間の項構造の差異だけでなく、移動の「経路」や変化の「推移」が明示的にも非明示的にも表されうるという英語の特性にも配慮した分析を施すことが可能となる。この特性を考慮に入れた比較検証を行うという意味で、移動構文においては、JLE が着点読みの解釈を伴う移動表現として「様態+着点句」型のものとして「様態+場所句」型のものどちらを容認しやすいかを検証し、結果構文においては、弱い結果構文と強い結果構文の双方で、結果述語が「形容詞句」型のものとして「前置詞句」型のものどちらを容認しやすいかを検証する。さらに、Inagaki (2001) で議論された移動構文の迂言的表現と併せて、2.3.2. で言及したような結果構文の迂言的表現もテスト文に含めることで、JLE が両構文の迂言的表現をどの程度容認するかを検証する。これにより、

検証方法を改善した上で Inagaki (2001) における検証結果を検討し直すことができるだけでなく、位置変化と状態変化の間で、迂言的表現に対する容認性の度合いに程度差があるかどうか、また、双方の迂言的表現を容認する上で類似点や相違点があるかを確認することが可能となる。ここまでをまとめると、以下の 5 つが本研究で取り組む小課題になる。なお、先行研究間で「容認性」に対する定義が統一されていないことを指摘したが、本研究では、これを「自然な表現として感じられる度合い」として検証を進める。

移動構文に関する課題

【小課題 1】JLE は、着点読みの解釈を伴う英語移動構文として、「様態+着点句」型と「様態+場所句」型のどちらの英語表現を容認しやすいか。

【小課題 2】JLE は、「様態+場所句」型の英語移動構文に対して、「着点読み」と「場所読み」のどちらの解釈を容認しやすいか。

結果構文に関する課題

【小課題 3】JLE は、英語結果構文の内、「弱い結果構文」と「強い結果構文」のどちらを容認しやすいか。

【小課題 4】JLE は、英語結果構文の内、「形容詞句」型の結果構文と「前置詞句」型の結果構文のどちらを容認しやすいか。

両構文の迂言的表現に関する課題

【小課題 5】JLE は、英語移動構文と英語結果構文のそれぞれの迂言的表現をどの程度容認するか。

これら 5 つの課題に取り組むことで、以下の研究課題に応えることを目指す。

【研究課題】英語の移動表現・状態変化表現に対する JLE の容認性判断は、日英語間の動詞フレーム言語・サテライトフレーム言語としての特性の差異に影響を受けるか。また、受けるとすれば、具体的にどのような特性に影響を受けるか。

第2章 注釈

1. Yotsuya et al. (2014) は、Suzuki (2012) の提唱するパラメータ値を理論的基盤としながら、JLE を対象に、様態+場所句型の移動構文における「着点読み」と「場所読み」の解釈の習得と「弱い結果構文」と「強い結果構文」の習得を同時に取り扱っている。
2. 下線部分は、第4章での考察において本研究の実験結果と比較するために加筆した。
3. Yotsuya et al. (2014) において実験に使用されたその他のイラストは、Yotsuya et al. (2014) の執筆者の方々と相談の上、本論文には掲載しないことにした。図2-4以外のイラストは Yotsuya et al. (2014) に掲載されていないため、本論文に掲載しても、読者がその証拠を辿ることができない（つまり、Yotsuya et al. (2014) を読んでも、オリジナルの実験資料のイラストを確認することができない）ことが主な理由である。
4. 平野 (2016) は、これら3種類の分類に基づく分析と、(4a), (4b), (5a), (5b), (6a), (6b) の6種類に基づく分析も行っている。詳しくは平野 (2016) を参照されたい。
5. 平野 (2016) は、JLE による英語結果構文の容認性判断に影響を及ぼす言語的要因として、(i) 主動詞の含意する結果状態の有無、(ii) 主動詞の他動性、(iii) 結果述語の統語範疇を挙げている。
6. Inagaki (2001) は、これら42名のJLEだけでなく、英語母語話者(NSE)22名も対象に実験を実施している。また、英語の移動表現に対する容認度を測るだけでなく、それに相当する日本語の移動表現に対する容認度も測り、双方向的な母語の影響を検証している。

第3章

実験的検討

本章では、本研究の研究課題に応えるために実施した検証実験の概要を説明し、実験結果を示した上で、各小課題の検証結果に対して考察を加える。検証実験については、実験参加者、実験内容、実験結果の順に説明する。実験内容については、先行研究における検証方法との違いを明確にしながらか説明を加える。また、各小課題の検証と考察については、移動構文に関する課題（小課題 1・2）、結果構文に関する課題（小課題 3・4）、両構文の迂言的表現に関する課題（小課題 5）の順に議論を進める。それぞれ、移動の「経路」と状態変化の「推移」が JLE によってどのように認識されているのかを軸として考察を進める。また、その認識されたものが、どの程度自然な表現としてみなされているのかという程度差にも焦点を当てて考察を進める。

3.1. 実験参加者

実験参加者として、日本語を母語とする英語学習者（以下、JLE）46名と英語母語話者（以下、NSE）11名の協力を得た。JLE 46名の内、26名が某国立大学の1年生であり、全員が英語専攻の学生であった。この26名を実験群 A とする。JLE 46名の内、残りの20名が某公立大学の2～4年生であり、全員が非英語専攻の学生であった。各学年の人数は、2年生が4名、3年生が12名、4年生が4名であった。この20名を実験群 B とする。NSE 11名の内、10名が日本の大学に勤務する教員であり、1名が教員の配偶者であった。NSE 11名をまとめて実験群 C とする。

表 3-1 実験群の背景情報のまとめ

| 実験群 | 学年（専攻） | TOEIC のスコア |
|----------------------------|----------------------|---------------------------------------|
| A: JLE (<i>n</i> = 26) | 大学 1 年生 (英語専攻) | 平均: : 644.6 (520-785) 標準偏差 : 69.0 |
| B: JLE (<i>n</i> = 20) | 大学 2-4 年生 (非英語専攻) | 平均: : 499.3 (280-665) 標準偏差 : 135.9 |
| C: NSE (<i>n</i> = 11) | 大学教員 [1名は教員の配偶者] | |

実験群 A・B は共に JLE の群であるが、英語を専攻しているかどうかと英語力の違いによって、対象とする構文や迂言的表現の容認性判断に差が生じるかを検証するために別々の群として分類した。実験群 A の英語のレベルは TOEIC で 520-785 点（平均 644.6 点、標準偏差 69.0）であった。実験群 B は TOEIC を受験したことがある者が 20 名中 11 名であり、そのスコアが 280-665 点（平均 499.3 点、標準偏差 135.9）であった。B 群の残り 9 名については、英検（準 2 級・3 級）の資格を持つ者もいたが、彼らが中学生・高校生の時期に受験したものであり、実験実施時期の彼らの英語のレベルを測る材料はなかった。上記の TOEIC のスコアに基づいて JLE の英語力を判断すれば、実験群 A が実験群 B よりも比較的英語力が高いグループであると考えられる。

なお、実験群 A と実験群 B については、別日に別会場で実験を実施した。実験を実施するにあたり、予め実験に参加協力してくれる有志を募った上で実験を行ったということもあり、いずれの実験群の参加者も最後まで積極的・献身的に実験に協力してくれた。同じ回答を続けたり、途中で実験協力を放棄したりする者はいなかった。また、実験群 C については、参加者 1 人 1 人に対し個別で実験を実施した。いずれの参加者も最後まで協力的・献身的に回答をしてくれた。

3.2. 検証実験

3.2.1. 実験の概要

検証実験として、イラスト付き容認性判断テストを採用した。このテストは、ある一連の状況表す 2 枚 1 組のイラストを実験参加者に提示し、その 1 組のイラストが表す状況を描写する英文として、併せて提示されたテスト文がどの程度自然な表現であると感じられるかを 5 段階で回答してもらった。なお、1 組のイラストに対して提示されたテスト文の判断をしてもらう作業をタスクと呼ぶことにする。

この実験では、前章で言及した「比較選択の問題」と「双極法の問題」を考慮し、次のような改善を図った。まず、比較選択の問題については、2 枚 1 組のイラストと併せて実

験参加者に提示するテスト文の数を1文のみとした。これにより、テスト文1つ1つが他のテスト文と比較された上で判断されてしまう可能性が極めて軽減されたものとする。また、双極法の問題については、5段階の回答を次のような単極法の回答項目に設定にした。JLEである実験群AとBに対しては、0「完全に不自然」、+1「少し自然」、+2「わりと自然」、+3「かなり自然」、+4「完全に自然」とし、NSEである実験群Cに対しては、0 (completely unnatural)、+1 (slightly natural)、+2 (somewhat natural)、+3 (fairly natural)、+4 (completely natural) とした。これにより、双極法における0という回答項目のように、参加者が「テスト文に対して感じる自然さが中間くらいのものであると判断した場合」と「どの程度の自然さであるかの判断そのものに迷った場合」との回答が混在するような回答が排除されたものとする。さらには、双極法における「かなり不自然」と「少し自然」という回答項目のように、表現こそ異なるものの意味的に重複してしまう回答を排除することができたと考える。なお、これら5段階の回答項目とは別に、実験群AとBに対しては、X「知らない単語があるため判断できない」、Y「知らない単語はないが判断できない」という2つの選択肢を用意した。こうすることにより、実験参加者がテスト文の意味を理解できない場合と容認性判断そのものに迷った場合との区別することが可能な実験を実施することが可能になった。なお、実験群Cに対してもXとYという回答項目を用意したが、用意したテスト文の中にNSEが知らない単語があることはないと判断し、実験群Cに対してはX (can't understand what the situation is)、Y (not sure) という回答項目にした。

3.2.2. タスクの種類と数

この項では、本研究の実験に含めたテスト文とタスクの種類と数について述べる。まず、移動構文とその迂言的表現用のタスク、結果構文とその迂言的表現用のタスクの順にそれぞれ説明した上で、錯乱用タスクとして用意したその他のタスクについての説明を行う。なお、この実験には様々なタイプのテスト文に対するタスクが含まれるが、実験参加者には全てのタスクをランダムな順で提示する形で実験を実施した。

まず、移動構文とその迂言的表現用のタスクについて、用意したテスト文のタイプは以下 (1)-(3)のとりである。

- (1) 様態+着点句型： Mike swam into the cave.
- (2) 様態+場所句型： Mike swam inside the cave.
- (3) 移動構文（様態+着点句型）の迂言的表現
 - (a) and 型： Mike swam and went into the cave.
 - (b) by -ing 型： Mike went into the cave by swimming.

各小課題の検証にかかわるタスクとして、(1) 様態+着点句型の移動構文用のタスクを 10、(2) 様態+場所句型の移動構文用のタスクとして、着点読みの解釈を伴うものと場所読みの解釈を伴うものとをそれぞれ 11 ずつ用意した。以下、(2) 様態+場所句型の移動構文の内、着点読みの解釈を伴うものについて言及する際は (2-着) と表記し、場所読みの解釈を伴うものについて言及する際は (2-場) と表記する。移動構文の主動詞には、fly, jump, run, swim, walk の 5 つの動詞を用いた。着点句としての前置詞には、into, onto, to の 3 つを用い、場所句としての前置詞としては、above, behind, by, in, inside, near, on, under の 8 つを用いた。さらに、迂言的表現用のタスクとして、(3a) のように移動様態動詞と有方向移動動詞を and でつなぐことで (1) を書き換えたものと、(3b) のように主動詞に有方向移動動詞 (went, came) を用い、移動の様態を by -ing で表すことによって (1) を書き換えたものとをそれぞれ 10 用意した。(3a) と (3b) の書き換えについては、主動詞に went を用いたものと came を用いたものとをそれぞれ 5 種類ずつ用意した。これら計 52 タスクが移動構文とその迂言的表現用に用意したものである。具体的なテスト文については、表 3-2 と表 3-3 を参照されたい。

表 3-2 タスクに含めた移動構文

| 種類 | 移動様態動詞 | テスト文 |
|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------|
| (1) 様態＋ 着点句型 (10 文) | fly | The plane flew to Osaka. |
| | | The plane flew into the cloud. |
| | jump | John jumped onto the bed. |
| | | Fred jumped into the pool. |
| | run | Tom ran to the park. |
| | | Ken ran onto the field. |
| | swim | Mike swam into the cave. |
| | | Ken swam to the beach. |
| | walk | John walked onto the stage. |
| | | Steve walked to school. |
| (2) 様態＋ 場所句型 (11 文) | fly | The bird flew above the tree. |
| | | The bird flew by the house. |
| | jump | John jumped on the bed. |
| | | Fred jumped in the pool. |
| | run | Tom ran in the park. |
| | | Ken ran on the field. |
| | swim | Mike swam inside the cave. |
| | | Paul swam near the boat. |
| | walk | Ken swam under the bridge. |
| | | Jim walked behind the house. |
| | swim | John walked on the stage. |
| Mike went into the cave by swimming. | | |
| Ken came to the beach by swimming. | | |
| walk | John went onto the stage by walking. | |
| | Steve came to school by walking. | |

表 3-3 タスクに含めた移動構文の迂言的表現

| 種類 | 移動様態動詞 | テスト文 |
|--------------------------|--------------------------------------|--|
| (3a) and 型 (10 文) | fly | The plane flew and came to Osaka. |
| | | The plane flew and went into the cloud. |
| | jump | John jumped and went onto the bed. |
| | | Fred jumped and came into the pool. |
| | run | Tom ran and went to the park. |
| | | Ken ran and came onto the field. |
| (3b) by -ing 型 (10 文) | swim | Mike swam and went into the cave. |
| | | Ken swam and came to the beach. |
| | walk | John walked and went onto the stage. |
| | | Steve walked and came to school. |
| | fly | The plane came to Osaka by flying. |
| | | The plane went into the cloud by flying. |
| jump | John went onto the bed by jumping. | |
| | Fred came into the pool by jumping. | |
| run | Tom went to the park by running. | |
| | Ken came onto the field by running. | |
| swim | Mike went into the cave by swimming. | |
| | Ken came to the beach by swimming. | |
| walk | John went onto the stage by walking. | |
| | Steve came to school by walking. | |

実験に用いるイラストには以下のようなものを用意した。(1) 様態+着点句型の移動構文用のタスクや、(3a, b) 迂言的表現用のタスクでは、図 3-1 タイプのイラストを使用した。(2) 様態+場所句型の移動構文用のタスクでは、着点読みの解釈を伴うものは図 3-1 タイプのイラストを、場所読みの解釈を伴うものは図 3-2 タイプのイラストを使用した。これら 2 枚 1 組のイラストの内、左側の 1 枚は移動する人・物 (=図 (Figure)) の移動行為開始時の状況を表している。右側の 1 枚は着点読みの解釈を表す場合には到着時の状況を、場所読みの解釈を表す場合にはその行為が行われている最中の状況を、それぞれ到達点やその行為が行われている場所 (=地 (Ground)) と併せて描写するものである。また、イラスト内に矢印を加えることで移動の方向や経路を表した。(Appendix 2 参照)。

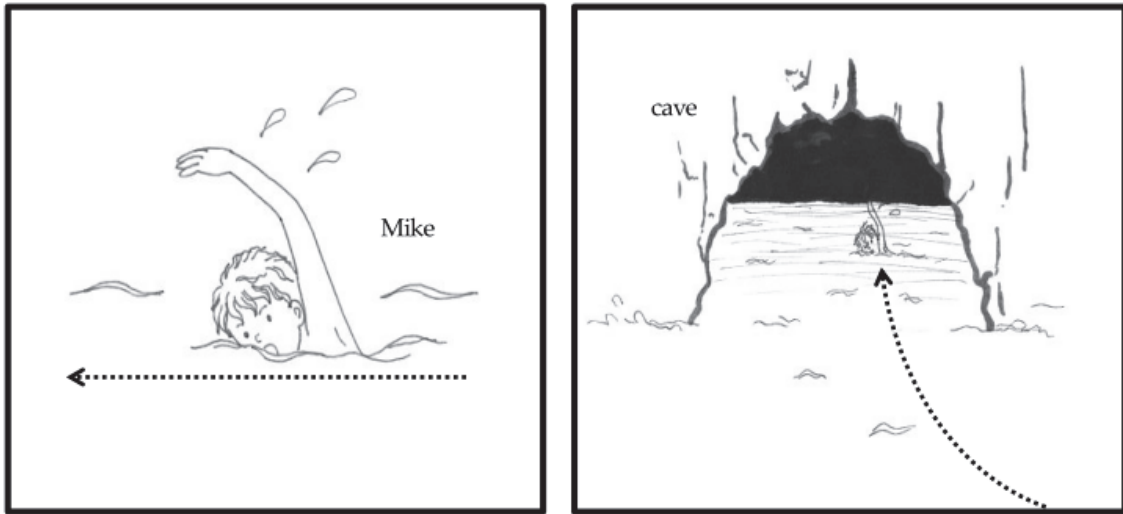


図 3-1 移動構文（着点読み）とその迂言的表現用のイラストの例

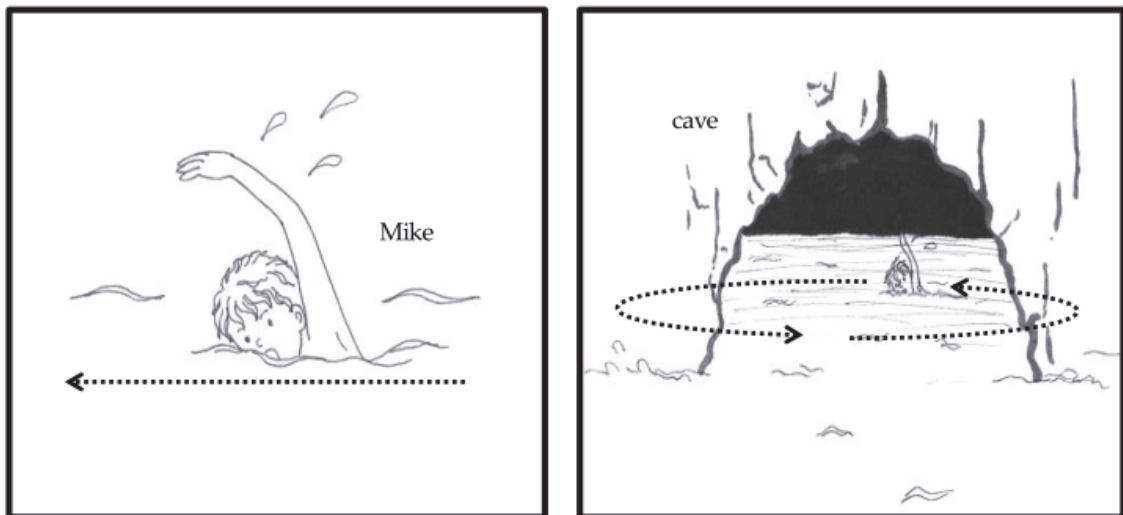


図 3-2 移動構文（場所読み）用のタスクのイラストの例

次に、結果構文とその迂言的表現用のタスクについて、用意したテスト文のタイプは以下 (4)-(8) のとおりである。

- | | |
|--------------------|-----------------------------------|
| (4) 弱い結果構文（形容詞句型）： | Mike painted the wall black. |
| (5) 弱い結果構文（前置詞句型）： | John broke the glass into pieces. |
| (6) 強い結果構文（形容詞句型）： | Paul kicked the door open. |
| (7) 強い結果構文（前置詞句型）： | Bob stabbed the man to death. |

(8) 結果構文の迂言的表現

- (a) 弱-形-make-and 型 : Mike painted and made the wall black.
- (b) 弱-形-make-by-ing 型 : Mike made the wall black by painting it.
- (c) 弱-前-get-and 型 : John broke and got the glass into pieces.
- (d) 弱-前-get-by-ing 型 : John got the glass into pieces by breaking it.
- (e) 強-形-make-and 型 : Paul kicked and made the door open.
- (f) 強-形-make-by-ing 型 : Paul made the door open by kicking it.
- (g) 強-前-get-and 型 : Bob stabbed and got the man to death.
- (h) 強-前-get-by-ing 型 : Bob got the man to death by stabbing him.
- (i) 弱-前-make-and 型 : John broke and made the glass into pieces.
- (j) 弱-前-make-by-ing 型 : John made the glass into pieces by breaking it.
- (k) 強-前-make-and 型 : Bob stabbed and made the man to death.
- (l) 強-前-make-by-ing 型 : Bob made the man to death by stabbing him.

結果構文に関する小課題の検証にかかわるタスクとして、弱い結果構文と強い結果構文で、それぞれ、(4) と (6) のような形容詞句型用のタスクを 4 つずつ、(5) と (7) のような前置詞句型用のタスクを 3 つずつ用意した。弱い結果構文の主動詞には、状態変化を含意する動詞として、*paint, crush, freeze, polish, break, bend, tear* の 7 つを用いた。強い結果構文の主動詞には、状態変化を含意しない動詞として、*kick, shoot, hammer, shake, knock, pat, stab* の 7 つを用いた。これらの動詞が状態変化を含意するか否かの判断は、Levin (1993) における動詞の分類に基づいて行った。以下、表 3-4 を参照されたい。

表 3-4 タスクに含めた結果構文

| 構文・表現 | 種類 | テスト文 |
|----------------------------------|--------------------|---|
| (4) & (5) 弱い 結果構文 (7 文) | (4) 形容詞句型 (4 文) | Mike painted the wall black. |
| | | Ken crushed the can flat. |
| | | Kumi froze the juice solid. |
| | | Lucy polished the mirror clean. |
| | | John broke the glass into pieces. |
| | (5) 前置詞句型 (3 文) | Bob bent the wire into a U shape. |
| | | Mike tore the letter into pieces. |
| | | Paul kicked the door open. |
| | | Tom shot the man dead. |
| | | John hammered the can flat. |
| (6) & (7) 強い 結果構文 (7 文) | (6) 形容詞句型 (4 文) | Mike shook his father awake. |
| | | John knocked Mike into unconsciousness. |
| | | Meg patted the dough into a circle. |
| | (7) 前置詞句型 (3 文) | Bob stabbed the man to death. |
| | | |

さらに、迂言的表現用のタスクとして、(4) と (6) のような形容詞句型の結果構文を 2 通りに書き換えたものを 4 文ずつ用意した。1 つは、(8a) と (8e) のように、結果構文の主動詞と使役動詞 **make** を **and** でつないだ表現であり、もう 1 つは、(8b) と (8f) のように、主動詞に使役動詞 **make** を用い、結果構文の主動詞であったものを **by -ing** で表したものである。これに加えて、(5) と (7) のような前置詞句型の結果構文については、使役動詞 **get** を用いて同様に書き換えたテスト文を 3 文ずつ用意した。(8c) と (8g) が、結果構文の主動詞と使役動詞 **get** を **and** でつないだ表現であり、(8d) と (8h) が主動詞に使役動詞 **get** を用い、結果構文の主動詞であったものを **by -ing** で表したものである。

以上の迂言的表現は、Jackendoff (1990) の指摘に従い、結果述語が形容詞句のものは主動詞に **make** を用い、前置詞句のものは主動詞に **get** を用いて書き換えたものである。さらに、平野 (2016) の実験において、結果述語のタイプに関わらず使役動詞 **make** を用いた迂言的表現を JLE が過剰に容認する結果が得られたことから、使役動詞の違いが判断に影響を及ぼすかどうかを確認するために、(5) と (7) の前置詞句型の結果構文については、使役動詞 **get** の代わりに **make** を用いて同様の書き換えを行ったもの ((8i)-(8l)) を 3 文ずつ追加した。具体的なテスト文については、表 3-5 を参照されたい。以上、結果構文

14 文と迂言的表現 40 文が状態変化表現用に用意したタスクである。

表 3-5 タスクに含めた結果構文の迂言的表現

| 構文・表現 | 種類 | テスト文 |
|------------------------|-------------------------------------|---|
| (8) 迂言的表現 (40 文) | (8a) 弱-形- make-and 型 (4 文) | Mike painted and made the wall black. Ken crushed and made the can flat. Kumi froze and made the juice solid. Lucy polished and made the mirror clean. |
| | (8b) 弱-形- make-by-ing 型 (4 文) | Mike made the wall black by painting it. Ken made the can flat by crushing it. Kumi made the juice solid by freezing it. Lucy made the mirror clean by polishing it. |
| | (8c) 弱-前- get-and 型 (3 文) | John broke and got the glass into pieces. Bob bent and got the wire into a U shape. Mike tore and got the letter into pieces. |
| | (8d) 弱-前- get-by-ing 型 (3 文) | John got the glass into pieces by breaking it. Bob got the wire into a U shape by bending it. Mike got the letter into pieces by tearing it. |
| | (8e) 強-形- make-and 型 (4 文) | Paul kicked and made the door open. Tom shot and made the man dead. John hammered and made the can flat. Mike shook and made his father awake. |
| | (8f) 強-形- make-by-ing 型 (4 文) | Paul made the door open by kicking it. Tom made the man dead by shooting him. John made the can flat by hammering it. Mike made his father awake by shaking him. |
| | (8g) 強-前- get-and 型 (3 文) | John knocked and got Mike into unconsciousness. Meg patted and got the dough into a circle. Bob stabbed and got the man to death. |
| | (8h) 強-前- get-by-ing 型 (3 文) | John got Mike into unconsciousness by knocking him. Meg got the dough into a circle by patting it. Bob got the man to death by stabbing him. |
| | (8i) 弱-前- make-and 型 (3 文) | John broke and made the glass into pieces. Bob bent and made the wire into a U shape. Mike tore and made the letter into pieces. |
| | (8j) 弱-前- make-by-ing 型 (3 文) | John made the glass into pieces by breaking it. Bob made the wire into a U shape by bending it. Mike made the letter into pieces by tearing it. |

| | |
|-------------------------------------|---|
| (8k) 強-前- make-and 型 (3 文) | John knocked and made Mike into unconsciousness. Meg patted and made the dough into a circle. Bob stabbed and made the man to death. |
| (8l) 強-前- make-by-ing 型 (3 文) | John made Mike into unconsciousness by knocking him. Meg made the dough into a circle by patting it. Bob made the man to death by stabbing him. |

これらの状態変化表現用のタスクでは、図 3-3 タイプのイラストを使用した。左側の 1 枚は状態変化を引き起こす行為を行っている状況を、状態変化する人・物(=図 (Figure))と併せて描写するものである。右側の 1 枚は、その人・物の変化した状態(=地 (Ground))を描写するものである。また、イラスト内に点線の丸印や矢印を加えることで、状態の変化した人・物ならびに結果状態に至るまでの推移を表した。(Appendix 3 参照)。

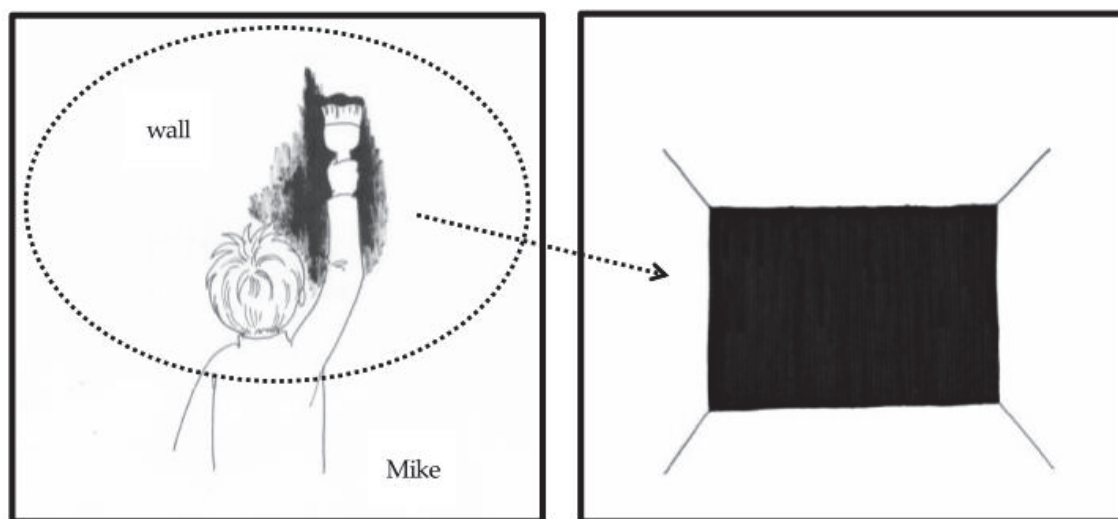


図 3-3 結果構文とその迂言的表現用タスクのイラストの例

以上が各小課題の検証にかかわるタスクである。さらに、錯乱用のタスクとして授受構文とその書き換え表現(非文法的な文を含む)用のタスクを 20 用意した(表 3-6 参照)。また、参加者の意識を数回英語から切り離すための課題として、計算問題を 10 題含めた(Appendix 5 参照)。

表 3-6 タスクに含めた授受構文とその書き換え表現

| 構文 | 動詞 | テスト文 |
|-----------------------------|-----------------|---------------------------------------|
| 授受構文とその 書き換え表現 (20 文) | cook (10 文) | Ken cooked Bob dinner. |
| | | Ken cooked dinner to Bob. |
| | | Ken cooked dinner for Bob. |
| | | Bob was cooked dinner by Ken. |
| | | Dinner was cooked to Bob by Ken. |
| | | Dinner was cooked for Bob by Ken. |
| | | Bob ate the dinner Ken cooked. |
| | | Bob ate the dinner cooked by Ken. |
| | | Bob ate the dinner which Ken cooked. |
| | | Ken cooked dinner and Bob ate it. |
| | write (10 文) | Mary wrote Tim a letter. |
| | | Mary wrote a letter to Tim. |
| | | Mary wrote a letter for Tim. |
| | | Tim was written a letter by Mary. |
| | | A letter was written to Tim by Mary. |
| | | A letter was written for Tim by Mary. |
| | | Tim read the letter Mary wrote. |
| | | Tim read the letter written by Mary. |
| | | Tim read the letter which Mary wrote. |
| | | Mary wrote a letter and Tim read it. |

授受構文のタスクには図 3-4 のようなイラストを用いた (Appendix 4 参照)。左側の 1 枚は、ある人物が相手に与えるものを用意している状況を描写するものであり、右側の 1 枚はもう一人の人物がそれを何らかの形で受け取った状況を描写するものである。

ここまで述べたとおり、(計算問題を除く) 全てのタスクに対して 2 枚 1 組のイラストを提示するという統一した実験を実施した。こうすることにより、移動表現については、移動の「様態」と「経路」をそれぞれ明確に示し、それらを一連の出来事として描写することができた。また、状態変化表現については、主動詞が表す「起因事象」と結果述語が表す「結果事象」をそれぞれ示し、それらを一連の出来事として描写するとともに、状態変化の「推移」を示すことができた。さらに、授受構文については、対象物の授受を位置変化や状態変化と同じように表すことで、錯乱用のタスクとして機能させることができた。

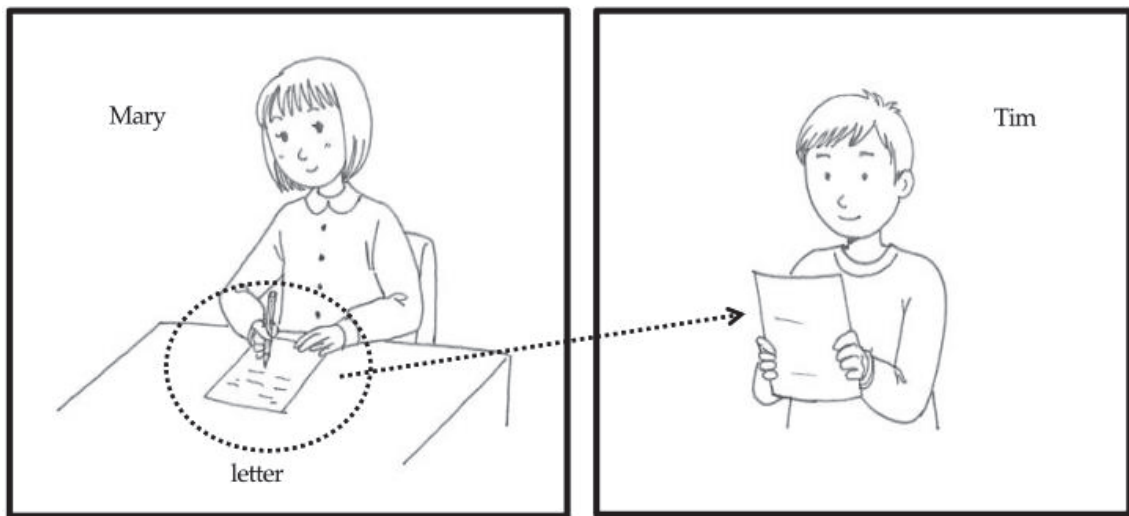


図 3-4 授受構文とその書き換え表現用タスクのイラスト例

以上、移動構文を中心としたタスク 52、結果構文を中心としたタスク 54、授受構文を中心としたタスク 20、計算問題 10、合計 136 のタスクを用意した。この 136 のタスクを各タイプのテスト文の数が均等になるように 68 タスクずつの 2 つのテストに分けて実験を実施した。なおタスクの順序はランダムなものにした。JLE の参加者が 1 つのテストに要した時間は約 30 分で、早く回答を終える者でも少なくとも 20 分程度の時間を要した。2 つのテストの間には休憩を 10 分程度取った。全体として実験に要した時間は 75 分程度であった。一方、NSE の参加者はいずれも 30-40 分程度で 2 つのテストを終えた。

本研究の実験の要点を整理しておく。まず、2 枚 1 組のイラストに対してテスト 1 文のみを提示したことにより、参加者に他の文と比較することなく各テスト文の判断をしてもらうことが可能になった。また、回答項目を単極法の回答にし、X と Y という回答も含めたことにより、重複する内容の回答項目が含まれることを避け、判断の度合いに迷った場合と英文の意味が把握できない場合とを区別することができた。同時に、5 件法による回答から、参加者がテスト文を自然な表現としてみなす度合いが測れるものであった。さらには、先行研究では異なる検証方法で個別に取り扱われてきた複数の課題—しかも、移動表現と状態変化表現の双方に関する課題—を、統一された検証方法で同時に検証することが可能となった。これらの点が本研究の実験の特筆すべき特徴である。

3.3. 実験結果

各種移動構文、各種結果構文、各種迂言的表現に対する容認性判断の結果と各回答の占める割合は以下に述べるとおりとなった。まず、移動構文と移動構文の迂言的表現に対する各実験群の判断結果（平均値と標準偏差）を表 3-7 に示す。なお標準偏差の値を丸括弧内に示している。表 3-8 は各実験群の各テスト文に対する各回答の占める割合を示している。図 3-5 は表 3-7 と表 3-8 の情報を可視化したものである。

表 3-8 に示した数値は、「各実験群の各テスト文に対する有効回答数」に対する「各実験群の各テスト文における各回答項目の回答数」の割合を示している。この割合の算出を行う際、回答項目 X と Y が選択されたタスクと回答のなかったタスクは有効回答数には含まなかった。なお、回答項目 X の回答数はいずれの群においても 0 であった。回答項目 Y の回答数は、実験群 A が 4、実験群 B が 1、実験群 C が 0 であった。実験群 A におけるこの 4 回答は、全て 1 人の参加者によるもので、(2) 様態+場所句型（着点読み）が 1 つ、(3) 様態+場所句型（場所読み）が 1 つ、(3a) 迂言的表現（and 型）が 2 つであった。実験群 B における Y の回答は、(1) 様態+着点句型に対するものであった。また、無回答のものが実験群 B において(2) 様態+場所句型（着点読み）に対して 1 つあった。

表 3-7 移動構文と移動構文の迂言的表現に対する容認性判断の結果（平均値と標準偏差）

| 実験群 | テスト文のタイプ | | | | |
|--------------------|----------------|-------------------------|-------------------------|--------------------------|------------------------------|
| | (1) 様態+ 着点句 | (2) 様態+ 場所句： 着点読み | (2) 様態+ 場所句： 場所読み | (3a) 迂言的 表現： and 型 | (3b) 迂言的 表現： by -ing 型 |
| A: JLE (n = 26) | 2.83 (0.57) | 1.74 (0.76) | 2.45 (0.73) | 2.26 (0.64) | 2.24 (0.70) |
| B: JLE (n = 20) | 2.75 (0.55) | 2.01 (0.72) | 2.70 (0.66) | 2.55 (0.64) | 2.51 (0.61) |
| C: NSE (n = 11) | 3.86 (0.12) | 3.20 (0.61) | 3.16 (0.73) | 1.78 (0.86) | 1.10 (0.96) |

表 3-8 各実験群の各テスト文に対する各回答の占める割合（移動構文とその迂言的表現）

| 回答 | 実験群 | テスト文のタイプ | | | | |
|----|--------|----------------|-------------------------|-------------------------|--------------------------|------------------------------|
| | | (1) 様態+ 着点句 | (2) 様態+ 場所句： 着点読み | (2) 様態+ 場所句： 場所読み | (3a) 迂言 的表現： and 型 | (3b) 迂言 的表現： by -ing 型 |
| +4 | A: JLE | 40.5% | 11.6% | 31.9% | 20.2% | 17.7% |
| | B: JLE | 31.7% | 18.7% | 31.8% | 22.0% | 20.0% |
| | C: NSE | 90.9% | 57.9% | 57.9% | 11.8% | 3.6% |
| +3 | A: JLE | 25.9% | 22.8% | 17.9% | 24.4% | 30.0% |
| | B: JLE | 33.2% | 22.4% | 31.8% | 32.5% | 35.5% |
| | C: NSE | 5.5% | 18.2% | 21.5% | 15.5% | 11.8% |
| +2 | A: JLE | 15.8% | 18.6% | 23.9% | 26.0% | 21.9% |
| | B: JLE | 18.6% | 16.0% | 17.3% | 28.5% | 25.0% |
| | C: NSE | 2.7% | 13.2% | 4.1% | 25.5% | 20.0% |
| +1 | A: JLE | 11.2% | 22.1% | 16.1% | 20.5% | 19.2% |
| | B: JLE | 12.1% | 26.5% | 12.7% | 12.5% | 14.5% |
| | C: NSE | 0.9% | 7.4% | 11.6% | 33.6% | 20.0% |
| 0 | A: JLE | 6.5% | 24.9% | 10.2% | 8.9% | 11.2% |
| | B: JLE | 4.5% | 16.4% | 6.4% | 4.5% | 5.0% |
| | C: NSE | 0.0% | 3.3% | 5.0% | 13.6% | 44.5% |

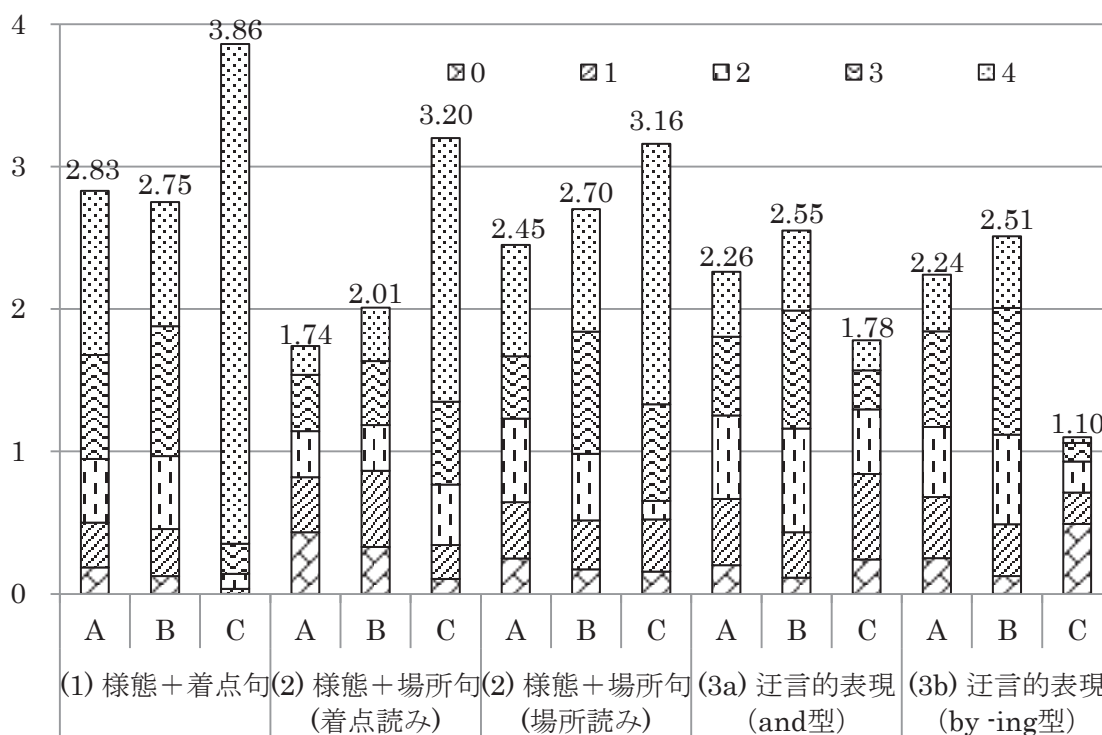


図 3-5 移動構文とその迂言的表現に対する容認性判断の結果と各回答の占める割合

次に、結果構文に対する各実験群の判断結果（平均値と標準偏差）を表 3-9、表 3-10 に示す。表 3-9 は、結果述語が形容詞句であるか前置詞句であるかを考慮せず、(4), (5) 弱い結果構文と(6), (7) 強い結果構文の 2 つに分類した結果であり、表 3-10 は、結果述語の統語範疇を含め、(4)-(7) の 4 つに分類した結果である。なお標準偏差の値を丸括弧内に示している。

表 3-9 結果構文 [2 分類] に対する容認性判断の結果（平均値と標準偏差）

| 実験群 | テスト文の種類 | |
|----------------------------|-----------------|-----------------|
| | (4), (5) 弱い結果構文 | (6), (7) 強い結果構文 |
| A: JLE (<i>n</i> = 26) | 2.52 (0.64) | 1.90 (0.84) |
| B: JLE (<i>n</i> = 20) | 2.52 (0.66) | 2.06 (0.71) |
| C: NSE (<i>n</i> = 11) | 3.58 (0.43) | 3.55 (0.32) |

表 3-10 結果構文 [4 分類] に対する容認性判断の結果（平均値と標準偏差）

| 実験群 | テスト文の種類 | | | |
|----------------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|
| | (4) 弱い (形容詞句型) | (5) 弱い (前置詞句型) | (6) 強い (形容詞句型) | (7) 強い (前置詞句型) |
| A: JLE (<i>n</i> = 26) | 2.06 (0.95) | 3.15 (0.67) | 1.58 (1.05) | 2.40 (0.90) |
| B: JLE (<i>n</i> = 20) | 2.58 (0.73) | 2.36 (1.07) | 1.90 (1.01) | 2.44 (0.50) |
| C: NSE (<i>n</i> = 11) | 3.34 (0.66) | 3.91 (0.22) | 3.89 (0.17) | 3.09 (0.65) |

以下の表 3-11 と表 3-12 は各実験群の各テスト文に対する各回答の占める割合を示している。表 3-9 と表 3-11 の情報、ならびに表 3-10 と表 3-12 の情報を、それぞれ図 3-8、図 3-9 として可視化した。

表 3-11 各実験群の各テスト文に対する各回答の占める割合（結果構文 [2 分類]）

| 回答 | 実験群 | テスト文の種類 | |
|----|--------|-----------------|-----------------|
| | | (4), (5) 弱い結果構文 | (6), (7) 強い結果構文 |
| +4 | A: JLE | 29.4% | 13.7% |
| | B: JLE | 26.0% | 15.9% |
| | C: NSE | 81.8% | 79.2% |
| +3 | A: JLE | 27.1% | 21.7% |
| | B: JLE | 29.0% | 24.6% |
| | C: NSE | 6.5% | 7.8% |
| +2 | A: JLE | 19.8% | 24.0% |
| | B: JLE | 23.7% | 23.0% |
| | C: NSE | 3.9% | 5.2% |
| +1 | A: JLE | 14.7% | 21.7% |
| | B: JLE | 16.8% | 23.8% |
| | C: NSE | 3.9% | 3.9% |
| 0 | A: JLE | 9.0% | 18.9% |
| | B: JLE | 4.6% | 12.7% |
| | C: NSE | 3.9% | 3.9% |

表 3-12 各実験群の各テスト文に対する各回答の占める割合（結果構文 [4 分類]）

| 回答 | 実験群 | テスト文の種類 | | | |
|----|--------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|
| | | (4) 弱い (形容詞句型) | (5) 弱い (前置詞句型) | (6) 強い (形容詞句型) | (7) 強い (前置詞句型) |
| +4 | A: JLE | 16.8% | 46.1% | 12.6% | 15.3% |
| | B: JLE | 25.0% | 27.3% | 16.7% | 14.6% |
| | C: NSE | 72.7% | 93.9% | 90.9% | 63.6% |
| +3 | A: JLE | 22.8% | 32.9% | 13.6% | 33.3% |
| | B: JLE | 32.9% | 23.6% | 20.5% | 31.3% |
| | C: NSE | 9.1% | 3.0% | 6.8% | 9.1% |
| +2 | A: JLE | 23.8% | 14.5% | 20.4% | 29.2% |
| | B: JLE | 23.7% | 23.6% | 16.7% | 33.3% |
| | C: NSE | 4.5% | 3.0% | 2.3% | 9.1% |
| +1 | A: JLE | 21.8% | 5.3% | 26.2% | 15.3% |
| | B: JLE | 13.2% | 21.8% | 25.6% | 20.8% |
| | C: NSE | 6.8% | 0.0% | 0.0% | 9.1% |
| 0 | A: JLE | 14.9% | 1.3% | 27.2% | 6.9% |
| | B: JLE | 5.3% | 3.6% | 20.5% | 0.0% |
| | C: NSE | 6.8% | 0.0% | 0.0% | 9.1% |

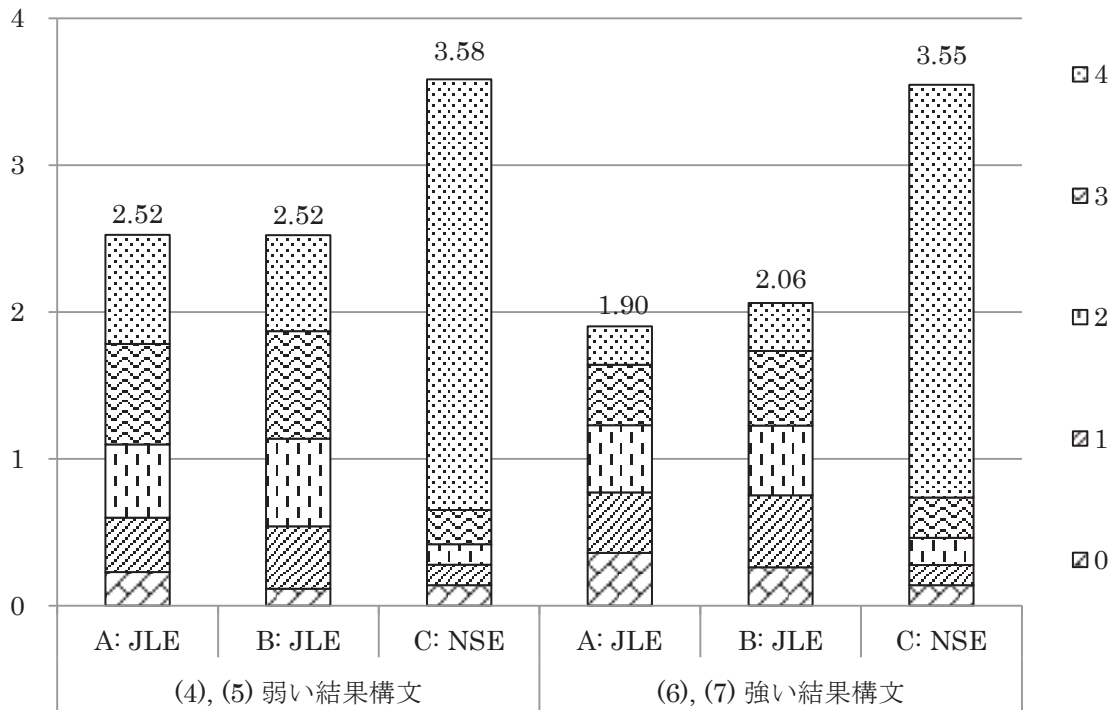


図 3-6 結果構文 [2 分類] に対する容認性判断の結果と各回答の占める割合

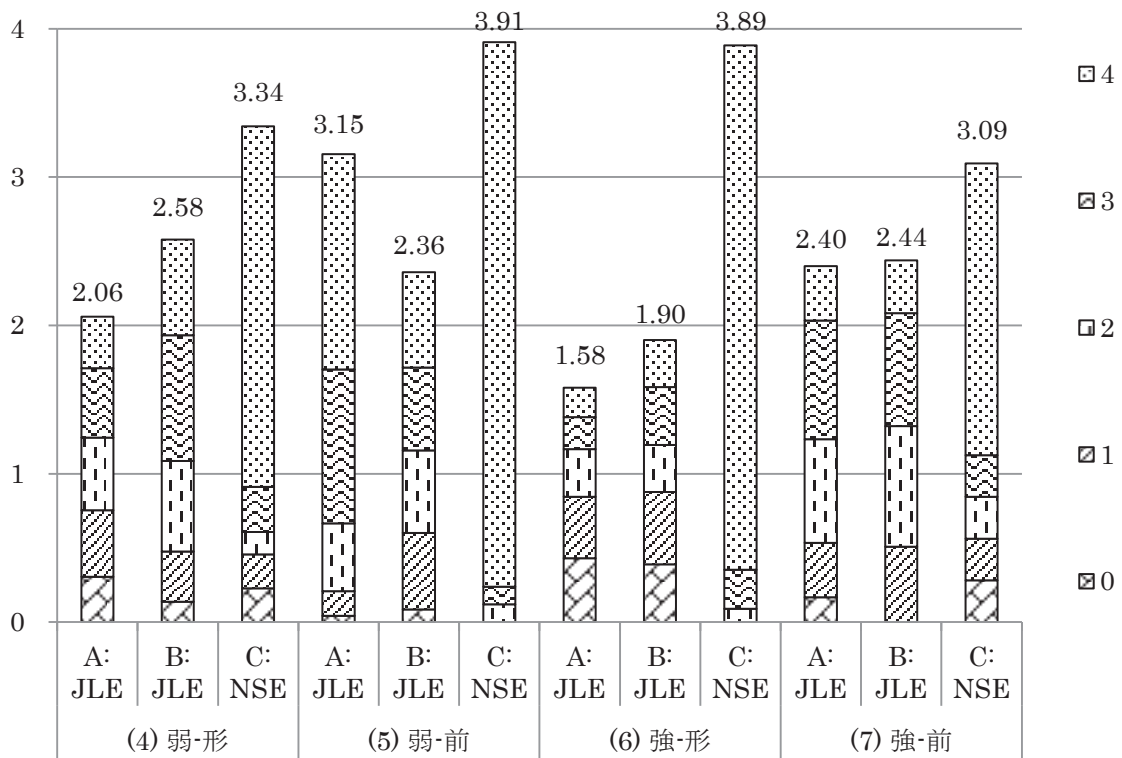


図 3-7 結果構文 [4 分類] に対する容認性判断の結果と各回答の占める割合

表 3-11 と表 3-12 に示した数値は、表 3-8 と同様、「各実験群の各テスト文に対する有効回答数」に対する「各実験群の各テスト文における各回答項目の回答数」の割合を示している。また、表 3-8 と同様に、回答項目 X と Y が選択されたタスクは有効回答数には含まなかった。なお、回答項目 X の回答数は (4) 弱い結果構文 (形容詞句型) において 6 (実験群 A が 2、実験群 B が 4)、(5) 弱い結果構文 (前置詞句型) において 6 (実験群 A が 2、実験群 B が 4)、(6) 強い結果構文 (形容詞句型) において 3 (実験群 A が 1、実験群 B が 2)、(7) 強い結果構文 (前置詞句型) において 18 (実験群 A が 6、実験群 B が 12) であった。回答項目 Y の回答数は (4) 弱い結果構文 (形容詞句型) において 1 (実験群 A)、(5) 弱い結果構文 (前置詞句型) において 1 (実験群 B)、(6) 強い結果構文 (形容詞句型) と (7) 強い結果構文 (前置詞句型) において 0 であった。実験群 C による回答項目 X・Y の回答はなかった。また、いずれの実験群においても、無回答などの欠損値に該当する回答は見られなかった。

最後に、結果構文の迂言的表現に対する各実験群の判断結果 (平均値と標準偏差) を表 3-13 に示す。標準偏差の値を丸括弧内に示している。表 3-14 は各実験群の各テスト文に対する各回答の占める割合を示している。表 3-13 と表 3-14 の情報を可視化したものが図 3-8 である。表 3-14 に示した数値は、表 3-8, 3-11, 3-12 と同様、「各実験群の各テスト文に対する有効回答数」に対する「各実験群の各テスト文における各回答項目の回答数」の割合を示している。回答項目 X と Y が選択されたタスクや無回答のタスクは有効回答数には含まなかった。回答項目 X の回答数は、(8a) が 2 (実験群 A)、(8c) が 8 (実験群 A が 2、実験群 B が 6)、(8d) が 3 (実験群 A が 2、実験群 B が 1)、(8e) が 13 (実験群 A が 2、実験群 B が 11)、(8f) が 11 (実験群 B)、(8g) が 13 (実験群 A が 2、実験群 B が 11)、(8h) が 9 (実験群 B)、(8i) が 9 (実験群 A が 4、実験群 B が 5)、(8j) が 7 (実験群 A が 1、実験群 B が 6)、(8k) が 4 (実験群 B)、(8l) が 4 (実験群 B) であった。回答項目 Y の回答数は、(8c) が 1 (実験群 A)、(8e) が 1 (実験群 A)、(8j) が 1 (実験群 A) であった。無回答のタスク数は、(8d) が 1 (実験群 A)、(8k) が 1 (実験群 C) であった。

表 3-13 結果構文の迂言的表現に対する容認性判断の結果（平均値と標準偏差）

| テスト文の種類 | 実験群 | | |
|----------------------------|----------------------------|----------------------------|----------------------------|
| | A: JLE (<i>n</i> = 26) | B: JLE (<i>n</i> = 20) | C: NSE (<i>n</i> = 11) |
| (8a) 弱-形- make-and 型 | 2.16 (0.82) | 2.23 (0.71) | 1.39 (1.37) |
| (8b) 弱-形- make-by-ing 型 | 2.47 (0.75) | 2.38 (0.75) | 2.75 (0.91) |
| (8c) 弱-前- get-and 型 | 2.24 (0.78) | 2.16 (0.80) | 0.64 (0.66) |
| (8d) 弱-前- get-by-ing 型 | 2.05 (0.83) | 2.12 (0.77) | 1.42 (1.03) |
| (8e) 強-形- make-and 型 | 2.29 (0.79) | 2.25 (1.00) | 0.89 (0.88) |
| (8f) 強-形- make-by-ing 型 | 2.75 (0.82) | 2.63 (0.55) | 1.52 (0.83) |
| (8g) 強-前- get-and 型 | 2.41 (0.80) | 2.44 (0.77) | 0.58 (0.73) |
| (8h) 強-前- get-by-ing 型 | 2.40 (0.78) | 2.25 (0.63) | 0.67 (0.71) |
| (8i) 弱-前- make-and 型 | 2.20 (0.79) | 2.13 (0.98) | 0.82 (1.05) |
| (8j) 弱-前- make-by-ing 型 | 2.31 (0.79) | 2.10 (0.75) | 1.85 (0.94) |
| (8k) 強-前- make-and 型 | 2.19 (0.80) | 2.17 (0.67) | 0.64 (0.53) |
| (8l) 強-前- make-by-ing 型 | 2.27 (0.86) | 2.37 (0.55) | 0.97 (0.48) |

表 3-14 各実験群の各テスト文に対する各回答の占める割合（結果構文の迂言的表現）

| テスト文 | 実験群 | 回答 | | | | |
|--------------------------------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | | 0 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| (8a) 弱-形- make- and 型 | A: JLE | 4.9% | 31.4% | 24.5% | 20.6% | 18.6% |
| | B: JLE | 9.0% | 21.8% | 24.4% | 26.9% | 17.9% |
| | C: NSE | 40.9% | 20.5% | 13.6% | 9.1% | 15.9% |
| (8b) 弱-形- make- by-ing 型 | A: JLE | 3.8% | 10.6% | 25.0% | 27.9% | 32.7% |
| | B: JLE | 2.5% | 10.0% | 31.3% | 35.0% | 21.3% |
| | C: NSE | 2.3% | 15.9% | 22.7% | 22.7% | 36.4% |
| (8c) 弱-前- get- and 型 | A: JLE | 5.3% | 22.4% | 23.7% | 39.5% | 9.2% |
| | B: JLE | 0.0% | 18.4% | 40.8% | 28.6% | 12.2% |
| | C: NSE | 63.6% | 18.2% | 12.1% | 3.0% | 3.0% |
| (8d) 弱-前- get- by-ing 型 | A: JLE | 11.5% | 16.7% | 33.3% | 32.1% | 6.4% |
| | B: JLE | 2.0% | 9.8% | 54.9% | 23.5% | 9.8% |
| | C: NSE | 36.4% | 21.2% | 18.2% | 12.1% | 12.1% |
| (8e) 強-形- make- and 型 | A: JLE | 5.8% | 20.2% | 29.8% | 27.9% | 16.3% |
| | B: JLE | 9.2% | 18.4% | 30.3% | 27.6% | 14.5% |
| | C: NSE | 53.5% | 23.3% | 9.3% | 9.3% | 4.7% |
| (8f) 強-形- make- by-ing 型 | A: JLE | 3.8% | 10.6% | 25.0% | 27.9% | 32.7% |
| | B: JLE | 7.9% | 14.5% | 28.9% | 26.3% | 22.4% |
| | C: NSE | 34.1% | 18.2% | 25.0% | 6.8% | 15.9% |
| (8g) 強-前- get- and 型 | A: JLE | 0.0% | 21.6% | 29.7% | 32.4% | 16.2% |
| | B: JLE | 7.3% | 23.6% | 29.1% | 23.6% | 16.4% |
| | C: NSE | 69.7% | 18.2% | 3.0% | 3.0% | 6.1% |
| (8h) 強-前- get- by-ing 型 | A: JLE | 6.6% | 13.2% | 28.9% | 35.5% | 15.8% |
| | B: JLE | 9.3% | 16.7% | 35.2% | 35.2% | 3.7% |
| | C: NSE | 69.7% | 12.1% | 6.1% | 6.1% | 6.1% |
| (8i) 弱-前- make- and 型 | A: JLE | 5.3% | 25.3% | 28.0% | 29.3% | 12.0% |
| | B: JLE | 4.1% | 18.4% | 38.8% | 32.7% | 6.1% |
| | C: NSE | 63.6% | 9.1% | 15.2% | 6.1% | 6.1% |
| (8j) 弱-前- make- by-ing 型 | A: JLE | 2.6% | 25.0% | 31.9% | 33.3% | 15.3% |
| | B: JLE | 6.1% | 14.3% | 30.6% | 40.8% | 8.2% |
| | C: NSE | 36.4% | 12.1% | 9.1% | 15.2% | 27.3% |
| (8k) 強-前- make- and 型 | A: JLE | 5.3% | 25.3% | 28.0% | 29.3% | 12.0% |
| | B: JLE | 11.1% | 20.4% | 24.1% | 29.6% | 14.8% |
| | C: NSE | 66.7% | 15.2% | 9.1% | 6.1% | 3.0% |
| (8l) 強-前- make- by-ing 型 | A: JLE | 3.9% | 23.7% | 30.3% | 26.3% | 15.8% |
| | B: JLE | 8.6% | 20.7% | 31.0% | 31.0% | 8.6% |
| | C: NSE | 54.5% | 15.2% | 15.2% | 9.1% | 6.1% |

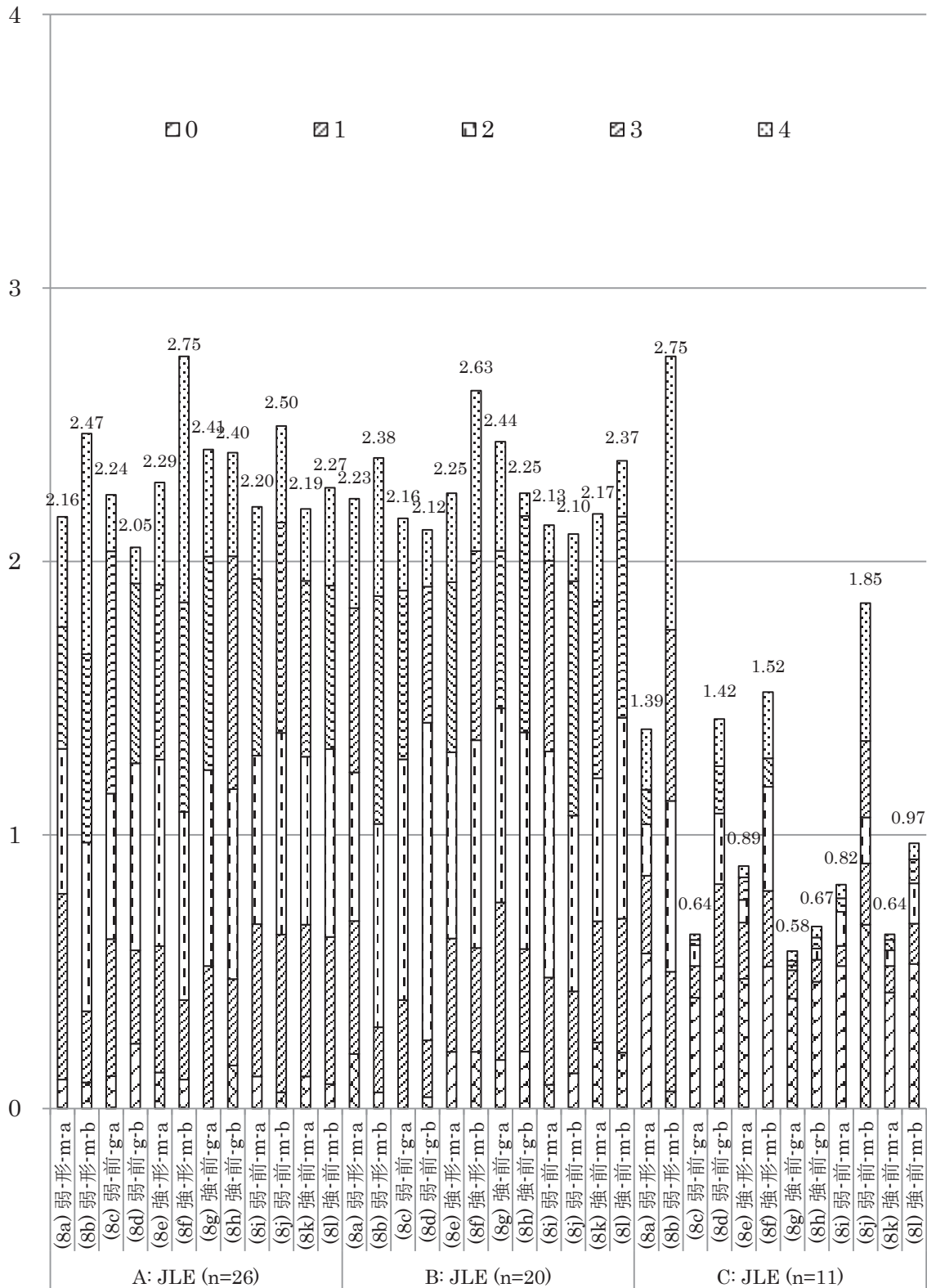


図 3-8 結果構文の迂言的表現に対する容認性判断の結果と各回答の占める割合

3.4. 検証と考察

上記の実験結果に基づき、各小課題の検証を行う際に比較する対象を整理しておく。以下に、参照用に各小課題を再掲する。

【小課題 1】JLE は、着点読みの解釈を伴う英語移動構文として、「様態＋着点句」型と「様態＋場所句」型のどちらの英語表現を容認しやすいか。

【小課題 2】JLE は、「様態＋場所句」型の英語移動構文に対して、「着点読み」と「場所読み」のどちらの解釈を容認しやすいか。

【小課題 3】JLE は、英語結果構文の内、「弱い結果構文」と「強い結果構文」のどちらを容認しやすいか。

【小課題 4】JLE は、英語結果構文の内、「形容詞句」型の結果構文と「前置詞句」型の結果構文のどちらを容認しやすいか。

【小課題 5】JLE は、英語移動構文と英語結果構文のそれぞれの迂言的表現をどの程度容認するか。

まず、小課題 1 の検証としては、移動構文の内、(1) 様態＋着点句型の英文と着点読みの解釈を伴う場合の (2) 様態＋場所句型の英文に対する JLE による判断結果を比較する。小課題 2 の検証としては、移動構文の内、着点読みの解釈を伴う場合の (2) 様態＋場所句型の英文と場所読みの解釈を伴う場合の (2) 様態＋場所句型の英文に対する JLE による判断結果を比較する。小課題 3 の検証としては、英語結果構文の内、(4), (5) 弱い結果構文と (6), (7) 強い結果構文に対する JLE による判断結果を比較する。小課題 4 の検証としては、弱い結果構文と強い結果構文の双方において、結果述語が形容詞句型のものと前置詞句型のものに対する判断結果を比較する。小課題 5 の検証については、移動構文の迂言的表現と結果構文の迂言的表現とに分けて検証を行う。以下、「JLE が英語移動構文の迂言的表現をどの程度容認するか。」という課題を小課題 5-(i) とし、「JLE が英語結果構文の迂言的表現をどの程度容認するか。」という課題を小課題 5-(ii) とする。小課題 5-(i) に

については、(3) 迂言的表現に対する JLE による判断結果を、JLE による (1) 様態+着点句型の英文に対する判断結果や NSE による (3) 迂言的表現の判断結果と比較する。小課題 5-(ii) については、(8) 迂言的表現に対する JLE による判断結果を、JLE による (4)-(7) の各種結果構文に対する判断結果や NSE による (8) 迂言的表現の判断結果と比較する。

以下、分析方法と併せて各小課題の検証結果を示し、それぞれの検証結果に対して考察を加える。移動構文に関する課題 (小課題 1・2)、結果構文に関する課題 (小課題 3・4)、両構文の迂言的表現に関する課題 (小課題 5-(i)・5-(ii)) の順に議論を進める。それぞれ、移動の「経路」と状態変化の「推移」が JLE によってどのように認識されているのかを軸として考察を進める。また、その認識されたものが、どの程度自然な表現としてみなされているのかという程度差にも焦点を当てて考察を進める。なお、小課題の検証には、テスト文のタイプによる比較を行うものと実験群間での比較を行うものがあるが、それぞれの要因の交互作用を見ることを目的としていないため、実験群ごとにテスト文のタイプによる主効果を測る 1 元配置分散分析を、分析方法の 1 つとして採用したことをここで予め述べておく。

3.4.1. 移動構文に関する課題の検証結果と考察

移動構文に関する小課題とテスト文のタイプを再度確認されたい。

【小課題 1】JLE は、着点読みの解釈を伴う英語移動構文として、「様態+着点句」型と「様態+場所句」型のどちらの英語表現を容認しやすいか。

【小課題 2】JLE は、「様態+場所句」型の英語移動構文に対して、「着点読み」と「場所読み」のどちらの解釈を容認しやすいか。

(9) (= (1)) 様態+着点句型： Mike swam into the cave.

(10) (= (2)) 様態+場所句型： Mike swam inside the cave.

(11) (= (3)) 移動構文 (様態+着点句型) の迂言的表現

(a) and 型： Mike swam and went into the cave.

(b) by -ing 型： Mike went into the cave by swimming.

上掲の表 3-7、表 3-8、図 3-5 に示した実験結果を基にして、テスト文のタイプ ((1) 様態+着点句型・(2-着) 様態+場所句型 (着点読み)・(2-場) 様態+場所句型 (場所読み)・(3a) 迂言的表現 (and 型)・(3b) 迂言的表現 (by-ing 型)) によって、容認性 (どの程度自然な表現であると感じるか) の判断に差が見られるかを、実験群ごとに、対応ありの 1 元配置分散分析で検討した。その結果、全ての実験群で有意であり、効果量も大きかった (表 3-15)。引き続き、実験群ごとに、ボンフェローニの方法を用いて多重比較を行った。全体の有意水準は 5%に設定した。多重比較の結果の内、小課題の検証にかかわるものを表 3-16 に示す。

表 3-15 1 元配置分散分析の結果 (移動表現)

| 実験群 | F 値 | p 値 | 効果量 |
|---------------------|--------------------------|-------------|-----------------|
| A: JLE ($n = 26$) | $F(2.46, 61.38) = 12.43$ | $p < .001,$ | $\eta^2 = .216$ |
| B: JLE ($n = 20$) | $F(2.92, 55.57) = 06.83$ | $p < .001$ | $\eta^2 = .152$ |
| C: NSE ($n = 11$) | $F(4.00, 40.00) = 53.31$ | $p < .001$ | $\eta^2 = .688$ |

表 3-16 多重比較の結果 (移動表現)

| 実験群 | 比較するテスト文の種類 | | | |
|------------------------|---|---|--|--|
| | (1) vs. (2-着) | (2-着) vs. (2-場) | (1) vs. (3a) | (1) vs. (3b) |
| A: JLE ($n = 26$) | <i>sig.</i> ($p < .001$) [(1) > (2-着)] | <i>sig.</i> ($p = .005$) [(2-着) < (2-場)] | <i>sig.</i> ($p < .001$) [(1) > (3a)] | <i>sig.</i> ($p < .001$) [(1) > (3b)] |
| B: JLE ($n = 20$) | <i>sig.</i> ($p < .001$) [(1) > (2-着)] | <i>sig.</i> ($p < .001$) [(2-着) < (2-場)] | <i>n.s.</i> ($p = .166$) [(1) = (3a)] | <i>n.s.</i> ($p = .089$) [(1) = (3b)] |
| C: NSE ($n = 11$) | <i>sig.</i> ($p = .003$) [(1) > (2-着)] | <i>n.s.</i> ($p = .867$) [(2-着) = (2-場)] | <i>sig.</i> ($p < .001$) [(1) > (3a)] | <i>sig.</i> ($p < .001$) [(1) > (3b)] |

* $p < .005$

まず、JLE である実験群 A と実験群 B の双方において、(1) 様態+着点句型の移動構文と (2-着) 様態+場所句型 (着点読み) の移動構文との間に有意差が確認されたことにより、小課題 1 については、「JLE は、着点読みの解釈を伴う英語移動構文として、『様態+着点句』型を『様態+場所句』型のよりも容認しやすい」という結果になった。これは先

行研究では取り扱われてこなかった課題であり、新たな知見が提供できたものとする。

これら 2 つのタイプの英語移動構文は、いずれも主動詞が移動様態動詞であり、移動事象の中心的概念である「経路」が前置詞句によって表されている。よって、どちらも着点読みの解釈を伴う英文としては移動様態動詞を主動詞としたまま日本語に直訳することができない。また、この課題の検証に関するタスクでは、テスト文と併せて、着点読みの解釈を描写するイラスト（図 3-1 参照）が提示されていることから、JLE の参加者が (2) 様態+場所句型の移動構文の場所句を日本語の「～で」句に相当するものとみなしたとは考えにくい。つまり、JLE は日本語にはない項構造の現れ方を含んだ英文の判断をしたことになる。それにもかかわらず、これら 2 つのタイプの移動構文の容認性判断に有意差が確認されたということは、JLE が本来日本語では有方向移動動詞によって表される移動の「経路」の概念を、英語の場所句よりも着点句に認めやすいことが明らかになったと言えよう。このことから、JLE は、主動詞に「経路」の概念を認められない英文であっても、その英文中の主動詞以外の表現に「経路」の概念を認めることができれば、その英文を着点読みの解釈を伴う表現として容認しやすくなるということが考えられる。ただし、JLE が英文中の主動詞や主動詞以外の表現に「経路」の概念を認めさえすれば、仮にその英文全体が実際には不自然な表現であったとしても、その英文を自然な表現として容認してしまう可能性が残留することを指摘しておきたい。この点については、小課題 5-(i) の検証結果について考察を加える際に改めて言及する。

さて、JLE が英語の場所句よりも着点句に対して「経路」の概念を認めやすいことが明らかになったが、これはどのような要因によるのであろうか。1 つに、着点読みの解釈を伴う英文として、(2) 様態+場所句型の移動構文のように、「経路」が場所句によって表現される英文が JLE にとってのインプットに不足している可能性が考えられる。それに対し、「経路」が着点句によって表現される移動構文—とりわけ前置詞 to を伴う移動構文—は、主動詞が有方向移動動詞の構文 (go/come to ... など) であれ移動様態動詞の構文 (run/walk to ... など) であれ、JLE が学習段階の早い時期から触れる英語表現に含まれていると言えよう。このことから、JLE が前置詞 to を移動の「経路」を表す表現として

認識できるようになると言って差し支えないだろう。また、つづり字にも発音にも“to”が含まれる語として、into, onto などの前置詞があるが、当然、学習者はこれらの語をそれぞれ in, on とは異なる前置詞として認識しているものと考えられる。前置詞 to を移動の「経路」を表す表現として認識していれば“to”という音形（形態）を含む into, onto に対しては「経路」の概念を認めやすく、そうではない in, on に対して「経路」の概念を認めにくいのも当然のことであろう。英語の場所句は、in, on はもちろんのこと、above であれ under であれ“to”という音形（形態）が現れない。JLE が場所句を伴う移動構文を着点読みの解釈を伴う表現として容認するには、場所句に対して移動の「経路」の要素を補った解釈をすることが必要になると言えよう。同様の考察を小課題 2 の検証結果にも当てはめることができるものと考えられる。

表 3-16 に示したとおり、実験群 A と実験群 B による容認性判断において、(2・着) 様態動詞＋場所句型（着点読み）の移動構文と (2・場) 様態動詞＋場所句型（場所読み）の移動構文との間に有意差が確認され、小課題 2 については、「JLE は、『様態＋場所句』型の移動構文に対して、『場所読み』の解釈を『着点読み』の解釈よりも容認しやすい」という結果となった。この要因として、上で述べたとおり、JLE が“to”という音形（形態）を伴わない場所句に対して移動の「経路」の概念を認めにくいことが考えられる。また、場所読みの解釈の場合には、「マイクは洞窟の中で泳いだ。」のように日本語への直訳表現が成立することから、JLE が英語の場所句を日本語の「～で」句に相当するものとみなす場合には、英語の場所句に対して「経路」の概念を認めることがより一層難しくなることも考えられる。この課題（小課題 2）は第 2 章の 2.1.1. で言及したとおり、先行研究間で検証結果が異なる課題の 1 つであった。本研究の結果は、程度の差はあるものの Inagaki (2002) の結果を支持し、Yotsuya et al. (2014) の結果とは異なるものとなった。以下、これらの先行研究における検証方法で測られているものを本研究の検証方法で測られているものと比較しながら、考察を加えていく。

まず、Inagaki (2002) の検証方法（絵図一文照合タスク）は、(2) 様態＋場所句型の移動構文と併せて、着点読みの解釈を表すイラストと場所読みの解釈を表すイラストを提示

し、実験参加者にイラストを選択してもらうことによって、参加者がどちらの解釈を容認しやすいかを問うものであった。この実験によって測られているものは、テスト文の表す意味に対する容認性であると言えよう。一方、本研究の検証方法は、イラストによって解釈できる状況を着点読みか場所読みかのいずれか一方に設定し、その状況を表す英文としてテスト文がどの程度自然なものと感じられるかを問うものであった。この実験によって測られているのは、ある状況を描写するテスト文の表現としての容認性である。双方の実験から、JLE がテスト文に対する解釈を判断する場合にも、状況を設定した上でテスト文をどの程度自然に感じるかを判断する場合にも、(2) 様態+場所句型の移動構文を場所読みの解釈を伴う表現として容認しやすいということが分かった。しかし、Inagaki (2002) では、着点読みの解釈を容認する JLE の割合がかなり低い (表 2-2、図 2-2 参照) のに対して、本研究では、JLE が着点読みの解釈を伴う英文としてテスト文をある程度容認していることが伺える (表 3-7、図 3-5 参照)。この違いは、何に起因するものであろうか。

本研究の検証方法と Inagaki (2002) の検証方法との大きな違いとして、本研究の検証方法が、テスト文に対する容認性を 5 段階で回答してもらうタスクであったのに対し、Inagaki (2002) の検証方法は、テスト文の解釈として正しいと思うイラストを選んでもらうタスクであった。本研究のタスクでは参加者の判断における段階性を確認できるのに対し、Inagaki (2002) のタスクでは、参加者がテスト文の解釈をどの程度容認しているかを確認することはできない。ここで、群ごとの比較だけでなく、タスクの回答数に着目することで、本研究と Inagaki (2002) の検証結果を比較していくことにする。

第 2 章 2.1.1.1. で言及したとおり、Inagaki (2002) は、(2) 様態+場所句型の移動構文に対して、着点読みの解釈のみを容認した者ないし着点読みと場所読みの解釈の双方を容認した者の数を JLE と NSE の間で比較し、JLE にとって着点読みの解釈を容認することが難しいと結論付けている。第 2 章の表 2-3 を表 3-17 として再掲する。

表 3-17 (=表 2-3) Inagaki (2002) において、様態+場所句型の移動構文に対して、着点読みの解釈のみ、または、着点読みと場所読み双方の解釈を容認した回答者の数とその割合 (Inagaki (2002), p.21, Table 3 (下線部は筆者による加筆))

| 着点読みのみ、または、着点読みと場所読みの両方を容認した回答数 (全回答数 = 12) | JLE (n = 35) | | NSE (n = 23) | |
|---|-----------------|---------------|-----------------|---------------|
| 0-3 | 18 | <u>51.42%</u> | 0 | <u>0.00%</u> |
| 4-6 | 17 | <u>48.57%</u> | 2 | <u>8.69%</u> |
| 7-9 | 0 | <u>0.00%</u> | 8 | <u>34.78%</u> |
| 10-12 | 0 | <u>0.00%</u> | 13 | <u>56.52%</u> |

この結果を本研究の結果と照らし合わせるために、次のような分析を試みた。本研究の実験において小課題 2 の検証に用意したテスト文の数は 11 であったが、この 11 のテスト文に対して、着点読みの解釈を伴う英文としてのみ +3 または +4 で回答されたものと、着点読みの解釈を伴う英文としても場所読みの解釈を伴う英文としても +3 または +4 で回答されたものの数を集計し、いずれかの形で回答した者の人数の占める割合を産出した。つまり、本研究の実験においてそれぞれの解釈に+3 または +4 で回答されたものを、Inagaki (2002) においてそれぞれの解釈を描写するイラストが選ばれたものに相当するものとみなしている。結果は表 3-18 のとおりであった。

表 3-18 本研究において様態+場所句型の移動構文に対して、着点読みの解釈、または、着点読みと場所読み双方の解釈を容認した回答者数

| 着点読みのみ、または、着点読みと場所読みの両方に、+3 または+4 で回答した回答数 (全回答数 = 11) | JLE (n = 36) | | NSE (n = 11) | |
|--|-----------------|---------------|-----------------|---------------|
| 0-2 | 14 | <u>30.48%</u> | 0 | <u>0.00%</u> |
| 3-5 | 19 | <u>41.30%</u> | 1 | <u>9.09%</u> |
| 6-8 | 11 | <u>23.91%</u> | 4 | <u>36.36%</u> |
| 9-11 | 2 | <u>4.35%</u> | 6 | <u>54.55%</u> |

表 3-17 と表 3-18 における各回答数の占める人数の割合を比較すると、NSE の判断結果がきわめて類似していることが分かる。一方、大きく異なる点として、Inagaki (2002) では、回答数の半数を上回る (7 以上) JLE がいないのに対し、本実験では半数を上回る (6 以上) 回答者が 28%以上いることが分かる。Inagaki (2002) の実験において、テスト文

の半数以上に対して着点読みの解釈あるいは着点読みと場所読み双方の解釈を認める JLE がいなかった理由として、着点読みの解釈を容認できる度合いが相当高くなければそのイラストを選択することができなかつた可能性があるかも知れない。また、第 2 章で指摘した「比較選択の問題」として、場所読みの解釈を着点読みの解釈よりも好ましいものと判断したために、着点読みの解釈を認めることが難しくなつてしまった可能性もあると言えよう。本研究の実験は、2 枚 1 組のイラストに対してテスト文 1 文のみを併せて提示することにより、「比較選択」が行われる可能性を極力軽減させたものであつた。また、五件法 ((0) ~ (+4)) の回答項目を設置したことにより、「双極法の抱える問題」を考慮することなしに、参加者によるテスト文の容認性判断の程度差を回答に反映させることが可能になつた。それらの点を踏まえると、JLE は (2) 様態+場所句型の移動構文を場所読みの解釈を伴う英文として容認しやすいものの、着点読みの解釈を伴う英文として容認できる度合いにも程度差があり、その度合いは Inagaki (2002) が指摘するよりも高いものであるという可能性が示されたと言えるだろう。

次に、Yotsuya et al. (2014) の検証方法と本研究の検証方法を比較していく。Yotsuya et al. (2014) の検証方法 (イラスト付き真偽値判断タスク) は、着点読みの解釈を表すイラストと場所読みの解釈を表すイラストを別々に提示し、その都度併せて提示した (2) 様態+場所句型の移動構文がイラストの示す状況を表す英文として正しいかどうかを True か False で回答するものであつた。Yotsuya et al. (2014) は、その結果、JLE が (2) 様態+場所句型の移動構文をどちらの解釈を伴う英文としても同程度に認めやすいとしている。Yotsuya et al. (2014) の検証結果と本研究の検証結果が異なる理由として、Inagaki (2002) と本研究の検証方法を比較した場合と同様に、Yotsuya et al. (2014) の実験ではテスト文が正しいものとみなされる程度差が測れていないのに対し、本研究ではテスト文が自然な表現とみなされる程度差が測れているという差異に起因することが考えられる。

第 2 章 2.1.1.2. で指摘したとおり、Yotsuya et al. (2014) の実験は、実験参加者が True か False かという二者択一の回答を求められるものであるため、True と判断されたものの中にも、その表現を適切だと感じる度合いには揺れがあり、テスト文が完全に適切なもの

と判断された場合も、ある程度適切なものと判断された場合にも True が選択され、結果として True の占める割合が過剰に高くなる可能性が残留する。ここで、本研究の実験結果を、以下に述べる 2 通りの方法で、Yostuya et al. (2014) の実験結果と照らし合わせる。まず、本研究の実験において 0 で回答されたものを Yostuya et al. (2014) における False の回答に相当するものとみなし、+1 ~ +4 で回答されたものを True に相当するものとみなし、それぞれの占める割合を算出した。その結果を表 3-19 に示す。次に、本研究の実験において 0 または +1 で回答されたものを False とみなし、+2 ~ +4 で回答されたものを True とみなし、それぞれの回答の占める割合を算出した。その結果を表 3-20 に示す。

表 3-19 移動構文の容認度を真偽値に換算した結果その真偽値の占める割合[1]

| 実験群 | (2) 様態+場所句型の移動構文の解釈 | | | |
|--------------------|---------------------|-------|---------------|-------|
| | 着点読み | | 場所読み | |
| A: JLE (n = 26) | T (= +1 ~ +4) | 75.1% | T (= +1 ~ +4) | 89.8% |
| | F (= 0) | 24.9% | F (= 0) | 10.2% |
| B: JLE (n = 20) | T (= +1 ~ +4) | 83.6% | T (= +1 ~ +4) | 93.6% |
| | F (= 0) | 16.4% | F (= 0) | 6.4% |

表 3-20 移動構文の容認度を真偽値に換算した結果その真偽値の占める割合[2]

| 実験群 | (2) 様態+場所句型の移動構文の解釈 | | | |
|--------------------|---------------------|-------|---------------|-------|
| | 着点読み | | 場所読み | |
| A: JLE (n = 26) | T (= +2 ~ +4) | 53.0% | T (= +2 ~ +4) | 73.7% |
| | F (= 0, +1) | 47.0% | F (= 0, +1) | 26.3% |
| B: JLE (n = 20) | T (= +2 ~ +4) | 57.1% | T (= +2 ~ +4) | 80.9% |
| | F (= 0, +1) | 42.9% | F (= 0, +1) | 19.1% |

表 3-19 と表 3-20 から、True (= +1 ~ +4)・False (= 0) とみなす場合と True (= +2 ~ +4)・False (= 0, +1) とみなす場合で、場所読みよりも着点読みの方が True の占める割合が大きく減少し、False の占める割合が大きく増加することが分かる。つまり、着点読みの解釈に対して True と判断された回答の中にも、かなり低い度合いで正しい表現であるとみなしているものが含まれている可能性が示されたと言えよう。この分析を踏まえると、JLE が (2) 様態+場所句型の移動構文をどの程度自然な表現と感じるかには程度差があり、着

点読みの解釈を伴う英文としてもある程度は容認できるものの、その度合いは Yotsuya et al. (2014) が指摘するほど高いものではないという可能性が示されたと言えるだろう。

ここまでの議論から、JLE が (2) 様態+場所句型の移動構文を着点読みの解釈を伴う表現としても、ある一定の度合いで容認することが示された。この度合いは、JLE が英語の場所句に対して「経路」の概念を認める度合いであり、言い換えれば、学習者が「主動詞以外の要素で、しかも非明示的に、『経路』の概念を表す」というサテライトフレーム言語としての英語の特性に精通していく度合いであると考えられる。この度合いは先行研究の実験データからは推測せざるを得ないものであったが、本研究においてこの度合いを数値化・視覚化できたことにより、新たな知見が提供できたものとする。

しかし、この度合いがいかにして高められるかは、今後検証を続けていかなければならない課題である。本研究の結果から、学習者の英語力や専攻の違いが結果に大きく影響するとは言いがたい。留学経験など英語圏に滞在した期間の違いをサテライトフレーム言語の特性に精通する要因の 1 つとして挙げている研究もある (スプリング・堀江 (2011)、Spring and Horie (2013)) が、英語圏滞在中にどのような能力や経験値に差が生じるのかは明言されていない。また、これは産出面に関する実験に基づく結論であるため、英文の認知・理解面でも同様の結果が得られるかどうかは検証を続けて行く必要がある。これらの検証を続けながらも、学習者がこうした特性に精通しやすい指導・学習の在り方を模索することも併せて継続していくことが望ましいものとする。これらは今後の課題としたい。次に、結果構文に関する課題 (小課題 3・4) の検証結果を示し、考察を加えていく。

3.4.2. 結果構文に関する課題の検証結果と考察

結果構文に関する小課題とテスト文のタイプを再度確認されたい。

【小課題 3】JLE は、英語結果構文の内、「弱い結果構文」と「強い結果構文」のどちらを容認しやすいか。

【小課題 4】JLE は、英語結果構文の内、「形容詞句」型の結果構文と「前置詞句」型の結果構文のどちらを容認しやすいか。

- (12) (= (4)) 弱い結果構文 (形容詞句型) : Mike painted the wall black.
- (13) (= (5)) 弱い結果構文 (前置詞句型) : John broke the glass into pieces.
- (14) (= (6)) 強い結果構文 (形容詞句型) : Paul kicked the door open.
- (15) (= (7)) 強い結果構文 (前置詞句型) : Bob stabbed the man to death.

上掲の表 3-9、表 3-11、図 3-6 に示した実験結果を基にして、テスト文のタイプ ((4), (5) 弱い結果構文・(6), (7) 強い結果構文) によって容認性 (どの程度自然な表現であると感じるか) の判断に差が見られるかを、実験群ごとに、対応ありの 1 元配置分散分析で検討した。結果は以下のとおりであった (表 3-21)。実験群 A では、 $F(1, 25) = 17.80, p < .001, \eta^2 = .152$ で有意であり、効果量も大きかった。実験群 B では、 $F(1, 19) = 20.59, p < .001, \eta^2 = .106$ で有意であり、効果量は中程度から大程度の間だった。実験群 C では、 $F(1, 10) = 0.08, p = .780, \eta^2 = .003$ で有意ではなかった。

表 3-21 分散分析の結果 (結果構文 [2 分類])

| 実験群 | 比較するテスト文の種類 |
|------------------------|---|
| | (4), (5) 弱い結果構文 vs. (6), (7) 強い結果構文 |
| A: JLE ($n = 26$) | <i>sig.</i> ($p < .001$) (4), (5) 弱い結果構文 > (6), (7) 強い結果構文 |
| B: JLE ($n = 20$) | <i>sig.</i> ($p < .001$) (4), (5) 弱い結果構文 > (6), (7) 強い結果構文 |
| C: NSE ($n = 11$) | <i>n.s.</i> ($p = .780$) (4), (5) 弱い結果構文 = (6), (7) 強い結果構文 |

JLE である実験群 A と実験群 B による双方の容認性判断において、(4), (5) 弱い結果構文と (6), (7) 強い結果構文との間に有意差が確認され、小課題 3 については、「JLE は、『弱い結果構文』を『強い結果構文』よりも容認しやすい」という結果となった。一方、NSE である実験群 C による判断において、これらのテスト文間では有意差が確認されなかった。このことから、少なくとも実験に使用した結果構文については、(4), (5) 弱い結果構文と

(6), (7) 強い結果構文の双方が、同程度に容認されうる表現であることが分かる。これらの結果から、JLE による英語結果構文の容認性判断は、総じて、主動詞が状態変化の「推移」を含意するか否かによって影響を受けると言えよう。しかし、上で指摘したとおり、結果構文の容認性判断は主動詞の性質だけでなく、結果述語の性質にも影響を受ける可能性がある。そこで、小課題 4 の検証として、弱い結果構文を (4) 形容詞句型と (5) 前置詞句型に 2 分し、強い結果構文を (6) 形容詞句型と (7) 前置詞句型に 2 分し、計 4 分類で同様の比較を試みた。

上掲の表 3-10、表 3-12、図 3-7 に示した実験結果を基にして、テスト文のタイプ ((4) 弱い結果構文 (形容詞句型)・(5) 弱い結果構文 (前置詞句型)・(6) 強い結果構文 (形容詞句型)・(7) 強い結果構文 (前置詞句型)) によって容認性 (どの程度自然な表現であると感じるか) の判断に差が見られるかを、実験群ごとに、対応ありの 1 元配置分散分析で検討した。結果は以下のとおりであった。実験群 A では、 $F(2.39, 59.84) = 19.28, p < .001, \eta^2 = .296$ で有意であり、効果量も大きかった。実験群 B では、 $F(2.08, 39.52) = 3.69, p = .032, \eta^2 = .084$ で有意であり、効果量は中程度から大程度の間だった。実験群 C では、 $F(1.92, 19.21) = 9.89, p = .001, \eta^2 = .370$ で有意であり、効果量も大きかった。また、引き続き、実験群ごとに、ボンフェローニの方法を用いて多重比較を行った。全体の有意水準は 5% に設定した。多重比較の結果の内、小課題の検証にかかわるものを表 3-22 に示す。

表 3-22 多重比較の結果 (結果構文 [4 分類])

| 実験群 | 比較するテスト文の種類 | | | |
|--------------------|------------------------------|------------------------------|------------------------------|------------------------------|
| | (4) 弱-形 vs. (5) 弱-前 | (4) 弱-形 vs. (6) 強-形 | (5) 弱-前 vs. (7) 強-前 | (6) 強-形 vs. (7) 強-前 |
| A: JLE (n = 26) | sig. (p < .001) (4) < (5) | sig. (p = .003) (4) > (6) | sig. (p = .002) (5) > (7) | sig. (p < .001) (6) < (7) |
| B: JLE (n = 20) | n.s. (p = .379) (4) = (5) | sig. (p < .001) (4) > (6) | n.s. (p = .731) (5) = (7) | n.s. (p = .038) (6) = (7) |
| C: NSE (n = 11) | sig. (p = .008) (4) < (5) | sig. (p < .011) (4) < (6) | sig. (p = .003) (5) > (7) | sig. (p = .002) (6) > (7) |

*p < .008

実験群 A と実験群 B の判断の内、(4)「弱一形」型と (6)「強一形」型を比較した結果、ならびに、(5)「弱一前」型と (7)「強一前」型を比較した結果に着目する。実験群 B において、(5)「弱一前」型と (7)「強一前」型との間に有意差は確認されなかったものの、総じて結果述語が形容詞句の場合にも前置詞句の場合にも弱い結果構文の方が自然な表現としてみなされやすいことが分かる。このことから、JLE は主動詞が状態変化の「推移」を含蓄する表現をより自然な表現とみなしやすいたことが再度確認できたと言えよう。これは、JLE が弱い結果構文と強い結果構文を同程度に容認するという Yotsuya et al. (2014) の検証結果とは異なるものと言える。再度、Yotsuya et al. (2014) の実験が、実験参加者に True か False かという二者択一の回答を求めるものであったことに留意し、参加者の判断の度合いに揺れがある可能性を検証する。前節と同様、本研究の実験結果を、2 通りの方法で、Yostuya et al. (2014) の実験結果と照らし合わせる。

まず、本研究の実験において 0 と回答されたものを、Yotsuya et al. (2014) の実験において False と回答されたものに相当するとみなし、+1 ~ +4 で回答されたものを、True と回答されたものに相当するとみなし、それぞれの占める割合を算出した。その結果を表 3-23 に示す。次に、本研究の実験において 0 または +1 で回答されたものを、Yotsuya et al. (2014) の実験において False の回答されたものに相当するとみなし、+2 ~ +4 で回答されたものを True と回答されたものに相当するとみなして算出した割合を表 3-24 に示す。なお、Yotsuya et al. (2014) の実験では前置詞句型の結果構文はテスト文に含まれていないため、ここでの検証において、比較する本研究における結果構文のテスト文も形容詞句型のものに限定した。

表 3-23 結果構文の容認度を真偽値に換算した結果その真偽値の占める割合[1]

| 実験群 | 形容詞型の結果構文の判断 | | | |
|--------------------|---------------|-------|---------------|-------|
| | 弱い結果構文 | | 強い結果構文 | |
| A: JLE (n = 26) | T (= +1 ~ +4) | 85.1% | T (= +1 ~ +4) | 72.8% |
| | F (= 0) | 14.9% | F (= 0) | 27.2% |
| B: JLE (n = 20) | T (= +1 ~ +4) | 94.7% | T (= +1 ~ +4) | 79.5% |
| | F (= 0) | 5.3% | F (= 0) | 20.5% |

表 3-24 結果構文の容認度を真偽値に換算した結果その真偽値の占める割合[2]

| 実験群 | 形容詞型の結果構文の判断 | | | |
|--------------------|---------------|-------|---------------|-------|
| | 弱い結果構文 | | 強い結果構文 | |
| A: JLE (n = 26) | T (= +2 ~ +4) | 63.3% | T (= +2 ~ +4) | 46.6% |
| | F (= 0, +1) | 36.6% | F (= 0, +1) | 53.4% |
| B: JLE (n = 20) | T (= +2 ~ +4) | 81.6% | T (= +2 ~ +4) | 53.8% |
| | F (= 0, +1) | 18.4% | F (= 0, +1) | 46.2% |

表 3-23 と表 3-24 から、True (= +1 ~ +4)・False (= 0) とみなす場合と True (= +2 ~ +4)・False (= 0, +1) とみなす場合で、弱い結果構文よりも強い結果構文の方が True の占める割合が大きく減少し、False の占める割合が大きく増加することが分かる。つまり、強い結果構文に対して True と判断された回答の中に、かなり低い度合いで正しい表現であるとみなしているものが含まれている可能性が示されたと言えよう。この分析を踏まえると、JLE が（形容詞句型の）弱い結果構文と強い結果構文を自然な表現として容認する度合いには程度差があり、弱い結果構文をより自然な表現として受け入れやすいことが示されたと言えるだろう。

次に、結果述語の違いが及ぼす影響の有無を確認するため、実験群 A と実験群 B の判断の内、(4)「弱一形」型と (5)「弱一前」型を比較した結果、ならびに、(6)「強一形」型と (7)「強一前」型を比較した結果を見てみると、実験群 A では、その双方において統計的な有意差が確認されたのに対し、実験群 B ではいずれの場合も有意差が確認されなかった。よって、小課題 4 については、「JLE は、『前置詞句』型の結果構文を『形容詞句』型の結果構文よりも比較的容認しやすい」という結果となった。実験群 A と B の間に見られる判断結果の違いは何に起因するのであろうか。実験群 A は英語専攻の大学 1 年生であり、実験群 B は非英語専攻の大学 2~4 年生であった。実験群 A と実験群 B の専攻の違いと学習期間の差異に焦点を当てて考察を進めることにする。

まず、専攻の違いを検討する。ここで、2.1.2.2. で言及した平野 (2016) と 2.1.2.3. で言及したスプリング (2015) において、JLE の実験参加者がそれぞれ英語専攻、英語学部 の 1 年生であったことに着目する。以下、平野 (2016) における JLE の実験参加者を実験群 H と呼び、スプリング (2015) における JLE の実験参加者を実験群 S と呼ぶことにす

る。本研究における実験群 A も英語を専攻とする大学 1 年生であった。その点を考慮すると、実験群 B よりも実験群 A の方が実験群 H や実験群 S と類似した環境にあると考えられる。なお、実験群 A と実験群 H は入学年次が 1 年異なるものの同じ大学の同じ学部・学科に所属する実験群である。いずれの実験群も、実験は参加者が 1 年生の時に実施した。仮に、実験群 H や実験群 S による判断結果と実験群 A による判断結果との間に類似性が見られるとすれば、それが英語を専攻とすることに何らかの影響を受けている可能性が示唆されると言えよう。

第 2 章の 2.1.2.2. で言及したとおり、平野 (2016) は実験群 H が「弱-前」型の結果構文を「弱-形」型の結果構文よりも自然な表現として容認しやすいことを報告している。表 3-22 から、実験群 A においても、(4)「弱-形」型と (5)「弱-前」型の間に有意差が確認されており、同様の傾向が確認された。また、2.1.2.3. で言及したとおり、スプリング (2015) は JLE である実験群 S が前置詞句型のサテライトフレーム表現よりも形容詞句型のサテライトフレーム表現を容認しにくいことを報告している。ただし、スプリング (2015) において前置詞句型のサテライトフレーム表現として含まれているのが (16) のようなテスト文であり、形容詞句型のサテライトフレーム表現として含まれているのが (17) のようなテスト文であった。

(16) スプリング (2015) におけるサテライトフレーム文 (前置詞句型)

a. He cut the apple in half. (スプリング (2015), p. 418, (10a))

b. He ripped the paper into two pieces. (*Ibid.*, p.418, (10b))

(17) スプリング (2015) におけるサテライトフレーム文 (形容詞型)

a. He pulled the tie loose. (*Ibid.*, p.418, (12a))

b. She kicked the door open. (*Ibid.*, p.418, (12b))

(16-a, b) は、主動詞に状態変化の「推移」を含意する動詞が用いられており、本研究の分類に基づけば、(5)「弱-前」型に相当する。一方、(17-a, b) は、主動詞が状態変化の「推

移」を含意しない動詞であるため、(6)「強一形」型に相当する。表 3-22 から、実験群 A において、(5)「弱一前」型と (6)「強一形」型の間には有意差が確認されており、実験群 S と同様の傾向が確認される結果となった。このとおり、英語を専攻とする JLE の判断にある一定の類似性が見られることが確認できた。よって、上述の実験群 A と実験群 B の間に見られる判断結果の違いは、英語を専攻するかどうかに関する何かしらの影響を受けた可能性が示唆されたものとする。

しかしながら、2.1.2.3. でスプリング (2015) を概観した際に指摘したとおり、これら 2 つのタイプのテスト文の間に見られる容認性判断の違いは、主動詞による状態変化の含意の有無に影響を受けたのか、結果述語が形容詞句であるか前置詞句であるかの差異に影響を受けたのかは明確ではない。そこで、実験群 A による容認性判断の内、(4)「弱一形」型と (5)「弱一前」型との間に、また、(6)「強一形」型と (7)「強一前」型との間に、それぞれ有意差が確認されたことに着目する。この結果から、実験群 A は、主動詞が状態変化を含意する場合にも含意しない場合にも、前置詞句型の結果述語を形容詞句型の結果述語よりも自然な表現とみなしやすいことが分かる。よって、本研究は、スプリング (2015) による、「JLE が前置詞句型のサテライトフレーム表現よりも形容詞句型のサテライトフレーム表現を習得する上で日英語間のフレームの差異に影響を受けやすい」とする主張をより強固な形で支持することができたと言えよう。これは、主動詞に状態変化の「推移」が含意されない場合、JLE が前置詞句型の結果述語に対して状態変化の「推移」を認めやすく、形容詞句型の結果述語に対して状態変化の「推移」を認めにくいことを表しているものと考えられる。

ここまで英語専攻の実験群 A に焦点を当てて議論を進めてきた。しかしながら、英語を専攻とすることによるどのような側面に学習者の判断が影響を受けているのかという点については、引き続き検証を続けて行かなければならない課題である。ただし、これと類似したことが、スプリング・堀江 (2011) と Spring and Horie (2013) において指摘されていることを付け加えておく。これらの研究によると、学習者がサテライトフレーム言語としての英語の特性を習得する上で、英語力よりも英語圏での滞在期間の長さの方が影響を

及ぼしやすいという。ただし、この結果も滞在期間中が長くなるつれて具体的にどのような側面が影響を受けるのかについては示されていない。また、これらの研究は本研究とは異なり、学習者の英語の産出面を調査対象としている。今後の課題として、理解面と産出面それぞれにおいて、学習者が英語を専攻することにより、あるいは英語圏に滞在することにより、具体的にどのような影響を受けうるのかについて、引き続き検証を続けて行くことが望まれるものと考ええる。

次に、学習期間の差異に焦点を当てて、実験群 B では、(4)「弱-形」型と (5)「弱-前」型の間にも (6)「強-形」型と (7)「強-前」型の間にも有意差が確認されなかった点について考察する。実験群 A が全員大学 1 年生であったのに対し、実験群 B は大学 2~4 年生の集団であったことに留意し、学習期間の差が影響を及ぼしている可能性を検討する。実験群 B は 2 年生が 4 名、3 年生が 12 名、4 年生が 4 名の実験群であった。人数に偏りはあるものの、学年ごとにそれぞれ実験群 B-2、B-3、B-4 として分類し、(4)-(7)の各種結果構文に対する容認性判断の結果を比較した。その結果(平均値)を表 3-25 に示す。

表 3-25 実験群 B の学年ごとの容認性判断の結果 [結果構文]

| 実験群 | 結果構文の種類 | | | |
|--------------|-------------|---------|-------------|---------|
| | (4) 弱-形 | (5) 弱-前 | (6) 強-形 | (7) 強-前 |
| B-2 (n = 4) | 2.08 | 2.60 | 1.19 | 2.33 |
| B-3 (n = 12) | 2.53 | 2.32 | 1.96 | 2.42 |
| B-4 (n = 4) | 3.07 | 2.88 | 2.36 | 2.38 |

表 3-25 から、弱い結果構文と強い結果構文の双方において、形容詞句型の結果構文に対する容認度は学年が上がるに応じて高くなる傾向があることが分かる。前置詞句型の結果構文においてはこうした傾向はみられない。このことから、形容詞句型の結果構文を自然な表現として容認するかどうか、英語を学習してきた期間が影響を及ぼす可能性が示されたと考える。実験群 B において、(4)「弱-形」型と (5)「弱-前」型の間にも、(6)「強-形」型と (7)「強-前」型の間にも、有意差が確認されなかったのは、このように、学習期間に差のある参加者を実験群 B としてまとめていたことに起因する可能性が考えられ

る。そのように考えると、小課題 4 について『形容詞句』型の結果構文を『前置詞句』型の結果構文よりも容認しやすいということはない」と言えるのは、学習の比較的早い段階にいる JLE を対象とした結果であると言えるかもしれない。

なお、Goldberg (1995) や Lakoff and Johnson (1980) が主張するように、結果構文の表す「状態の変化」が「新しい位置への移動」というメタファー的な位置変化として理解されるものであるとすれば、前置詞句型の結果述語は「推移」を明示しているという点で、「経路」を明示的に表している着点句に相当し、形容詞句型の結果述語は「推移」を明示していないという点で、「経路」を明示的に表していない着点読みの場所句に相当するものと考えられる。そのように考えると、JLE の学習期間が長くなるにつれて、形容詞句型の結果構文に対する容認度が高くなるのと同様に、(2-着) 様態+場所句型の移動構文に対する容認度も高くなることが期待できよう。そこで、実験群 B-2、B-3、B-4 による各種移動構文に対する容認度を比較した。その結果（平均値）を表 3-26 に示す。

表 3-26 実験群 B の学年ごとの容認性判断の結果 [移動構文]

| 実験群 | 移動構文の種類 | | |
|--------------|------------|------------------------|------------------------|
| | (1) 様態+着点句 | (2-着) 様態+場所句 (着点読み) | (2-場) 様態+場所句 (場所読み) |
| B-2 (n = 4) | 2.63 | 1.59 | 2.57 |
| B-3 (n = 12) | 2.87 | 2.05 | 2.77 |
| B-4 (n = 4) | 2.55 | 2.43 | 2.64 |

表 3-26 から、期待したとおり、学年が上がるにつれて (2-着) 様態+場所句型の移動構文に対する容認度が高くなる傾向があることが見て取れる。このことから学習者は、非明示的に「経路」を表す場所句に着点読みの解釈を見出す上で、学習期間に影響を受けることが分かる。これにより、JLE による形容詞句型の結果構文の容認度が学習期間によって異なるのは、移動構文の場所句と同様に、形容詞句型の結果述語に内包された「推移」を表す音形を伴わない構成素に対する気づきに学習期間が影響を及ぼすからであると考えられる。ただし、上述のとおり、この考察は人数に偏りがある上に少人数のデータに基づくものでしかない。人数を拡大・調整して再検討する必要がある。また、英語を専攻とする

実験群Aにおいても学習期間によって同様の影響が確認されるのかについても検証する必要がある。これらの問題は今後の課題としたい。

ここまでの議論から、JLEが英語の結果構文を自然な表現として容認する上で、主動詞が状態変化の「推移」を含意するかどうか、ならびに、結果述語が明示的に「推移」を表すかどうかに影響を受けることが示されたと言えよう。さらに非明示的に「推移」を表す形容詞句型の結果述語を自然な表現として容認する上で、学習期間の長さが影響を及ぼす可能性が示された。JLEが弱い結果構文や前置詞句型の結果述語を容認しやすい要因としては、日本語の状態変化表現では状態変化動詞を用いなければならないことや、結果述語が「～に」形や「～く」形といった一定の表現に限定されることが影響を受けていることが考えられる。一方でJLEが強い結果構文や形容詞句型の結果述語を容認していくことは、JLEが「主動詞以外の要素で、しかも非明示的に、状態変化の『推移（+地）』を表す」というサテライトフレーム言語の特性に精通していくことになると考えられる。先行研究の実験では、テスト文に前置詞句型の結果述語が含まれていなかったり、あるいは、サテライトフレーム型と分類されていながらも主動詞が状態変化を含意するものであったりしたために、主動詞の及ぼす影響と結果述語の及ぼす影響をそれぞれ検証することが難しかった。本研究において主動詞のタイプの結果述語のタイプを整理し、それぞれの及ぼす影響を確認できたことにより、より説得力のある証拠が提供できたものとする。しかし、移動構文の場合と同様、このサテライトフレーム言語としての英語の特性を容認する度合いがいかにして高められるかは、今後検証を続けて行かなければならない課題である。この課題に取り組みながら、学習者がこうした特性に精通しやすい指導・学習の在り方を模索することも併せて継続していくことが望ましいものとする。また、移動表現であれ状態変化表現であれ、仮にサテライトフレーム言語としての英語の特性に学習者が一定程度習熟したとしても、動詞フレーム言語としての母語の特性が学習者の判断に影響を及ぼし続ける可能性は考えられる。この点を踏まえながら、最後に両構文の迂言的表現に関する小課題（小課題5-(i)・5-(ii)）の検証結果を示し、考察を加えていく。

3.4.3. 迂言的表現に関する課題の検証結果と考察

移動構文と結果構文のそれぞれの迂言的表現に関する小課題を再度確認されたい。

【小課題 5】 JLE は、英語移動構文と英語結果構文のそれぞれの迂言的表現をどの程度容認するか。

【小課題 5-(i)】 JLE が英語移動構文の迂言的表現をどの程度容認するか。

【小課題 5-(ii)】 JLE が英語結果構文の迂言的表現をどの程度容認するか。

3.4.3.1. 移動構文の迂言的表現について

移動構文の迂言的表現については、3.3.で示した結果（表 3-7、図 3-5 参照）から、JLE である実験群 A・B が、(3a, b) 迂言的表現を、(1) 様態+着点句型の移動構文に対する判断に及びそうなほど自然な表現とみなしていることが分かった。実際、表 3-16 に示したとおり、実験群 B においては、(1) と (3a)、(1) と (3c) の間にはそれぞれ有意差が確認されなかった。また、実験群 A・B の (3a) と (3b) に対する判断が、それぞれ実験群 C の判断を大きく上回っていることが分かる。このとおり、小課題 5-(i) については、「JLE は、移動構文の迂言的表現を過剰に容認する」という結果となった。なお、「過剰に」とは、JLE による容認性判断が NSE による容認性判断を上回ることを意味している。

これら 3 種類のテスト文に対する JLE の容認性判断の度合いは、Inagaki (2001) による実験の結果と極めて類似する結果となった。第 2 章の図 2-13 と本章の図 3-5 を参照されたい。それぞれ図 3-9、図 3-10 として以下に再掲する。ただし、それぞれの図に点線の楕円を加筆し、JLE による (1)、(3a)、(3b) タイプの英文に対する判断の結果を表す箇所を示した。また、図 3-9 の下線部を修正し、テスト文のタイプの番号を本章の番号に合わせた。Inagaki (2001) の実験は「比較選択の問題」と「双極法の問題」を含むものであり、本実験はそれらの点に留意して検証方法の改善を図ったものであった。その上で、類似の実験結果が得られたことから、複数のテスト文を同時に提示することや双極法の回答項目を設置することは、各実験群による判断の全体の平均値には大きく影響を及ぼさないとと言えるのかもしれない。

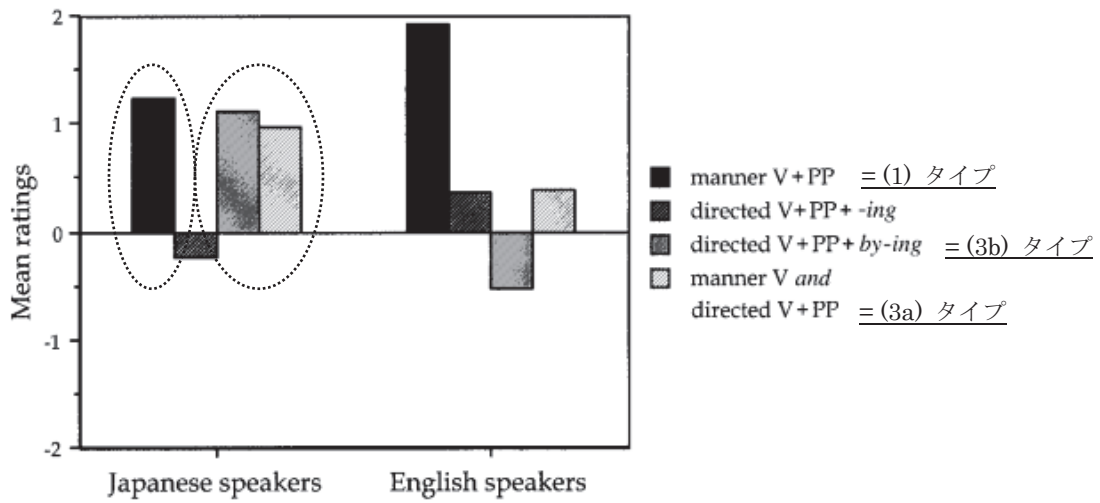


図 3-9 (=図 2-13) Inagaki (2001) における容認性判断タスクの結果 (楢円付)
 (Inagaki (2001), p.160, Figure 1 [下線部は筆者による加筆])

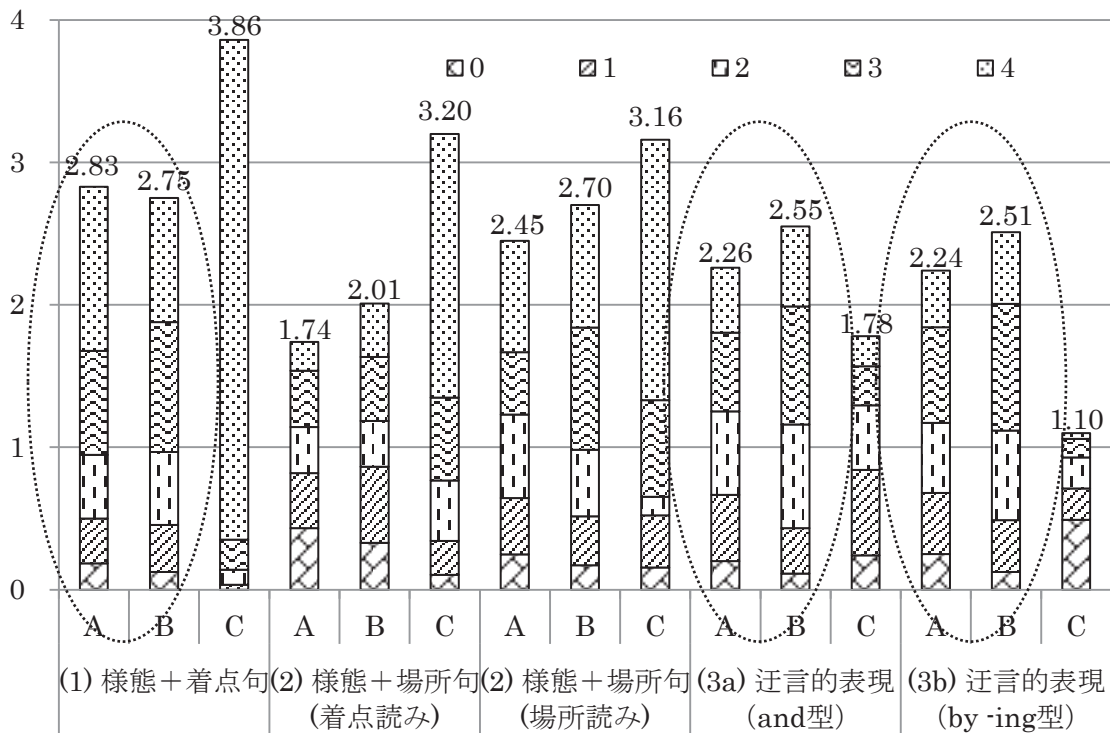


図 3-10 (=図 3-5) 移動構文とその迂言的表現に対する
 容認性判断の結果と各回答の占める割合 (楢円付)

ここで、Inagaki (2001) の実験に参加した JLE が非英語専攻の大学 1 年生であったのに対し、本実験では、英語専攻の 1 年生 (実験群 A) と非英語専攻の 2~4 年生 (実験群 B) が JLE としての実験参加者であったことに留意したい。本実験では、実験群 A・B の双方が迂言的表現を過剰に容認しているという結果が得られたことから、英語力の差が及ぼす影響は少ないものと思われる。また、以下の表 3-27 に示すとおり、実験群 B の学年ごとの比較を見ても、学習期間の差が及ぼす影響も少なそうである。これらの点から、少なくとも、Inagaki (2001) による考察に対して、それを支持する追加のデータを提供できたものとする。

表 3-27 実験群 B の学年ごとの容認性判断の結果 [移動構文の迂言的表現]

| 実験群 | 移動構文の迂言的表現の種類 | |
|------------------|---------------|----------------|
| | (3a) and 型 | (3b) by -ing 型 |
| B-2 ($n = 4$) | 2.53 | 2.70 |
| B-3 ($n = 12$) | 2.62 | 2.40 |
| B-4 ($n = 4$) | 2.38 | 2.68 |

Inagaki (2001) は、JLE が迂言的表現を容認してしまう理由として、(3a) の and や (3b) の by を日本語の「～て (で)」形の表現に相当するものとみなしている可能性を指摘している。これが正しいとすれば、JLE は位置変化の「経路」を有方向移動動詞で表すという動詞フレーム言語としての日本語の特性に影響を受けた判断をしていると言えるだろう。また、ここまでの議論から、このような母語の性質に基づく影響が、英語力が向上し、学習期間が長くなったとしても、なかなか解消しにくいものであることが改めて示唆されたと言えるであろう。これに対し、NSE である実験群 C は、(1) 様態+着点句型の表現を明らかに自然な表現とみなしていることがわかる。このことから、JLE にとってのインプットの中に、(3a, b) の迂言的表現が含まれているとは考えにくく、肯定証拠だけでは、JLE が NSE にとって不自然な表現を自然な表現として受け入れ続けてしまう可能性がある。否定証拠の提供の仕方を考えることが求められるであろう。

3.4.3.2. 結果構文の迂言的表現について

このような状況は結果構文の迂言的表現にも当てはまるのであろうか。参照用に各種迂言的表現を再掲する。

(18) (= (8)) 結果構文の迂言的表現

- (a) 弱-形-make-and 型 : Mike painted and made the wall black.
- (b) 弱-形-make-by-ing 型 : Mike made the wall black by painting it.
- (c) 弱-前-get-and 型 : John broke and got the glass into pieces.
- (d) 弱-前-get-by-ing 型 : John got the glass into pieces by breaking it.
- (e) 強-形-make-and 型 : Paul kicked and made the door open.
- (f) 強-形-make-by-ing 型 : Paul made the door open by kicking it.
- (g) 強-前-get-and 型 : Bob stabbed and got the man to death.
- (h) 強-前-get-by-ing 型 : Bob got the man to death by stabbing him.
- (i) 弱-前-make-and 型 : John broke and made the glass into pieces.
- (j) 弱-前-make-by-ing 型 : John made the glass into pieces by breaking it.
- (k) 強-前-make-and 型 : Bob stabbed and made the man to death.
- (l) 強-前-make-by-ing 型 : Bob made the man to death by stabbing him.

上掲の表 3-13, 表 3-14、図 3-8 に示した実験結果を基にして、テスト文のタイプ ((8a) 弱-形-make-and 型・(8b) 弱-形-make-by-ing 型・(8c) 弱-前-get-and 型・(8d) 弱-前-get-by-ing 型・(8e) 強-形-make-and 型・(8f) 強-形-make-by-ing 型・(8g) 強-前-get-and 型・(8h) 強-前-get-by-ing 型・(8i) 弱-前-make-and 型・(8j) 弱-前-make-by-ing 型・(8k) 強-前-make-and 型・(8l) 強-前-make-by-ing 型) によって容認性 (どの程度自然な表現であると感じるか) の判断に差が見られるかを、実験群ごとに、対応ありの 1 元配置分散分析で検討した。結果は以下のとおりであった。実験群 A では、 $F(3.61, 90.22) = 1.82, p = .138, \eta^2 = .046$ で有意ではなかった。実験群 B では、 $F(5.31, 100.98) = 1.19, p = .321, \eta^2 = .040$

で有意ではなかった。実験群 C では、 $F(11, 110) = 16.87, p < .001, \eta^2 = .356$ で有意であり、効果量も大きかった。この結果から、JLE である実験群 A と B は、迂言的表現の基になる結果構文が弱い結果構文であれ強い結果構文であれ、結果述語が形容詞句型であれ前置詞句型であれ、使役動詞の種類が **make** であれ **get** であれ、迂言的表現が **and** 型であれ **by -ing** 型であれ、すべてのタイプの迂言的表現を同程度に自然な表現であると感じていることが分かった。また、その平均値を NSE である実験群 C による判断結果と比べてみると、(8b) 弱-形-**make-by-ing** 型を除く全ての迂言的表現において、実験群 A と実験群 B による判断結果が NSE である実験群 C の判断結果を上回った。これらのおり、小課題 5-(ii) についても、「JLE は、結果構文の迂言的表現を過剰に容認する」という結果となった。参照用に図 3-8 を図 3-11 として次頁に再掲する。

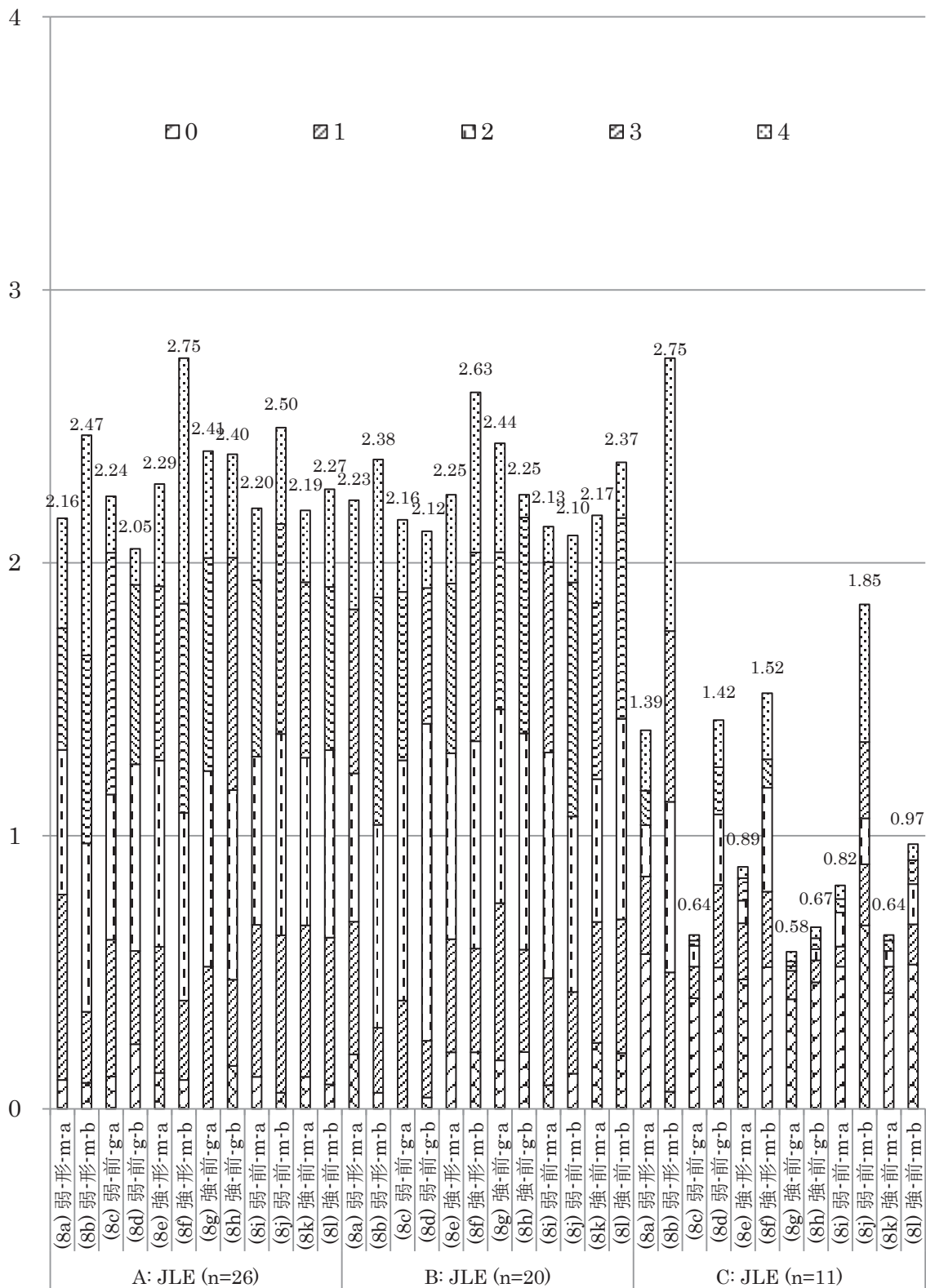


図 3-11 (=図 3-8) 結果構文の迂言的表現に対する容認性判断の結果と各回答の占める割合 (再掲用)

JLE による (8) 迂言的表現に対する容認性判断がこれだけ過剰なものになった原因として、明示的に指導を受けた知識に依存していることと、移動構文の迂言的表現に対する判断の場合と同様に、母語の特性に影響を受けている可能性が考えられる。日本における中学校や高等学校での英語教育において、結果構文が独立した構文として指導されることはほぼないと言って差し支えないであろう。筆者が調べた限りにおいて、高校生が使用しそうな学習参考書や文法書などの内、結果構文を独立した構文として解説しているものはなかった。せいぜい、この構文に該当する例文（弱い結果構文）が、文型を扱う単元でいくつか登場する程度が関の山であった。一方で、使役動詞については全ての文法書で取り扱われており、今回の実験参加者に限らず、いわゆる EFL 環境に置かれている JLE は、総じて使役動詞について何らかの明示的な指導を受けていることが期待できる。そうした明示的に得た知識に基づいて JLE が容認性判断をしたものと考えれば、結果構文の各種迂言的表現を結果構文（特に、強い結果構文）よりも自然の表現であるとみなしたのも当然の結果と言えよう。ただし、使役動詞 *make* を主動詞として補語 (SVOC の C) の部分に前置詞句を取るような英語表現が学習内容に含まれているとは考えにくい。筆者が調べた限りにおいて、高校生が使用しそうな学習参考書や文法書などの内、使役動詞 *make* を用いた表現で補語の位置を占めるのは形容詞句（分詞を含む）(The news made them happy.) 名詞句 (They made him captain.)、動詞句 (What made him stay home?) のいずれかであった。その点を踏まえれば、JLE が (8i, j, k l) の迂言的表現をその他の迂言的表現と同程度に容認したことから、使役動詞 *make* の語法を過剰一般化していることが分かる。その原因の 1 つとして、英語の使役動詞を何かしらの日本語表現に相当するものとみなしている可能性を指摘する。

ここで、日本語の使役表現に着目する。日本語の使役表現には、他動詞の語彙的使役と動詞に「-さす/させる」をつけた迂言的使役があることが知られている（高見，2011）。以下、(19) - (25) の例文は高見（2011）からの抜粋である。

- (19) 子供が寝た。[自動詞文]
- (20) a. お母さんは、子供を寝かした／寝かせた。[他動詞文]
 b. お母さんは、子供を寝させた。[一させる使役文]
- (21) a. 遅刻した生徒を廊下に立たすなんて、今時信じられない先生ですね。
 b. 遅刻した生徒を廊下に立たせるなんて、今時信じられない先生ですね。
- (22) a. 集まりたい奴には集まらしておけ。
 b. 集まりたい奴には集まらせておけ。
- (23) a. お母さんは、赤ちゃんにミルクを飲ましてから、自分の食事をした。
 b. お母さんは、赤ちゃんにミルクを飲ませてから、自分の食事をした。
- (24) a. あそこは、故郷の田舎料理を食べさす、とってもいいお店です。
 b. あそこは、故郷の田舎料理を食べさせる、とってもいいお店です。
- (25) a. 息子に留学の夢を諦めさすのは、親として不憫だ。
 b. 息子に留学の夢を諦めさせるのは、親として不憫だ。

語彙的使役とは (20a) の「寝かす／寝かせる」のような他動詞のことを指す。このような他動詞は主語が行う使役過程とその結果生じる出来事の両方がその動詞の持つ意味に含まれているため、「語彙的使役動詞」と呼ばれる (高見, 2011)。一方、迂言的使役とは (20b) の「寝させる」のように、動詞に「一さす／させる」がついたものを指す ((20b) の場合は「一させる」)。 (21) - (25) の a. の方が「一さす」のついた迂言的使役で、b. の方が「一させる」のついた迂言的使役である。なお、(21), (22) は基になる動詞が自動詞で、(23)-(25) は基になる動詞が他動詞である。さらには、形容動詞や擬態語の「～に形」や形容詞の「～く形」にも「一させる」あるいは「一する」をつけることが可能である。

- (26) a. 金属を叩いて平らに (ペシャンコに) した／させた。
 b. パン生地を叩いて丸くした／させた。

JLE が結果構文の迂言的表現を過剰に容認した原因として、こうした「-さす／させる」のような日本語表現を、英語の使役動詞に相当するものとみなしやすいことが考えられる。第1章で、弱い結果構文は日英語の双方で成立するのに対し、強い結果構文は日本語では成立せず、英語の強い結果構文を自然な日本語として訳出する場合に、働きかけ動詞と状態変化動詞の両方が必要となることを述べた。しかしながら、以下の (27c), (28c) の日本語文のように、英語の弱い結果構文も強い結果構文も「-する／させる」という表現を用いて訳出することは可能である。こうした表現では、主動詞として用いられている「-する／させる」が状態変化を表しているという意味において、こうした表現も日本語の動詞フレーム言語の特性を表していると言えよう。

(27) 弱い結果構文

- a. Ken crushed the can flat.
- b. ケンは缶をペシャンコに潰した。
- c. ケンは缶を潰してペシャンコにした／させた。

(28) 強い結果構文

- a. Paul kicked the door open.
- b. ポールはドアを蹴って開けた (蹴り開けた)。
- c. ポールはドアを蹴って開かした／開かせた。

また、移動構文の迂言的表現に対する判断の場合と同様に、JLE が (27c) の「潰して」や、(28c) の「蹴って」のような「～て」という表現を、(8a, c, e, g, i, k) の and や、(8b, d, f, h, j, l) の by -ing に相当するものとみなし、各種迂言的表現を自然な表現であると判断した可能性も考えられる。

JLE は、結果構文の判断をする際には、主動詞が状態変化動詞か働きかけ動詞か、また、結果述語が形容詞句型か前置詞句型かに影響を受けていた。つまり、状態変化の「推移」が動詞に含意されるかどうかと、結果述語に明示的に示されているかどうかに影響を受け

ていた。そういった影響の程度差が、使役動詞の含まれる表現になったとたんに見られなくなってしまうということになる。また、図 3-11 における実験群 A・B の (8f) に対する判断の結果を見ると、それぞれの実験群において最も高い値を示していることが分かる。(8f) の基になっている結果構文は (6)「強一形」型の結果構文であり、状態変化の「推移」が、主動詞に含意されるものでもなければ、結果述語に明示的に示されるものでもなかった。このタイプに対する実験群 A・B の容認度は、結果構文の中で最も低いものであった。それにもかかわらず、迂言的表現の中ではこの (6) を書き換えた (8f) が最も自然な表現として受け入れられており、しかも、(6)「強一形」型の結果構文を大きく上回っていることが分かる。これらのことから、JLE は使役動詞に対して「推移」の概念を認めやすいと言って差し支えないものと思われる。これが正しいとすれば、JLE は状態変化の「推移」を動詞で表す動詞フレーム言語としての日本語の特性に影響を受けた判断をしていると言えるだろう。また、(8) 迂言的表現に対する判断において、実験群 A と B はほぼ同じような判断結果となった。さらに、実験群 B の学年ごとの判断結果を見ても、学習期間の差異が何らかの影響を及ぼしている傾向が示されているようには思えない (表 3-28 参照)。

表 3-28 実験群 B の学年ごとの容認性判断の結果 [結果構文の迂言的表現]

| 実験群 | 結果構文の迂言的表現の種類 | | | | | | | | | | | |
|-----|---------------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| | (8a) | (8b) | (8c) | (8d) | (8e) | (8f) | (8g) | (8h) | (8i) | (8j) | (8k) | (8l) |
| B-2 | 2.62 | 2.38 | 2.50 | 2.64 | 2.69 | 2.94 | 2.44 | 2.11 | 2.67 | 2.64 | 2.63 | 2.60 |
| B-3 | 2.19 | 2.52 | 2.00 | 1.74 | 2.09 | 2.55 | 2.26 | 2.26 | 2.06 | 1.66 | 2.06 | 2.20 |
| B-4 | 2.20 | 2.63 | 2.45 | 2.55 | 2.20 | 2.63 | 2.56 | 2.55 | 2.09 | 2.92 | 2.20 | 2.33 |

ここまでの議論から、母語の性質に基づく影響が、英語力が向上し、学習期間が長くなったとしても、なかなか解消しにくいものであることが改めて示唆されたと言えるであろう。これに対し、NSE である実験群 C は、程度の差はあるものの (後述)、総じて (8) 迂言的表現を自然な表現とみなしているとは言えない。このことから、JLE にとってのインプットの中に、(8) の各種迂言的表現が含まれているとは考えにくく、肯定証拠だけでは、JLE が NSE にとって不自然な表現を自然な表現として受け入れ続けてしまう可能性

がある。移動構文の迂言的表現の場合と同様、否定証拠の提供の仕方を考えることが求められるであろう。

3.4.3.3. 英語母語話者による判断

最後に、NSE による実験結果から得られる知見に言及する。NSE は移動構文の迂言的表現であれ結果構文の迂言的表現であれ、それらの基になっている各種構文に比べると、迂言的表現を自然な表現としてみなしていないことは明らかである。しかしながら、and 型のものと by -ing 型のものとを比べると、基になる英文が移動構文の場合と結果構文の場合とでは、NSE の受け入れ方が異なることが分かる。まず、移動構文の迂言的表現において、NSE は (3a) and 型よりも (3b) by -ing 型をより不自然な表現としてみなすことが Inagaki (2001) で指摘されていたが、本実験でも同様の結果が得られた (図 3-9、図 3-10 参照)。これとは対照的に、結果構文の迂言的表現においては、(8a)-(8b)・(8c)-(8d)・(8e)-(8f)・(8g)-(8h)・(8i)-(8j)・(8k)-(8l) の各組で、(8b, d, f, h, j, l) by -ing 型よりも (8a, c, e, g, i, k) and 型の方が不自然な表現とみなされていることが分かった (図 3-11 参照)。NSE がそれぞれのタイプを受け入れない要因について考察を加える。

まず、NSE が (3a) タイプの英文を自然な表現とみなさない理由として、Inagaki (2001) は、この英文は移動様態動詞と有方向移動動詞が個別に表す 2 つの事象を描写する表現のように感じられ、実験で提示された 1 枚のイラスト (図 2-12 参照) の示す状況を表す表現としては適切ではないと判断された可能性があるとしている。また、“Sam walked and went into the house.” のような英文も、提示されたイラストが「サムが家の周りを数分間歩き、それから家の中に入った」という状況を示すものであれば、もっと適切な表現と判断された可能性があるとして述べている。この場合、walked は場所読みの解釈を伴う移動事象を表しており、went が着点読みの解釈を伴う移動事象を表していることになる。これを、移動事象を構成する概念要素の観点から捉え直してみると、walked と went が別々の移動事象を表しており、それぞれの活性化過程が「静止」と「移動」ということになる。

一方、着点読みの解釈を伴う 1 つの移動事象として (3a) タイプの迂言的表現が受け入

れられない理由は、移動様態動詞と有方向移動動詞の活性化過程（＝「移動」）が重複することにあると思われる。以下の図 3-12 を参照されたい。

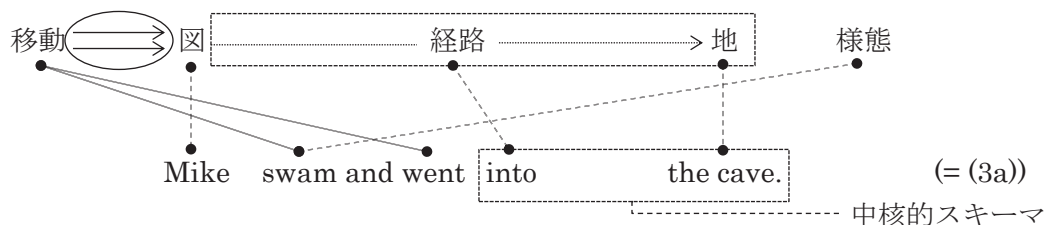


図 3-12 NSE による移動構文の迂言的表現（and 型）の捉え方

NSE は、(3a) のような迂言的表現においても移動の「経路」の概念は着点句によって表現されているものとみなすであろう。そうすると、NSE がこれらの表現を自然なものともみなさない理由は、「経路」の表され方が問題ではないということになる。NSE が (3a) タイプの英文を 1 つの移動事象を描写する表現として容認しにくいのは、and で並列された 2 つの動詞がそれぞれ位置の変化があることを示す表現として捉えられるからであろう。つまり、swam と went それぞれの活性化過程（＝「移動」）が重複することで（図 3-12 の実線部分参照）、例えば、“John kissed and hugged his daughter.” という英文が、“John kissed his daughter, and (then) hugged her.” と解釈できるように、(3a) “Mike swam and went into the cave.” のような迂言的表現が、“Mike swam into the cave, and (then) went into the cave.” と解釈してしまうことにより、1 回の位置変化を表す事象としては受け入れにくいものと判断するのである。

このように 2 つの動詞の活性化過程が重複することに対して NSE が感じる抵抗感が、結果構文の迂言的表現の場合にはより一層強くなるのかもしれない（図 3-13 参照）。本実験で参加者に提示したイラストは、2 枚 1 組のイラストであった。状態変化を表すイラストについては、左側の 1 枚が状態変化を引き起こす行為を行っている状況（起因状況）を描写するもので、右側の 1 枚がその人・物の変化した状態（結果状況）を描写するものであった。よって、イラストに起因状況と結果状況が別々に描かれていたとしても、それを一連の行為として捉えた場合に、NSE は 2 つの動詞が並列された表現に強く抵抗を感じる

ということになる。おそらく、NSE は、結果構文の and 型の迂言的表現を、状態変化が 2 回引き起こされた状況として捉えてしまうものと思われる。(3a) タイプの英文と同様、(8a) “Mike painted and made the wall black.” のような迂言的表現を、“Mike painted the wall black, and (then) made it black.” と解釈してしまうことにより、1 回の状態変化を表す事象としては受け入れにくいものと判断するのであろう。

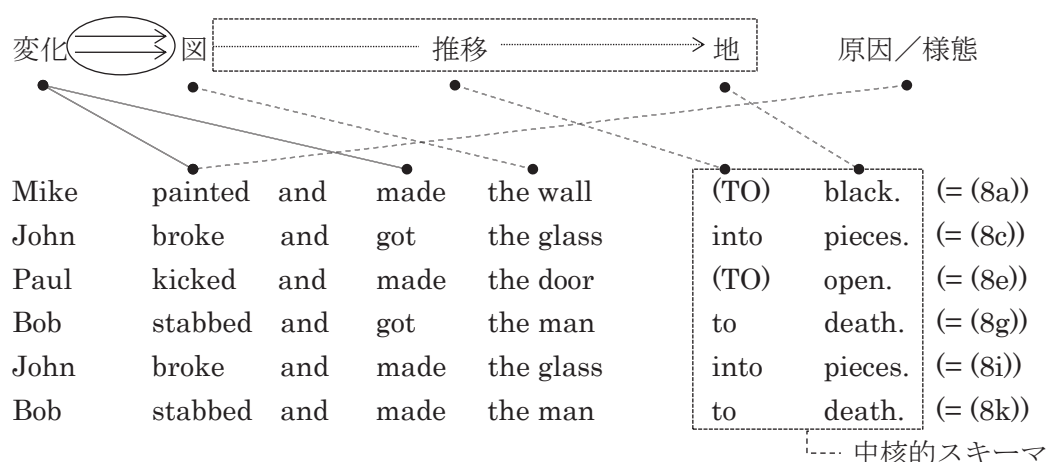


図 3-13 NSE による結果構文の迂言的表現 (and 型) の捉え方

次に、by -ing 型の迂言的表現を見ていく。(3b) タイプの迂言的表現が NSE に容認されにくい理由として、Inagaki (2001) は、移動の「様態」が主動詞ではなく付加詞的な要素によって表現されていることにより、英語のサテライトフレーム言語としての特性に反することが考えられるとしている。また、NSE が (3b) タイプの迂言的表現を、“John went into the house walking.” のような by を用いない表現よりも不自然な表現とみなしたことから、前置詞 by が “by car” のように移動の「手段」を表すものであるために、移動の「様態」を表すには適さないのかも知れないとしている。この想定が正しければ、NSE は、前置詞 by によって移動の「様態」を表すことに対して、活性化過程が重複すること以上に抵抗を感じるということになる。これに対し、結果構文の迂言的表現では、and 型よりは、by -ing 型に対する抵抗が少ないようである。その理由として、結果構文の迂言的表現の by -ing で表現されているものの中には、状態変化の「様態」だけでなく、状態変化の「原因」を表すものが含まれていることが考えられる。

Talmy (2000) は、以下の (29) や (30) のような例を挙げ、「様態 (=Manner)」とは「図 (=Figure)」がする行為を表すものであり、「原因 (=Cause)」とは「動作主 (=Agent)」がする行為を表すものであるとしている。(29) と (30) の下線部が、それぞれ「図」と「動作主」を表している。

(29) MOVE + Manner

- a. I *slid/rolled/bounced* the keg into the storeroom.
- b. I *twisted/popped* the cork out of the bottle.

(30) MOVE + Cause

- a. I *pushed/threw/kicked* the keg into the storeroom.
- b. I *blew/flicked* the ant off my plate.
- c. I *chopped/sawed* the tree down to the ground at the base.
- d. I *knocked/pounded/hammered* the nail into the board with a mallet.

(Talmy, 2000: 28 より抜粋 [下線は筆者による加筆])

例えば、“I rolled the keg” では、基本的に rolled は the keg がしている行為を表しており、“I pushed the keg” では、pushed は I がしている行為を表しているという。この観点から本実験のテスト文として採用した結果構文を見直すと、その主動詞の中には、「様態」を表すものと「原因」を表すものが混在していることが分かる。表 3-29 を参照されたい。つまり、これらの結果構文を基にした迂言的表現の by -ing によって表されているものは一様ではない。しかし、少なくとも結果構文の迂言的表現では by -ing によって「様態」が表されることは、NSE にとって移動構文の場合ほど大きな抵抗はないと言えるのかもしれない。

ここで、(5)「弱-前」型の主動詞が全て「様態」を表し、(7)「強-前」型の主動詞が全て「原因」を表していることに留意されたい。(5) と (7) を基にした by -ing 型の迂言的表現が、それぞれ (8d, j) と (8h, l) であった。図 3-11 から、NSE が (8d, j) よりも (8h,

D) をより不自然な表現とみなしていることが分かる。このことから、NSE にとって、「原因」が主動詞で表されないことに対する抵抗の方が、「様態」が主動詞によって表されないことに対する抵抗よりも大きなものであると言えるのかもしれない。また、(8j) が (8d) を上回り、(8l) が (8h) を上回ったことを考えると、必ずしも形容詞句型の結果構文を make を用いて書き換え、前置詞句型の結果構文を get を用いて書き換えるのが典型的であるという Jackendoff (1990) の指摘は必ずしも適切とは言えないだろう。

表 3-29 タスクに含めた結果構文とその主動詞が表す共事象の構成要素

| 構文・表現 | 種類 | テスト文 | 様態／原因 | | |
|----------------------------------|---|-----------------------------------|--------------------|-----------------------------|----|
| (4) & (5) 弱い 結果構文 (7 文) | (4) 形容詞句型 (4 文) | Mike painted the wall black. | 原因 | | |
| | | Ken crushed the can flat. | 原因 | | |
| | | Kumi froze the juice solid. | 様態 | | |
| | | Lucy polished the mirror clean. | 原因 | | |
| | (5) 前置詞句型 (3 文) | John broke the glass into pieces. | 様態 | | |
| | | Bob bent the wire into a U shape. | 様態 | | |
| | | Mike tore the letter into pieces. | 様態 | | |
| | | Paul kicked the door open. | 原因 | | |
| | | (6) & (7) 強い 結果構文 (7 文) | (6) 形容詞句型 (4 文) | Tom shot the man dead. | 原因 |
| | | | | John hammered the can flat. | 原因 |
| Mike shook his father awake. | 様態 | | | | |
| (7) 前置詞句型 (3 文) | John knocked Mike into unconsciousness. | 原因 | | | |
| | Meg patted the dough into a circle. | 原因 | | | |
| | | Bob stabbed the man to death. | 原因 | | |

以上のとおり、NSE が自然と感じる表現を JLE が必ずしも自然なものとは限らず、また、NSE が不自然と感じる表現を JLE が自然と感じることさえあることを見た。そして、その判断は、JLE が英語においても、「経路」や「推移」が明示的に示される表現や、「推移」が主動詞に含意される表現を自然な表現として受け入れることに起因すると言えるであろう。最終章では、ここまで議論した JLE の容認性判断に影響を及ぼす点を踏まえた上で、日本語と英語の性質の差異を反映させた指導法・学習法を提案する。また、本研究で取り扱った英語構文（移動構文と結果構文）とその他の英語構文を交えた今後の SLA 研究の展望を示し、本論文を総括することとする。

第4章

結論と今後の展望

本章では、本論文の要点を整理したまとめを行うと共に、本研究の限界点を提示する。その上で、英語教育への示唆として英語と日本語の特性の差異を意識的に対照させるような指導・学習法を提案する。最後に、SLA 研究における今後の展望を示して本章ならびに本論文を締め括る。

4.1. 本論文の要約

4.1.1. 移動事象・状態変件事象における日英語間の差異

本論文は、移動事象や状態変件事象を表す英語表現に対する JLE の容認性を、日英語間で成立する表現上の差異を基盤としながら検証した。第1章では、移動事象を表す移動構文と状態変件事象を表す結果構文において、日英語間で成立する構文のタイプの差異に類似性があることを概観した。移動構文では、英語が「有方向移動動詞」も「移動様態動詞」も到着点を表す句を項構造に取ることができるのに対し、日本語は「有方向移動動詞」しか到着点を表す句を項構造に取ることができない。結果構文では、英語が「状態変化動詞」も「働きかけ動詞」も結果を表す句（結果述語）を項構造に取ることができるのに対し、日本語は「状態変化動詞」しか結果を表す句（結果述語）を項構造に取ることができない。こうした日英語間の差異を Talmy (2000) の類型論的観点から整理し、英語では、移動事象や状態変件事象を構成する「中核的スキーマ」－位置変化の「経路＋（地）」や状態変化の「推移＋（地）」－が主動詞以外の要素（＝サテライト）によって表されやすく、日本語ではそれが主動詞によって表されやすいという特性があることを見た。また、英語における「経路（＋地）」や「推移（＋地）」を表す表現に着目し、明示的な表現と非明示的な表現があることを見た。「経路」については、「着点句」が明示的な表現であり、「場所句」が非明示的な表現であった。「推移」については「前置詞句」型の結果述語が明示的な表現であり、「形容詞句」型の結果述語が非明示的な表現であった。「経路」においても「推移」においても、前置詞“to”が明示的な役割を果たしていることを確認した。

4.1.2. 先行研究を補った点

第2章では、大きく3点の議論をした。1点目として、JLEを対象とした英語の移動構文や結果構文の習得を取り扱った先行研究の中には、検証結果が一致していないものがあることを示し、その不一致が検証方法の違いやその検証方法によって測られているものの差異に起因することを指摘した。まず、「様態+場所句」型の英語移動構文に対して、JLEが「着点読み」と「場所読み」の2通りの解釈を認めるかという課題に対して、Inagaki (2002) と Yotsuya et al. (2014) を概観した。その際、Inagaki (2002) の限界点として、実験参加者に対して2枚のイラストを同時に提示することに伴い、その2枚のイラストの間で優劣の判断がついてしまう「比較選択の問題」が残留する可能性を指摘した。また、Yotsuya et al. (2014) の限界点として、実験に採用されたタスクが真偽値判断タスクであることから、参加者がテスト文をどの程度適切なものであると感じているかという程度差が測れておらず、ある程度適切だと判断した場合にも True という回答を選択することで、回答に過剰な偏りが出てしまう可能性を指摘した。

次に、JLEによる「弱い結果構文」と「強い結果構文」の習得を取り扱った先行研究として、Yotsuya et al. (2014)、平野 (2016)、スプリング (2015) を概観した。Yotsuya et al. (2014) は、まず真偽値判断タスクの結果から参加者が結果構文を知っていると判断した上で、その容認性を測る容認性判断タスクを採用した。それぞれのタスクの限界点として、真偽値判断タスクについては、上述のとおり回答に偏りが出てしまう可能性に加え、このタスクで確認できるのが、結果述語が叙述するものが直接目的語でなければならないことに関する知識に過ぎない点を指摘した。また、容認性判断タスクについては、テスト文が文脈に当てはまるかどうかを判断するタスクになっており、テスト文が文法的に正しい文として提示されているために文法性や表現としての自然さを測っているとは言えない点を指摘した。平野 (2016) とスプリング (2015) の実験の限界点としては、主にテスト文の分類に不備があることを指摘した。平野 (2016) の実験は、主動詞の性質に着目して結果構文を「弱い結果構文」と「強い結果構文」分類した上で JLE の容認性判断を測るもので

あったが、結果述語の統語範疇（形容詞句か前置詞句か）に配慮した分類になっていなかったために、「弱い結果構文」には形容詞句型と前置詞句型の双方が同程度含まれていたのに対して、「強い結果構文」はそのほとんどが形容詞句型になってしまっていた。これにより、主動詞の特性による影響を測った実験とは言いがたい点を指摘した。スプリング (2015) の実験では、「サテライトフレーム文（変化を前置詞句で表す）」として分類されるテスト文の中に、状態変化動詞が主動詞として用いられているものがあるために、そのテスト文が変化（推移）を必ずしも「サテライト（この場合は前置詞）」で表しているものとは言い切れない点を指摘した。

2点目の論点として、先行研究におけるその他の検証方法上の限界点に言及した。まず、「比較選択の問題」を指摘した。これは、実験参加者に複数のテスト文やイラストを同時に提示することに伴い、テスト文同士やイラスト同士での優劣の判断がついてしまうことで、1つ1つのテスト文の容認性やテスト文が表す状況に対する判断が正確になされていない可能性が残留するというものであった。テスト文についてこの問題を抱える先行研究として、平野 (2016)、スプリング (2015) に加え、Inagaki (2001) を取り上げた。また、その際に、移動構文の迂言的表現に対する JLE の容認性判断の結果を概観した。次に、「双極法」の抱える問題として2つの点を指摘した。1つ目は、5件法ないしは7件法における真ん中の0が意味するものが曖昧な点であり、2つ目は、正の数側の回答項目と負の数側の回答項目の内、意味的に重複している内容のものが含まれている点であった。取り上げた先行研究の内、平野 (2016) と Inagaki (2001) がこの問題を抱えていた。

最後に3点目の論点として、先行研究では統一的に検証されていない課題があることに言及した。まず、JLEによる英語移動構文の習得を取り扱った研究では、「様態+着点句」型の移動構文と「様態+場所句」型の移動構文に対して、それぞれ異なる検証方法が採用されてきたことを指摘した。また、JLEの結果構文の習得を取り扱った研究では、テスト文の分類が統一的になされてこなかった点を改めて指摘した。さらに、移動構文と結果構文が日英語間の類型論的差異を表す顕著な構文として議論されてきたにもかかわらず、JLEによるこれら両構文の習得を統一的な手法で検証した先行研究が見られない点を指

摘した。そして、移動構文の迂言的表現と併せて結果構文の迂言的表現を取り入れた検証実験にすることで、これまで JLE による移動構文の迂言的表現の判断について議論されてきた内容を再検討することが可能になるだけでなく、結果構文の迂言的表現に対して同様の議論を当てはめることができるかの議論や、双方の迂言的表現に対する判断を対照させた議論が可能になることを指摘した。

続く第 3 章では、まず、本研究の実験が先行研究が抱えるこれらの様々な問題を改善し、統一的な手法で JLE による英語の移動表現や状態変化表現に対する容認性(どの程度自然な表現として感じられるか)を検証したものであることを述べた。具体的には、2 枚 1 組のイラストを用いた容認性判断タスクを採用したが、1 組のイラストに対してテスト文 1 文のみを提示するタスクにしたことにより「比較選択の問題」を補った。また、単極法 ((0) ~ (+4) の 5 件法) の回答形式にしたことや、回答項目に X「知らない単語があるため判断できない」と Y「知らない単語はないが判断できない」を含めたことにより、「双極法」が抱える問題を補った。さらに、以下のテスト文を用意することで、テスト文の不備を補った。移動表現については、「様態+着点句」型の移動構文、「様態+場所句」型の移動構文、迂言的表現を用意し、状態変化表現については、弱い結果構文、強い結果構文、迂言的表現を用意した。結果構文については、弱い結果構文と強い結果構文の双方に対して「形容詞句型」と「前置詞句型」のテスト文を用意した。また、移動表現についても状態変化表現についても、各迂言的表現には、and 型のものとは by -ing 型のものを用意した。移動構文の迂言的表現の主動詞には come または go を用い、結果構文の迂言的表現の主動詞には、形容詞句型の場合は make を、前置詞句型の場合は get を用いた。これらに加え、錯乱用のタスクとして授受構文の容認性を測るタスクと計算問題のタスクを含めた。

4.1.3. 本論文の結論

第 3 章の後半では、本研究の実験結果を示した上で、分析方法と併せて各小課題に対する検証結果を提示し、それぞれの結果に考察を加えた。以下、移動構文、結果構文、両構文の迂言的表現の順に、検証結果と考察について整理し、本論文全体としての結論を述べる。

4.1.3.1. 移動構文に対する小課題の結果

【小課題 1】JLE は、着点読みの解釈を伴う英語移動構文として、「様態＋着点句」型と「様態＋場所句」型のどちらの英語表現を容認しやすいか。

【小課題 2】JLE は、「様態＋場所句」型の英語移動構文に対して、「着点読み」と「場所読み」のどちらの解釈を容認しやすいか。

JLE は、着点読みの解釈を伴う移動構文として、「様態＋着点句」型を「様態＋場所句」型よりも容認しやすく、「様態＋場所句」型の移動構文に対して、「場所読み」の解釈を「着点読み」の解釈よりも容認しやすいという結果になった。英語は移動様態動詞が到着点を表す句を項構造に取ることができる一方で、日本語はそれができない。こうした日英語間の項構造の現れ方の差異という観点から見ると、JLE は、着点読みの解釈を伴う移動構文として、移動様態動詞が主動詞に用いられた英語移動構文を習得しそこなう可能性がある。しかし、本研究の検証により、JLE は主動詞に移動様態動詞が用いられた英語移動構文をある程度容認できることが示された。さらに、このような英語移動構文に対して、JLE が一様の反応を示すわけではなく、JLE にとって容認することが比較的容易な表現とそうでない表現があることが明らかとなった。JLE は、移動の「経路」が、to, into, onto などの“to”という音形によって明示的に示される場合に「経路」の概念を認めやすく、そうでない場合には「経路」の概念を認めにくいことが明らかとなった。

なお、小課題 2 は、Inagaki (2002) と Yotsuya et al. (2014) の間で検証結果が異なるものであった。JLE が「様態＋場所句」型の移動構文に対して、「着点読み」の解釈と「場所読み」の解釈をどの程度容認するのかという点については、先行研究の検証結果からは推測することしかできなかつた。本研究の検証結果を双方の先行研究の検証結果と照らし合わせることにより、程度差を示しながら JLE が「場所読み」の解釈の方を容認しやすいことを明らかにすることができた。

4.1.3.2. 結果構文に対する小課題の結果

【小課題 3】JLE は、英語結果構文の内、「弱い結果構文」と「強い結果構文」のどちらを容認しやすいか。

【小課題 4】JLE は、英語結果構文の内、「形容詞句」型の結果構文と「前置詞句」型の結果構文のどちらを容認しやすいか。

JLE は、「弱い結果構文」を「強い結果構文」よりも容認しやすく、また、「前置詞句」型の結果構文を「形容詞句」型の結果構文よりも比較的容認しやすいという結果になった。

これらの結果から、JLE が英語の結果構文を自然な表現として容認する上で、主動詞が状態変化の「推移」を含意するかどうか、ならびに、結果述語が明示的に「推移」を表すかどうかに影響を受けることが示された。このことから、JLE は日本語で成立するような項構造の現れ方をする英語の状態変化表現を容認しやすいことが明らかになった。また、日英語の双方で成立するような項構造の現れ方をする英語の状態変化表現の中にも、日本語では成立しない項構造の現れ方を持つ英語の状態変化表現の中にも、学習者にとって習得の比較的容易な表現とそうでない表現があることが明らかになった。JLE は、状態変化の「推移」が *to*, *into* などの “to” という音形によって明示的に示される場合に「推移」の概念を認めやすく、そうでない場合には「推移」の概念を認めにくいことが明らかとなった。移動表現と状態変化表現に対する JLE の容認度を、統一の検証方法により検証し、このように、移動の「経路」と状態変化の「推移」に対して JLE が類似の反応を示すという結果が得られたことは、興味深い知見を提供できたものとする。

なお、小課題 3 は、Yotsuya et al. (2014) と平野 (2016) の間で検証結果が異なるものであった。本研究の検証結果を Yotsuya et al. (2014) の検証結果と照らし合わせることで、程度差を示しながら JLE が「弱い結果構文」を「強い結果構文」よりも容認しやすいことを明らかにすることができた。また、小課題 4 について、本研究の検証結果を平野 (2016) やスプリング (2015) の検証結果を照らし合わせることで、非明示的に「推移」を表す形容詞句型の結果述語を JLE が自然な表現として容認する上で、英語を専攻するか否

かによる影響を受ける可能性が示された。さらに、本研究の実験群を学年ごとに分類した検証を施すことで、学習期間の長さが影響を及ぼす可能性が示された。学習期間の長さによる影響が、非明示的に移動の「経路」を表す「様態+場所句」型の移動構文においても確認されたことにより、中核的スキーマが非明示的に表された表現を徐々に容認できるようになるという点において、JLE による英語の移動表現と状態変化表現の容認度判断にある一定の類似性が存在する可能性が示された。

4.1.3.3. 迂言的表現に対する小課題の結果

【小課題 5】 JLE は、英語移動構文と英語結果構文のそれぞれの迂言的表現をどの程度容認するか。

【小課題 5-(i)】 JLE が英語移動構文の迂言的表現をどの程度容認するか。

【小課題 5-(ii)】 JLE が英語結果構文の迂言的表現をどの程度容認するか。

JLE は、NSE が容認するよりもはるかに高い度合いで、移動構文の迂言的表現と結果構文の迂言的表現を容認する結果となった。とりわけ、本研究における移動構文の迂言的表現に対する JLE の判断結果は、Inagaki (2001) における検証結果に極めて近いものであった。英語力の違いや学習期間の長さにかかわらず、JLE が移動構文の迂言的表現を過剰に容認することが示されたという点において、JLE が迂言的表現内の *and* や *by -ing* を日本語の「～て(で)」形の表現に相当するものとみなしているという Inagaki (2001) の指摘を強く支持する結果となった。また、同様に、JLE が結果構文の迂言的表現を、英語力の違いや学習期間の長さに関係なく、過剰に容認したことからも、日本語（の特性）を基にした判断をしている可能性が示唆された。日本語を基にした判断については、Inagaki (2001) の指摘と併せて考察すると、英語の使役動詞を日本語の「～さす／させる」に相当するものとみなしている可能性がうかがえる。さらには、移動構文の迂言的表現に対しても結果構文の迂言的表現に対しても、英語力や学習期間の差異に関係なく、こうした母語の特性に影響を受けた判断が継続される可能性が高いという点において、学習者に対して

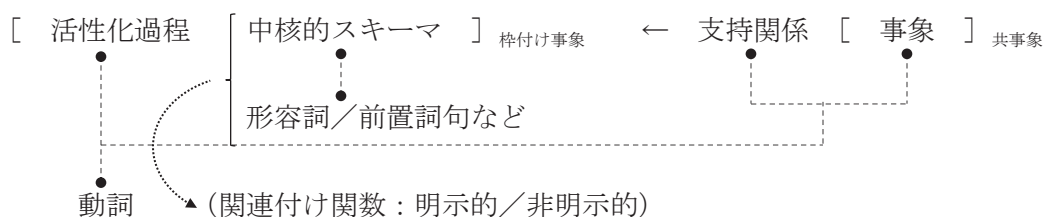
否定証拠を提示する必要性、またその方法が求められる結果となった。

4.1.3.4. 研究課題に対する総括

【研究課題】英語の移動表現・状態変化表現に対する JLE の容認性判断は、日英語間の動詞フレーム言語・サテライトフレーム言語としての特性の差異に影響を受けるか。また、受けるとすれば、具体的にどのような特性に影響を受けるか。

各小課題の検証結果から、「英語の移動表現・状態変化表現に対する JLE の容認性判断は、日英語間の動詞フレーム言語・サテライトフレーム言語としての特性の差異に影響を受ける」ものと結論付ける。ここで、日英語間の類型論的差異が以下のようにまとめられることを思い出されたい。

A. 英語 (≒ サテライトフレーム言語)



B. 日本語 (≒ 動詞フレーム言語)

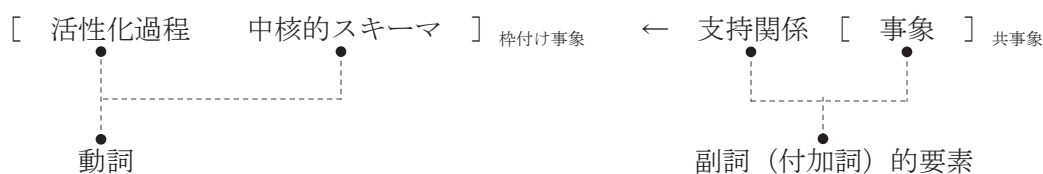


図 4-1 (=図 1-12) 移動事象・状態変化事象の日英語の構成概念の表出の仕方

こうした日英語間の特性の内、JLE は「中核的スキーマ (を構成する「関連付け関数」) が明示的にも非明示的にも表出されうる」という英語の特性と「移動事象や状態変化事象の中核的スキーマを動詞で表しやすい」という母語 (=日本語) の特性に影響を受けやすいものと結論付ける。ただし、これらの影響は、学習者が受けるインプットによって、前者が比較的变化しやすいのに対し、後者は比較的变化しにくいものと考えられる。

まず、小課題 1・2・4 の結果から、移動の到着点を表す語句としても状態変化の結果を表す語句としても、JLE が「経路」や「推移」を明示的に示した表現を容認しやすいことが明らかとなった。しかし、「経路」や「推移」といった中核的スキーマが非明示的に表される「様態+場所句」型（着点読み）の移動構文や形容詞句型の（強い）結果構文についても、これらの表現が肯定証拠としてインプットの中に含まれることにより、学習者は徐々にこれらの英語表現を自然なものとして受け入れるようになる可能性がある。実際にその傾向があることは前章の 3.4.2. で議論したとおりである。しかしながら、学習時期の比較的早い段階からインプットに含まれていると考えられる移動構文でさえ、到着点の表し方による影響が、英語の学習を大学生まで続けている者に及ぶことが明らかとなった。その点を踏まえると、結果構文は、移動構文よりも遅い時期に JLE が触れ始めると思われるだけでなく、Snyder (2001) において、NSE 自身も結果構文を使い始める時期が比較的遅く、子供だけでなく大人の母語話者においても、使用頻度が高くないことが指摘されていることから、インプット量に頼るだけでは、学習者が自然な表現として受け入れるようになるにはかなり時間を要するかもしれない。

また、小課題 3・5 の結果から、移動事象についても状態変化事象についても、日本語で「経路」や「推移」を表す動詞に相当する英語の動詞が主動詞に用いられた表現を容認しやすいことが明らかとなった。比較的早い時期からインプットに含まれると思われる移動構文を基にした迂言的表現についても、移動構文より触れ始めるのが遅く、触れる頻度が低いと考えられる結果構文を基にした迂言的表現についても、JLE が双方の迂言的表現を過剰に容認するという結果を示したことから、JLE が英語母語話者にとって自然な英語表現に触れることだけ一つまり、肯定証拠だけをインプットとして取り入れること一では、英語母語話者にとって不自然な表現を不自然な表現として受け止められるように必ずしもなるわけではないことが明らかとなった。さらに、このような母語の特性は、JLE の英語力や学習期間の差にほとんど関係なく、影響を及ぼし続ける可能性が高いことが改めて示された。当然のことながら、これらの迂言的表現が NSE にとって不自然な表現であることは、肯定証拠からは得られる情報ではなく、否定証拠として提供されることが無ければ、

学習者はそのことに気付きにくいと言えよう。もちろん、NSEにとってこのような迂言的表現が不自然な表現であることから、学習者は、実際にこのような表現に触れることは少ないかも知れない。しかしながら、学習者が産出する英文の中に、母語（＝日本語）の影響を受けたことにより、不自然な表現が含まれてしまう可能性が残留することは否めないと言えよう。

4.2. 英語教育への示唆

本研究で得られたこのような結論から、学習者に対してどのような教育的示唆が提供できるであろうか。学習指導要領では、英文法の指導に対して、「語順や修飾関係などにおける日本語との違いに留意して指導すること」や「英語の特質を理解させるために、関連のある文法事項はまとまりをもって整理するなど、効果的な指導ができるよう工夫すること」などの指摘がなされている。本研究の結果から、JLEが影響を受けることが明らかとなった、到着点までの「経路」や状態変化に至るまでの「推移」が明示的に示されているかどうかという点や、動詞がそのような概念を含意しているか否かという点は、日英語間の語順や修飾関係の差異に配慮することで対応できるものとは言えまい。だからと言って、本研究で取り扱った各構文を個別に指導や学習に盛り込むだけでは、関連する文法事項をまとまりのあるものとして整理したことにもなるまい。そこで、英語には見られない日本語の特性の1つである「複合動詞」を活用することと、英語の形容詞に相当する単一の統語範疇が日本語には存在しないことを意識した学習を取り入れることを提案する。

まず、「複合動詞」について見ていく。日本語には、2つの動詞からなる「V1-V2型複合動詞」が存在するが、これは英語には見られない現象である。このV1-V2複合動詞を形成する2つの動詞の内、V1に相当する動詞の中には手段・原因・様態などを表すものがある。まず、移動表現に関する例を以下に示す。

- (1) a. 彼女は部屋の中から走り出た。

She ran out of the room.

(上野・影山, 2001, p.40 [下線筆者])

b. 彼女はテーブルの上に飛び乗った。

She jumped on(to) the table. (上野・影山, 2001, p.43 [下線筆者])

c. 彼女のスカーフが椅子から滑り落ちた。

Her scarf slid from the chair. (上野・影山, 2001, p.62 [下線筆者])

これらの例から、日本語の V1-V2 型複合動詞を構成する V1 が、英語では主動詞で表現されやすいことがわかる。その点を学習者に意識させながら英作文などをさせてみることにより、英語と日本語との間で主動詞に用いる動詞のタイプに違いがあることに比較的早い時期から精通することが期待できるかもしれない。また、日本語の V2 に相当する部分が英語では動詞で表されていないことに意識を向けさせることにより、様々な前置詞句（や副詞句）がいろいろな移動の「経路」を表現しうるものであるということにも比較的早い時期から気づき自然な英語表現として受け入れられるようになるかもしれない。

また同様に、ある程度学習が進んだ段階で、V1-V2 型複合動詞を構成する V1 と V2 の表す様々な意味的な関係に着目しながら、それらに相当する英語表現を照らし合わせた学習・指導を施すことで、移動構文のみならず、英語の様々な表現をまとめて指導することが可能となる。

- | | | |
|-----------|------------------------------------|------------------|
| (2) a. 手段 | She <u>pushed</u> the window open. | (<u>押し開</u> ける) |
| b. 原因 | He <u>burned</u> to death. | (<u>焼け死</u> ぬ) |
| c. 様態 | He <u>stormed</u> into the house. | (<u>怒鳴り込</u> む) |
| d. 補文関係 | He <u>used up</u> his energy. | (<u>使い果</u> たす) |

(影山, 1999, p.197 より抜粋)

このような試みにより、学習者が、手段・原因・様態などを動詞で表現しやすいというサテライトフレーム言語としての英語の特性に精通することが期待できる。また、(1) で示した移動表現の場合と同様に、日本語の V2 に相当する部分が英語では動詞で表されてい

ないことに意識を向けさせることにより、形容詞句・前置詞句・副詞句などのサテライト表現の豊富さにも学習者が精通しやすくなることが期待できるかもしれない。これらの特性に精通することは、学習者がより自然な英語表現に習熟していく上で効果的であると考えられる。また、同様の指導で、以下のような「動詞の反他動性」に対する気付きを促せる可能性もあるかもしれない。反他動性とは、ある他動詞が、*on/off/along/through* などの小辞と共起した場合に、その動詞が単独で用いられた場合には問題なく目的語として選択できる名詞句を、目的語として選択できなくなる現象を指す (小川, 2012)。

(3) a. John washed the dirt/the shirt off.

(cf. John washed the shirt/*the dirt.)

b. 太郎は汚れを洗い落とした/*服を洗い落とした/*汚れを洗った。

(小川, 2012, p.317 [下線部は筆者])

さらには、手段・原因・様態などを動詞で表現する英語の特性に習熟していけば、その後の発展的な学習として、以下に示す *way* 構文や *time away* 構文などに習熟することも容易になるかも知れない。

(4) *way* 構文

a. Dora drank her way down the street.

b. *Dora drank scotch her way down the street. (Jackendoff, 1997, p.545)

(5) *time away* 構文

a. Fred drank the night away.

b. *Fred drank scotch the night away. (Jackendoff, 1997, p.535)

次に、英語の形容詞に相当する日本語表現を確認する。Washio (1997) は、以下の例を示し、英語の形容詞に相当する単一の統語範疇が日本語に存在しないことを指摘している。

(6) (i) 形容詞

a. Mary is pretty.

b. メアリーは かわいい。

(ii) 動詞

a. He is alive.

b. 彼は 生きている。

(iii) 形容動詞

a. The room is clean.

b. その部屋は きれいだ。

(iv) 名詞

a. This fish is raw.

b. この魚は 生だ。

(Washio, 1997, p.2 [下線は筆者])

このような日英語間の差異を利用し、英語の形容詞で表されるものが日本語ではどのような要素で表現されるのか、また、日本語のどの要素が英語の形容詞で表現されるのかを学習者に対照的に意識させながら英文和訳や英作文をさせてみるのもまた有意義であると考えられる。また、(6-i) や (6-ii) のように、英語の形容詞に相当する日本語表現が形容詞や形容動詞の場合、日本語とは異なり、英語の形容詞には活用がないことを意識させることも有効かもしれない。なぜならば、英語結果構文の結果述語を日本語に直訳した際に、二形のものとかク形のものがあることを見たが、日本語の場合、形態的には形容詞と副詞の活用が同形になる点や、二形については助詞の二と同形になるという点が、学習者が英語の形容詞の用法を正確に身に付けて行く上で妨げとなる可能性が考えられるからである。

「複合動詞」を活用した指導・学習も、英語の形容詞とそれに相当する日本語表現を対照させた指導・学習も、学習者にとっての対象言語である英語と母語である日本語とのそれぞれが持つ特性を念頭に置いた上での活動となる。このように、母語と対照的に英語を

指導・学習することが実際に効果的だということが明らかになれば、「メタ言語意識 metalinguistic awareness」(大津, 2012)を養うという意味でも、日本の英語教育において母語の果たす役割は大きいということが再確認できると言えよう。昨今、「英語の授業は英語で」、「World Englishes」、「コミュニケーション能力」、「文法抜き英語学習」など様々なキーワードが英語教育を取り巻く環境に飛び交う状況にあるが、理論言語学や SLA 研究の知見に基づきながら、母語の特性を利用した英語の指導や学習は、学習者に単により自然な英語表現を身に着けさせるためだけでなく、いわゆる「ことばへの気づき」(大津, 2012)を促し、ことばの持つおもしろさ、豊かさ、怖さを学習者に意識させるといった目的の達成にも効果を発揮するものになると言えるだろう。今後、まずは日英語それぞれの言語特性を対照させながら施す指導・学習が学習者に与える影響について、実証的な成果を追及することが現実的な課題となるだろう。

4.3. 第二言語習得研究の展望

最後に、SLA 研究として「使役移動構文」と「受動構文」という 2 つの構文を取り入れることにより、本研究における議論が、それぞれどのように発展する可能性があるかを示して本論文を締め括る。

4.3.1. 使役移動構文の習得

4.3.1.1. 位置づけ

本研究で取り扱った 2 つの構文の内、移動構文は、主語として表されたものが移動の主体である一方、結果構文は、目的語として表されたものが状態変化の主体であった。結果構文の結果述語が表す状態変化を、位置変化が意味的に拡張したメタファー表現としてみなすことにより、英語の結果構文が以下に示すような「使役移動構文」からのメタファー的拡張とみなす考え方があり (Goldberg, 1995)。なお、以下の (7a) と (8a) の訳の内、(7b) と (8b) はゴールドバーグ (2001) における河上・早瀬・谷口・堀田による訳に従い、(7c) と (8c) は筆者が加筆した。

(7) a. Joe kicked the dog into the bathroom.

b. ジョーは 浴室に 犬を 蹴り入れた。

c. *ジョーは 犬を 浴室に 蹴った。

(8) a. Frank sneezed the napkin off the table.

b. フランクは くしゃみをして ナプキンを テーブルから 吹き飛ばした。

c. *フランクは ナプキンを テーブルから／の下へ くしゃみした。

(Goldberg, 1995, pp.153-154 から抜粋)

この使役移動構文において直訳的な日本語表現が成立するかどうかは、強い結果構文—主動詞が働きかけ動詞の結果構文—の場合と同様の現象が確認できる。つまり、状態変化を必ずしも含意しない働きかけ動詞は結果述語を項構造に取ることができないように、位置変化を必ずしも含意しないような動詞は対象物を移動させた起点や到着点を表す表現を項構造に取ることができない。(7b) や (8b) に示したように、日本語の場合、対象物を移動させた起点や到着点を項構造に含めるには「入れる」や「飛ばす」のような位置変化を含意するような動詞が必要となる。実際に、位置変化を含意する動詞が用いられた英文は、その直訳表現が可能となる。

(9) a. Tamara poured water into the bowl.

b. タマラは 水を ボウルに 注いだ。 (Levin, 1993, p. 115 [b.は筆者による加筆])

これらをまとめると図 4-2、図 4-3 のように整理できる。強い結果構文も使役移動構文も日本語では成立しないような項構造の現れ方をする英語構文である。

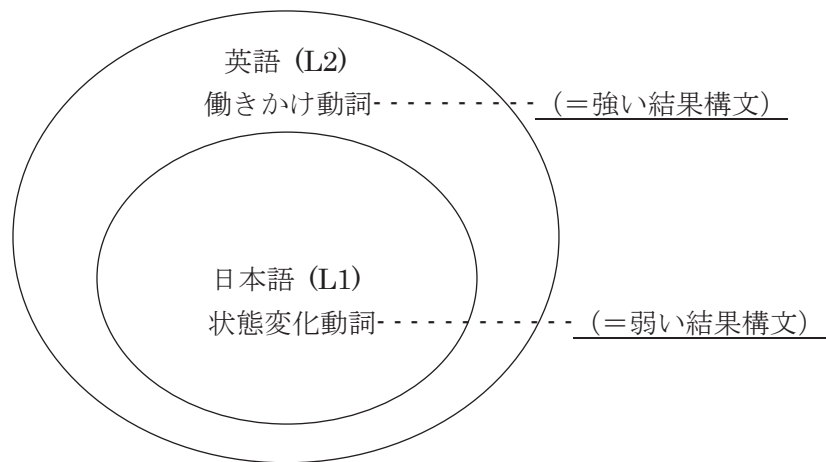


図 4-2 (=図 1-4) 結果述語を項に取ることができる
動詞の種類についての日英語間の差異 (下線部は筆者による加筆)

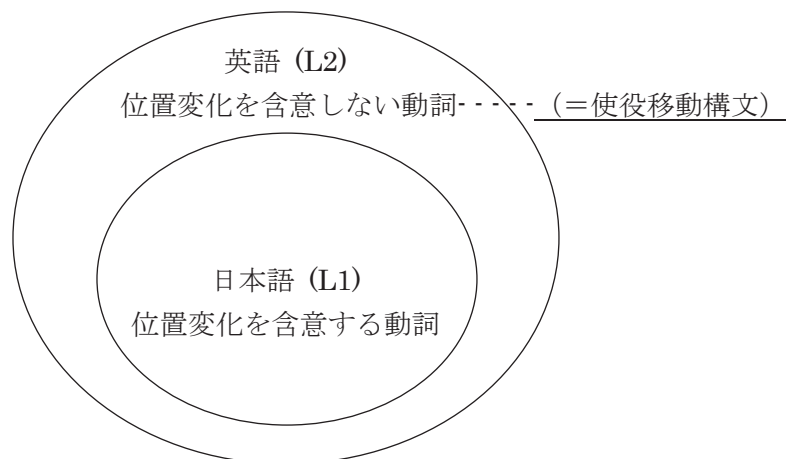


図 4-3 移動させる対象物の起点や到着点を表す語句を項に取ることができる
動詞の種類についての日英語間の差異

仮に JLE が英語を習得する際に、状態変化を位置変化からメタファー拡張した表現として受け入れているとすれば、位置変化を表す「使役移動構文」のような表現を、状態変化を表す「(強い) 結果構文」よりも先に習得する、あるいは習得しやすいことが予想される。実際に、JLE が使役移動構文を強い結果構文よりも先に習得する、あるいは習得しやすいという結果が得られれば、英語の習得において、「位置」の変化を表す表現と「状態」の変化を表す表現との間に順序や認知的負荷の違いがあることが示される可能性が期待できる。

また、(8) に示したように、使役移動構文には自動詞型のものがあり、本来その動詞が目的語として取らないような語句を目的語として取ることができる (cf. *Frank sneezed the napkin.)。これは結果構文においても同様である。

(10) a. Tom ran himself tired. (疑似=再帰形)

b. トムは クタクタに なるまで 走った。

c. *Tom ran himself.

(11) a. Tom ran his shoes ragged. (疑似≠再帰形)

b. トムは 靴が ボロボロに なるまで 走った。

c. *Tom ran his shoes.

平野 (2016) では JLE による自動詞型の英語結果構文の習得も取り扱っている。自動詞型の使役動詞構文と併せて容認性判断の検証を試みることにより、興味深い知見が提供できるかもしれない。さらに、平野 (2016) では、他動詞型の強い結果構文の中でも、主動詞が「衝撃を伴う接触動詞」が用いられた表現を NSE が自然な表現として受け入れやすいことを報告しているが、このように、動詞の様々な性質に配慮した実験計画を組むことで、より多様な知見が得られるかもしれない。以下に、その一例を示す。

4.3.1.2. アスペクト仮説に基づく検証

動詞の性質に配慮した実験計画を組む上で、Vendler (1957, 1967) によって提唱される動詞の分類を参考に、「アスペクト仮説」(Aspect Hypothesis) に基づいて、JLE による英語の各種構文の習得を検証することが新たな知見につながる可能性が考えられる。Vendler (1957, 1967) によると、動詞の表す事態は、動詞に内在するアスペクト的意味成分から、「活動」(activity)、「達成」(accomplishment)、「到達」(achievement)、「状態」(state)の4種類に分類されるという。このような動詞に内在する意味成分が、時制やアスペクトを表す形態素の習得に及ぼす影響を予測したものが「アスペクト仮説」と呼ばれる

(Shirai, 2003)。このような観点を取り入れることで、本論文の議論とは異なる角度から、各種構文の習得に及ぼす影響を検証することが可能になるかも知れない。

まず、結果構文の例として以下の英文を参照されたい。

(12) 弱い結果構文

a. Mike painted the wall black.

b. Kumi froze the juice solid.

(13) 強い結果構文

a. Mike shook his father awake.

b. Paul kicked the door open.

上記の例文は、(12a, b) が弱い結果構文として取り扱ったものであり、(13a, b) が強い結果構文として扱ったものである。この分類は、主動詞が状態変化の推移を含意するかどうかに基づくものであったが、各文の動詞に内在するアスペクト的意味成分に着目すると、(12a) は、壁（全体）が黒くなるまでマイクが **paint** という行為を続けたと考えられるのに対し、(12b) はジュースが凍るまでクミが **freeze** という行為を続けたことを意味するものではないことが分かる。同様に、(13a) は父親が目を覚ますまでの間、マイクが **shake** という行為を続けたと考えられるのに対し、(13b) はドアが開くまでポールが **kick** という行為を継続した（繰り返した）という解釈も可能だが、1回きりの行為でドアが開いた — つまり、**kick** という行為を継続したわけではない — という解釈も可能である。このような動詞の内在する意味の違いが、これらの構文の習得に影響を及ぼすかどうかを検証してみることも有意義なことと言えよう。

このような影響は、結果構文の習得だけでなく移動構文や使役移動構文の習得に対しても検証することが可能であると考えられる。それぞれの構文の例として、以下の英文を参照されたい。

(14) 移動構文 (様態+着点句型)

- a. Mike swam into the cave.
- b. Fred jumped into the pool.

(15) 使役移動構文

- a. Mike pushed a cart into the garage.
- b. Ken hit the ball out of the park.

上記の移動構文の内、(14a) は洞窟の中に入るまでマイクが swim という行為を続けているのに対し、(14b) はプールの中に入るまでフレッドが jump という行為を続けているわけではない。同様に、使役構文の内、(15a) はカートがガレージの中に入るまでマイクが push という行為を続けたと解釈できるのに対し、(15b) はボールが公園の外に出るまでケンが hit という行為を続けたわけではない。このような動詞の性質に着目することで、移動構文、使役移動構文、結果構文について、構文間だけでなく、各種構文内での習得差や習得の段階性を確認することにつながり、新たな知見を提供することが可能になるかもしれない。また、1つ1つのテスト文に対する実験参加者の容認性判断に着目することで、新たな発見が得られることも期待できよう。これらの検証も今後の課題としたい。

4.3.2. 受動構文の習得との比較

最後に、「受動構文」の習得を取り入れることによる今後の展望を示したい。本研究で取り扱った「移動構文」ならびに「結果構文」は、英語の方が日本語よりも多様な項構造の現れ方を示すものであった。これとは対照的に、日本語の方が英語よりも多様な項構造の現れ方を示す表現の1つとして「受動構文」がある。以下の例を参照されたい。

(16) 直接受動構文

- a. 先生が学生たちに批判された。
- b. The teacher was criticized by the students.

(17) 間接受動構文

- a. 先生が学生たちに論文を批判された。
- b. *The teacher was criticized his article by the students.
- c. 太郎は子供に泣かれた。
- d. *Taro was cried by his children.

日本語では、他動詞の目的語が主語となって現れる直接受身 (16a) だけでなく、間接受身と呼ばれる他動詞の目的語を残したままの受身化 (17a) や自動詞の受身化 (17c) が可能である。これに対し、英語では直接受身 (16b) のみ可能で、間接受身 (17b, d) は成立しない。これらを項構造の現れ方という観点から整理すると、図 4-4 のようにまとめられる。

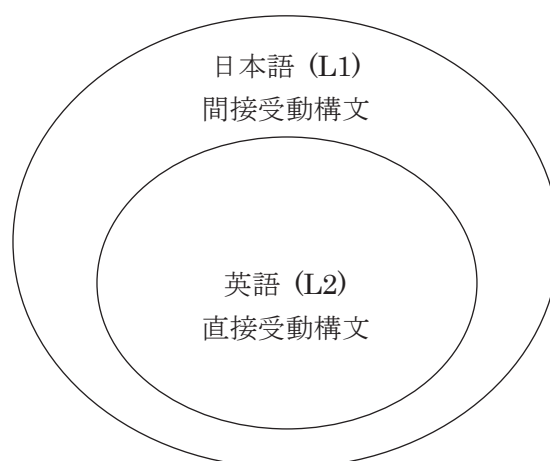


図 4-4 (=図 1-4) 日英語間で成立する受動構文の差異
(稲垣俊史, 私信, 2014 年 7 月 9 日 [一部修正])

この構文は、単に日英語間での項構造の現れ方が本研究で取り扱った構文と逆になるというだけではない。受動構文と結果構文は「事象結束」という観点から共通の理論的基盤を基に分析がなされている (小野, 2005)。事象結束とは、2 つの事象間に一定の条件が整った場合にその事象間に使役 (因果) 関係が生じるというものである。例えば、“John hammered the metal flat.” のような結果構文の場合、「ジョンが金属を叩く」という事象と「金属が平らである」という事象との間に使役 (因果) 関係が成立することにより、「ジ

ヨンが金属を叩いて平らにした。」という意味が成立するというものであり、「太郎は子供に泣かれた」のような間接受動文の場合、「子供が泣く」という事象「太郎が迷惑を被った」という事象との間に使役（因果）関係が成立するというものである。

(18) a. John hammered the metal flat.

b. EVENTSTR = E1 = e₁: (John, the metal)

E2 = e₂: (the metal)

QUALIA = FORMAL = flat_result (e₂, the metal)

AGENTIVE = hammer_act (e₁, John, the metal)

(19) a. 太郎は子供に泣かれた。

b. EVENTSTR = E1 = e₁: (kodomo)

E2 = e₂: (taro)

QUALIA = FORMAL = adversely_affected_result (e₂, taro)

AGENTIVE = cry_act (e₁, kodomo)

小野 (2005) によると、(18) のように 2 つの事象間で共有される項がある場合の方が、事象間の結束性が成立しやすく、(19) のように 2 つ事象間に共有される項がない場合には、語用論的な推論による「意味の補給」を行う必要があるために、事象間の結束に負荷がかかるという。このことは、“They drank the pub dry.” のような自動詞型の（強い）結果構文の場合も同様であるという。

(20) a. They drank the pub dry.

b. EVENTSTR = E1 = e₁: (they)

E2 = e₂: (the pub)

QUALIA = FORMAL = dry_result (e₂, the pub)

AGENTIVE = drink_act (e₁, they)

英語学習者がこのような構文を解釈する際に、2つの事象を結束させるような理解の仕方をしているのか、また、仮にそのような理解の仕方をしていて、日英語間での項構造の現れ方の異なる構文の間で習得にかかる負荷や順序に差異があることが明らかになれば、SLA 研究に新たな知見をもたらすだけでなく、学習者に対して施すべき教育的介入の在り方にも新たな示唆が提供できるかもしれない。さらには、日本語を学習している英語母語話者をも研究対象に含め、彼らが日本語の結果構文や受動構文をいかに習得していくかという点を交えて、英語学習者と日本語学習者の双方向的な検証を試みることも新たな知見を付け加えることにつながるであろう。4.2. で触れた教育的示唆の実証研究と併せて、これらを今後の課題としたい。

本論文は、日本語を母語とする英語学習者を対象に、移動事象や状態変化事象を表す英語表現に対する容認性を検証した。その結果、学習者がこれらの英語表現を習得する上で、日英語間の語順や修飾関係の差異だけでは説明のつかない要因に影響を受けること、ならびに、学習者の英語力や学習期間に関係なく、母語である日本語の性質が影響を及ぼし続ける側面があることが明らかとなった。本研究で取り扱った表現のみならず、様々な自然な英語表現を学習者がまとまりをもって身に着けていけるように学習英文法の見直しを図ることは、その内容面においても指導面においても、引き続き求められることであろう。また、その際、理論言語学や第二言語習得研究を始めとした関連するより広い分野の知見を積極的に取り入れることは、より効果的な英語教育の在り方を模索し続ける上で、これまで以上に必要不可欠な要素になってくることだろう。

参考文献

- 安藤貞雄 (2005). 『現代英文法講義』 開拓社, 東京.
- 安藤貞雄 (2007). 『英文法を探る』 開拓社, 東京.
- 安藤貞雄 (2008). 『英語の文型－文型がわかれば、英語がわかる』 開拓社, 東京.
- Boas, H. C. (2003). *A constructional approach to resultatives*, Stanford, CSLI Publications.
- 出水孝典 (2012). 「Talmy の類型論を再考する」 『六甲英語学研究』 15, 25-79.
- 藤田耕司・松本マズミ・児玉一宏・谷口一美 (編) (2012) 『最新言語理論を英語教育に活用する』 開拓社, 東京.
- Goldberg, A. E. (1995). *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*, Chicago, University of Chicago Press.
- ゴールドバーク A.E. (2001). 『構文文法論 英語構文への認知的アプローチ』 河上誓作・早瀬尚子・谷口一美・堀田優子 (訳), 研究社, 東京.
- 濱田英人 (2016). 『認知と言語－日本語の世界・英語の世界』 開拓社, 東京.
- 長谷部郁子 (2013). 「複合動詞と 2 種類のアスペクト」 影山太郎 (編) 『複合動詞研究の最先端 謎の解明に向けて』 (pp. 75-108), ひつじ書房, 東京.
- 畠山雄二 (2012). 「項と付加詞の統語的区別の重要性」 藤田耕司・松本マズミ・児玉一宏・谷口一美 (編) 『最新言語理論を英語教育に活用する』 (pp. 244-253), 開拓社, 東京.
- 平野洋平 (2016). 「日本語を母語とする英語学習者による英語結果構文の容認性判断に影響を及ぼす言語的要因」 『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 (文化教育開発関連領域)』 65, 159-168.
- 平野洋平 (2017). 「日本語を母語とする英語学習者による英語移動構文とその迂言的表現に対する容認性判断再考」 『日本教科教育学会誌』 40(2), 43-56.
- 廣森友人 (2015). 『英語学習のメカニズム－第二言語習得にもとづく効果的な勉強法』 大修館書店, 東京.

- 今尾康裕・岡田悠佑・小口一郎・早瀬尚子（編）（2017）『英語教育徹底リフレッシュ』開拓社，東京。
- Inagaki, S. (2001). Motion verbs with goal PPs in the L2 acquisition of English and Japanese, *Studies in Second Language Acquisition*, 23, 153-170.
- Inagaki, S. (2002). Japanese learners' acquisition of English manner-of-motion verbs with locational/directional PPs, *Second Language Research*, 18, 3-27.
- Inagaki, S. (2010). *Transfer and learnability in second language argument structure: Motion verbs with locational/directional PPs in L2 English and Japanese*, Saarbrücken, Vdm Verlag.
- Iwata, S. (2006). Argument resultatives and Adjunct resultatives in a lexical constructional account: The case of resultatives with adjectival result phrases, *Language Sciences*, 28, 449-496.
- 岩田彩志（2009）。「2種類の結果表現と構文理論」小野尚之（編）『結果構文研究の新視点』（pp. 171-216），ひつじ書房，東京。
- 岩田彩志（2012）．『英語のしくみと文法のからくりー語彙・構文アプローチ』開拓社，東京。
- Jackendoff, R. (1983). *Semantic and Cognition*, Cambridge, MIT Press.
- Jackendoff, R. (1990). *Semantic Structures*, Cambridge, MIT Press.
- Jackendoff, R. (1997). Twistin' the night away, *Language*, 73, 534-559.
- 加賀信広・大橋一人（編）（2017）．『授業力アップのための一步進んだ英文法』開拓社，東京。
- 影山太郎（1996）．『動詞意味論』くろしお出版，東京。
- 影山太郎（1999）．『形態論と意味』くろしお出版，東京。
- 影山太郎（編）（2001）．『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店，東京。
- 影山太郎（2007）．「英語結果述語の意味分類と統語構造」小野尚之（編）『結果構文研究の新視点』（pp. 33-65），ひつじ書房，東京。

- 影山太郎 (2009). 「語彙情報と結果述語のタイポロジー」 小野尚之 (編) 『結果構文のタイポロジー』 (pp.101-139), ひつじ書房, 東京.
- 影山太郎 (2013). 「語彙的複合動詞の新体系—その理論的・応用的意味合い—」 影山太郎 (編) 『複合動詞研究の最先端 謎の解明に向けて』 (pp. 3-46), ひつじ書房, 東京.
- 影山太郎 (編) (2013). 『複合動詞研究の最先端 謎の解明に向けて』 ひつじ書房, 東京.
- 影山太郎・由本陽子 (1997). 『語形成と概念構造』 研究社, 東京.
- 岸本秀樹 (2013). 「統語的複合動詞の格と統語特性」 影山太郎 (編) 『複合動詞研究の最先端 謎の解明に向けて』 (pp. 143-183), ひつじ書房, 東京.
- Lakoff, G., & Johnson, M. (1980). *Metaphors we live by*. Chicago, University of Chicago Press.
- Levin, B. (1993). *English verb classes and alternations: A preliminary investigation*, Chicago, University of Chicago Press.
- Levin, B., & Rappaport H. M. (1995). *Unaccusativity: At the syntax—lexical semantics interface*, Cambridge, MIT Press.
- 三宅知宏 (2007). 『日本語と他言語—<ことば>のしくみを探る』 神奈川新聞社, 横浜.
- 宮腰幸一 (2009). 「日英語の周边的結果構文—類型論的含意」 小野尚之 (編) 『結果構文のタイポロジー』 (pp. 217-265), ひつじ書房, 東京.
- 村野井仁 (2006). 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』 大修館書店, 東京.
- 文部科学省 (2008). 『中学校学習指導要領解説—外国語編』 開隆堂出版, 東京.
- 文部科学省 (2010). 『高等学校学習指導要領解説—外国語編・英語編』 開隆堂出版, 東京.
- 中島平三 (2017). 『斜めからの学校英文法』 開拓社, 東京.
- 中村捷 (2012). 「句構造の重要性」 藤田耕司・松本マサミ・児玉一宏・谷口一美 (編) 『最新言語理論を英語教育に活用する』 (pp. 2-11), 開拓社, 東京.
- 大庭幸男 (2011). 『英語構文を探求する』 開拓社, 東京.
- 小川芳樹 (2012). 「結果構文と動詞小辞構文の統語的分析と英語教育への応用」 藤田耕

- 司・松本マスマ・児玉一宏・谷口一美（編）『最新言語理論を英語教育に活用する』（pp.311-322），開拓社，東京．
- 大橋一人・草山学（2017）．「文型と文の基本構造」 加賀信広・大橋一人（編）『授業力アップのための一步進んだ英文法』（pp. 38-61），開拓社，東京．
- 岡田伸夫・南出康世・梅咲敦子（編）（2012）．『英語研究と英語教育——ことばの研究を教育に活かす（英語教育学大系第8巻）』大修館書店，東京．
- 小野尚之（2004）．「移動と変化の言語表現：認知類型論の視点から」 佐藤滋・堀江薫・中村渉（編）『対照言語学の新展開』（pp. 3-26），ひつじ書房，東京．
- 小野尚之（2005）．『生成語彙意味論』くろしお出版，東京．
- 小野尚之（編）（2007）．『結果構文研究の新視点』ひつじ書房，東京．
- 小野尚之（2009）．「結果構文のタイポロジー序説」 小野尚之（編）『結果構文のタイポロジー』（pp. 1-42），ひつじ書房，東京．
- 小野尚之（編）（2009）．『結果構文のタイポロジー』ひつじ書房，東京．
- 小野尚之（2012）．「サテライト・フレーム言語と動詞フレーム言語」 藤田耕司・松本マスマ・児玉一宏・谷口一美（編）『最新言語理論を英語教育に活用する』（pp. 323-335），開拓社，東京．
- 大津由紀雄（編）（2009）．『危機に立つ日本の英語教育』慶応義塾大学出版会，東京．
- 大津由紀雄（編）（2012）．『学習英文法を見直したい』研究社，東京．
- Pustejovsky, J. (1991). *The generative lexicon*, Cambridge, MIT Press.
- Ramchand, G. (2008). *Verb meaning and the lexicon: A first phrase syntax*, Cambridge, Cambridge University Press.
- 斉木美知世・鷲尾龍一（2009）．「言語の類型と結果表現の類型—いくつかの残された問題」 小野尚之（編）『結果構文のタイポロジー』（pp. 43-100），ひつじ書房，東京．
- 佐藤芳明・田中茂範（2009）．『レキシカル・グラマーへの招待—新しい教育英文法の可能性—』開拓社，東京．
- 白畑智彦（2015）．『英語指導における効果的な誤り訂正—第二言語習得研究の見地から』

- 大修館書店, 東京.
- Shirai, Y. (2003). The aspect hypothesis in SLA and the acquisition of Japanese, *Acquisition of Japanese as a Second Language*, 5, 42-61.
- Snyder, W. (1995). A neo-Davidsonian approach to resultatives, particles, and datives, *North Eastern Linguistic Society*, 25, 457-471.
- Snyder, W. (2001). On the nature of syntactic variation: evidence from complex predicates and complex word-formation, *Language*, 77, 324-342.
- Son, M. (2007). Directionality and resultativity: the cross-linguistic Correlation revisited, In M. Bašić, M. Pantcheva, M. Son, & P. Svenonius (Eds.), *Tromsø Working Papers on Language and Linguistics: Nordlyd 34.2, special issue on Space, Motion, and Result*, 126-164.
- Son, M., & Svenonius, P. (2008). Microparameter of cross-linguistic variation: Directed motion and Resultatives, In N. Abner & J. Bishop (Eds.), *Proceedings of the 27th West Coast Conference on Formal Linguistics*, 388-396.
- Spring, R. (2010). A look into the acquisition of English motion event conflation by native speakers of Chinese and Japanese. In R. Ogawa, K. Ishikawa, H. Umemoto, K. Yoshimoto, & Y. Harada (Eds.), *Proceedings of the 24th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation*, 563-572.
- スプリングライアン (2015). 「事象フレームの言語類型と第二言語習得—移動と状態変化の表現を巡って—」 由本陽子・小野尚之 (編) 『語彙意味論の新たな可能性を探って』 (pp.408-431), 開拓社, 東京.
- スプリングライアン・堀江薫 (2011). 「英語のフレーム化習得に関する認知言語学的研究: 中国語・日本語母語話者を対象に」 野瀬昌彦 (編) 『日本語と X 語の対象—言語を対照することでわかること—対照言語学若手の会シンポジウム 2010 発表論文集』 (pp.95-104), 三恵社, 名古屋.
- Spring, R., & Horie, K. (2013). How cognitive typology affects second language

- acquisition: A study of Japanese and Chinese learners of English, *Cognitive Linguistics*, 24, 689-710.
- Suzuki, T. (2012). Strong resultatives as a bounded PathPP construction: PathPP structure and parameterized path head movement, *Coyote Working Papers*, 20, 109-117.
- 鈴木渉 (編) (2017). 『実践例で学ぶ—第二言語習得研究に基づく英語指導』 大修館書店, 東京.
- 高見健一 (2011). 『受身と使役—その意味規則を探る』 開拓社, 東京.
- Talmy, L. (2000). *Toward a cognitive semantics*, Cambridge, MIT Press.
- 田中茂範・松本曜 (1997). 『空間と移動の表現』 研究社, 東京.
- Tsujimura, N. (1994). Unaccusative mismatches and resultatives in Japanese. In M. Koizumi & H. Ura (Eds.), *MIT Working Papers in Linguistics 24: Formal Approaches to Japanese Linguistics 1*, 335-354.
- 上野誠司・影山太郎 (2001). 「移動の経路の表現」 影山太郎 (編) 『日英対照 動詞の意味と構文』 (pp. 40-68), 大修館書店, 東京.
- 上山恭男 (2016). 『機能・視点から考える英語のからくり』 開拓社, 東京.
- 牛江一裕 (2002). 「文を作る仕組み: 統語論 I」 大津由紀雄 (編) 『言語研究入門 生成文法を学ぶ人のために』 (pp.102-117), 研究社, 東京.
- Vendler, Z. (1957). Verbs and times, *The Philosophical Review*, 66, 143-160.
- Vendler, Z. (1967). *Linguistics in philosophy*, Ithaca, Cornell University Press.
- Washio, R. (1997). Resultatives, compositionality and language variation, *Journal of East Asian Linguistics*, 6, 1-49.
- White, L. (2003). *Second language acquisition and Universal Grammar*, Cambridge, Cambridge University Press.
- 柳瀬陽介 (2012). 「コミュニケーション能力と学習英文法」 大津由紀雄 (編) 『学習英文法を見直したい』 (pp. 52-65), 研究社, 東京.

- 安井稔 (2012). 「学習英文法への期待」 大津由紀雄 (編) 『学習英文法を見直したい』 (pp. 268-277), 研究社, 東京.
- 由本陽子 (2013). 「語彙的複合動詞の生産性と 2 つの動詞の意味関係」 影山太郎 (編) 『複合動詞研究の最先端 謎の解明に向けて』 (pp. 109-142), ひつじ書房, 東京.
- Yoneyama, M. (1986). Motion verbs in conceptual semantics, *Bulletin of the Faculty Humanities*, 22, 1-15.
- 米山三明 (2009). 『意味論から見る英語の構造—移動と状態変化の表現を巡って—』 開拓社, 東京.
- Yotsuya, A., Asano, M., Koyama, S., Suzuki, K., Shibuya, M., Iwagami, E., ... Hirakawa, M. (2014). Crosslinguistic effects in L2 acquisition: Strong/weak resultatives and the directional/locational interpretation of PPs in L2 English by Japanese speakers. In R.T. Miller, K. I. Martin, C. M. Eddington, A. Henery, N. M. Miguel, A. M. Tseng, A. Tuninetti, & D. Walter (Eds.), *Selected Proceedings of the 2012 Second Language Research Forum*, 89-100.

Appendix-1

タスクの説明＋練習課題 (JLE 用)

タスクの説明

このタスクでは、ある一連の出来事を表す 2 枚 1 組のイラストが示されます。イラストは左右に並んでいます。まず、イラストを見て、左のイラストから右のイラストへと続く一連の出来事として状況を把握して下さい。イラスト中には点線の矢印があります。この矢印はイラスト中に登場する人物や物体の「移動経路」や「状態変化」を表します。左のイラストに点線の円で囲まれた人物または物体がある場合、それが移動する前や状態が変化する前の人物または物体であることを示します。点線の円がない場合は、左のイラスト中の人物または物体が移動する前や状態が変化する前の対象です。

各組のイラストの下には 1 つの英文が示されます。イラストの示す一連の出来事を表す英文として、その英文がどの程度自然な表現であると感じるかを、5 つの数字(0)~(+4)を○で囲んで答えてください。各数字の表す意味は以下の通りです。

| (0) | (+1) | (+2) | (+3) | (+4) |
|--------|------|-------|-------|-------|
| 完全に不自然 | 少し自然 | わりと自然 | かなり自然 | 完全に自然 |

示される英文の中に知らない単語が含まれていて判断ができない場合には(X)を○で囲んで下さい。また、知らない単語は含まれていないが、どうしても判断に困った場合やイラストの表す状況が把握できなかった場合などには(Y)を○で囲んで下さい。

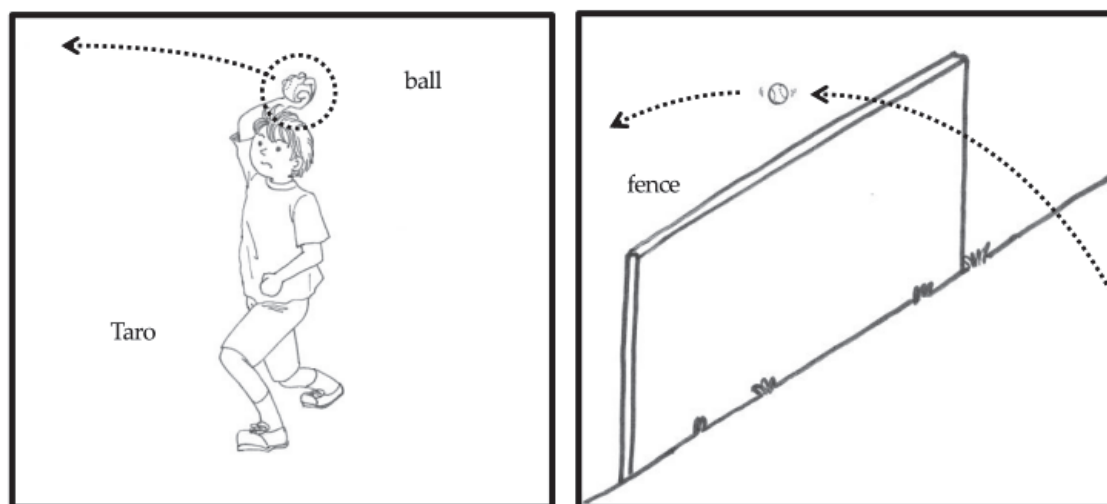
| (X) | (Y) |
|-------------------|------------------|
| 知らない単語があるため判断できない | 知らない単語はないが判断できない |

この課題は正解を問う問題ではありませんので、皆さんが感じたありのままの答えを率直に選んで下さい。同じイラスト、また、同じ英文が繰り返し登場する場合がありますが、皆さんの直観による判断に興味がありますので、後戻りしたり、前に済ませた回答を変更したりすることなく、全ての課題に回答して下さい。

また、途中で簡単な計算問題が出題されますので、その計算問題に答えてから次に進んで下さい。計算できない場合、答えが分からない場合には、(Z)を○で囲んでから次に進んで下さい。

それでは、2 つの課題と 1 つの計算問題を練習として一緒にやってみましょう。

練習課題①



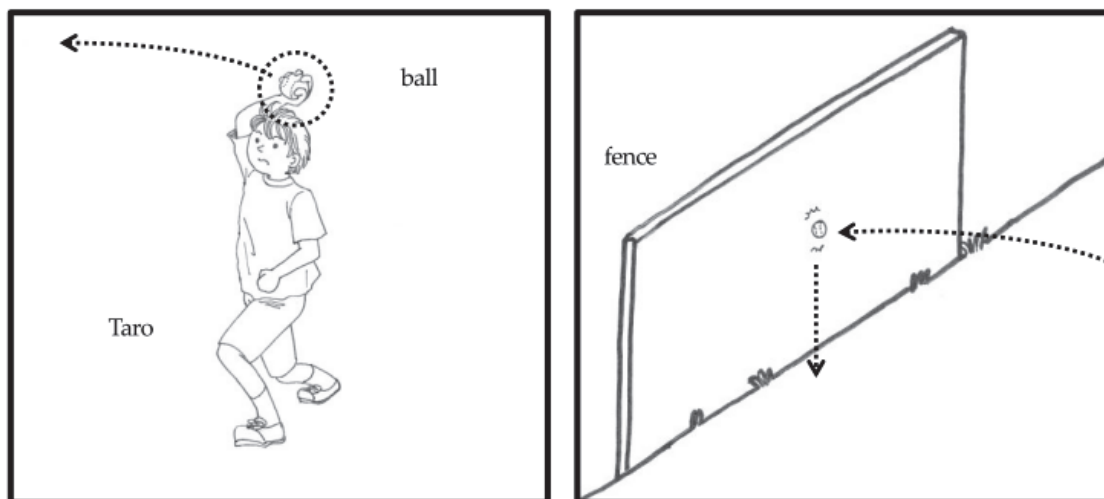
Taro threw a ball over the fence.



| | | | | |
|--------|------|-------|-------|-------|
| (0) | (+1) | (+2) | (+3) | (+4) |
| 完全に不自然 | 少し自然 | わりと自然 | かなり自然 | 完全に自然 |

| | |
|-------------------|------------------|
| (X) | (Y) |
| 知らない単語があるため判断できない | 知らない単語はないが判断できない |

練習課題②



Taro threw a ball through the fence.



| | | | | |
|--------|------|-------|-------|-------|
| (0) | (+1) | (+2) | (+3) | (+4) |
| 完全に不自然 | 少し自然 | わりと自然 | かなり自然 | 完全に自然 |

| | |
|-------------------|------------------|
| (X) | (Y) |
| 知らない単語があるため判断できない | 知らない単語はないが判断できない |

練習課題③

$$46 - 18 = 4x$$

$$x = \underline{\hspace{2cm}}$$

(Z) 答えが分からない。

計算用紙

(NSE 用)

Activity

In this activity, you will see a set of pictures. Each set will show a movement or a change that happens in the situation. You will also see one English sentence below each pair of pictures.

Judge to what degree each sentence sounds natural as a description of the series of situations expressed by the set of pictures.

Circle only one of the five numbers or one of the letters following each sentence. Each number and letter means the following.

| | | | | |
|----------------------|------------------|------------------|----------------|--------------------|
| (0) | (+1) | (+2) | (+3) | (+4) |
| completely unnatural | slightly natural | somewhat natural | fairly natural | completely natural |

| | |
|--|----------|
| (X) | (Y) |
| can't understand what the situation is | not sure |

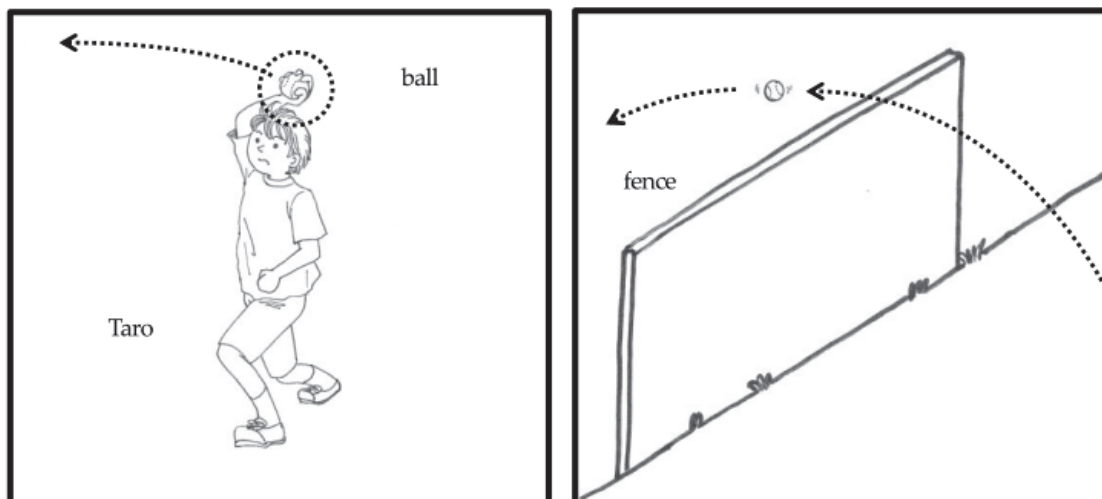
There will be one dotted arrow, and also possibly one dotted circle in each set of pictures. The arrow indicates the movement or the change of state of the object. The circled object in the left picture indicates the object which will be changed.

There are no right or wrong answers. I would like you to report how you feel about the sentences. You will see the same set of pictures or the same sentences repeatedly, but **don't go back or change your answers** because I am interested in your first impression.

Also, you will see several calculation questions. Move onto the next task after answering each of the questions. If you don't know the answer, circle (Z) to indicate you are not sure and move onto the next task.

There are two example tasks and one example calculation question on the following pages. Let's try them for practice.

Example 1

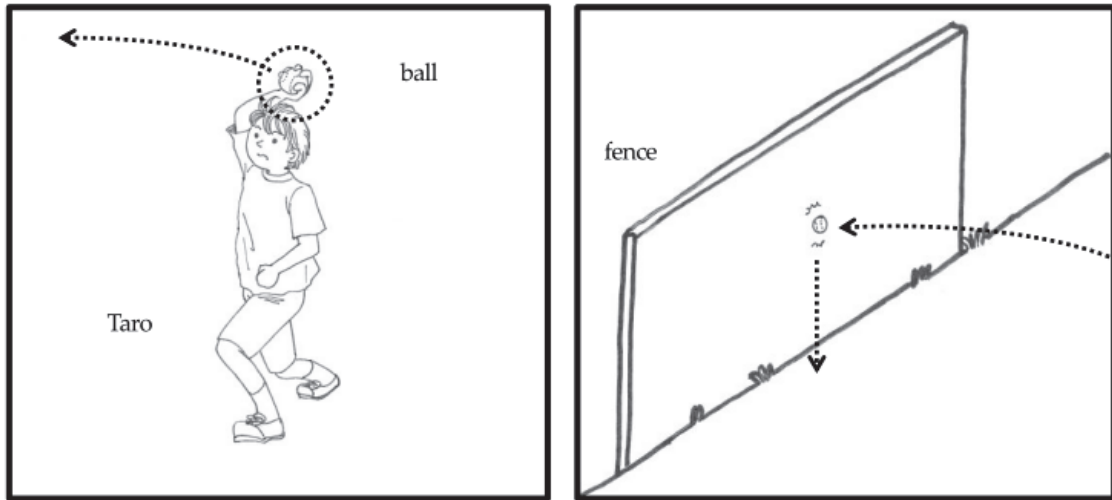


Taro threw a ball over the fence.

| ←-----→ | | | | |
|----------------------|------------------|------------------|----------------|--------------------|
| (0) | (+1) | (+2) | (+3) | (+4) |
| completely unnatural | slightly natural | somewhat natural | fairly natural | completely natural |

| | |
|--|----------|
| (X) | (Y) |
| can't understand what the situation is | not sure |

Example 2



Taro threw a ball through the fence.

←-----→

| | | | | |
|----------------------|------------------|------------------|----------------|--------------------|
| (0) | (+1) | (+2) | (+3) | (+4) |
| completely unnatural | slightly natural | somewhat natural | fairly natural | completely natural |

| | |
|--|----------|
| (X) | (Y) |
| can't understand what the situation is | not sure |

Example 3

$$46 - 18 = 4x$$

$$x = \underline{\hspace{2cm}}$$

(Z) don't know the answer

Space for calculation

Appendix-2

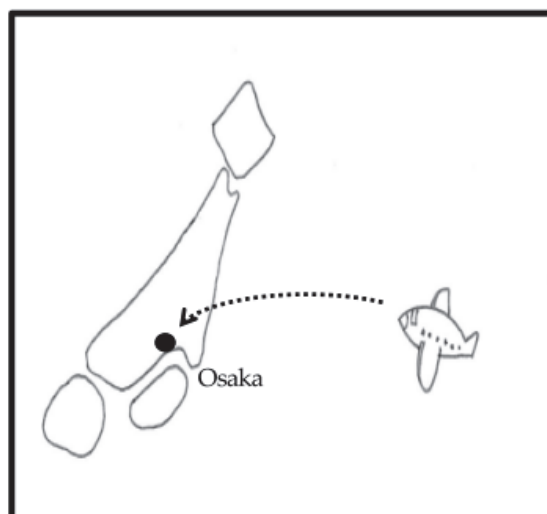
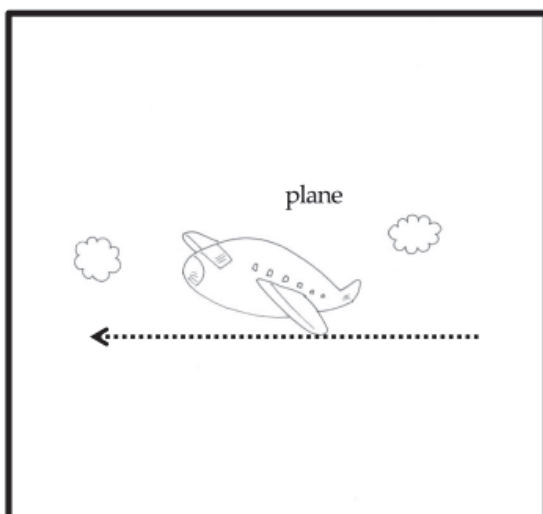
移動表現のタスクに使用したテスト文とイラスト

| テスト文のタイプ | 移動様態動詞 | テスト文 |
|-------------------------------|--------|-----------------------------------|
| A. 様態＋着点句型 (10文) | fly | 1. The plane flew to Osaka. |
| | | 2. The plane flew into the cloud. |
| | jump | 3. John jumped onto the bed. |
| | | 4. Fred jumped into the pool. |
| | run | 5. Tom ran to the park. |
| | | 6. Ken ran onto the field. |
| | swim | 7. Mike swam into the cave. |
| | | 8. Ken swam to the beach. |
| | walk | 9. John walked onto the stage. |
| | | 10. Steve walked to school. |
| B. 様態＋場所句型 「着点読み」 (11文) | fly | 11. The bird flew above the tree. |
| | | 12. The bird flew by the house. |
| | jump | 13. John jumped on the bed. |
| | | 14. Fred jumped in the pool. |
| | run | 15. Tom ran in the park. |
| | | 16. Ken ran on the field. |
| | swim | 17. Mike swam inside the cave. |
| | | 18. Paul swam near the boat. |
| | | 19. Ken swam under the bridge. |
| | walk | 20. Jim walked behind the house. |
| | | 21. John walked on the stage. |
| C. 様態＋場所句型 「場所読み」 (11文) | fly | 22. The bird flew above the tree. |
| | | 23. The bird flew by the house. |
| | jump | 24. John jumped on the bed. |
| | | 25. Fred jumped in the pool. |
| | run | 26. Tom ran in the park. |
| | | 27. Ken ran on the field. |
| | swim | 28. Mike swam inside the cave. |
| | | 29. Paul swam near the boat. |
| | | 30. Ken swam under the bridge. |
| | walk | 31. Jim walked behind the house. |
| | | 32. John walked on the stage. |

| テスト文のタイプ | 移動様態動詞 | テスト文 |
|---------------------------------|--------|--|
| D. 迂言的表現 and 型 (10 文) | fly | 33. The plane flew and came to Osaka. |
| | | 34. The plane flew and went into the cloud. |
| | jump | 35. John jumped and went onto the bed. |
| | | 36. Fred jumped and came into the pool. |
| | run | 37. Tom ran and went to the park. |
| | | 38. Ken ran and came onto the field. |
| | swim | 39. Mike swam and went into the cave. |
| | | 40. Ken swam and came to the beach. |
| | walk | 41. John walked and went onto the stage. |
| | | 42. Steve walked and came to school. |
| E. 迂言的表現 by -ing 型 (10 文) | fly | 43. The plane came to Osaka by flying. |
| | | 44. The plane went into the cloud by flying. |
| | jump | 45. John went onto the bed by jumping. |
| | | 46. Fred came into the pool by jumping. |
| | run | 47. Tom went to the park by running. |
| | | 48. Ken came onto the field by running. |
| | swim | 49. Mike went into the cave by swimming. |
| | | 50. Ken came to the beach by swimming. |
| | walk | 51. John went onto the stage by walking. |
| | | 52. Steve came to school by walking. |

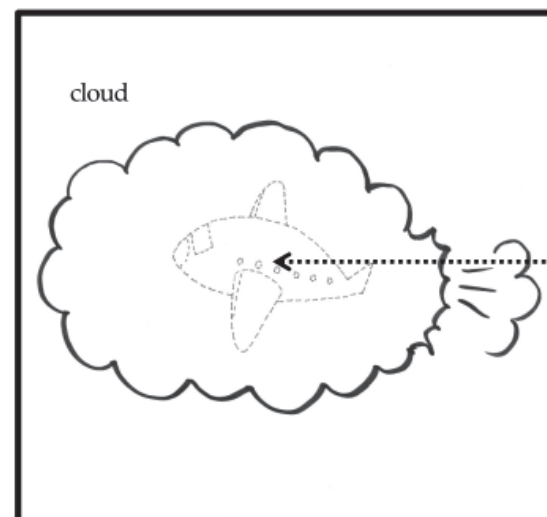
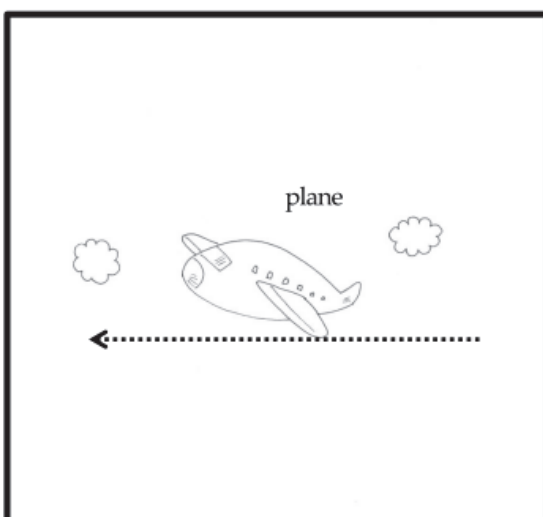
A. 様態+着点句型

1.



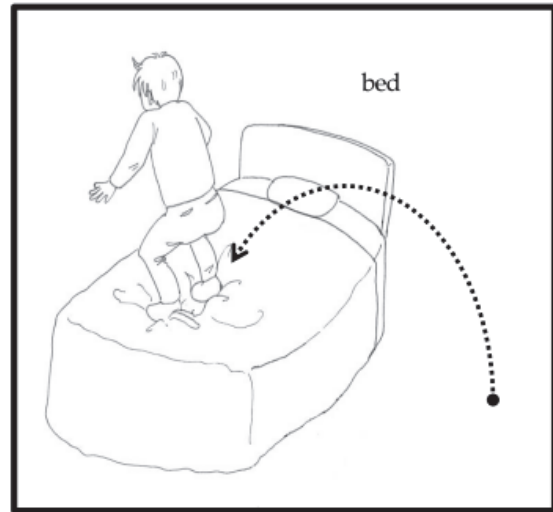
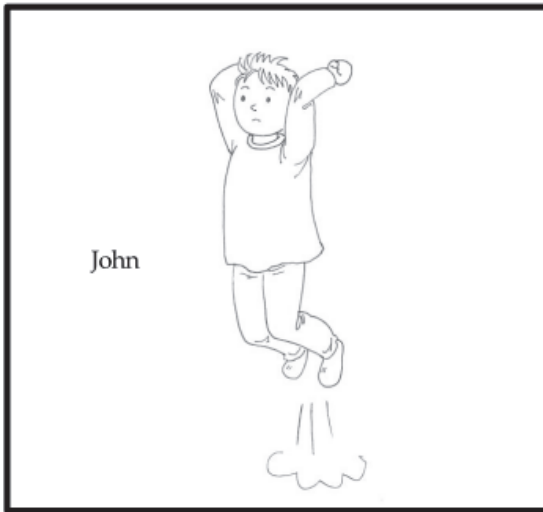
The plane flew to Osaka.

2.



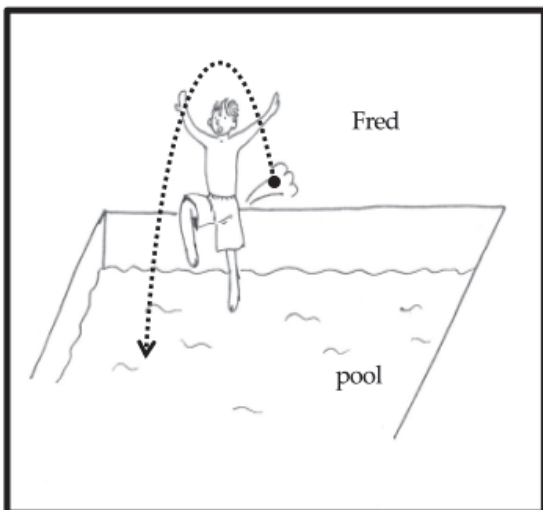
The plane flew into the cloud.

3.



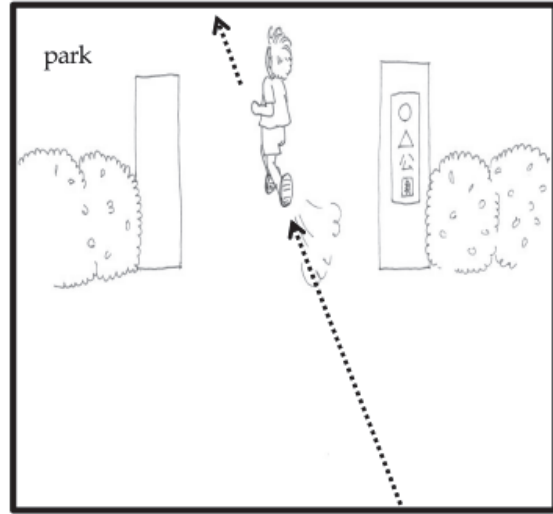
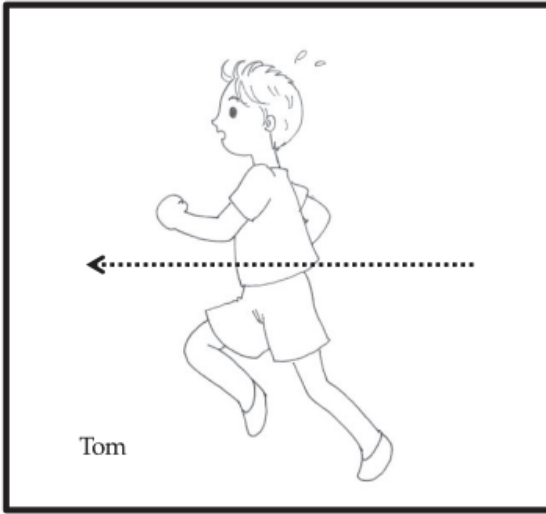
John jumped onto the bed.

4.



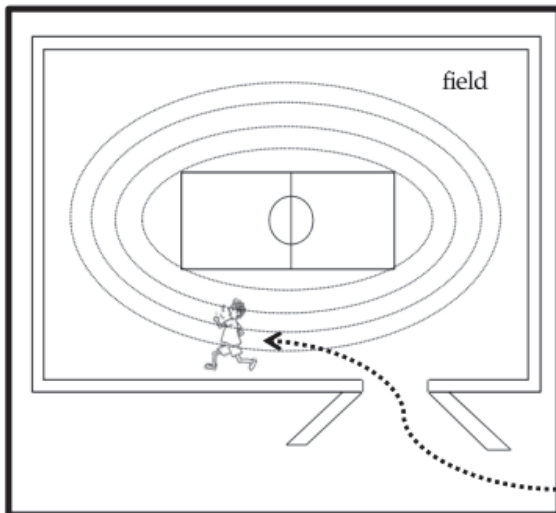
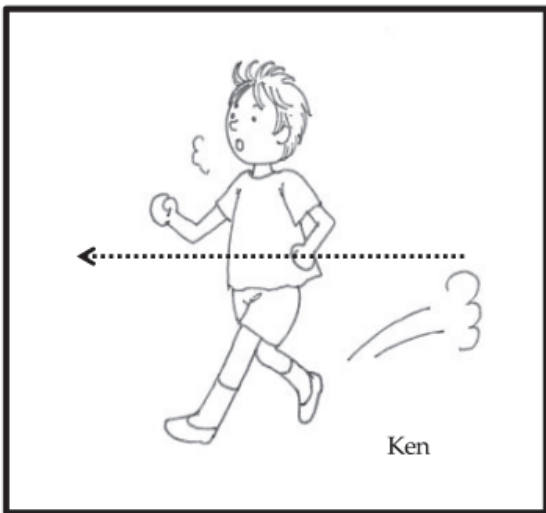
Fred jumped into the pool.

5.



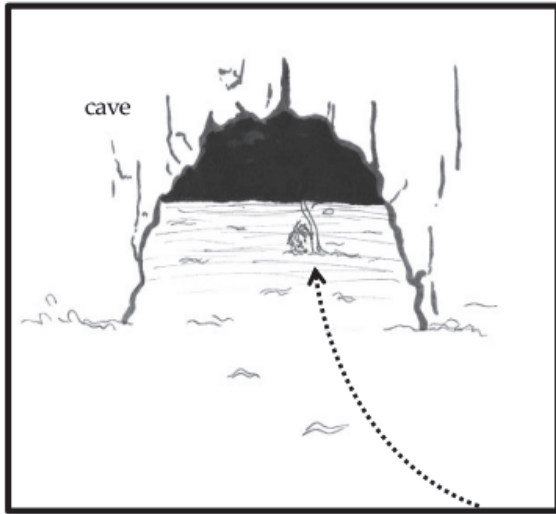
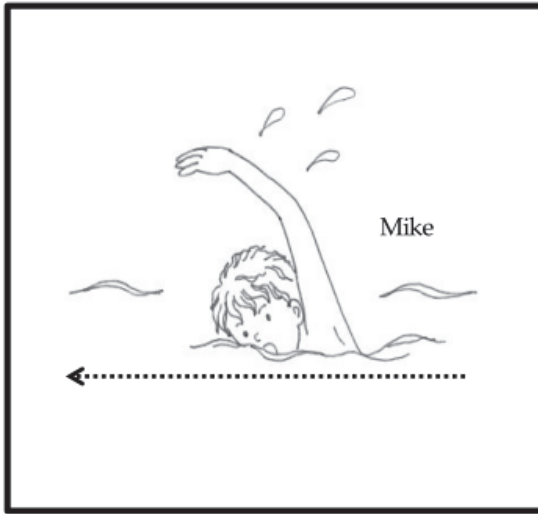
Tom ran to the park.

6.



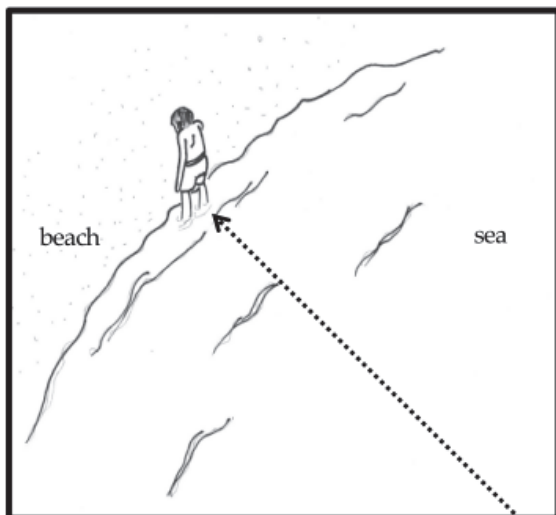
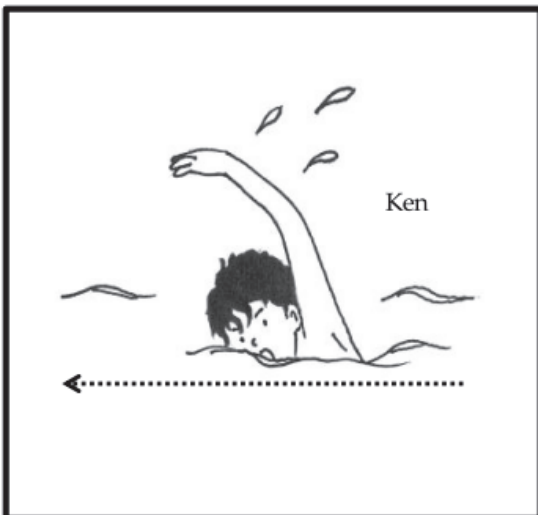
Ken ran onto the field.

7.



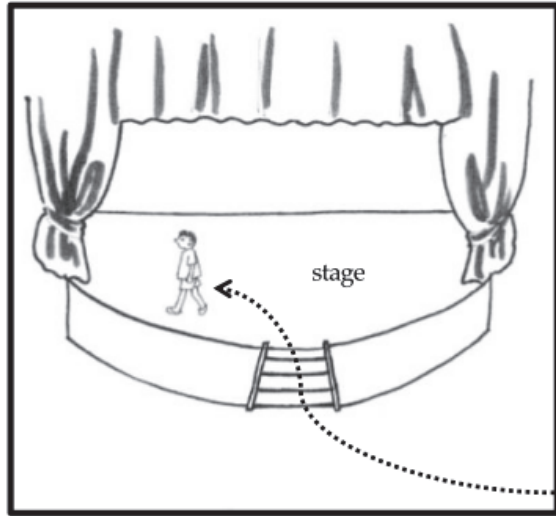
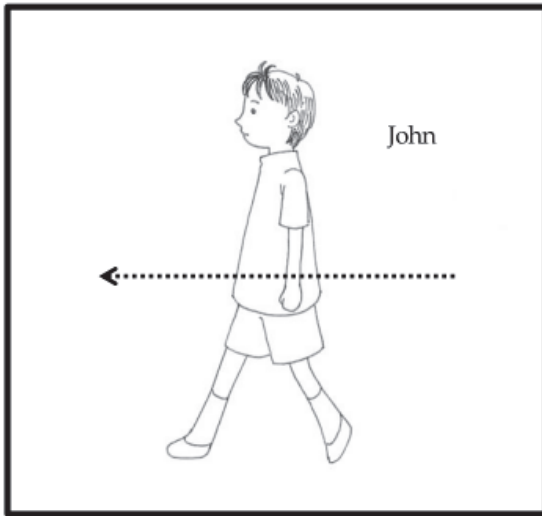
Mike swam into the cave.

8.



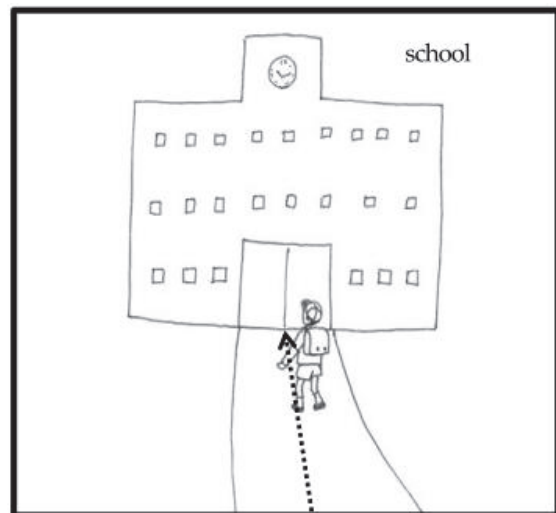
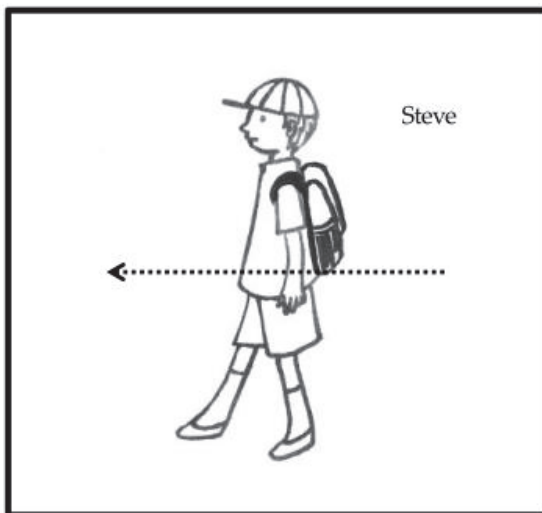
Ken swam to the beach.

9.



John walked onto the stage.

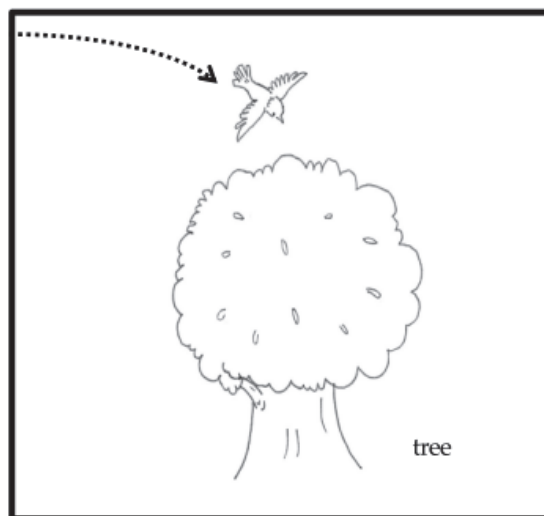
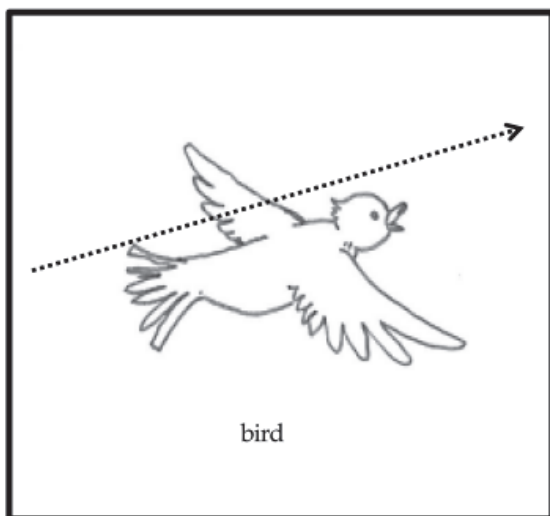
10.



Steve walked to school.

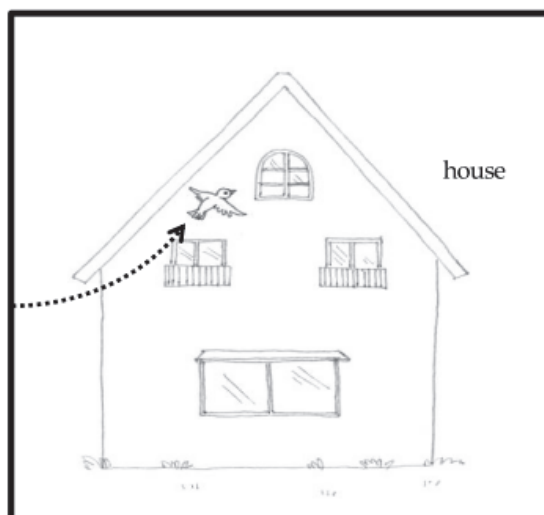
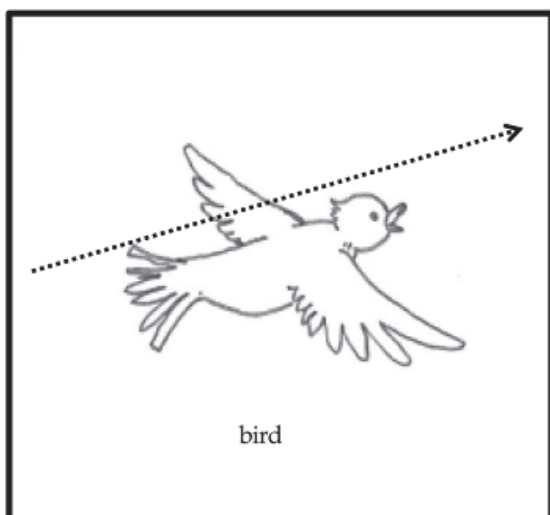
B. 様態+場所句型「着点読み」

11.



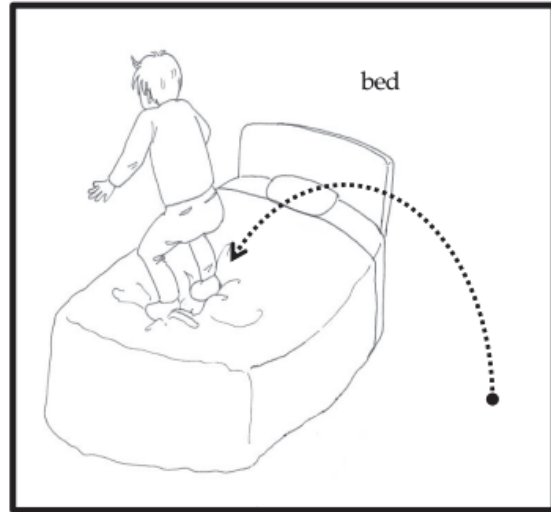
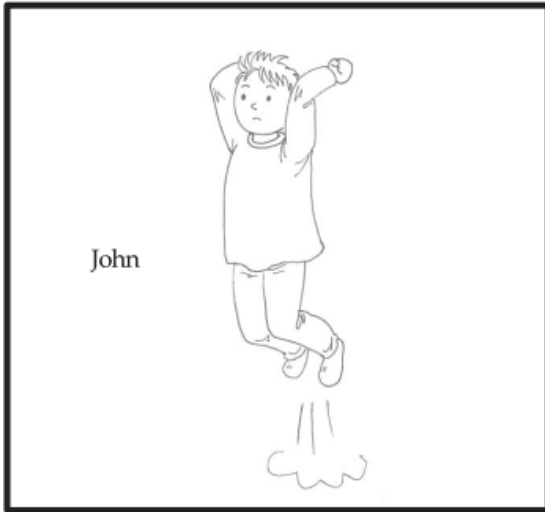
The bird flew above the tree.

12.



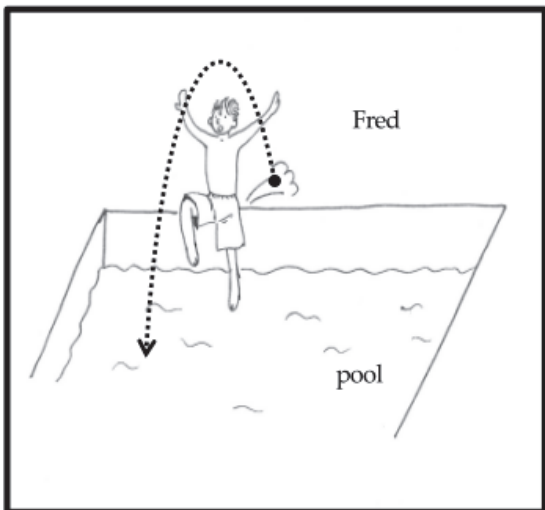
The bird flew by the house.

13.



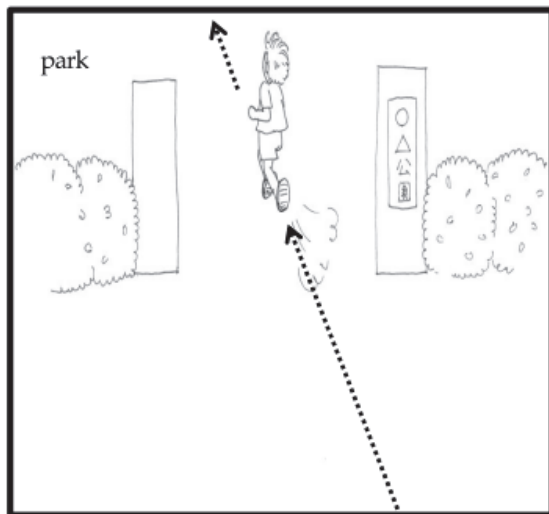
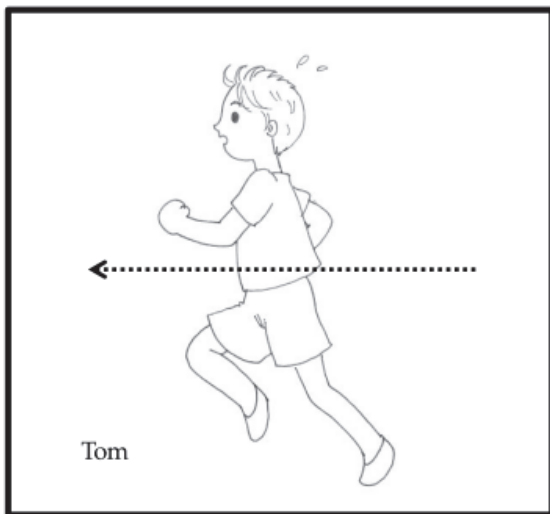
John jumped on the bed.

14.



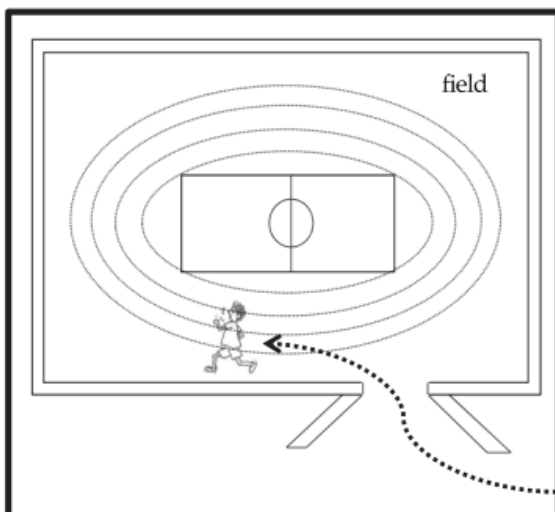
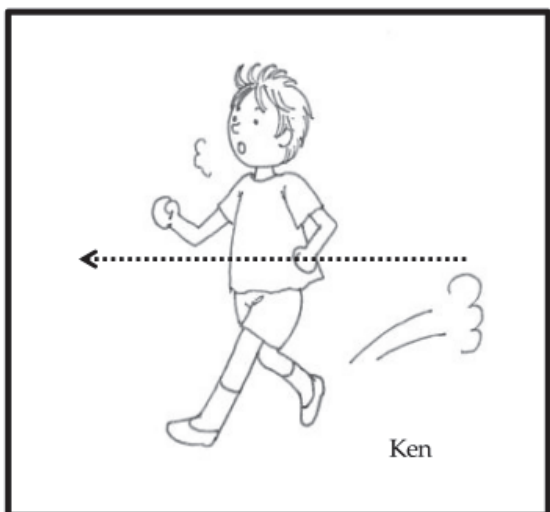
Fred jumped in the pool.

15.



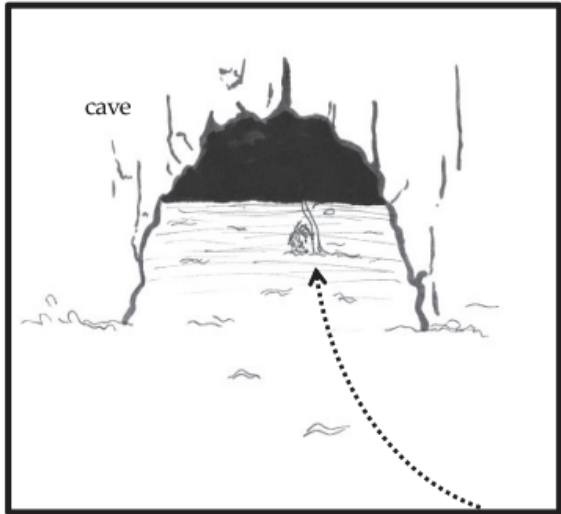
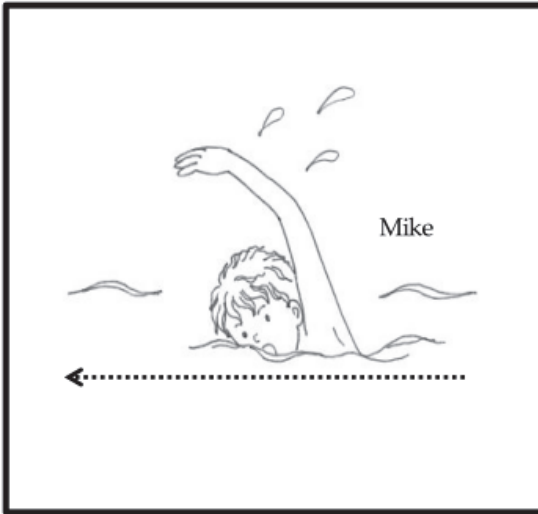
Tom ran in the park.

16.



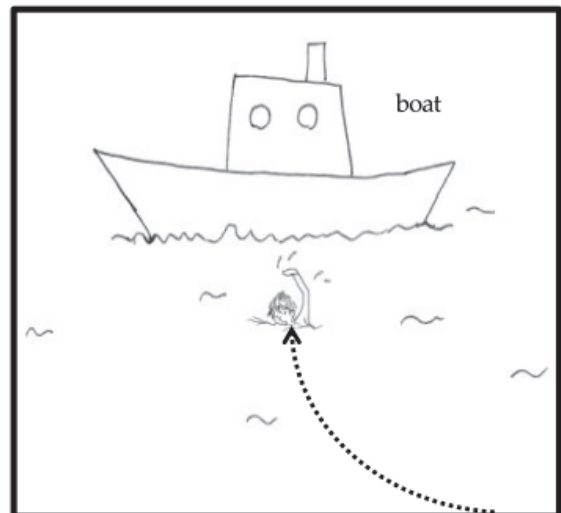
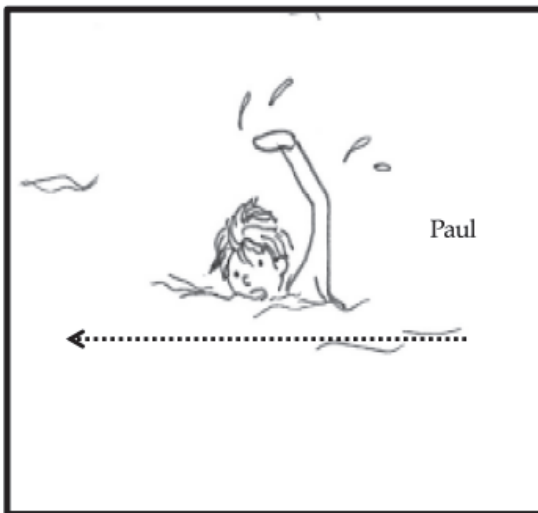
Ken ran on the field.

17.



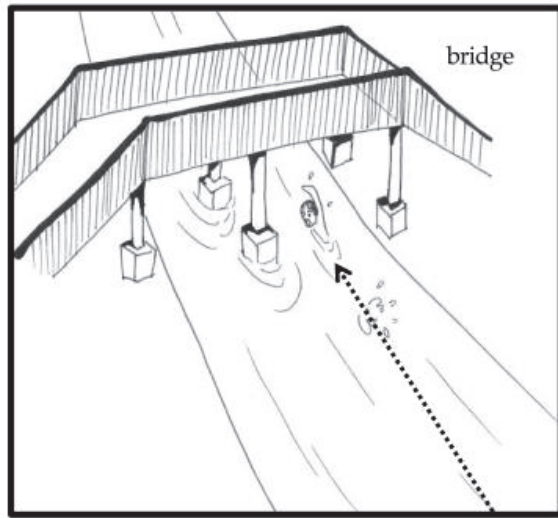
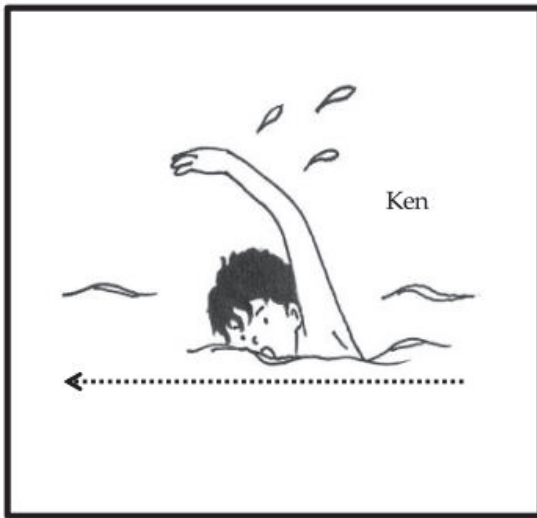
Mike swam inside the cave.

18.



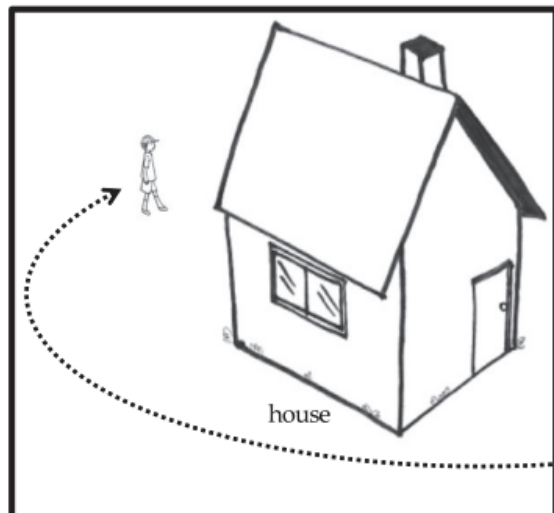
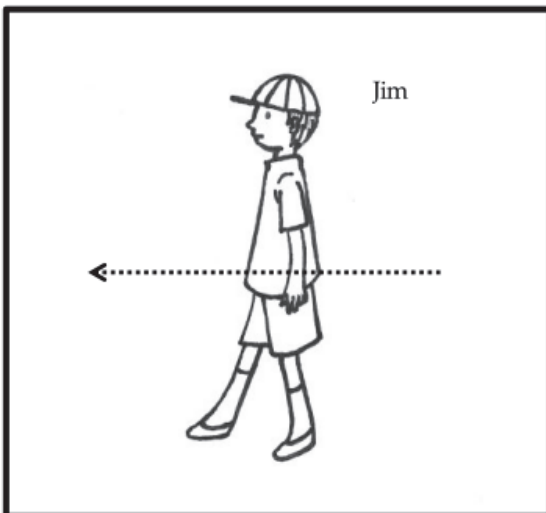
Paul swam near the boat.

19.



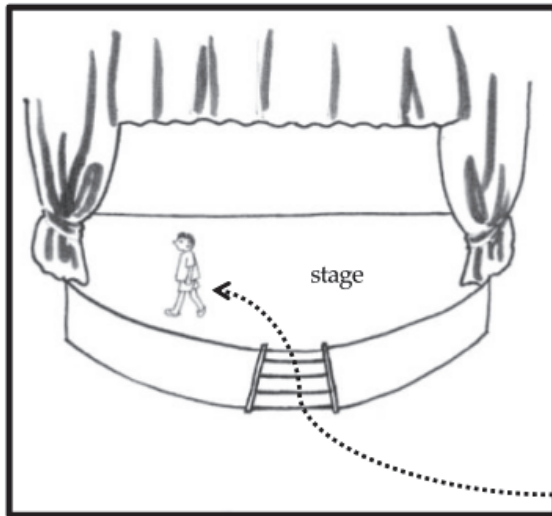
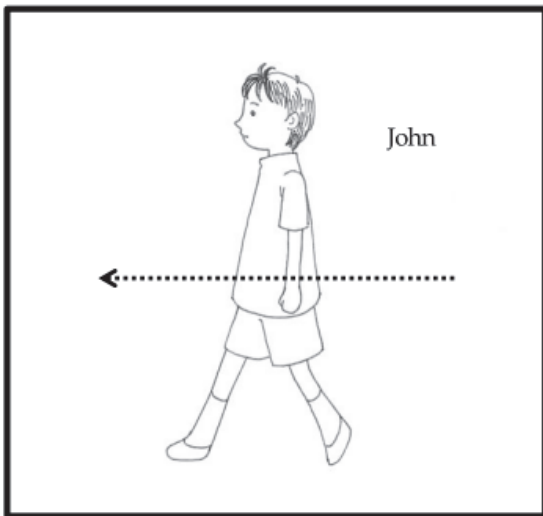
Ken swam under the bridge.

20.



Jim walked behind the house.

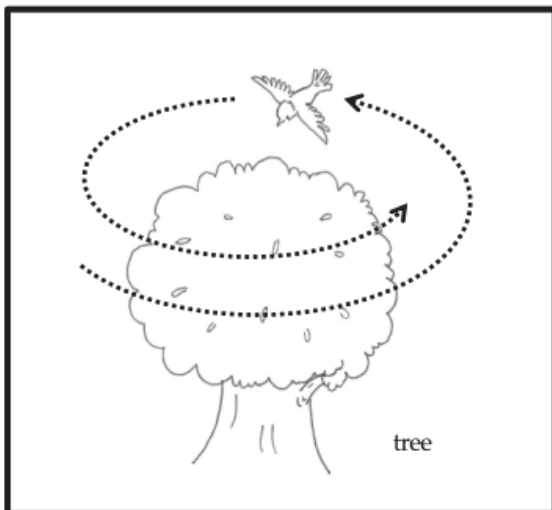
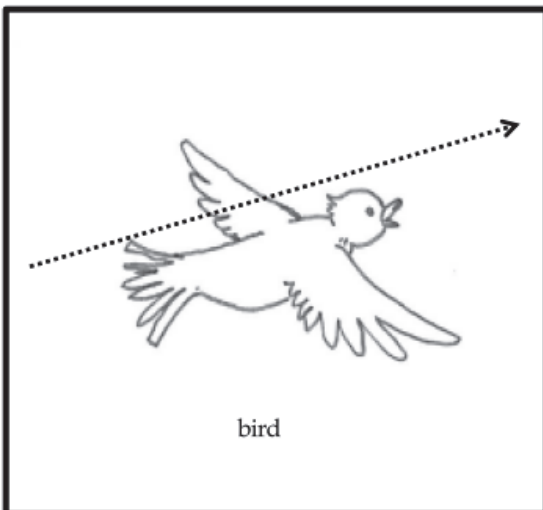
21.



John walked on the stage.

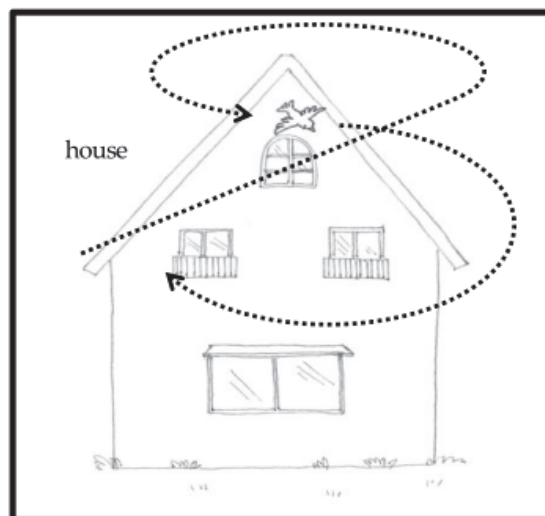
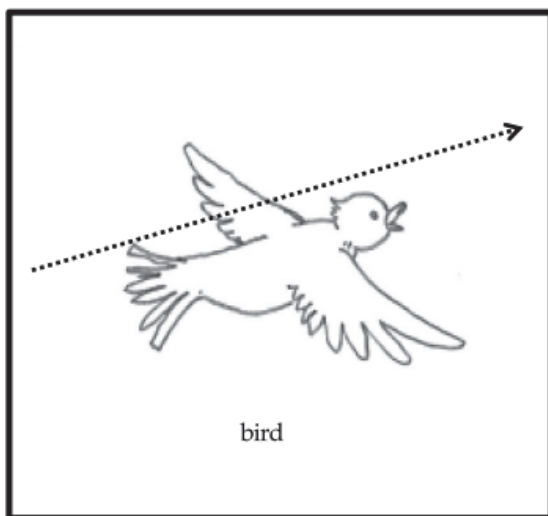
C. 様態+場所句型「場所読み」

22.



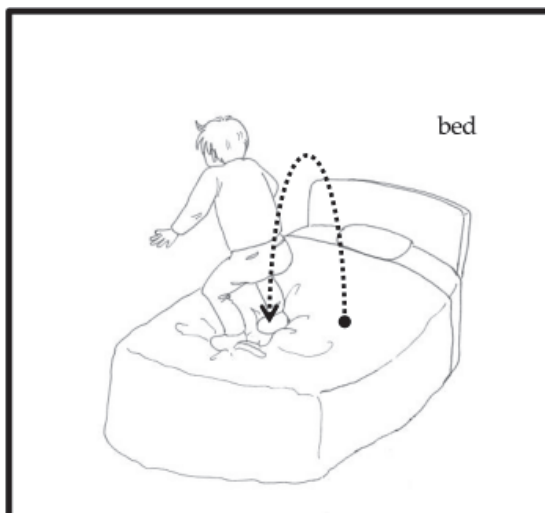
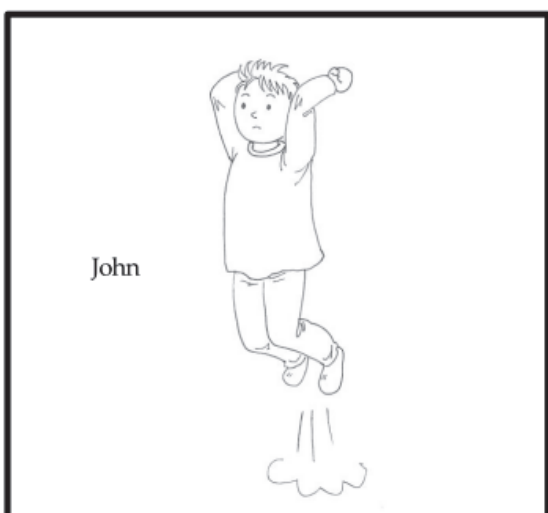
The bird flew above the tree.

23.



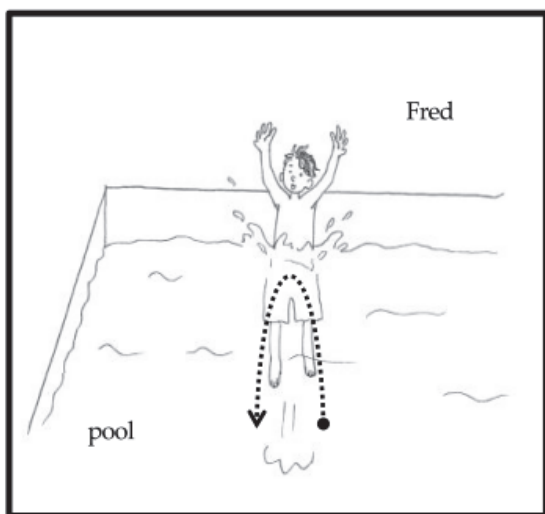
The bird flew by the house.

24.



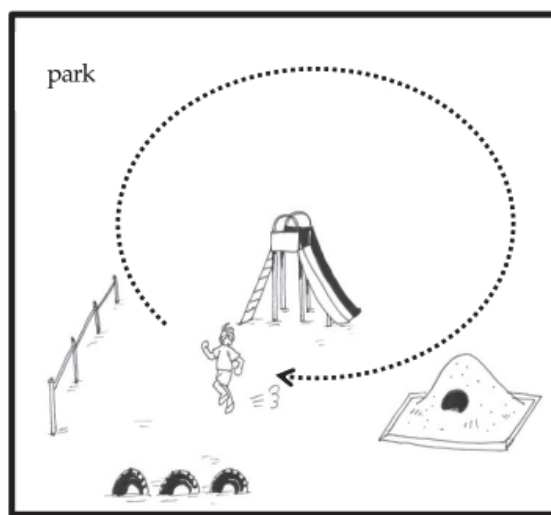
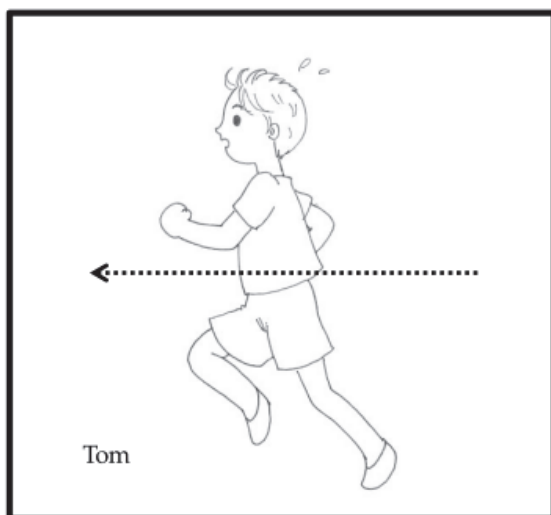
John jumped on the bed.

25.



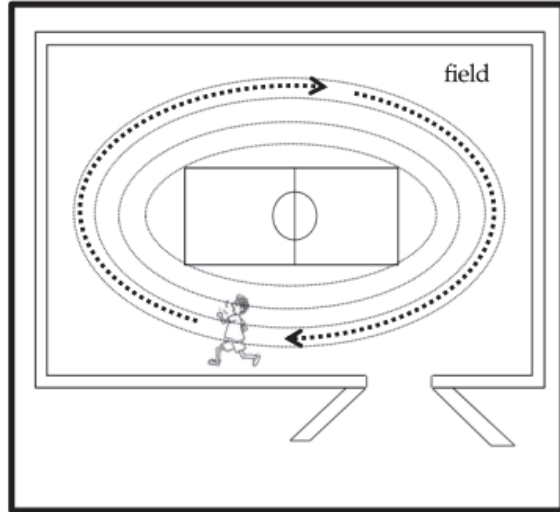
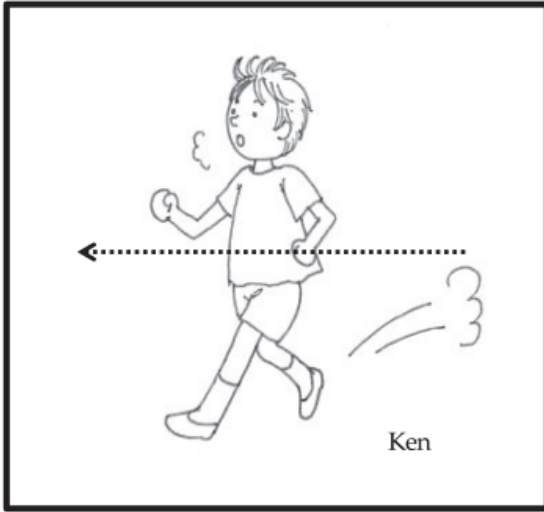
Fred jumped in the pool.

26.



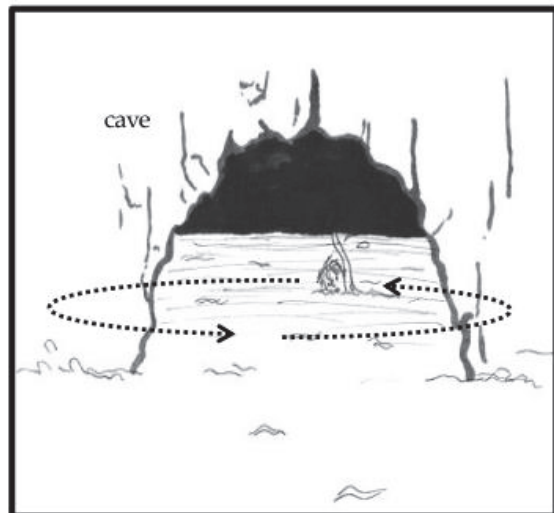
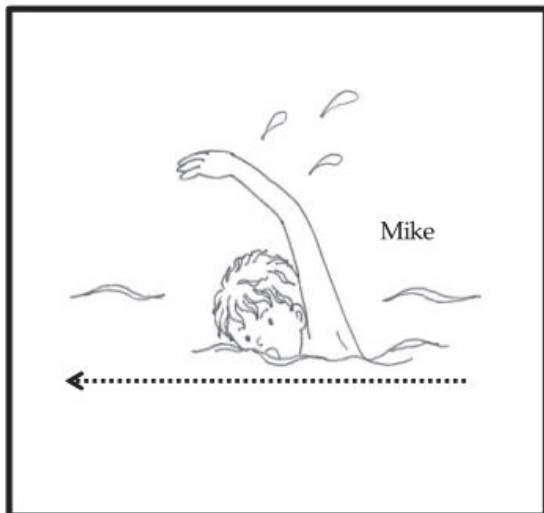
Tom ran in the park.

27.



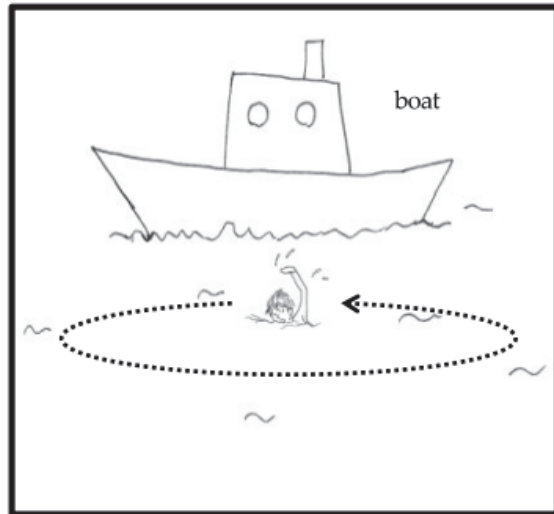
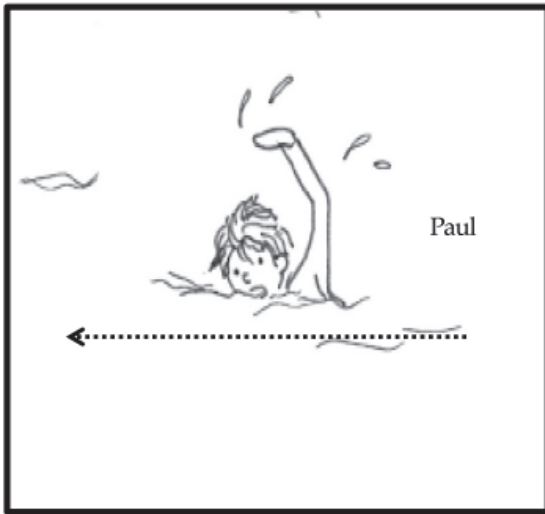
Ken ran on the field.

28.



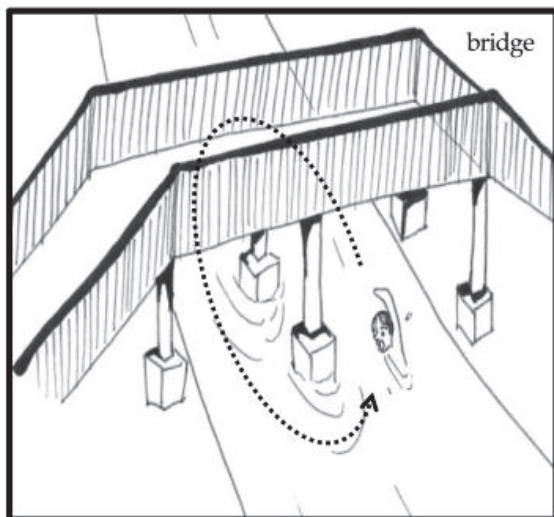
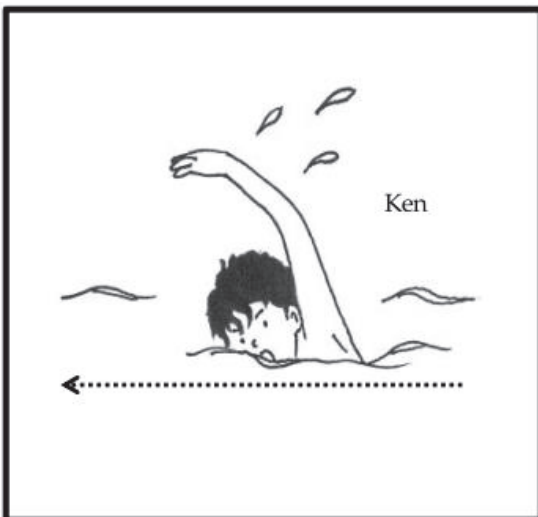
Mike swam inside the cave.

29.



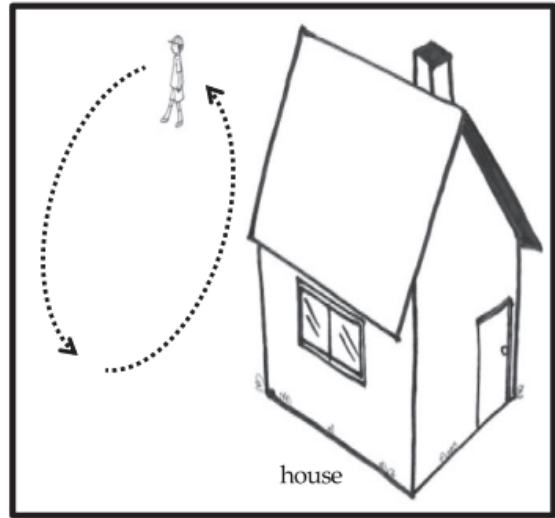
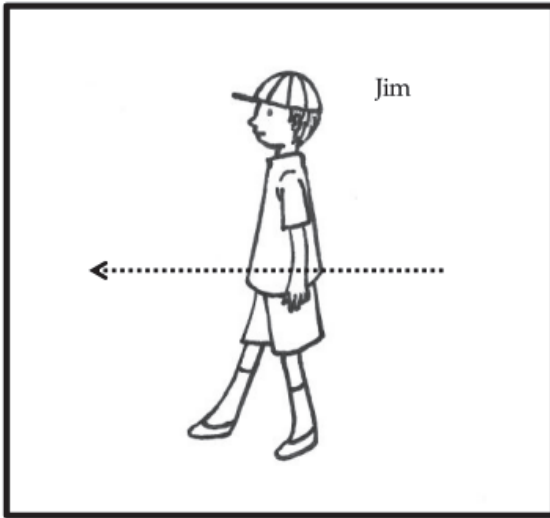
Paul swam near the boat.

30.



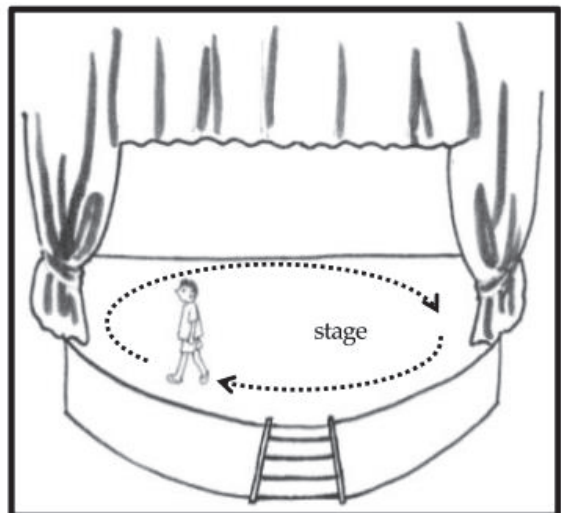
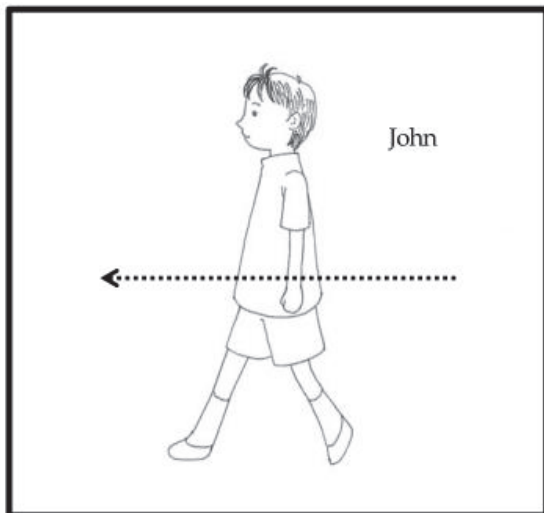
Ken swam under the bridge.

31.



Jim walked behind the house.

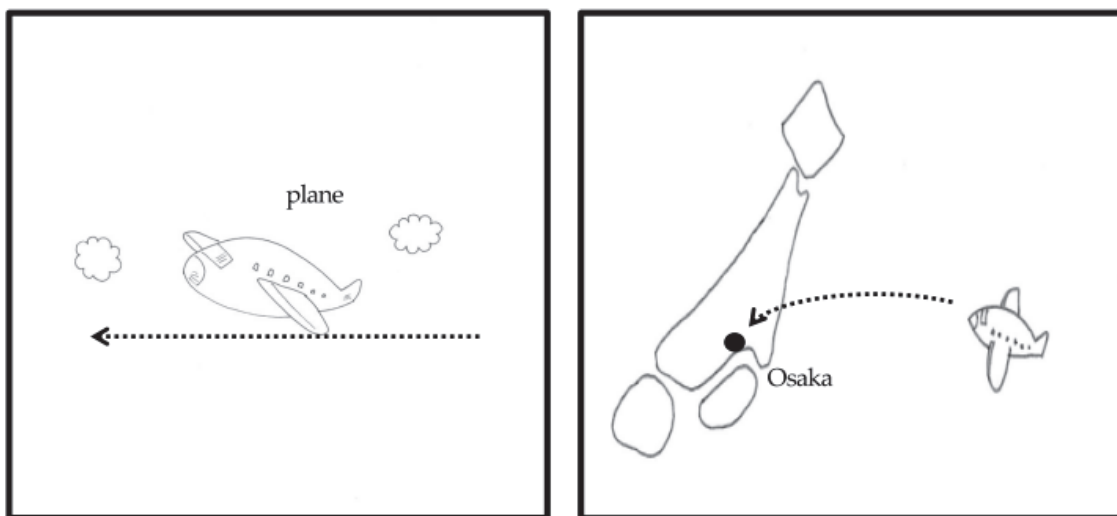
32.



John walked on the stage.

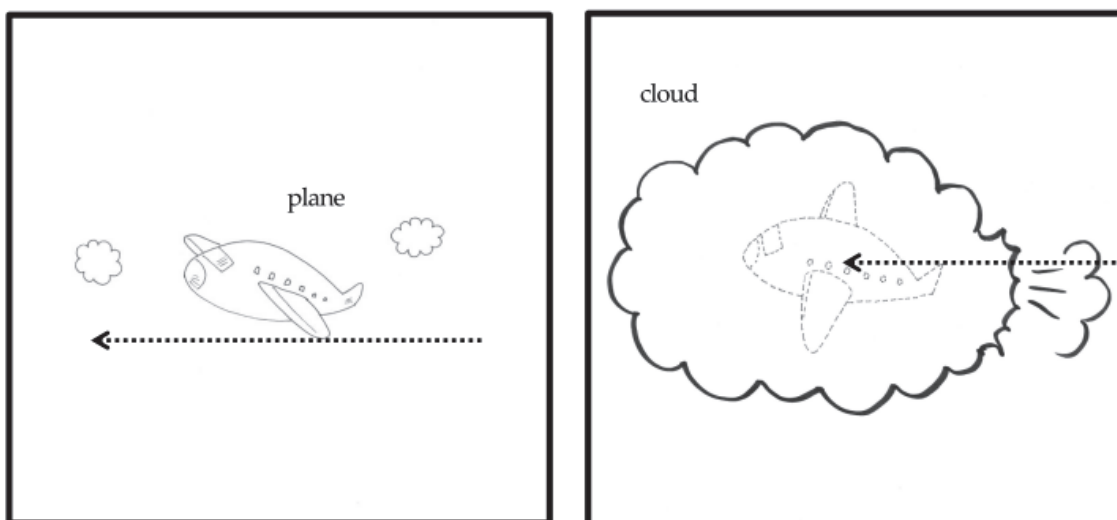
D. 迂言的表现 and 型

33.



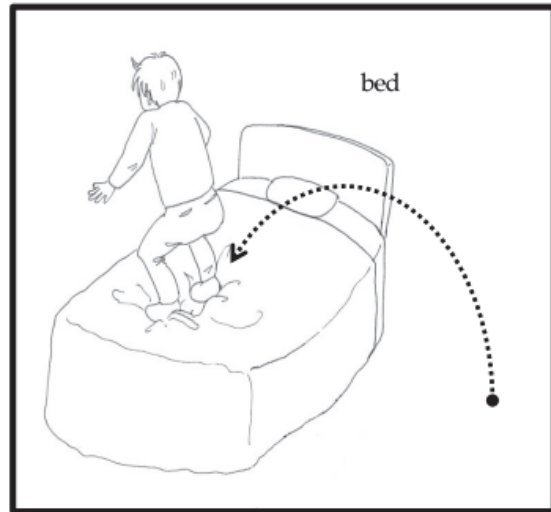
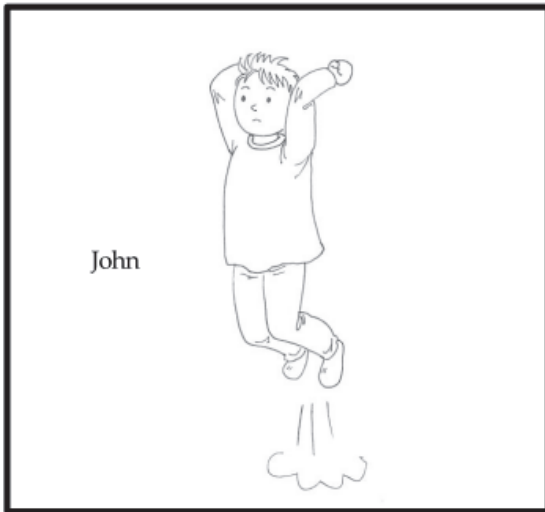
The plane flew and came to Osaka.

34.



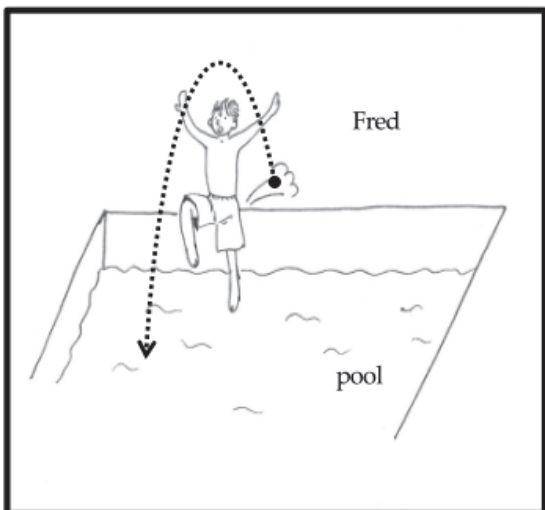
The plane flew and went into the cloud.

35.



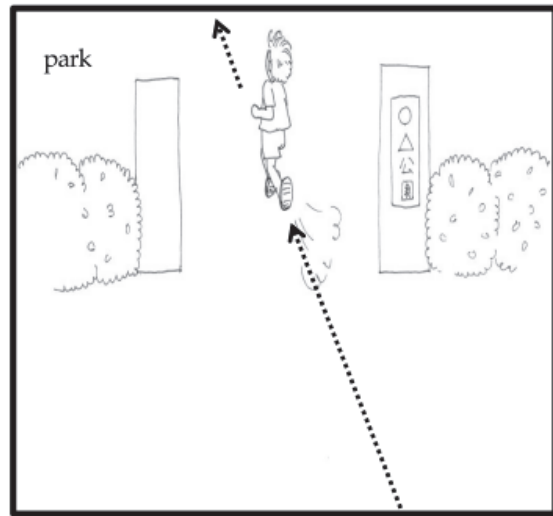
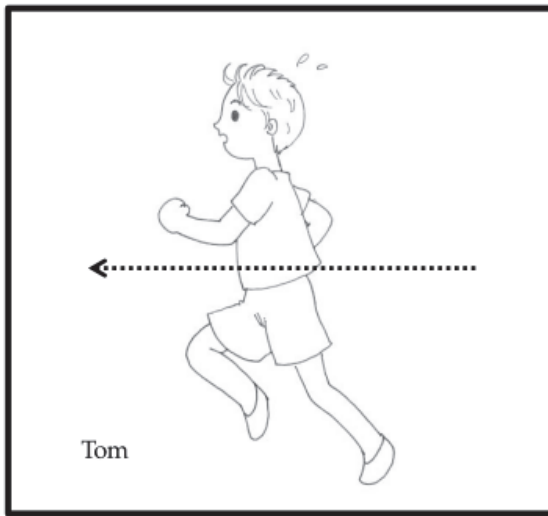
John jumped and went onto the bed.

36.



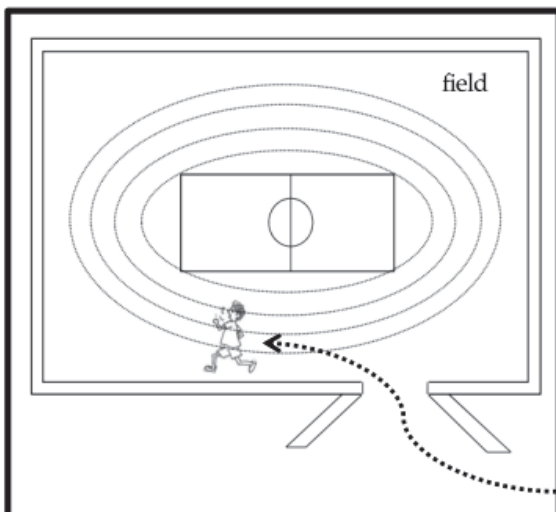
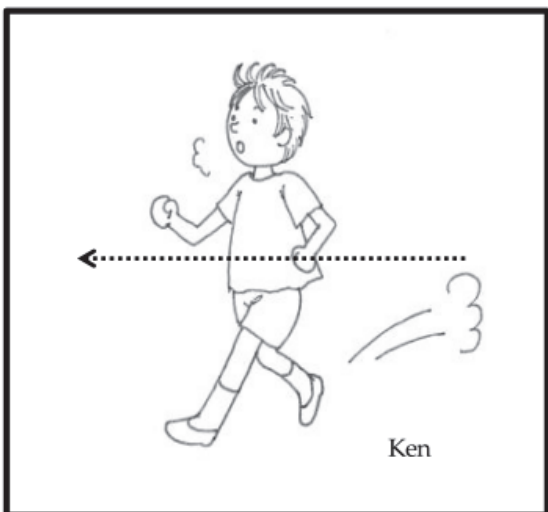
Fred jumped and came into the pool.

37.



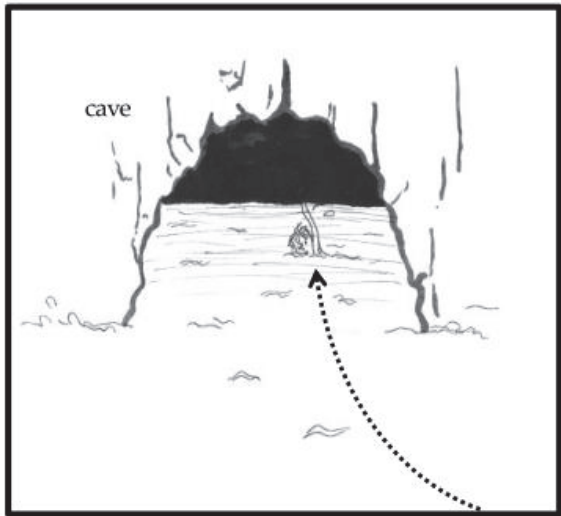
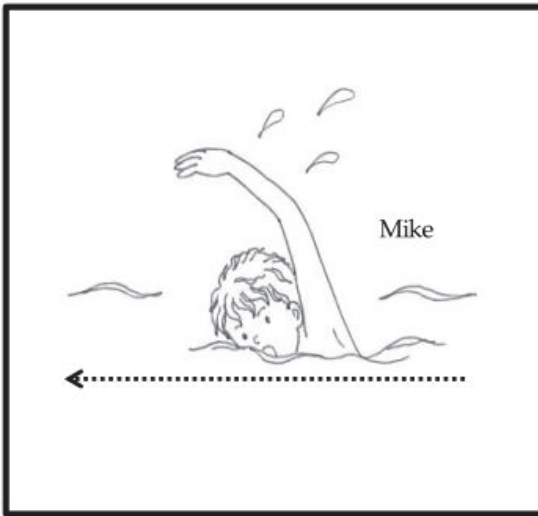
Tom ran and went to the park.

38.



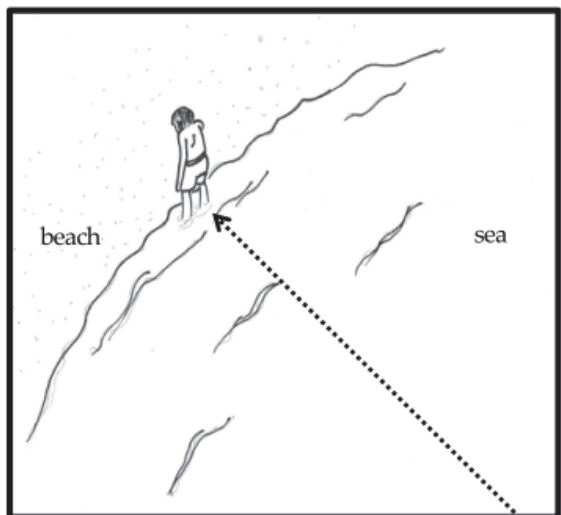
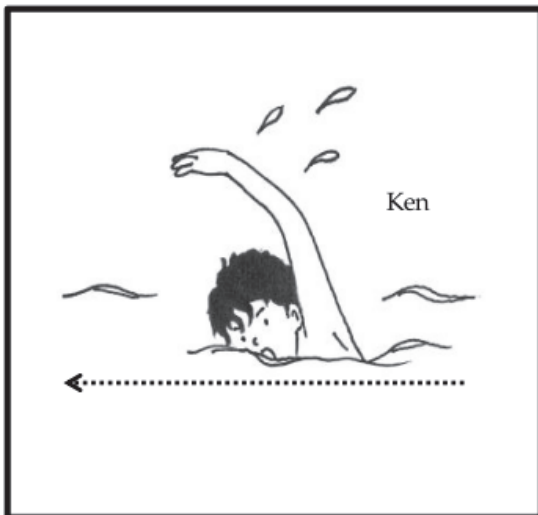
Ken ran and came onto the field.

39.



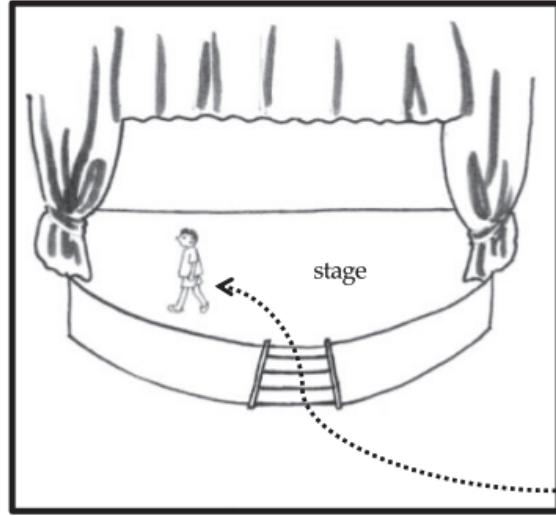
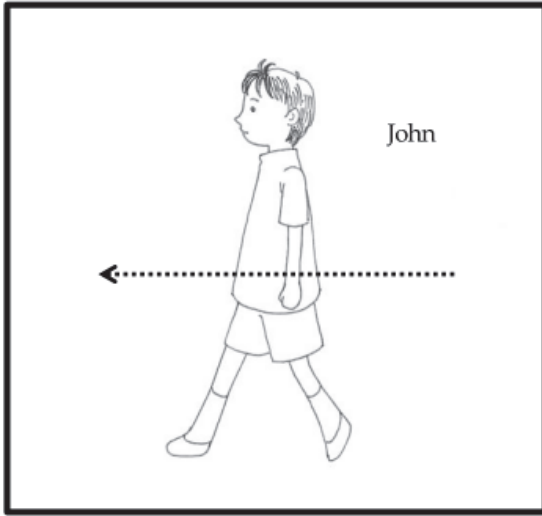
Mike swam and went into the cave.

40.



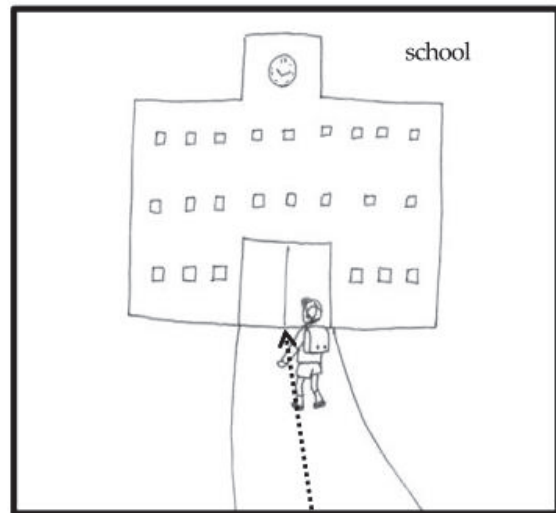
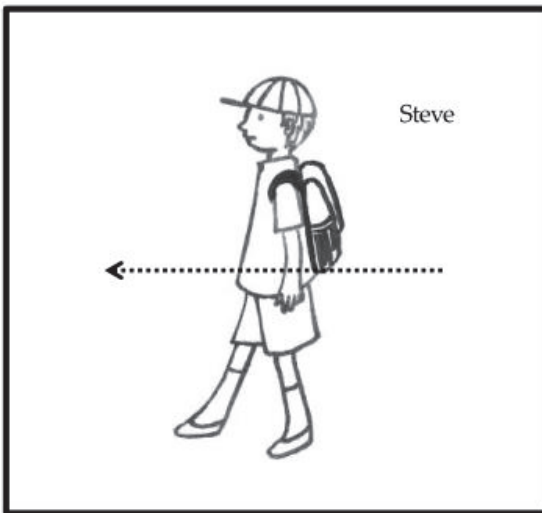
Ken swam and came to the beach.

41.



John walked and went onto the stage.

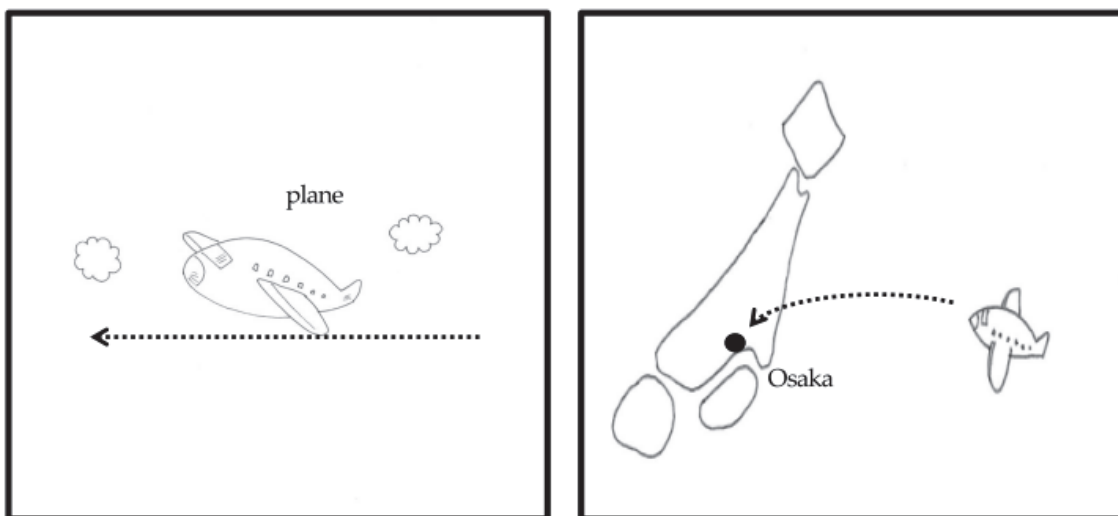
42.



Steve walked and came to school.

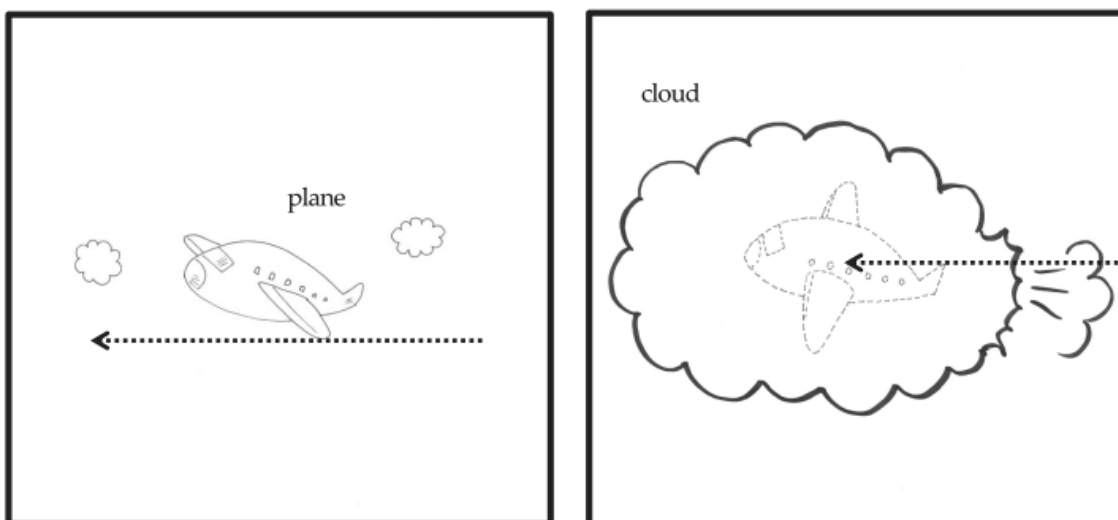
E. 迂言的表现 by -ing 型

43.



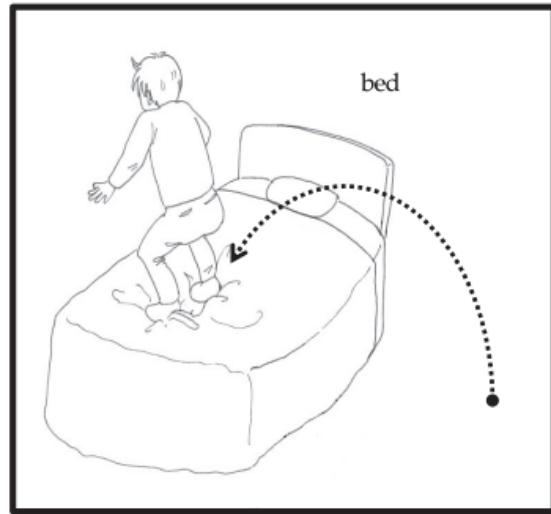
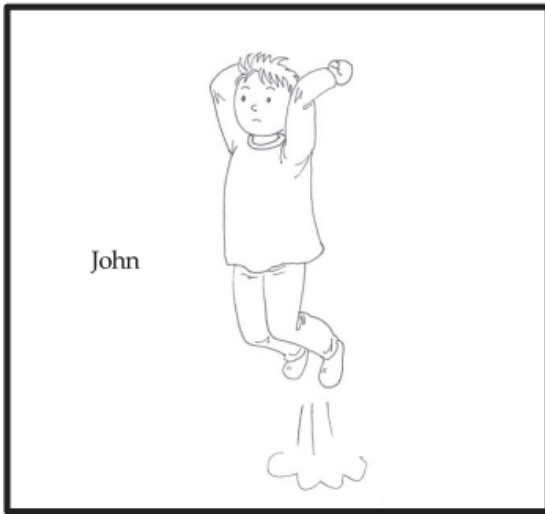
The plane came to Osaka by flying.

44.



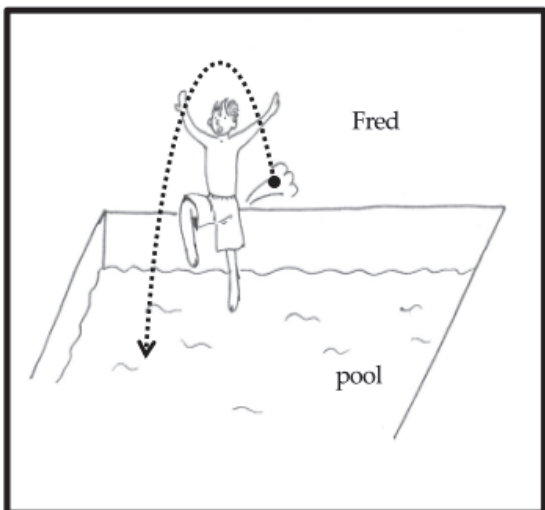
The plane went into the cloud by flying.

45.



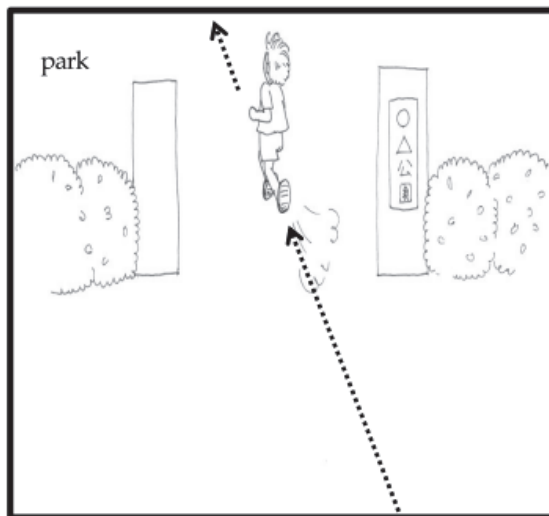
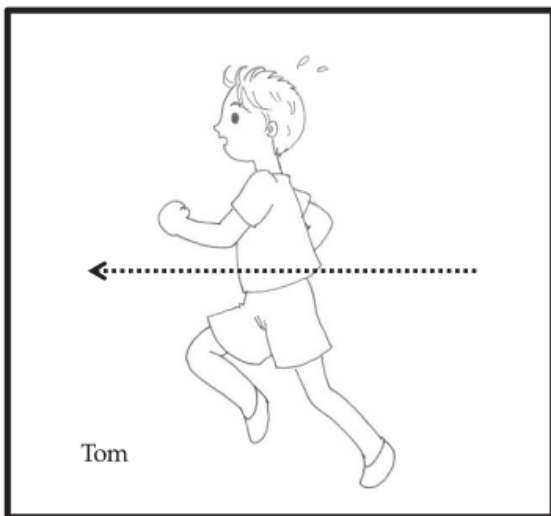
John went onto the bed by jumping.

46.



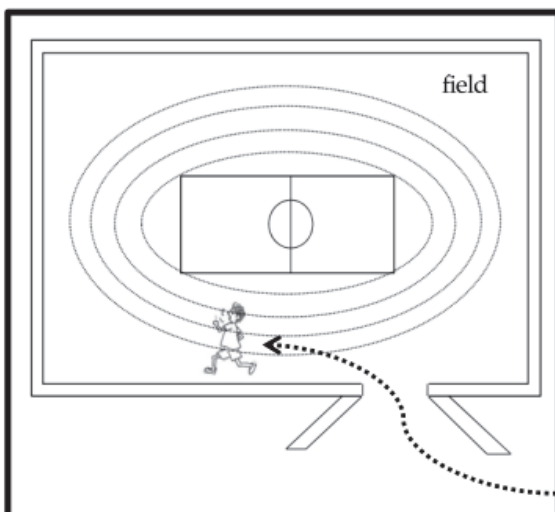
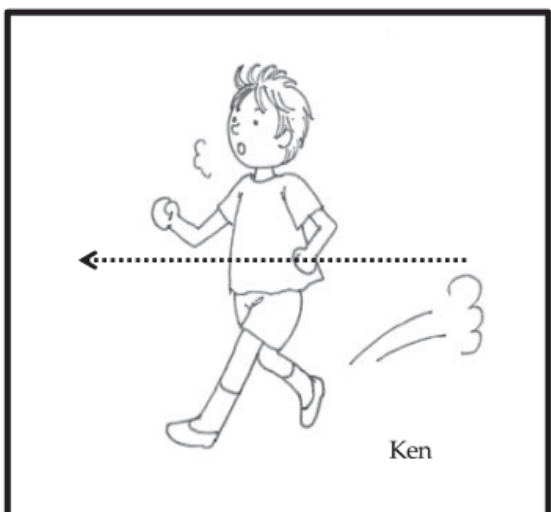
Fred came into the pool by jumping.

47.



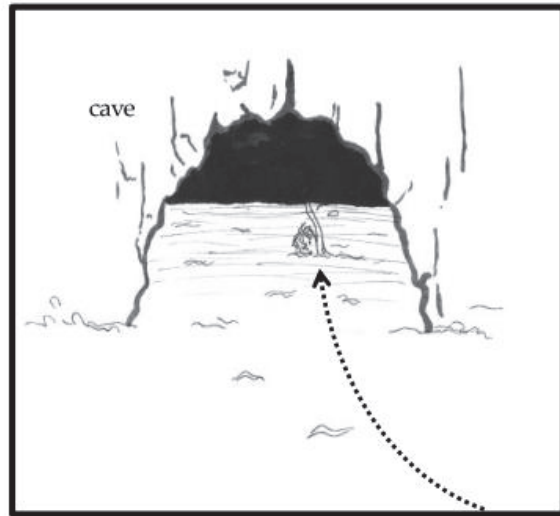
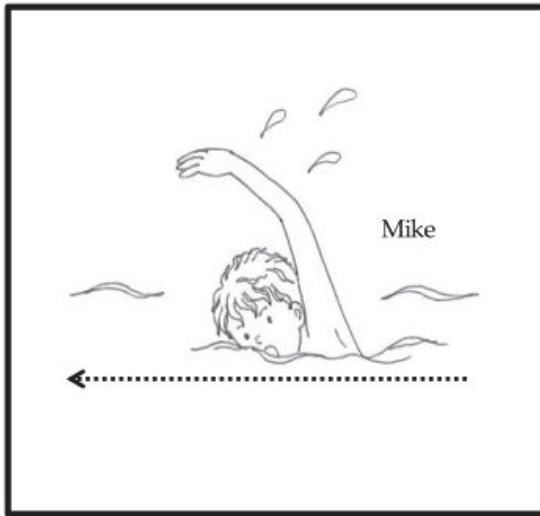
Tom went to the park by running.

48.



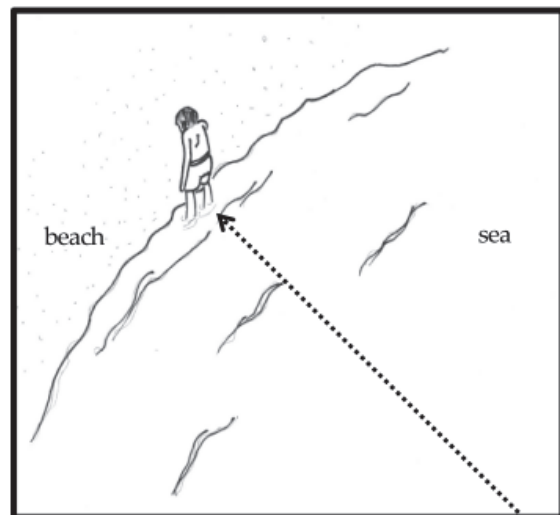
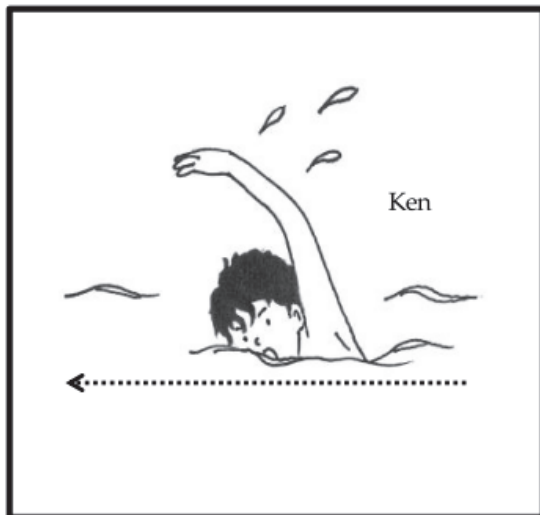
Ken came onto the field by running.

49.



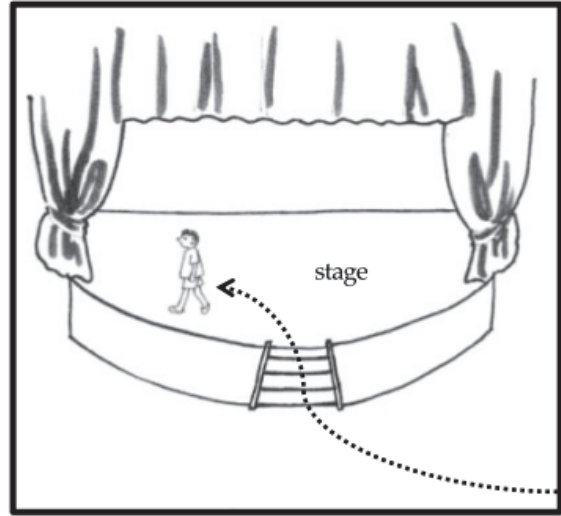
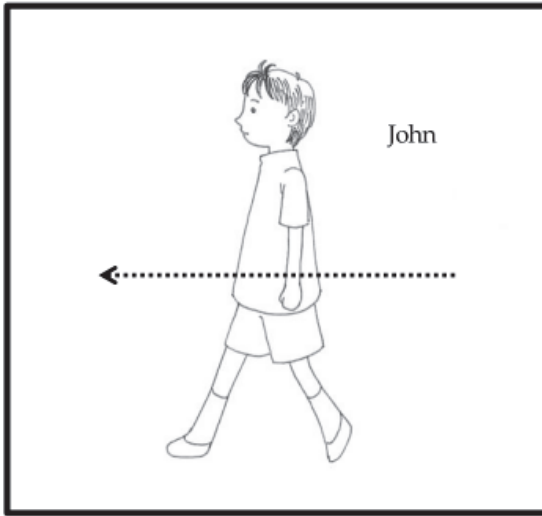
Mike went into the cave by swimming.

50.



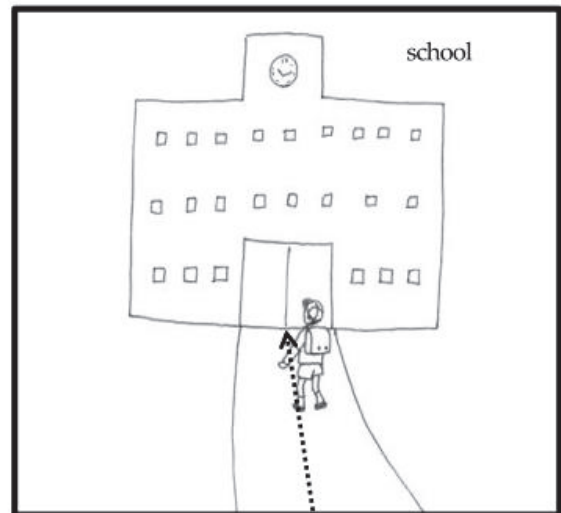
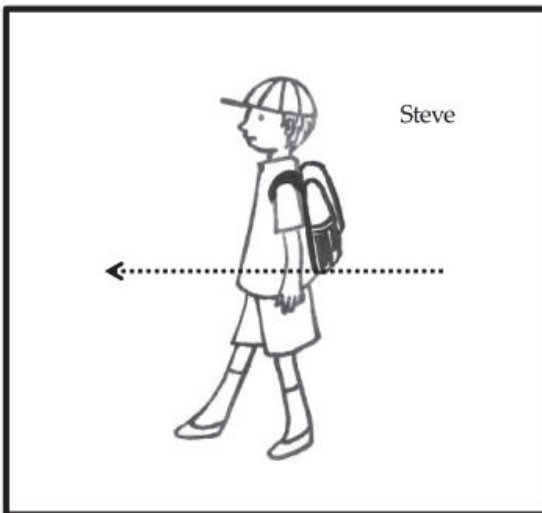
Ken came to the beach by swimming.

51.



John went onto the stage by walking.

52.



Steve came to school by walking.

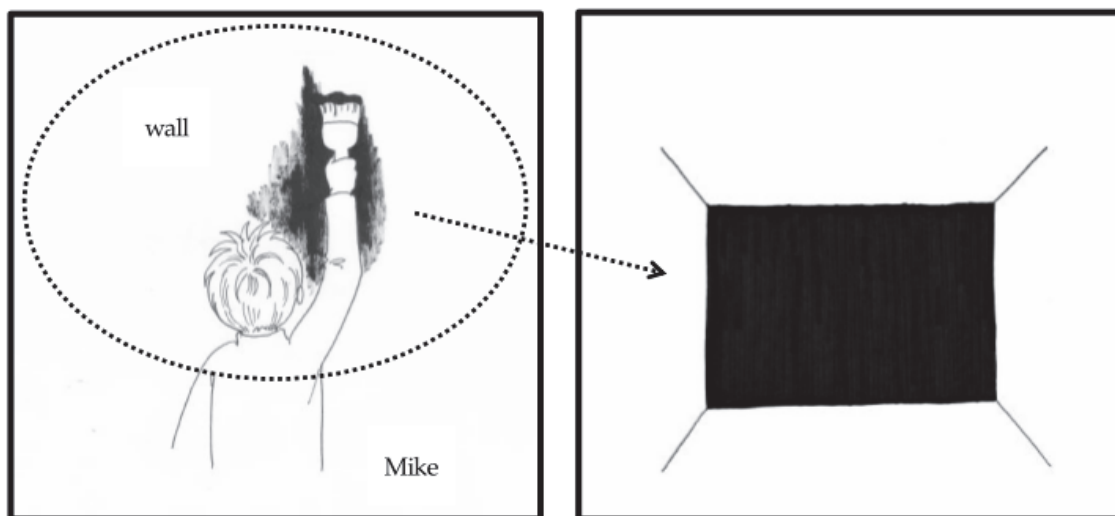
Appendix-3

状態変化表現のタスクに使用したテスト文とイラスト

| テスト文の種類 | タイプ | テスト文 |
|-------------------|------------------------------------|---|
| A. 弱い結果構文 (7文) | (i) 形容詞句型 (4文) | 1. Mike painted the wall black. 2. Ken crushed the can flat. 3. Kumi froze the juice solid. 4. Lucy polished the mirror clean. |
| | (ii) 前置詞句型 (3文) | 5. John broke the glass into pieces. 6. Bob bent the wire into a U shape. 7. Mike tore the letter into pieces. |
| B. 強い結果構文 (7文) | (i) 形容詞句型 (4文) | 8. Paul kicked the door open. 9. Tom shot the man dead. 10. John hammered the can flat. 11. Mike shook his father awake. |
| | (ii) 前置詞句型 (3文) | 12. John knocked Mike into unconsciousness. 13. Meg patted the dough into a circle. 14. Bob stabbed the man to death. |
| C. 迂言的表現 (40文) | (i) 弱-形-make -and 型 (4文) | 15. Mike painted and made the wall black. 16. Ken crushed and made the can flat. 17. Kumi froze and made the juice solid. 18. Lucy polished and made the mirror clean. |
| | (ii) 弱-形-make -by-ing 型 (4文) | 19. Mike made the wall black by painting it. 20. Ken made the can flat by crushing it. 21. Kumi made the juice solid by freezing it. 22. Lucy made the mirror clean by polishing it. |
| | (iii) 弱-前-get -and 型 (3文) | 23. John broke and got the glass into pieces. 24. Bob bent and got the wire into a U shape. 25. Mike tore and got the letter into pieces. |
| | (iv) 弱-前-get -by-ing 型 (3文) | 26. John got the glass into pieces by breaking it. 27. Bob got the wire into a U shape by bending it. |
| | (v) 強-形-make -and 型 (4文) | 28. Mike got the letter into pieces by tearing it. 29. Paul kicked and made the door open. 30. Tom shot and made the man dead. 31. John hammered and made the can flat. 32. Mike shook and made his father awake. |

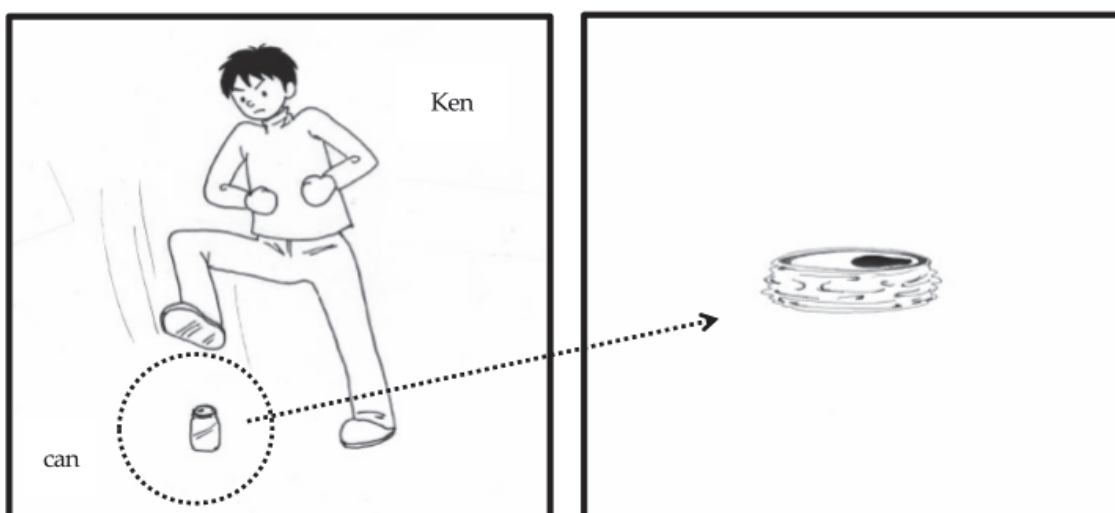
A. 弱い結果構文 (i) 形容詞句型

1.



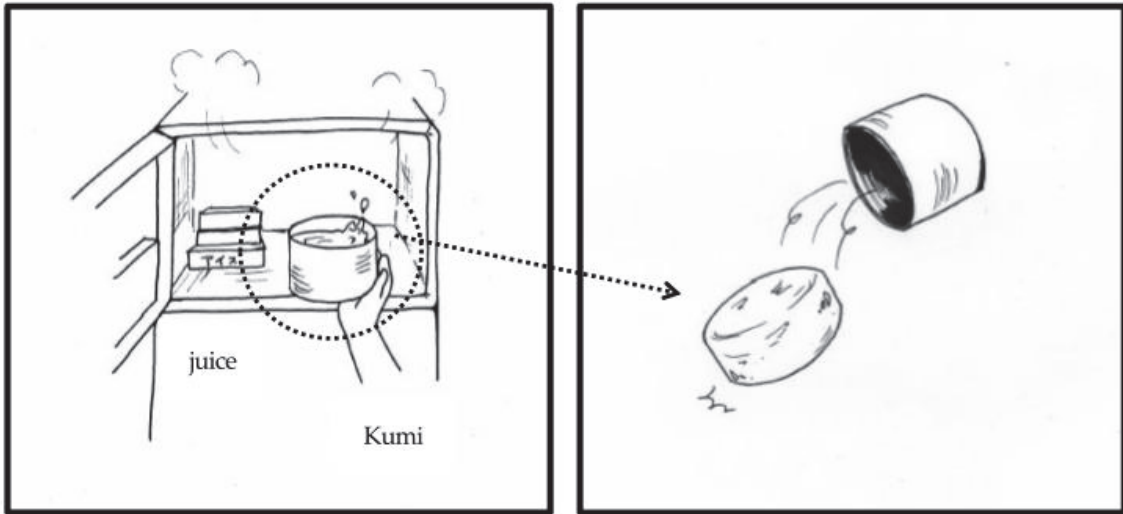
Mike painted the wall black.

2.



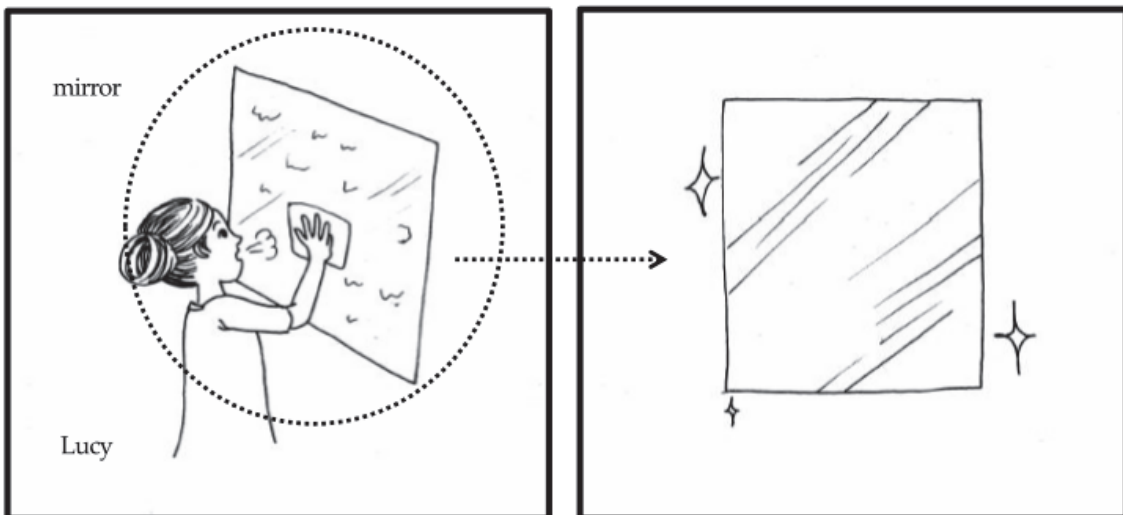
Ken crushed the can flat.

3.



Kumi froze the juice solid.

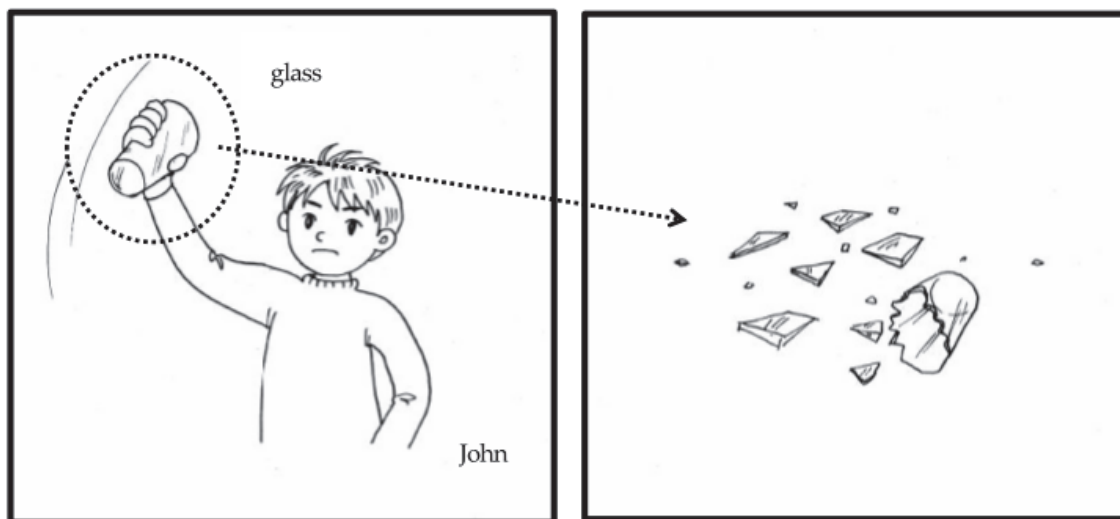
4.



Lucy polished the mirror clean.

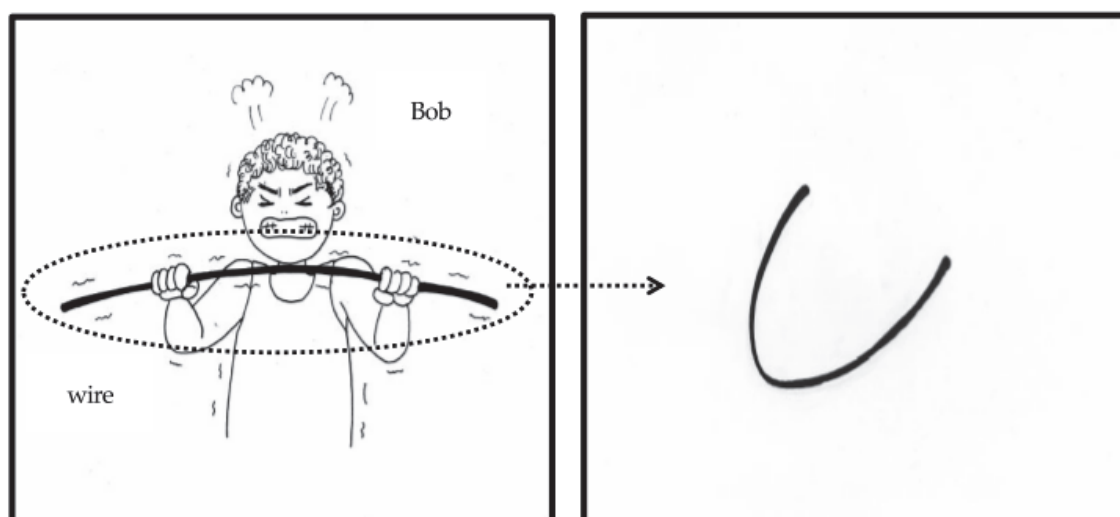
A. 弱い結果構文 (ii) 前置詞句型

5.



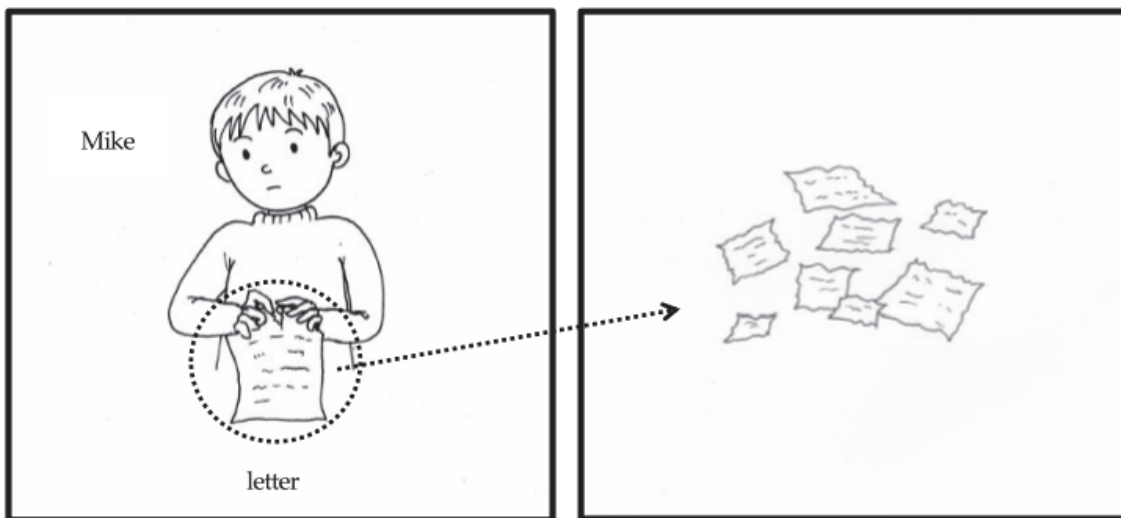
John broke the glass into pieces.

6.



Bob bent the wire into a U shape.

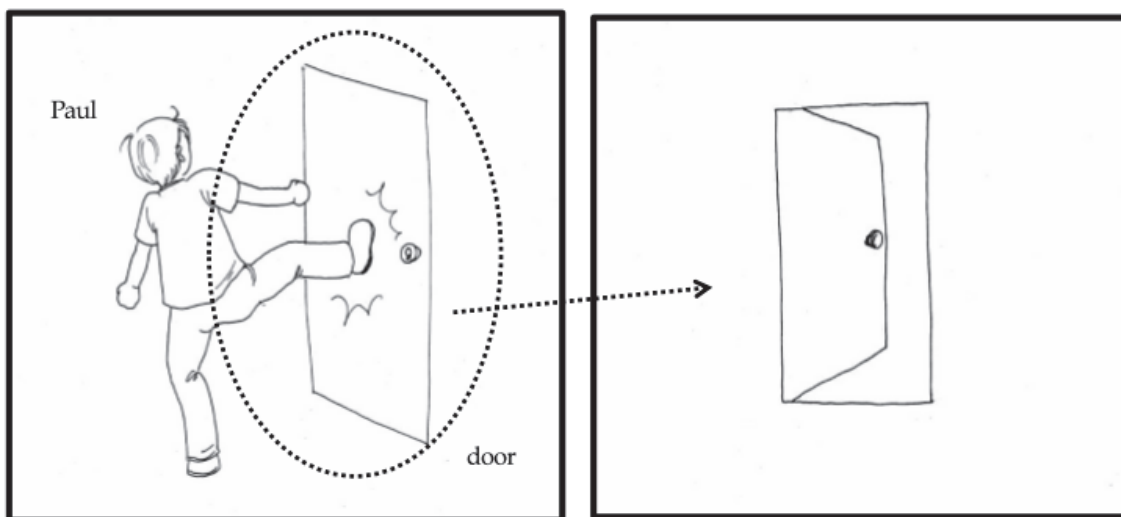
7.



Mike tore the letter into pieces.

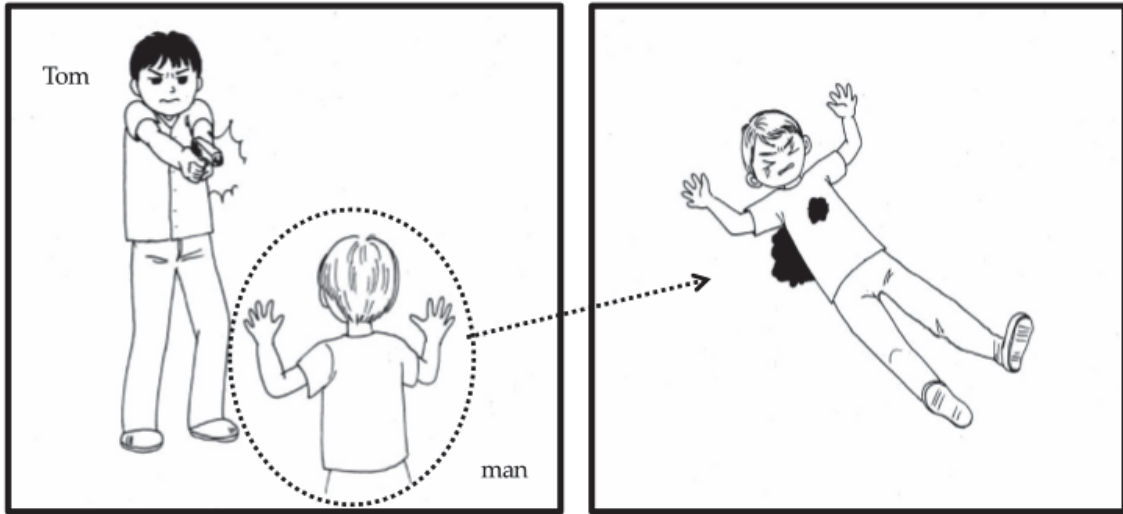
B. 強い結果構文 (i) 形容詞句型

8.



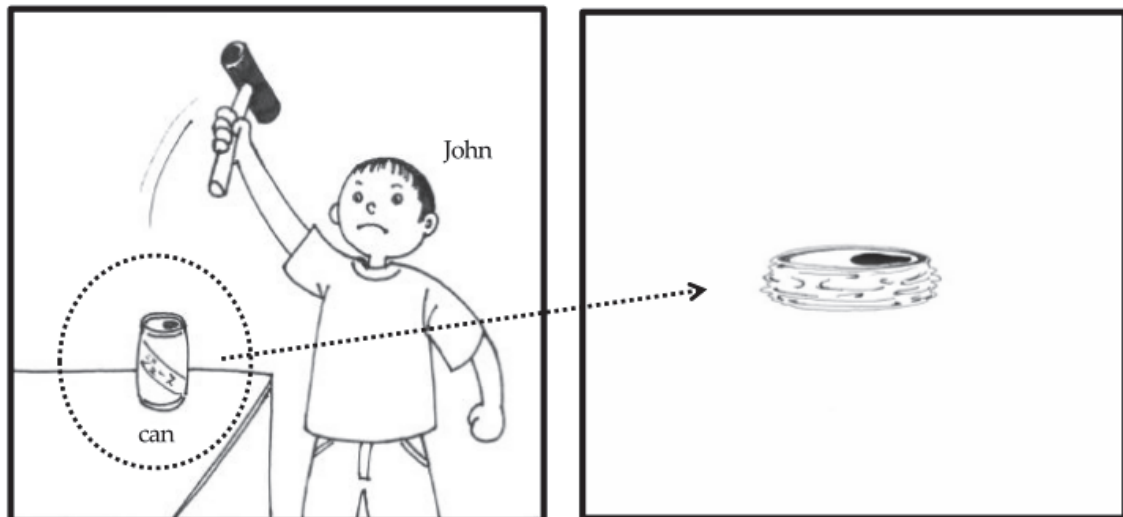
Paul kicked the door open.

9.



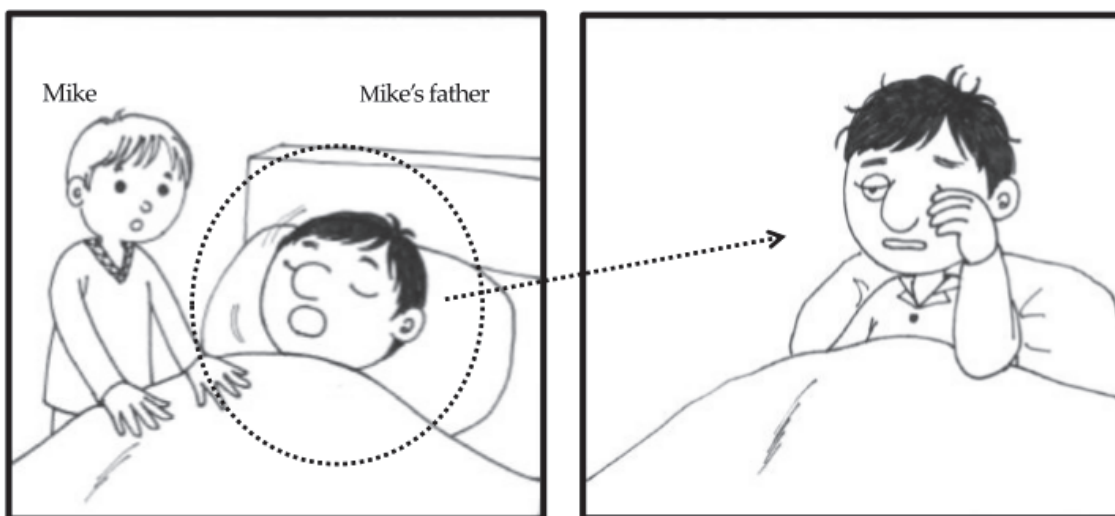
Tom shot the man dead.

10.



John hammered the can flat.

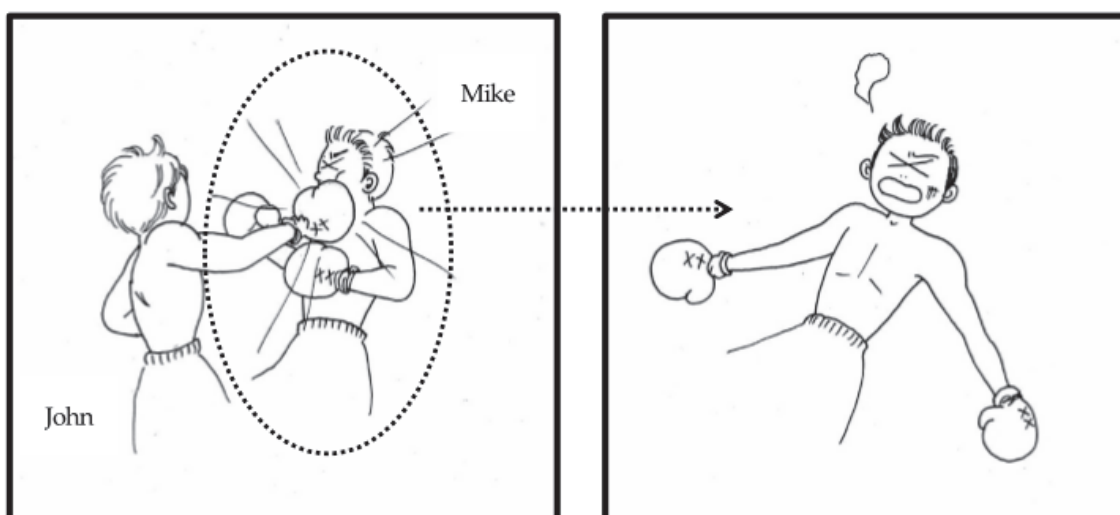
11.



Mike shook his father awake.

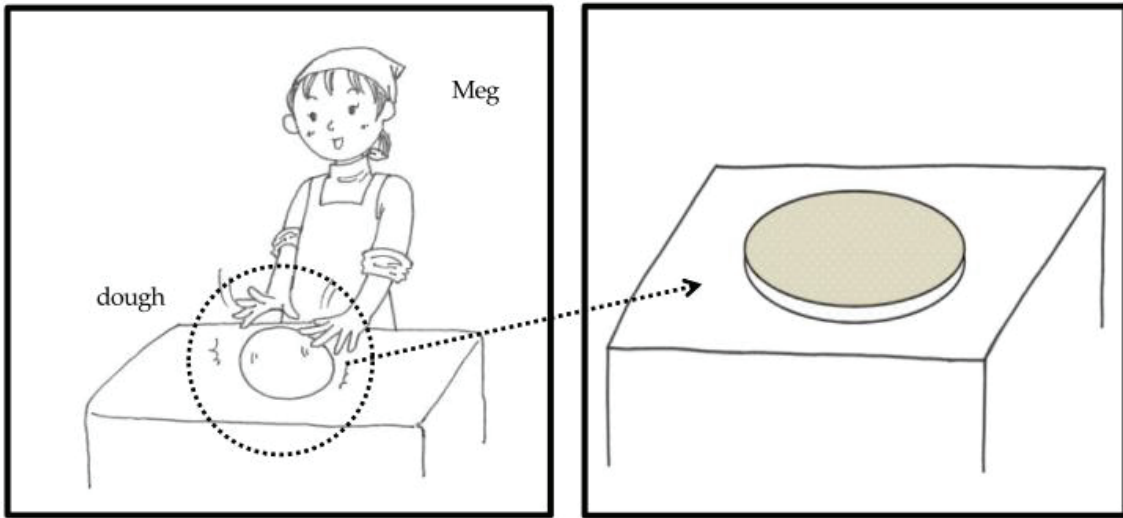
B. 強い結果構文 (ii) 前置詞句型

12.



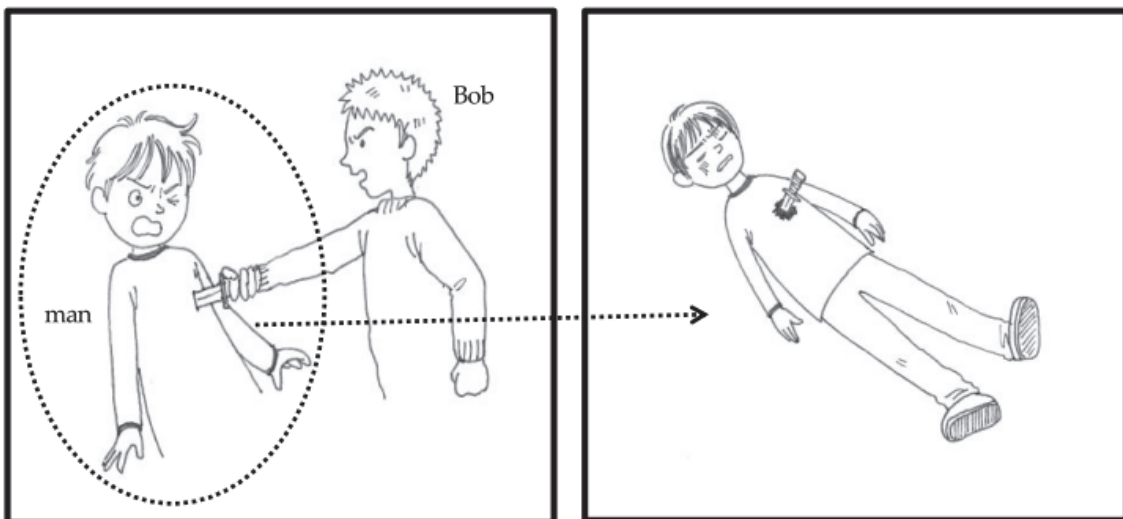
John knocked Mike into unconsciousness.

13.



Meg patted the dough into a circle.

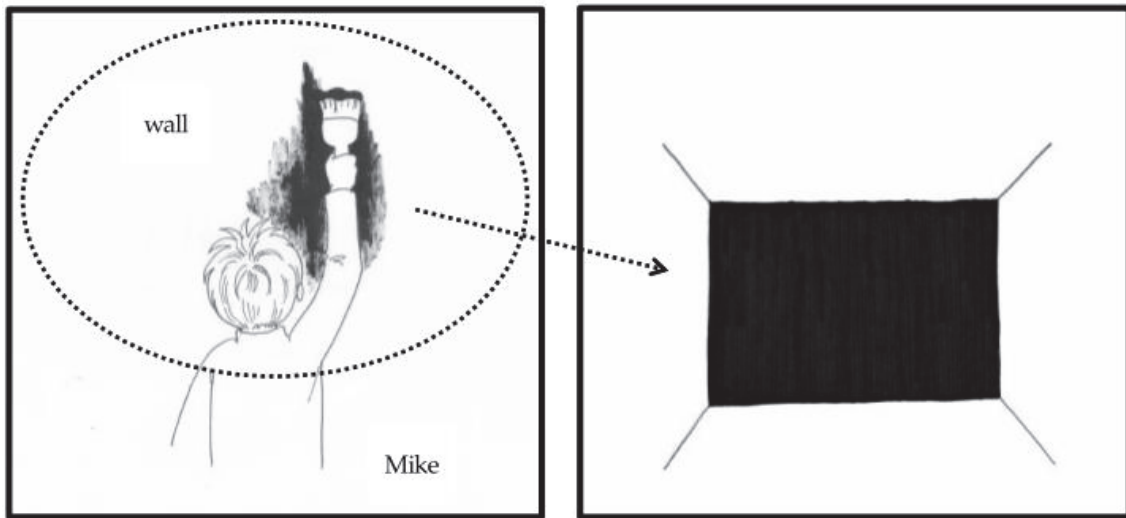
14.



Bob stabbed the man to death.

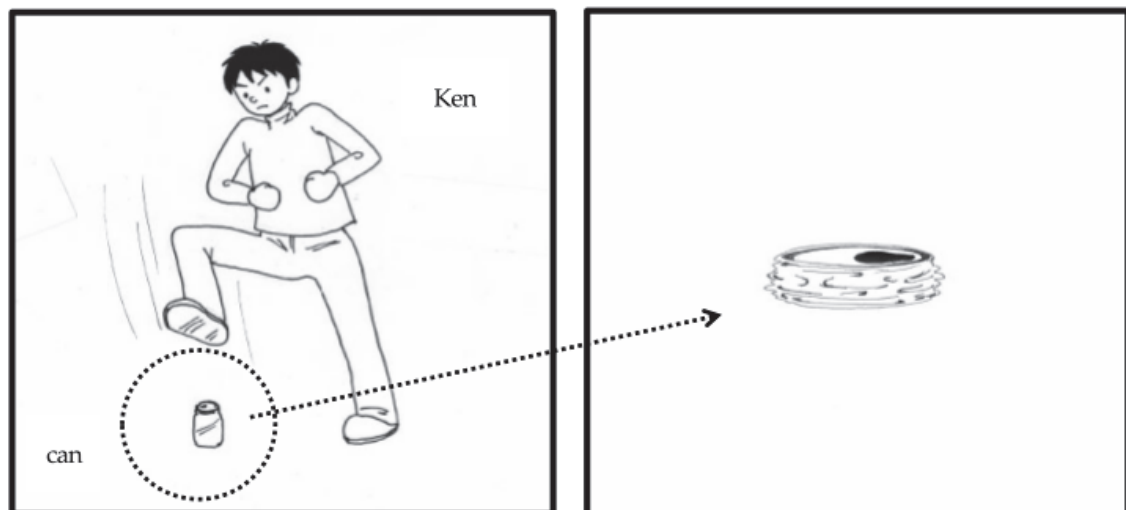
C. 迂言的表现 (i) 弱-形-make-and 型

15.



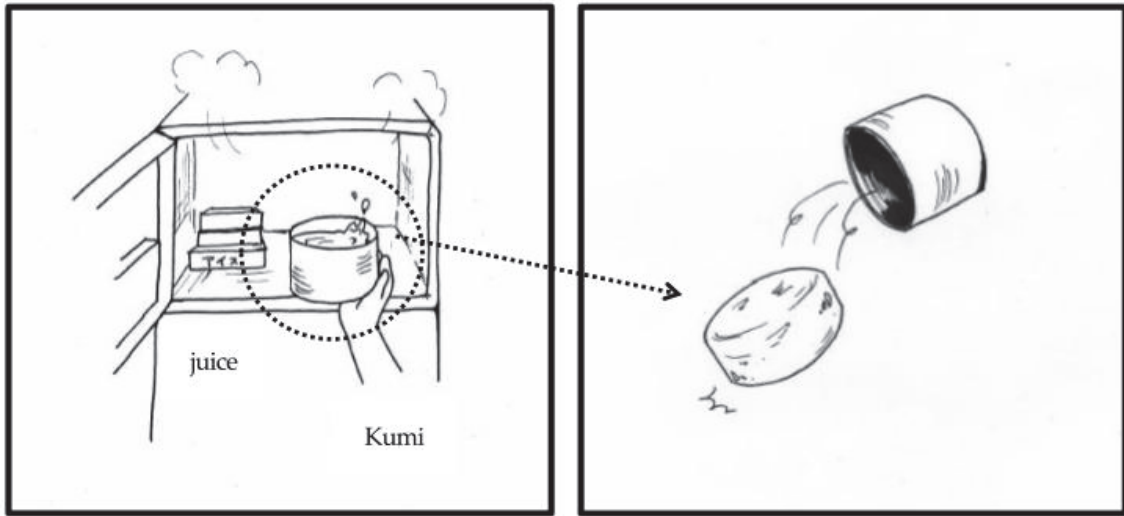
Mike painted and made the wall black.

16.



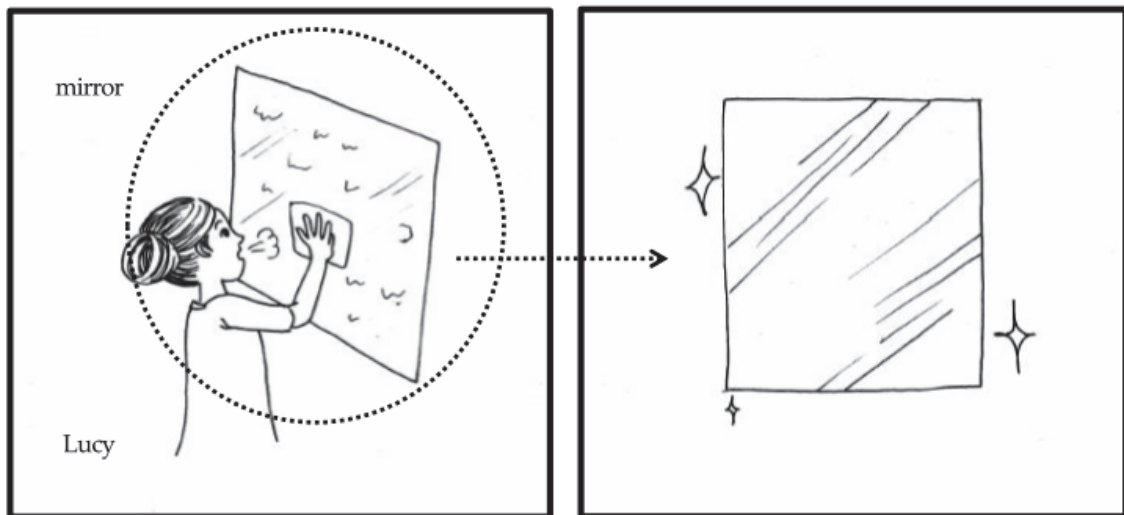
Ken crushed and made the can flat.

17.



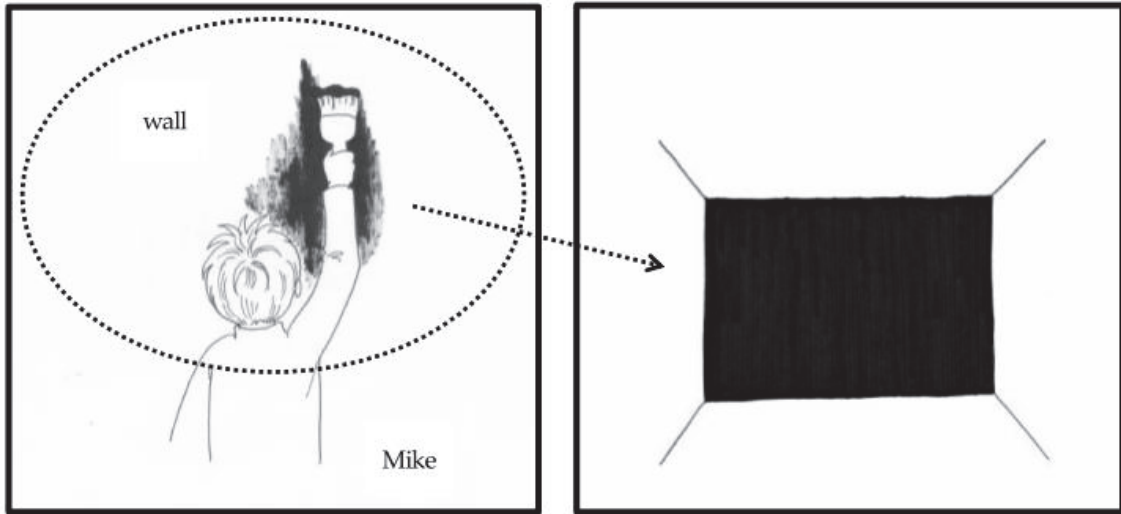
Kumi froze and made the juice solid.

18.



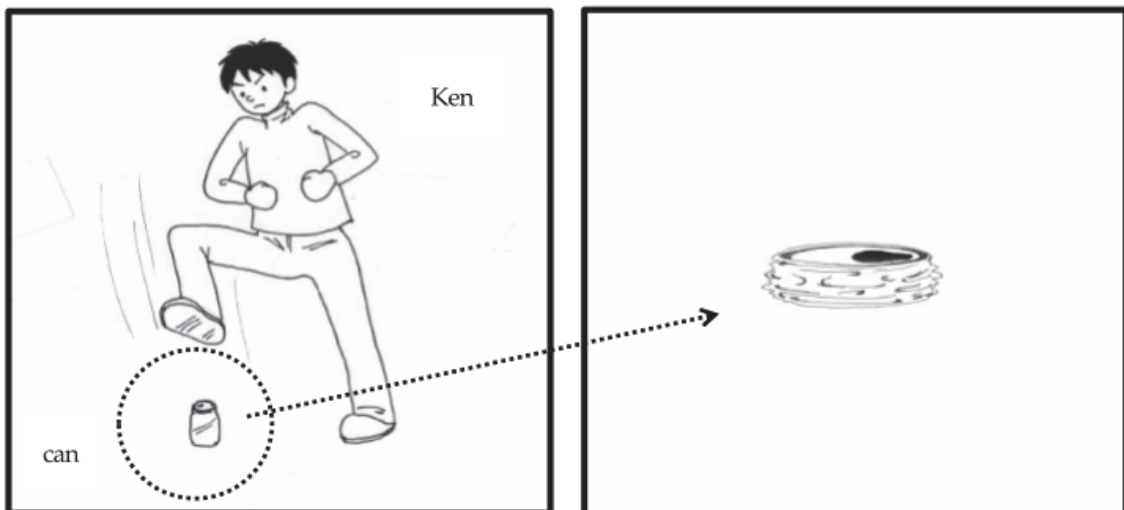
Lucy polished and made the mirror clean.

C. 迂言的表现 (ii) 弱-形-make-by-ing 型
19.



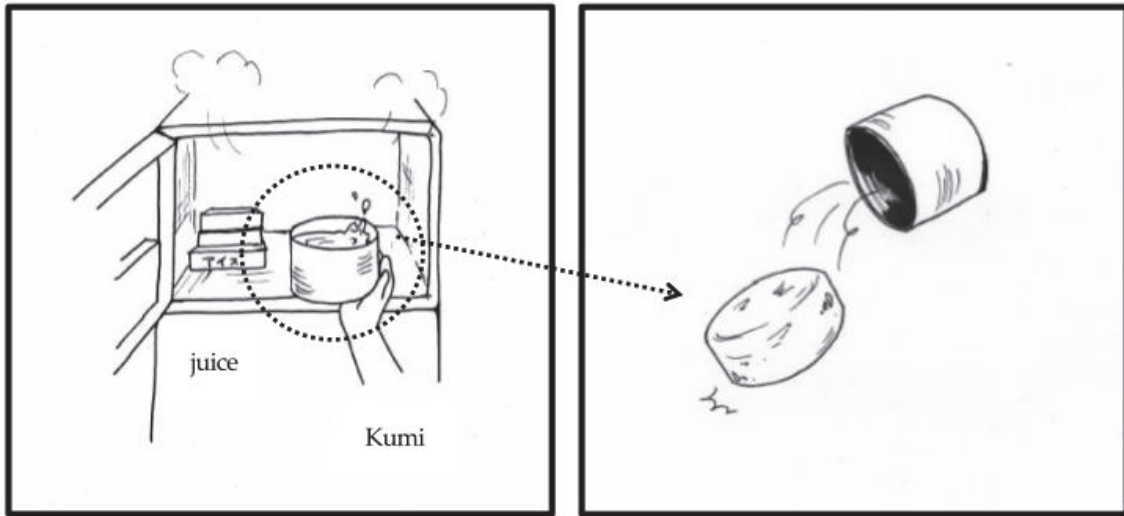
Mike made the wall black by painting it.

20.



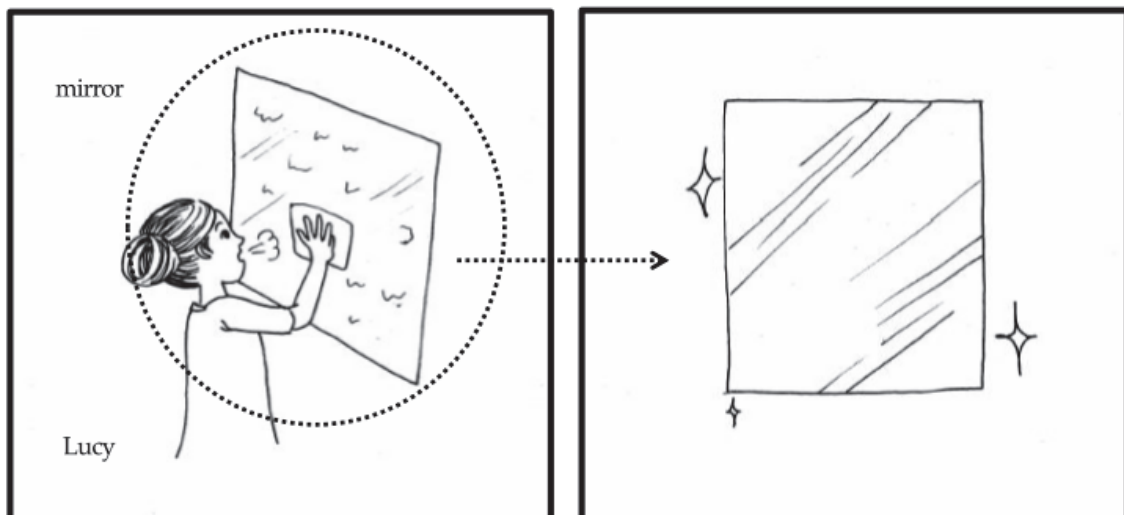
Ken made the can flat by crushing it.

21.



Kumi made the juice solid by freezing it.

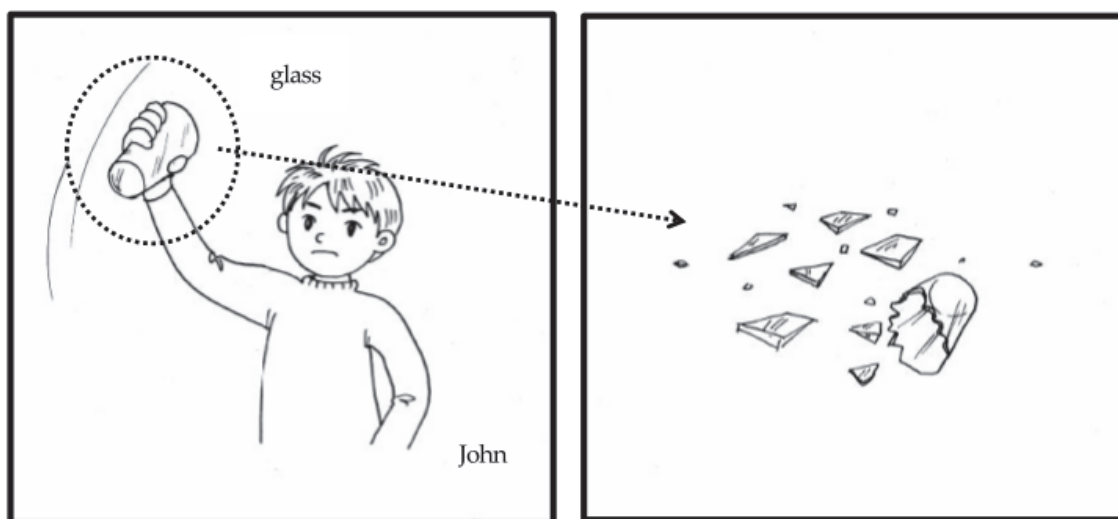
22.



Lucy made the mirror clean by polishing it.

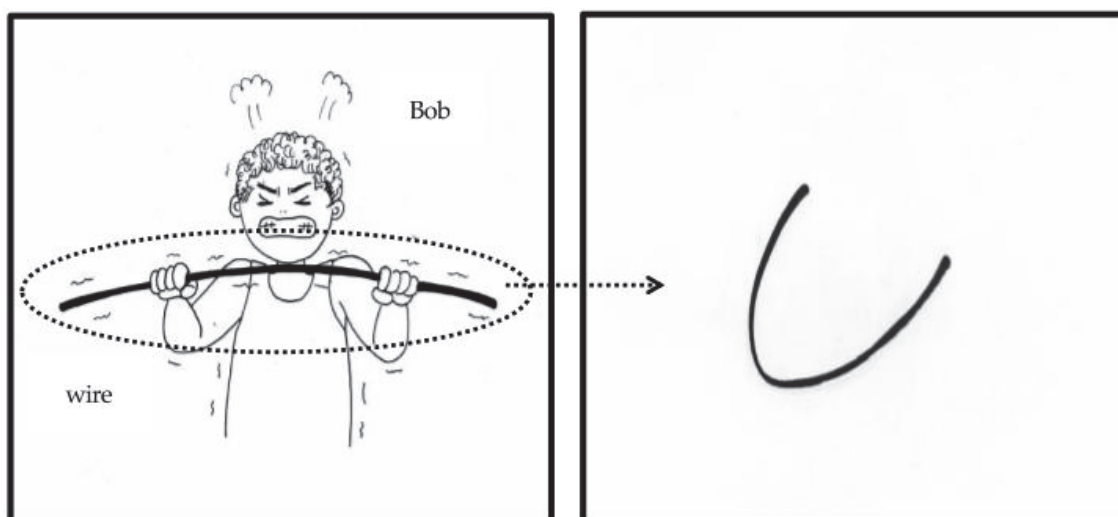
C. 迂言的表现 (iii) 弱-前-get-and型

23.



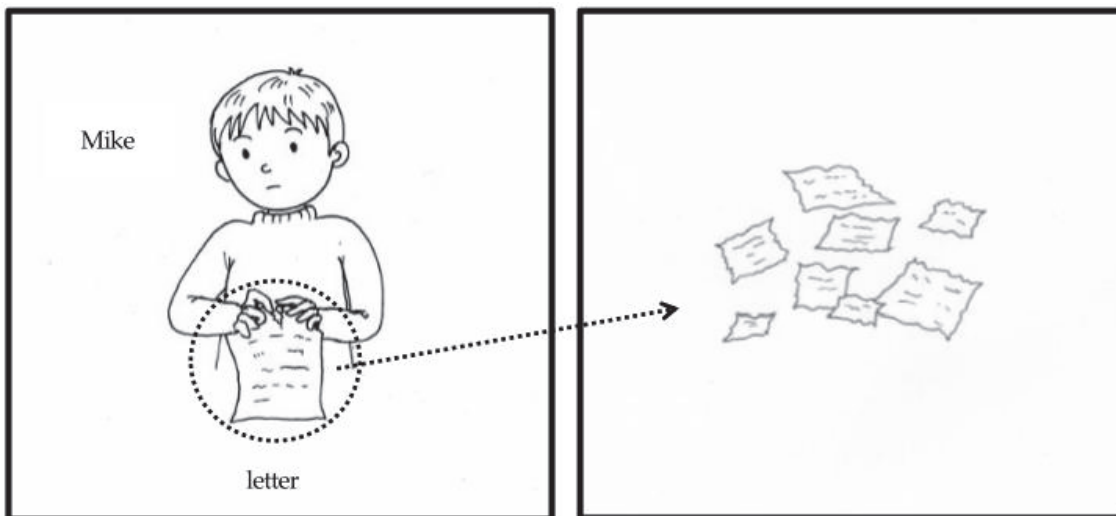
John broke and got the glass into pieces.

24.



Bob bent and got the wire into a U shape.

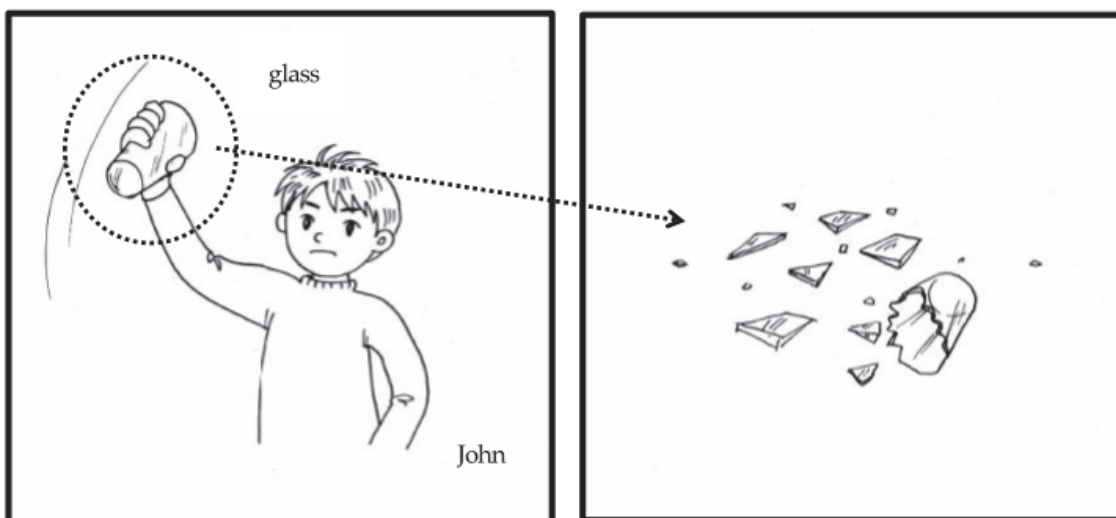
25.



Mike tore and got the letter into pieces.

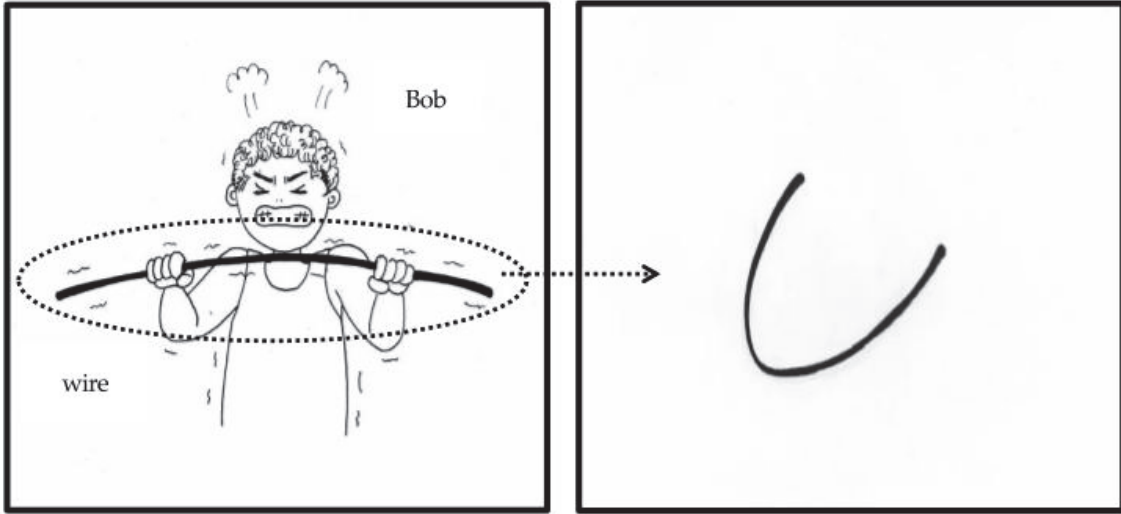
C. 迂言的表现 (iv) 弱-前-get-by-ing 型

26.



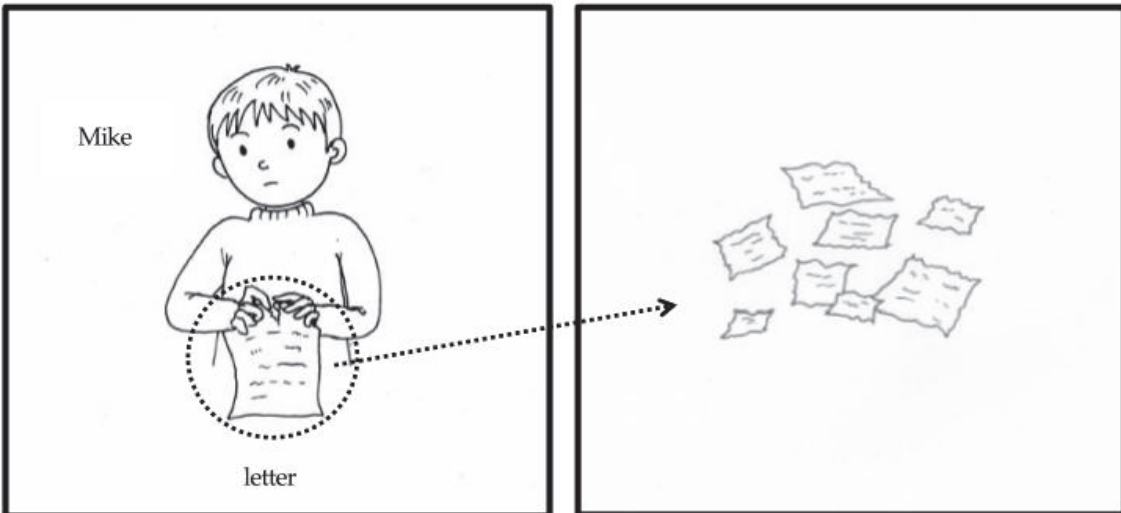
John got the glass into pieces by breaking it.

27.



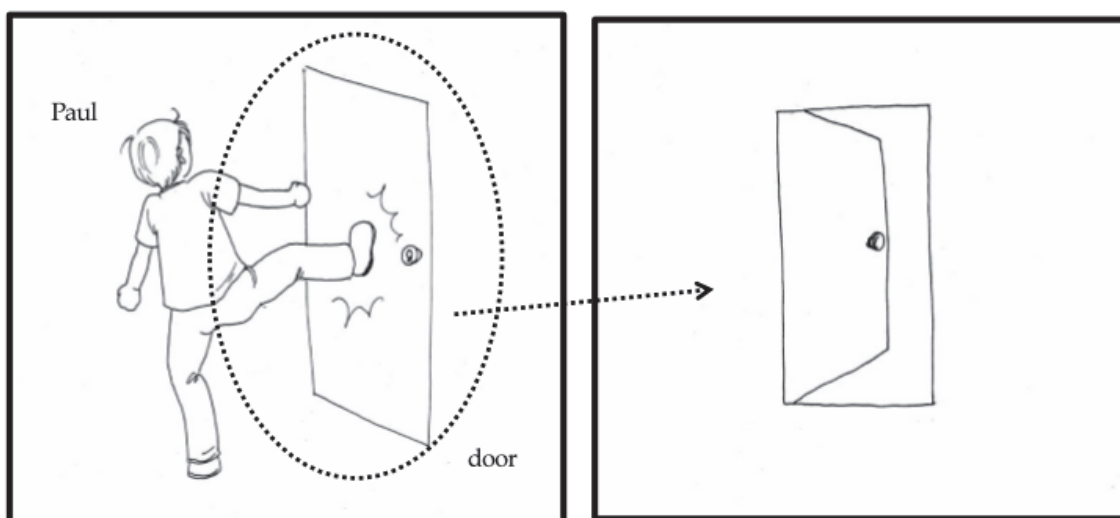
Bob got the wire into a U shape by bending it.

28.



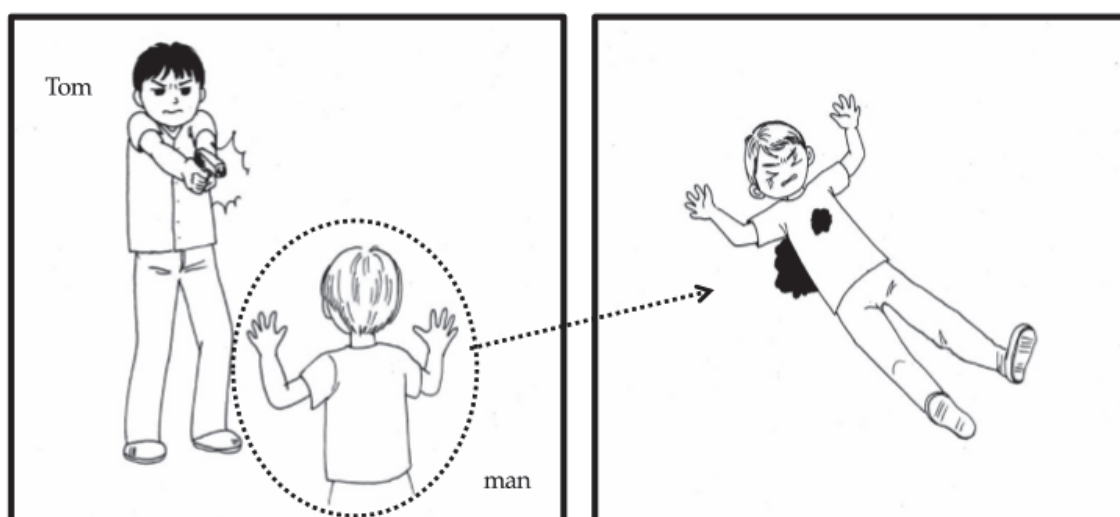
Mike got the letter into pieces by tearing it.

C. 迂言的表现 (v) 強-形-make-and 型
29.



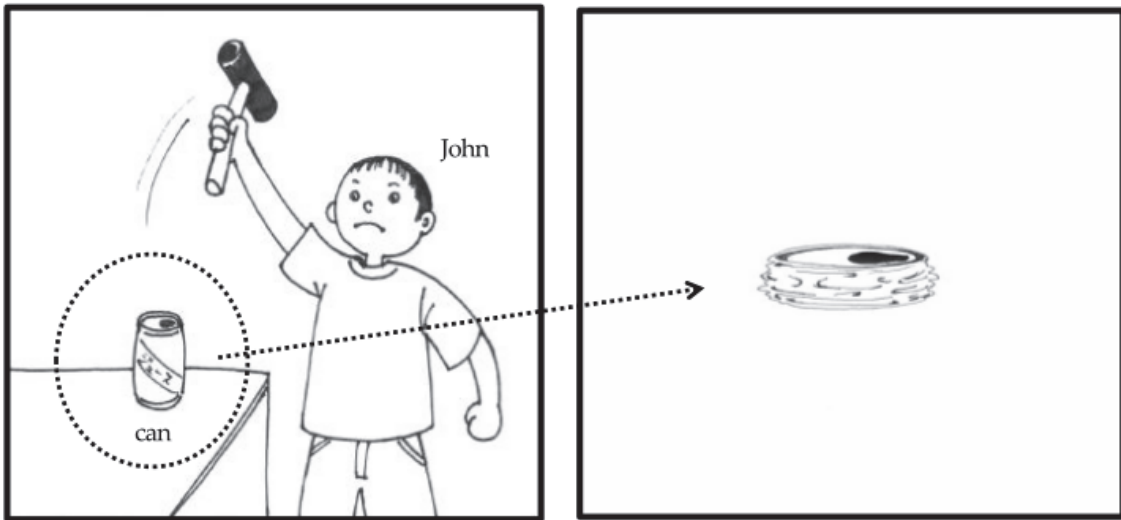
Paul kicked and made the door open.

30.



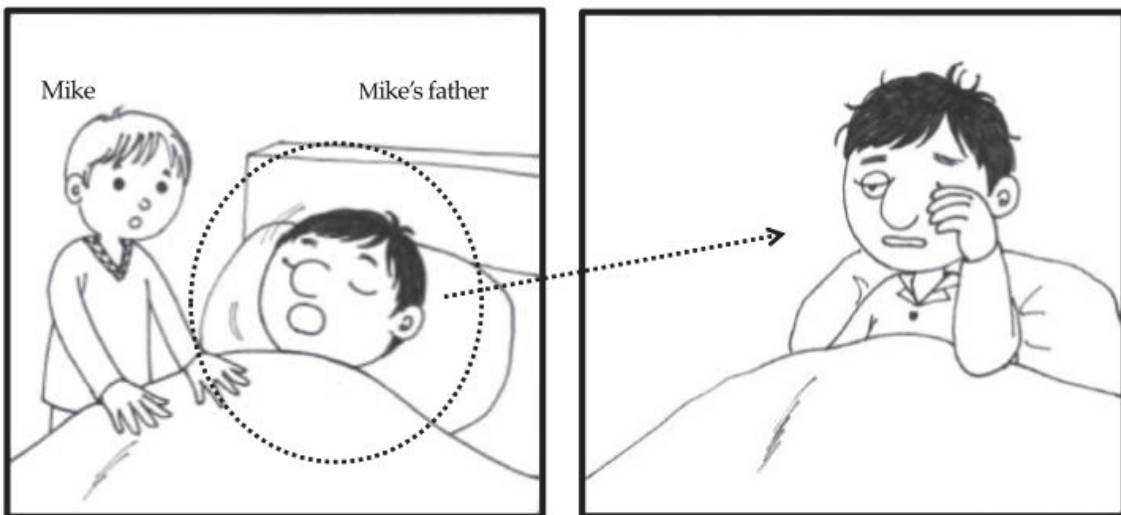
Tom shot and made the man dead.

31.



John hammered and made the can flat.

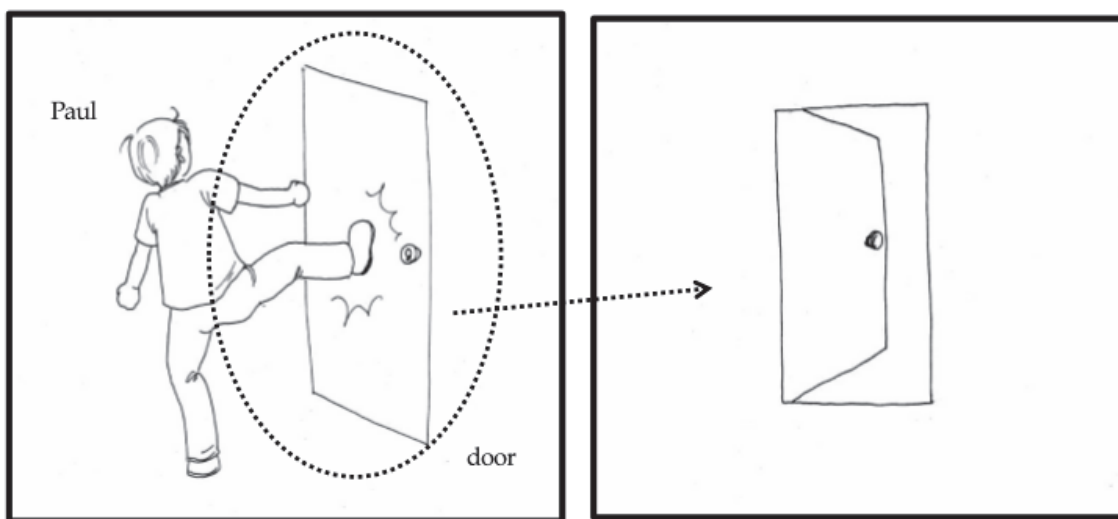
32.



Mike shook and made his father awake.

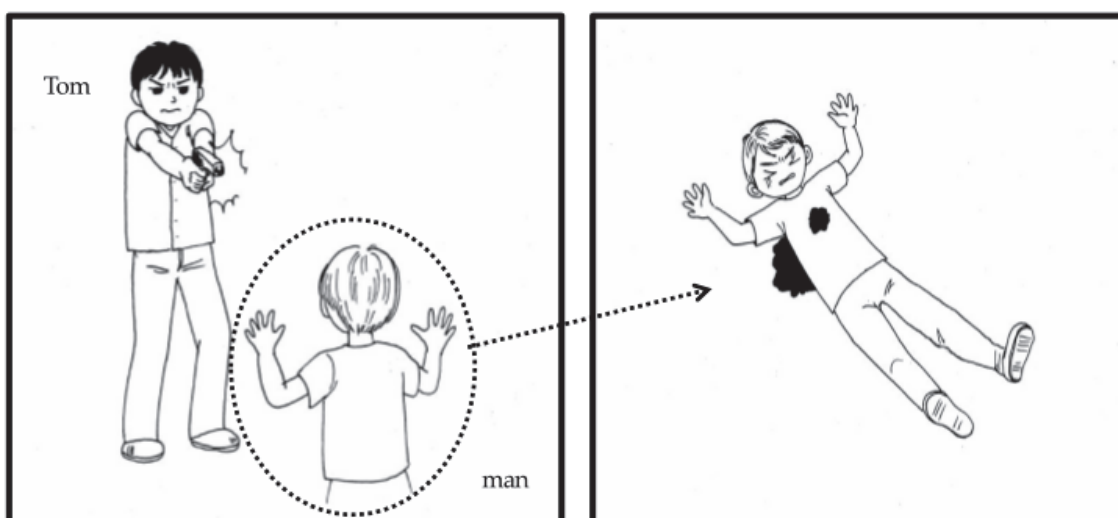
C. 迂言的表现 (vi) 强-形-make-by-ing 型

33.



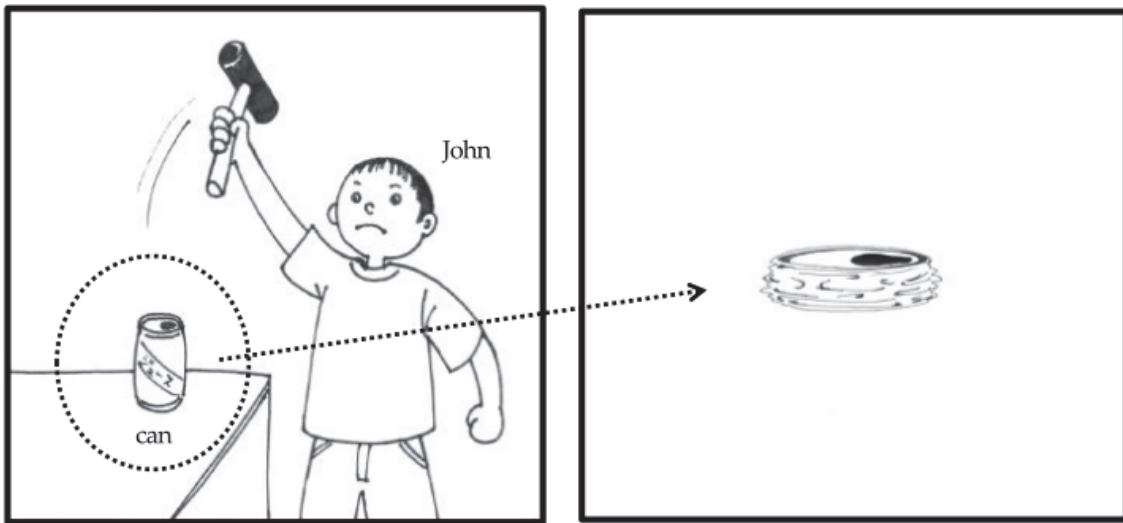
Paul made the door open by kicking it.

34.



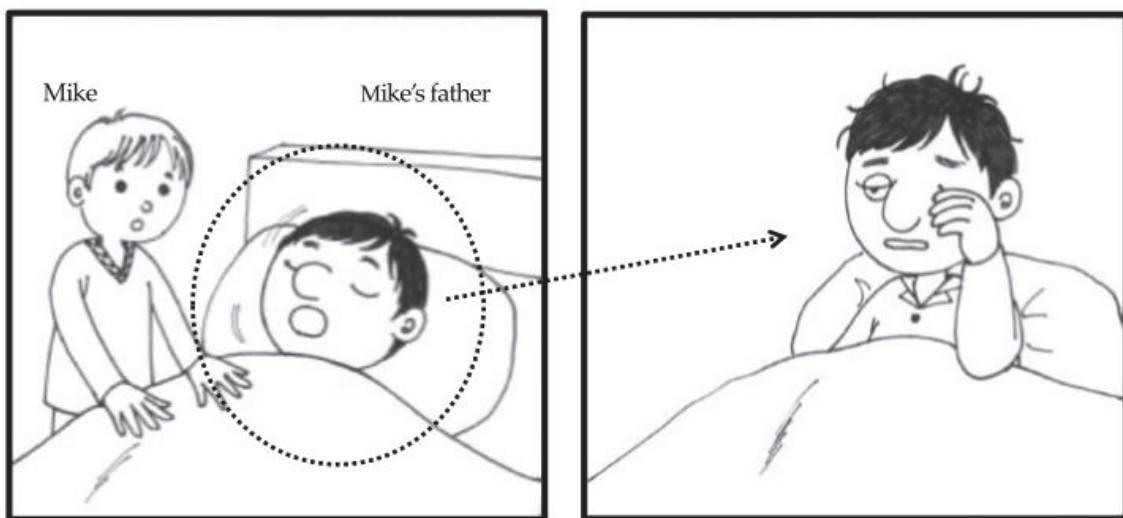
Tom made the man dead by shooting him.

35.



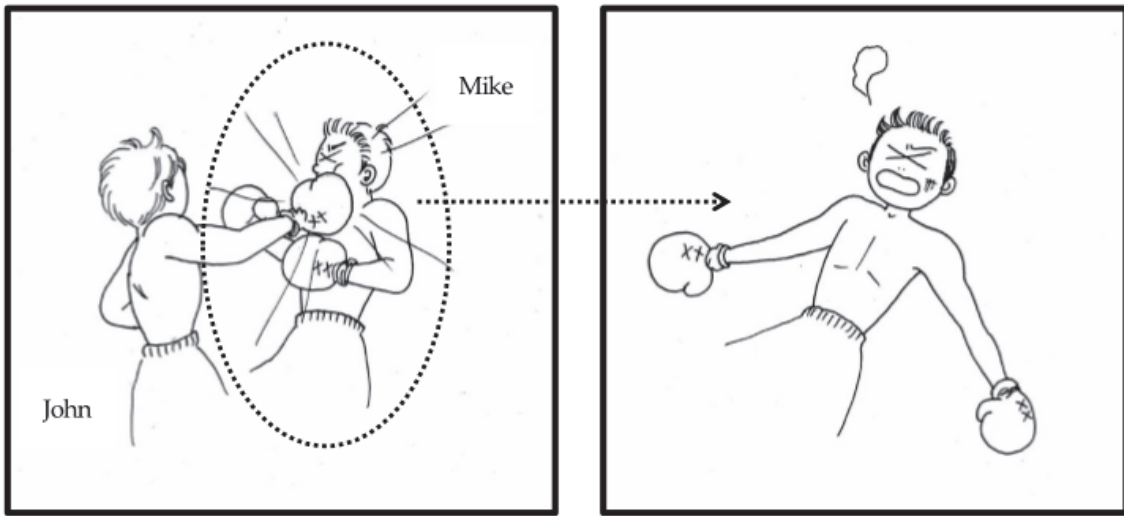
John made the can flat by hammering it.

36.



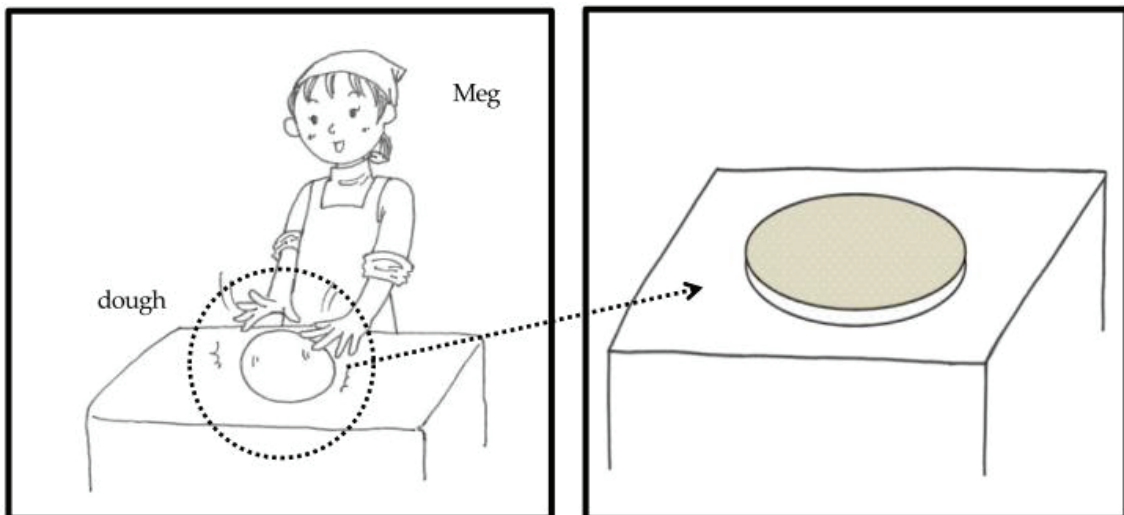
Mike made his father awake by shaking him.

C. 迂言的表现 (vii) 強-前-get-and型
37.



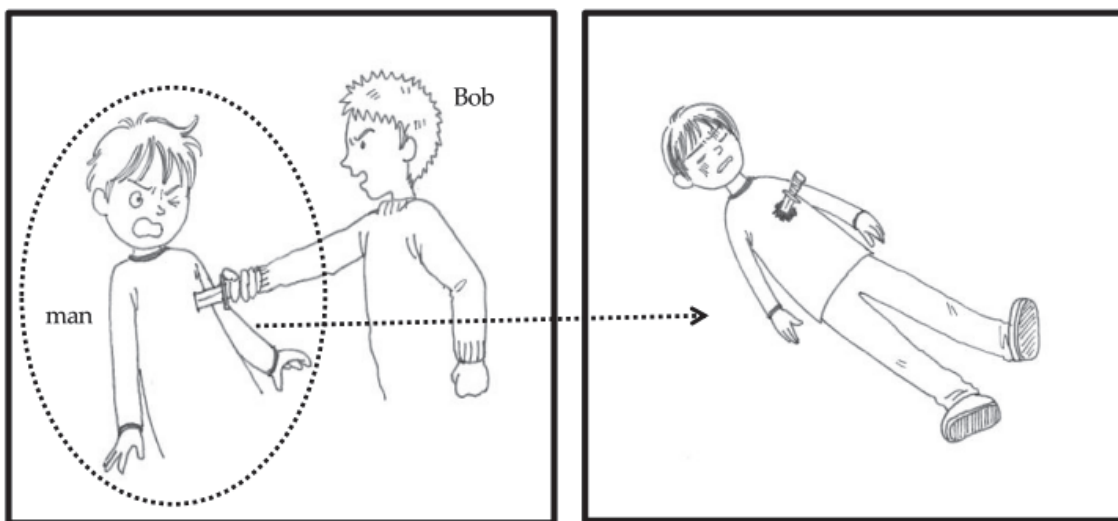
John knocked and got Mike into unconsciousness.

38.



Meg patted and got the dough into a circle.

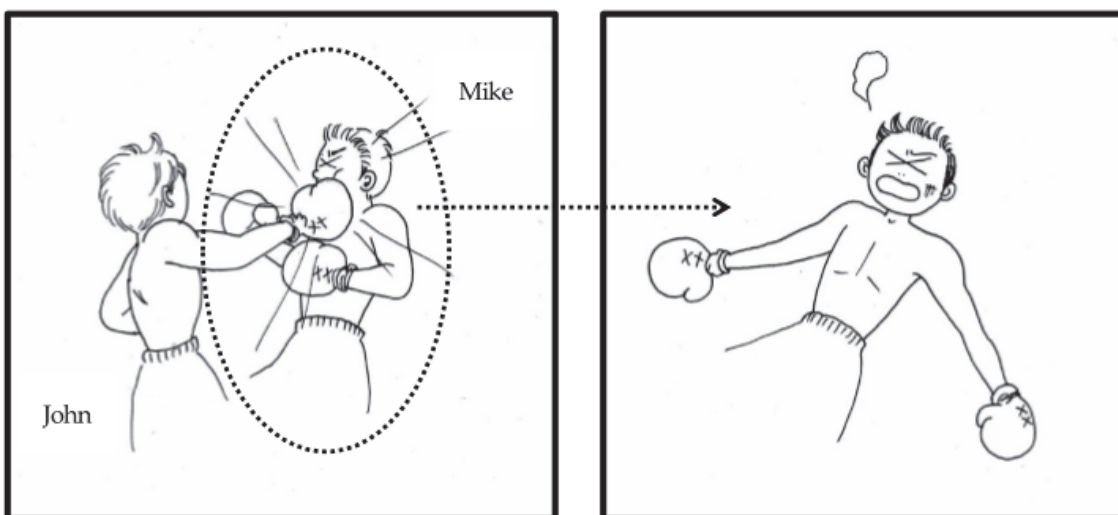
39.



Bob stabbed and got the man to death.

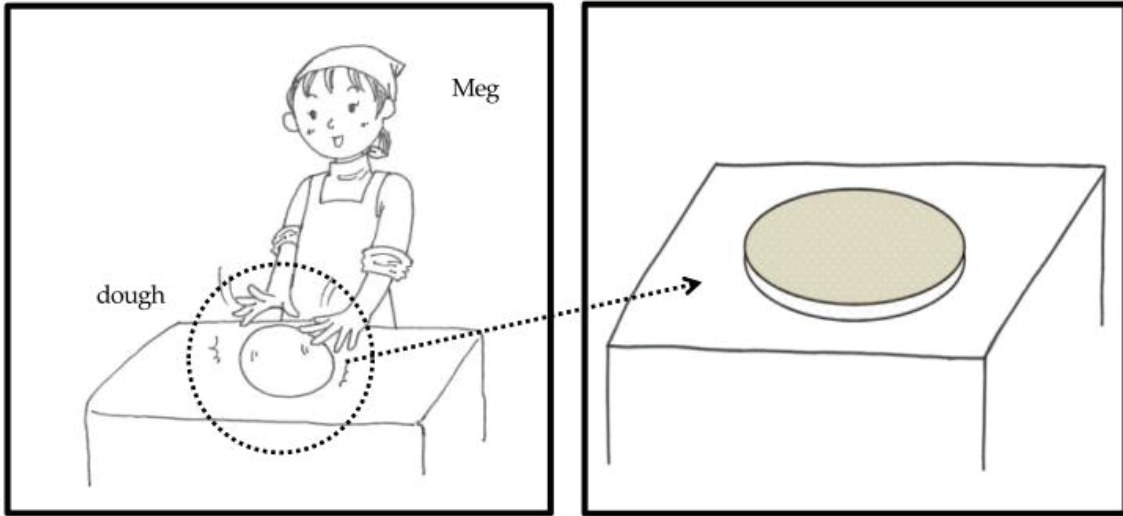
C. 迂言的表现 (viii) 強-前-get-by-ing 型

40.



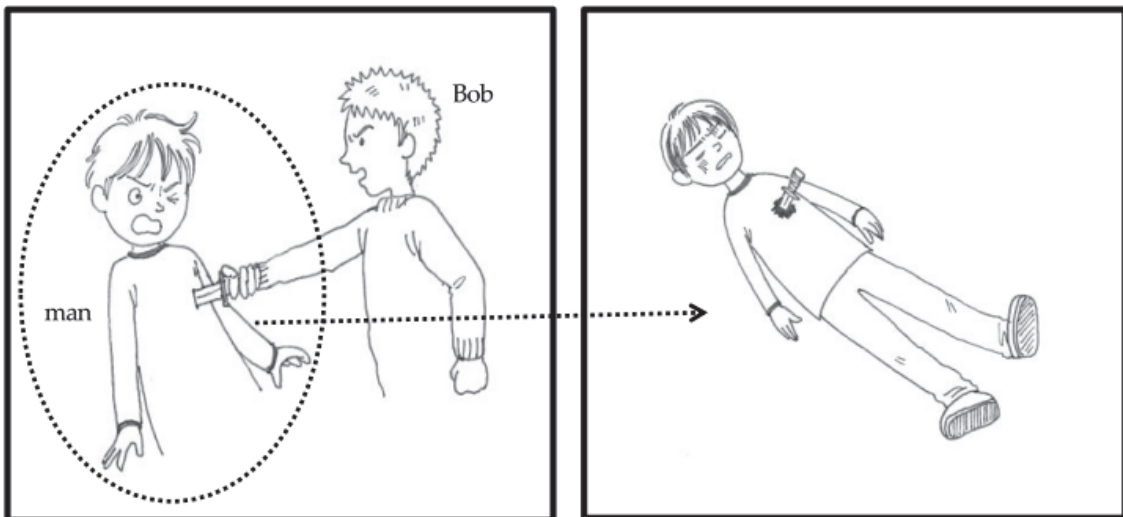
John got Mike into unconsciousness by knocking him.

41.



Meg got the dough into a circle by patting it.

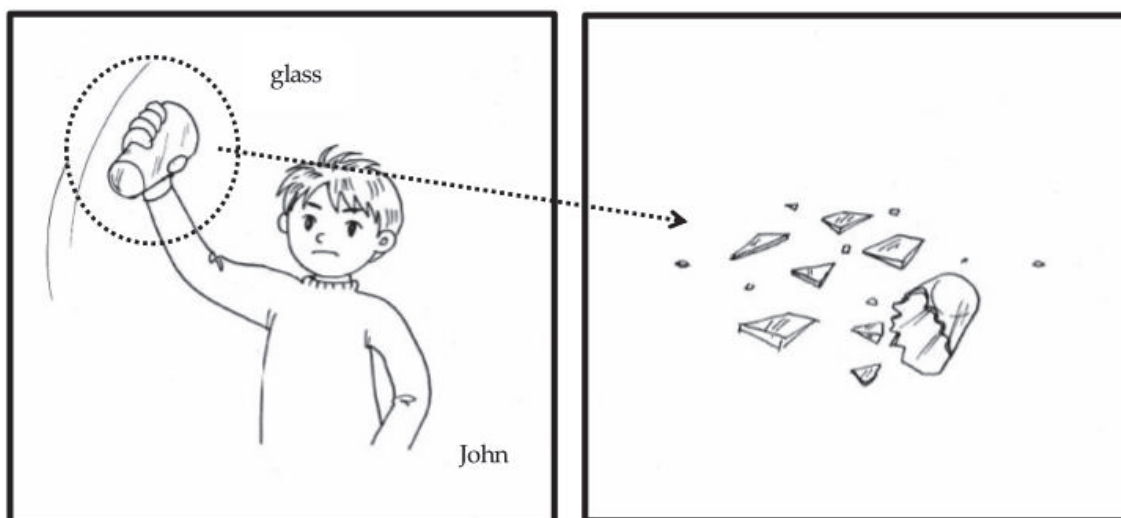
42.



Bob got the man to death by stabbing him.

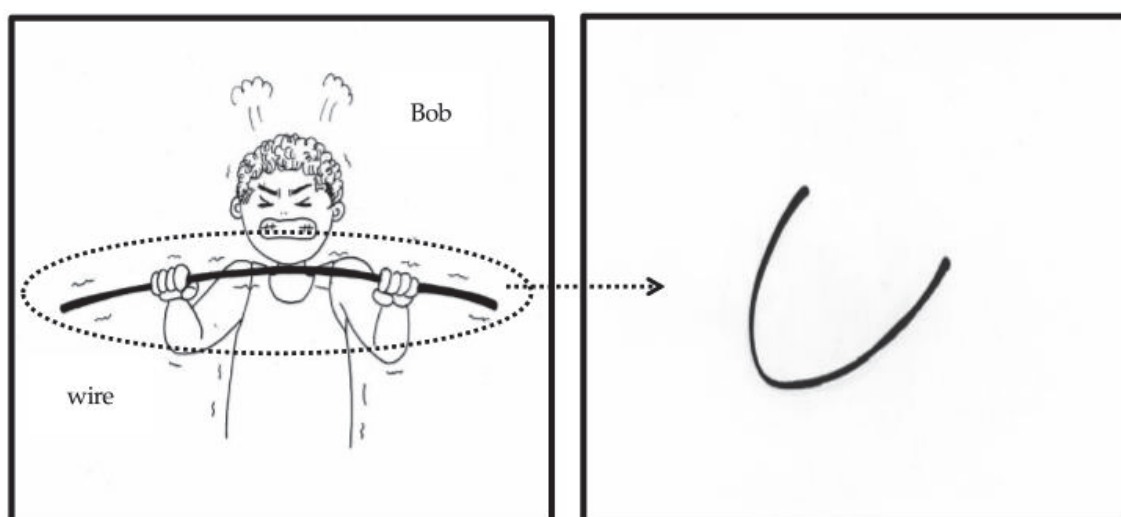
C. 迂言的表现 (ix) 弱-前-make-and 型

43.



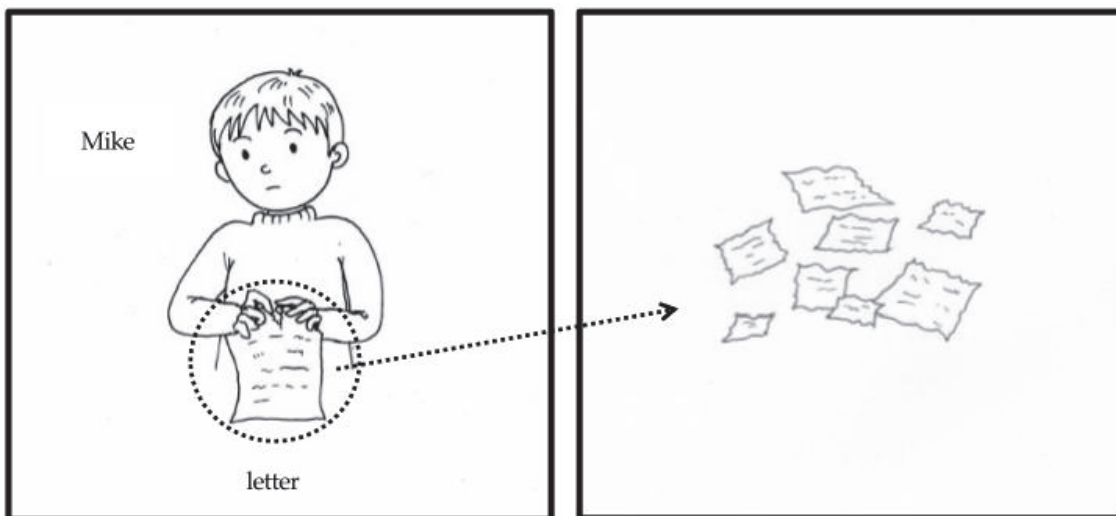
John broke and made the glass into pieces.

44.



Bob bent and made the wire into a U shape.

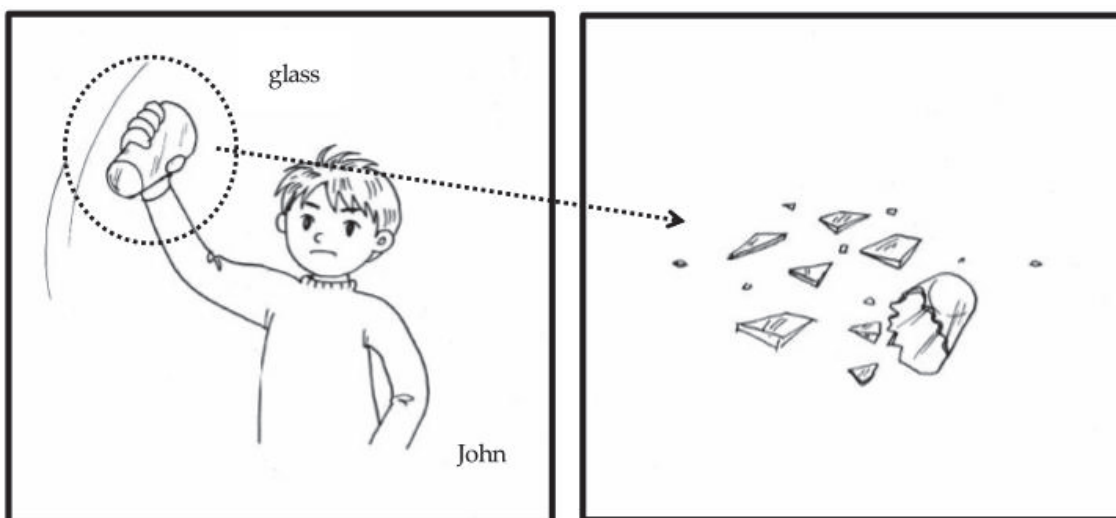
45.



Mike tore and made the letter into pieces.

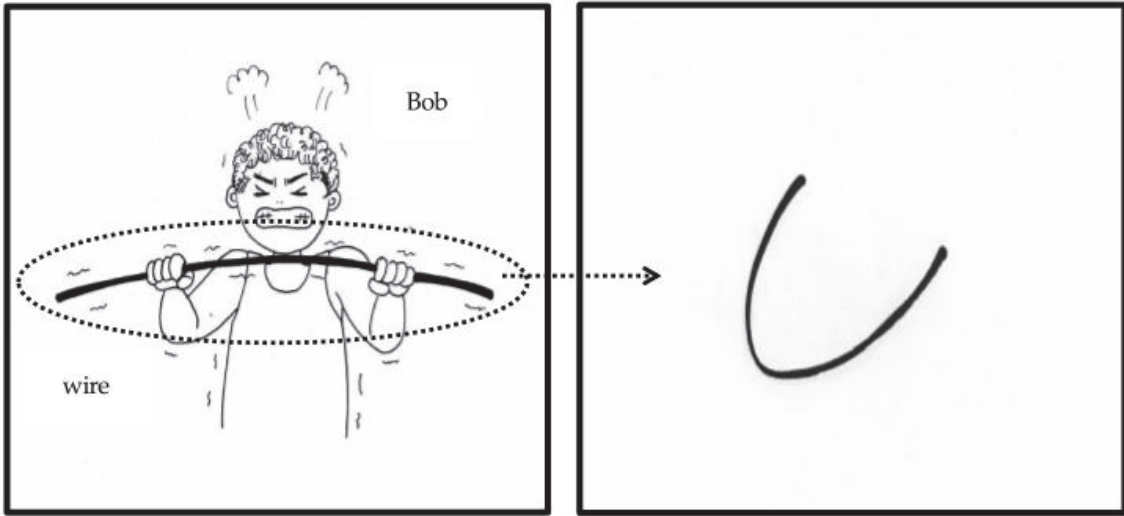
C. 迂言的表现 (x) 弱-前-make-by-ing 型

46.



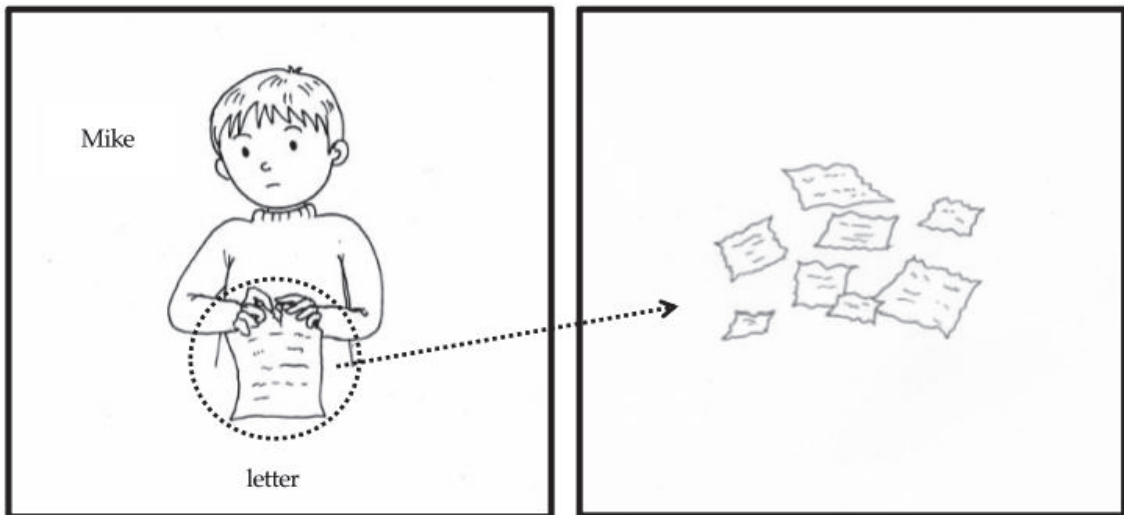
John made the glass into pieces by breaking it.

47.



Bob made the wire into a U shape by bending it.

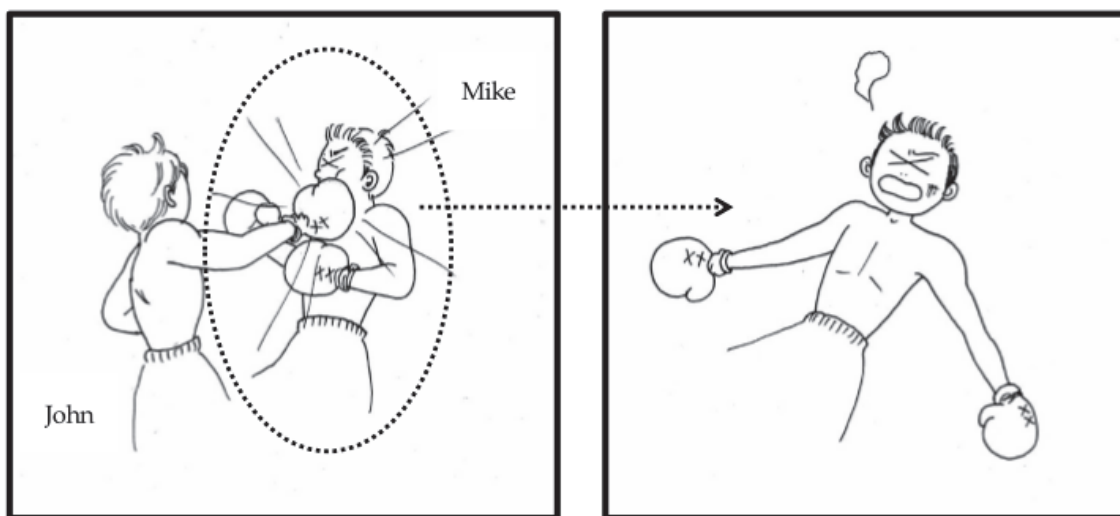
48.



Mike made the letter into pieces by tearing it.

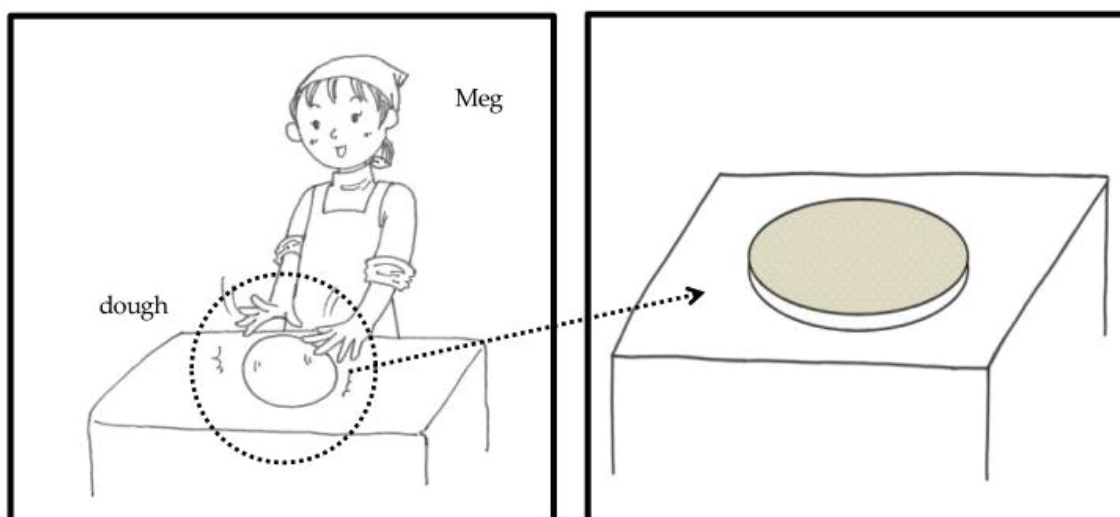
C. 迂言的表现 (xi) 强-前-make-and 型

49.



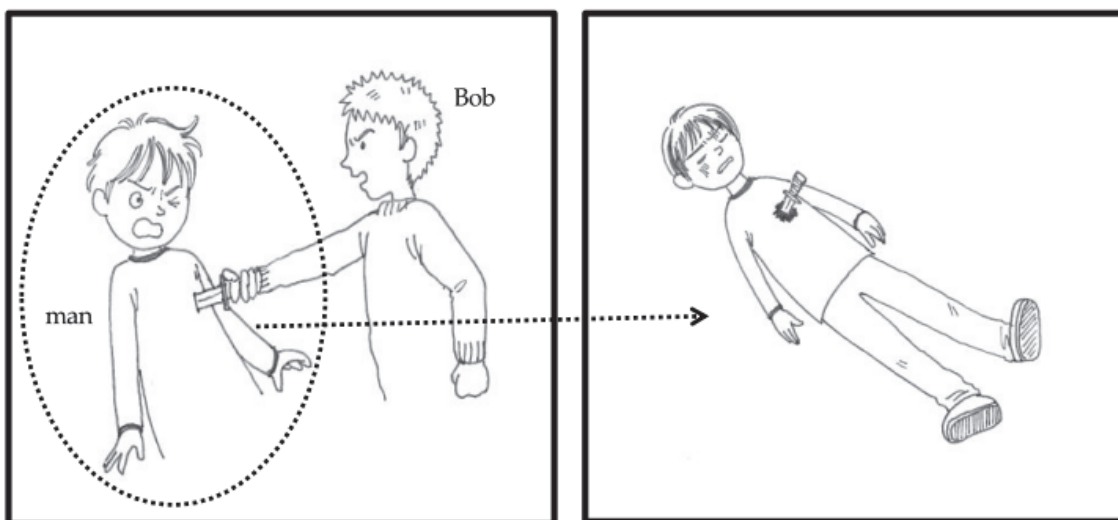
John knocked and made Mike into unconsciousness.

50.



Meg patted and made the dough into a circle.

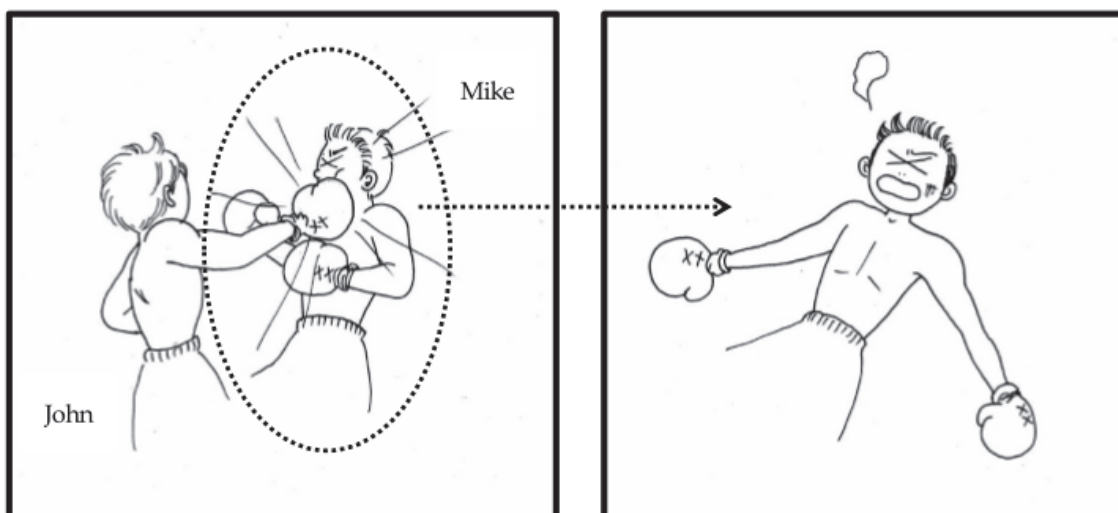
51.



Bob stabbed and made the man to death.

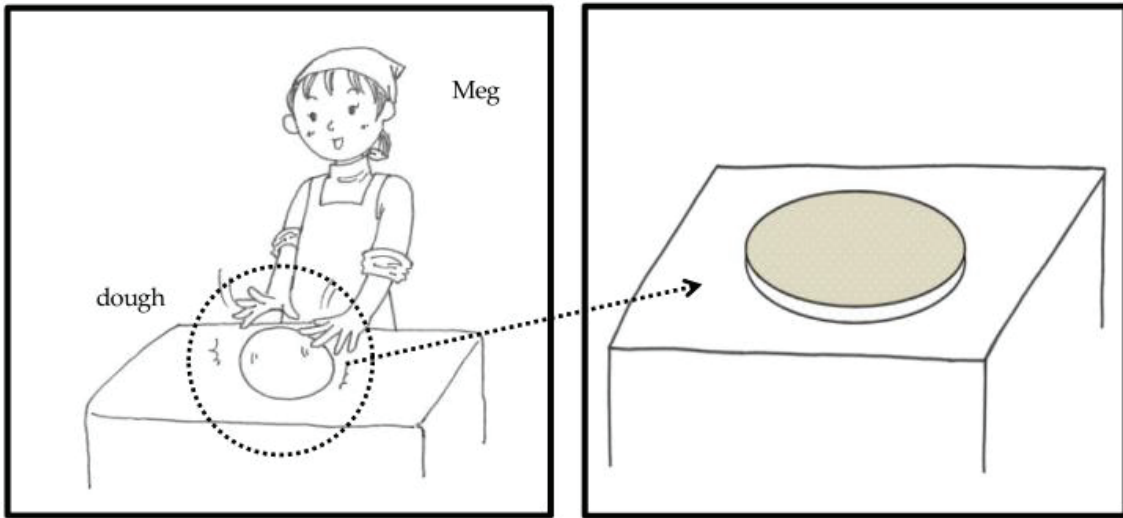
C. 迂言的表现 (xii) 強-前-make-by-ing 型

52.



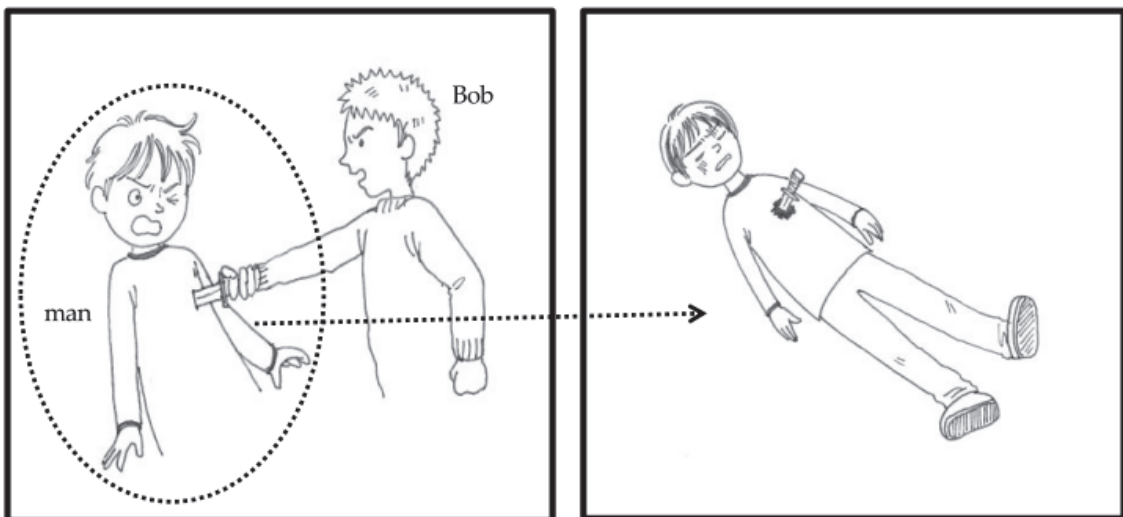
John made Mike into unconsciousness by knocking him.

53.



Meg made the dough into a circle by patting it.

54.



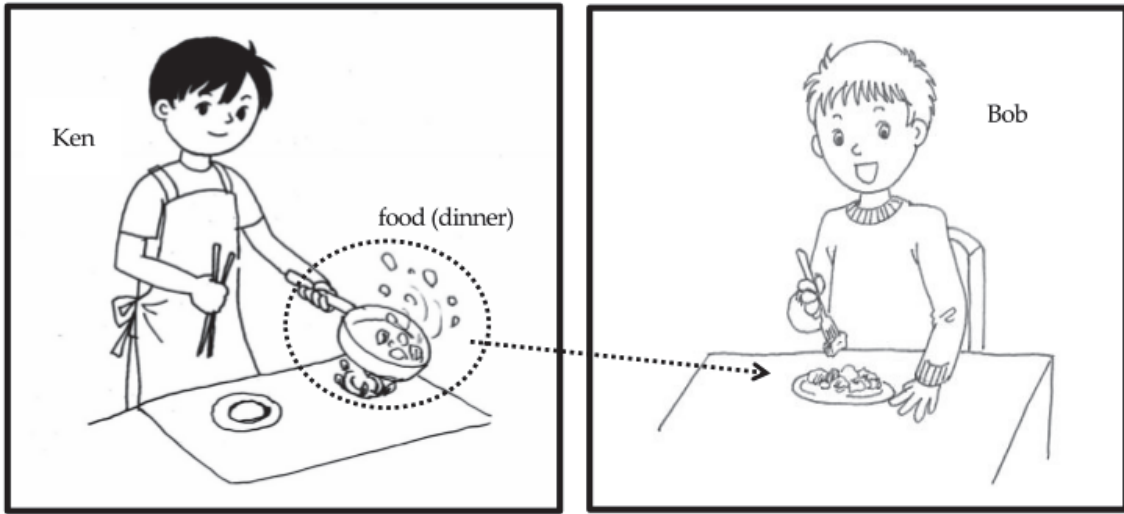
Bob made the man to death by stabbing him.

Appendix 4

授受構文のタスクに使用したテスト文とイラスト

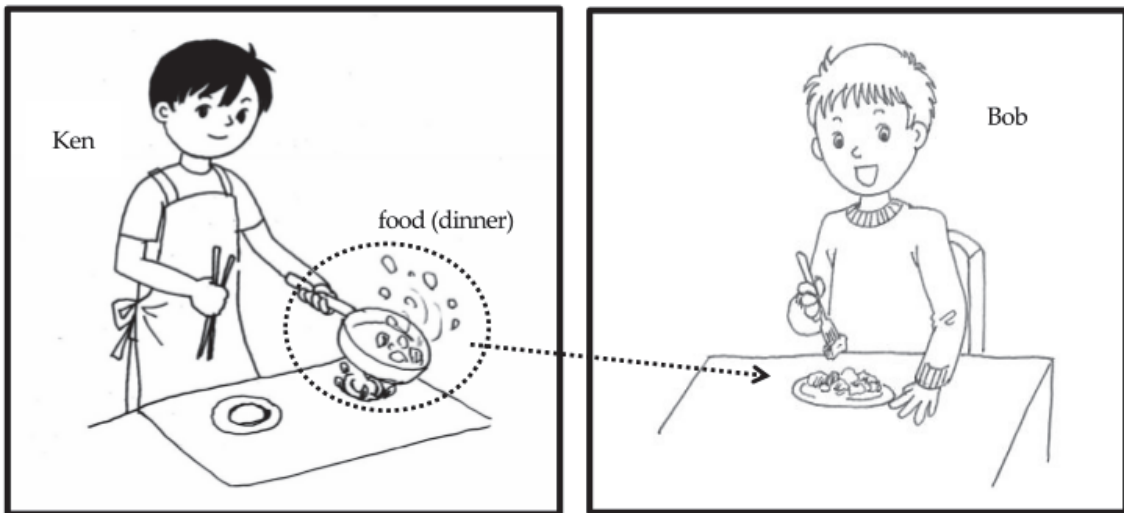
| テスト文のタイプ | 授受動詞 | テスト文 |
|-------------------------|-----------------|---|
| 授受構文とその書き換え表現 (20 文) | cook (10 文) | 1. Ken cooked Bob dinner. |
| | | 2. Ken cooked dinner to Bob. |
| | | 3. Ken cooked dinner for Bob. |
| | | 4. Bob was cooked dinner by Ken. |
| | | 5. Dinner was cooked to Bob by Ken. |
| | | 6. Dinner was cooked for Bob by Ken. |
| | | 7. Bob ate the dinner Ken cooked. |
| | | 8. Bob ate the dinner cooked by Ken. |
| | | 9. Bob ate the dinner which Ken cooked. |
| | | 10. Ken cooked dinner and Bob ate it. |
| | write (10 文) | 11. Mary wrote Tim a letter. |
| | | 12. Mary wrote a letter to Tim. |
| | | 13. Mary wrote a letter for Tim. |
| | | 14. Tim was written a letter by Mary. |
| | | 15. A letter was written to Tim by Mary. |
| | | 16. A letter was written for Tim by Mary. |
| | | 17. Tim read the letter Mary wrote. |
| | | 18. Tim read the letter written by Mary. |
| | | 19. Tim read the letter which Mary wrote. |
| | | 20. Mary wrote a letter and Tim read it. |

1.



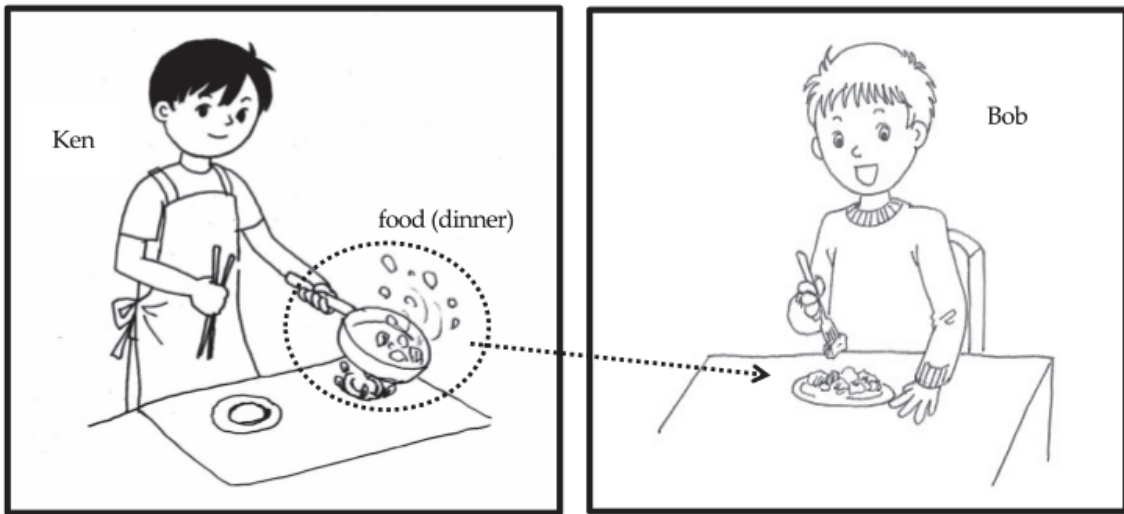
Ken cooked Bob dinner.

2.



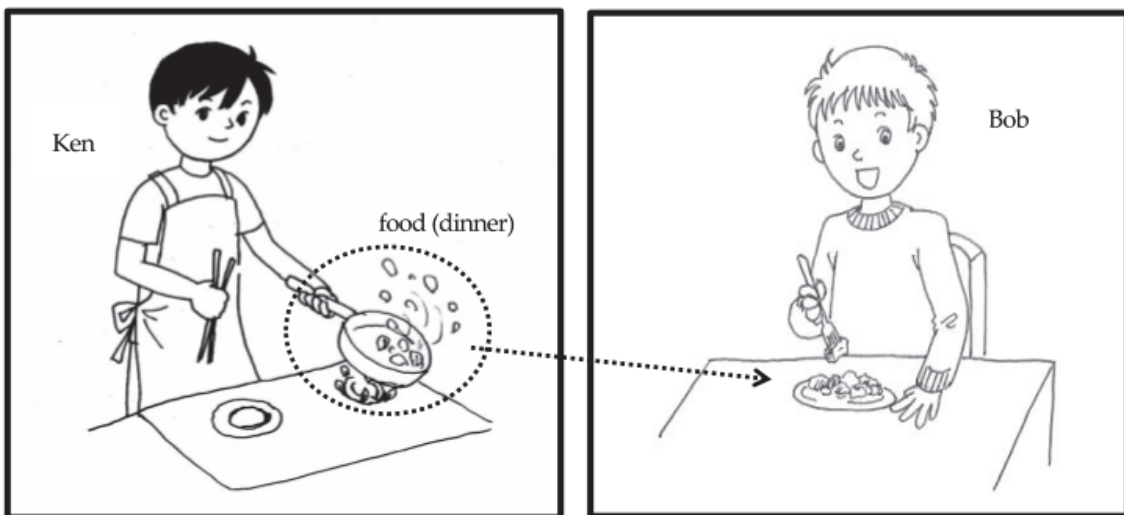
Ken cooked dinner to Bob.

3.



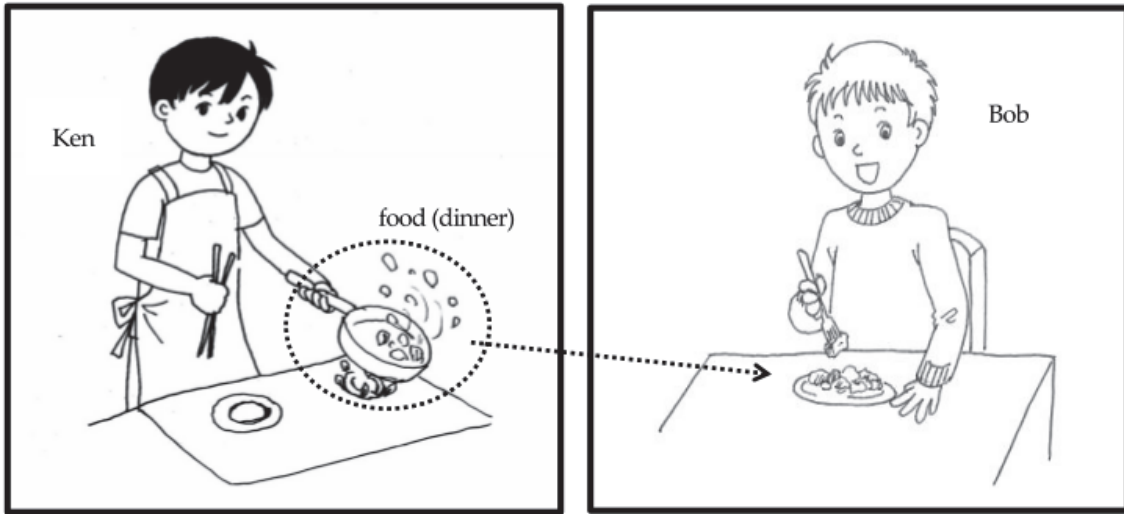
Ken cooked dinner for Bob.

4.



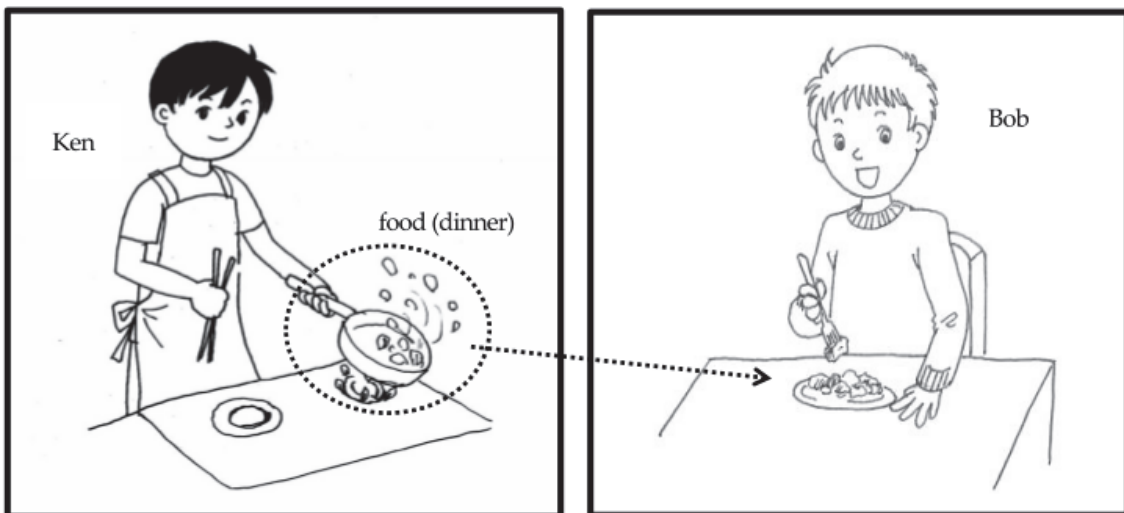
Bob was cooked dinner by Ken.

5.



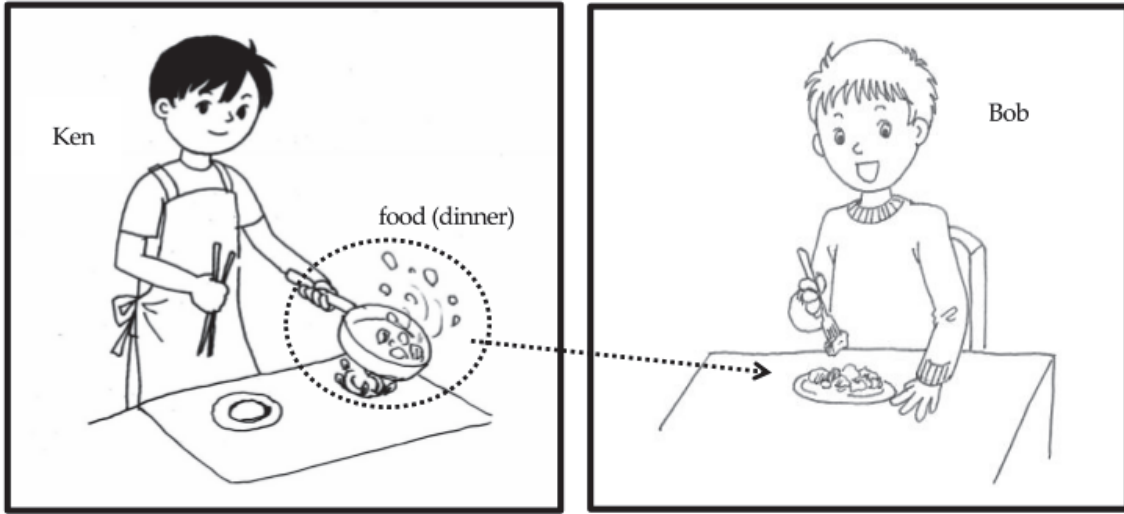
Dinner was cooked to Bob by Ken.

6.



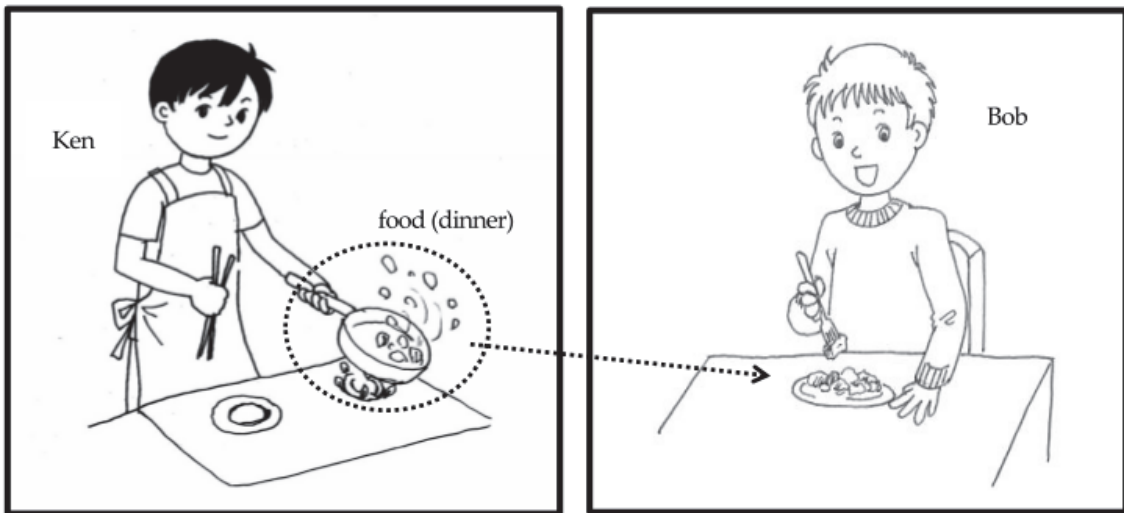
Dinner was cooked for Bob by Ken.

7.



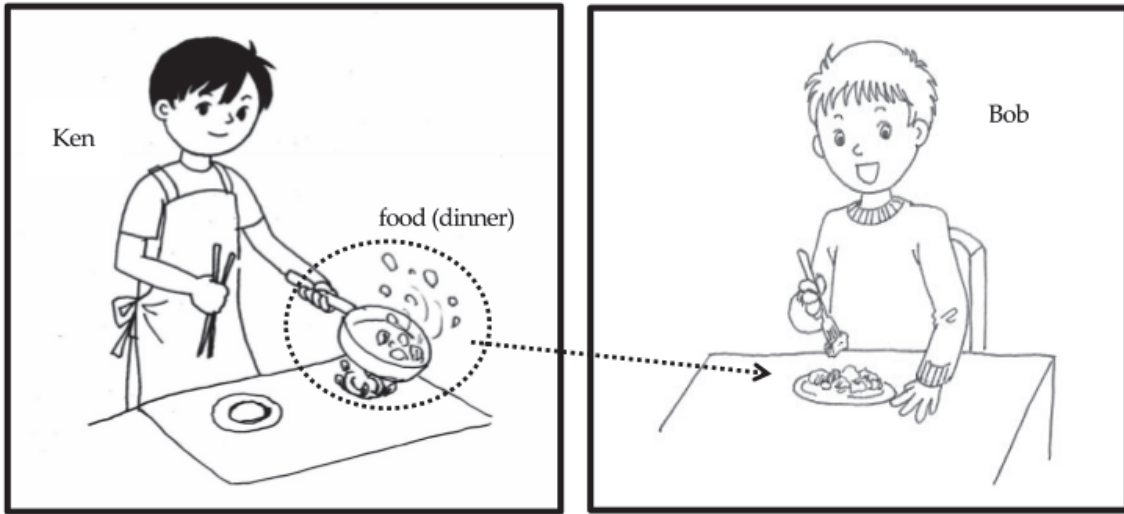
Bob ate the dinner Ken cooked.

8.



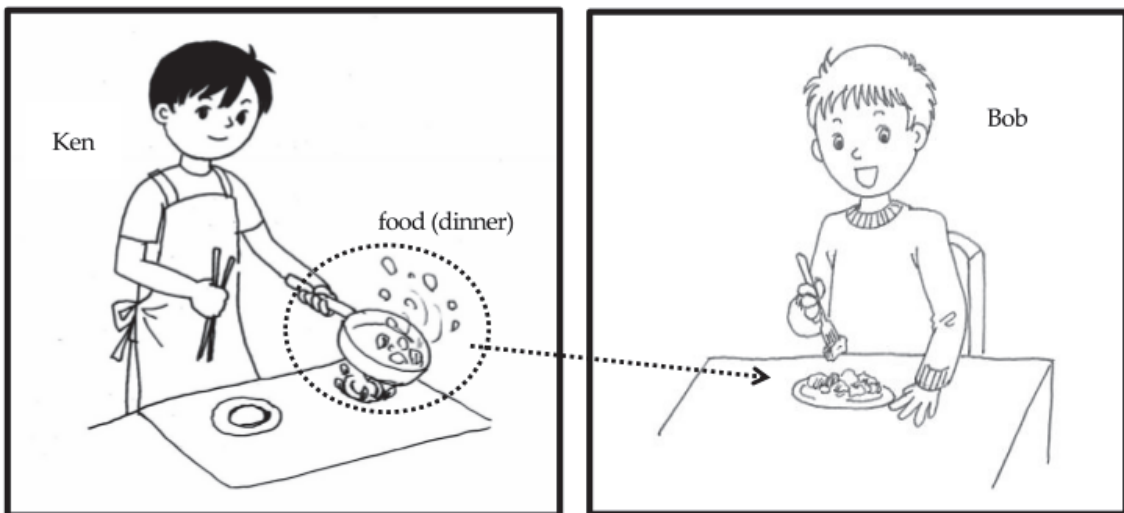
Bob ate the dinner cooked by Ken.

9.



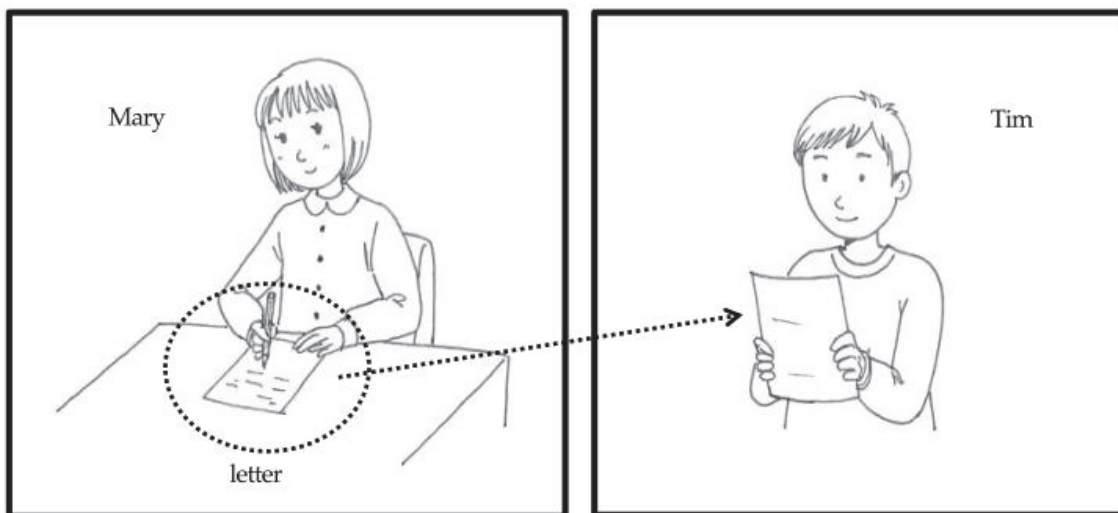
Bob ate the dinner which Ken cooked.

10.



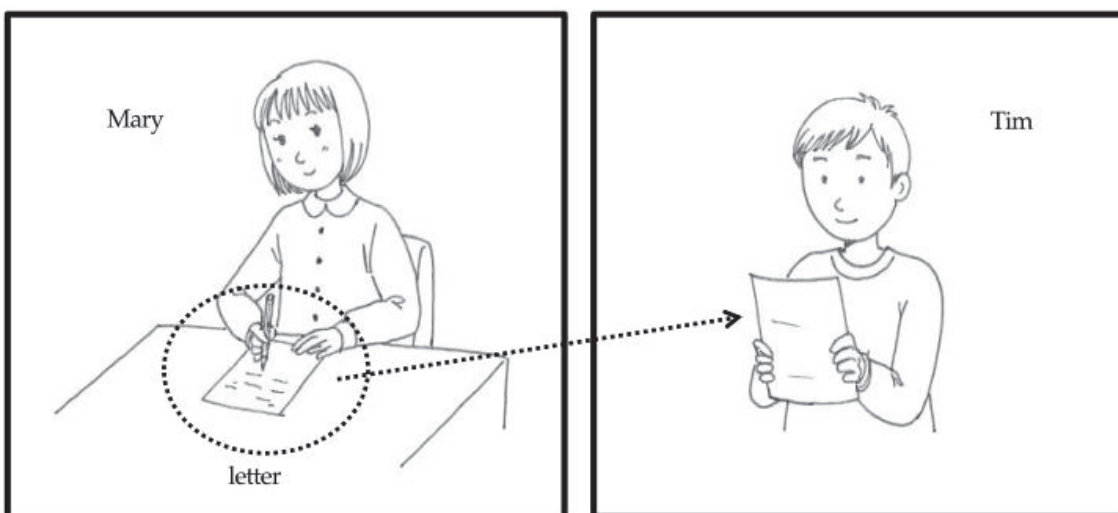
Ken cooked dinner and Bob ate it.

11.



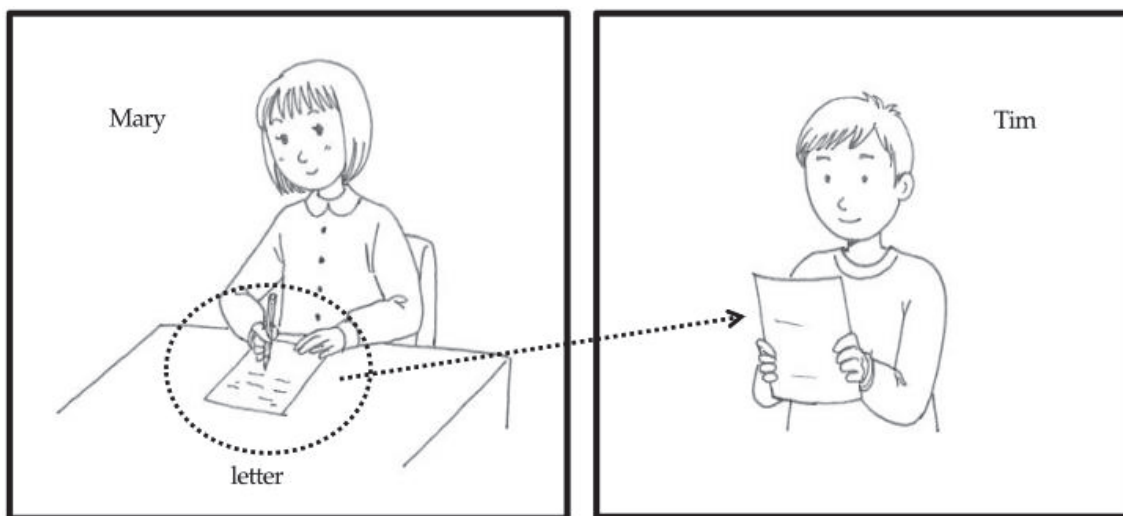
Mary wrote Tim a letter.

12.



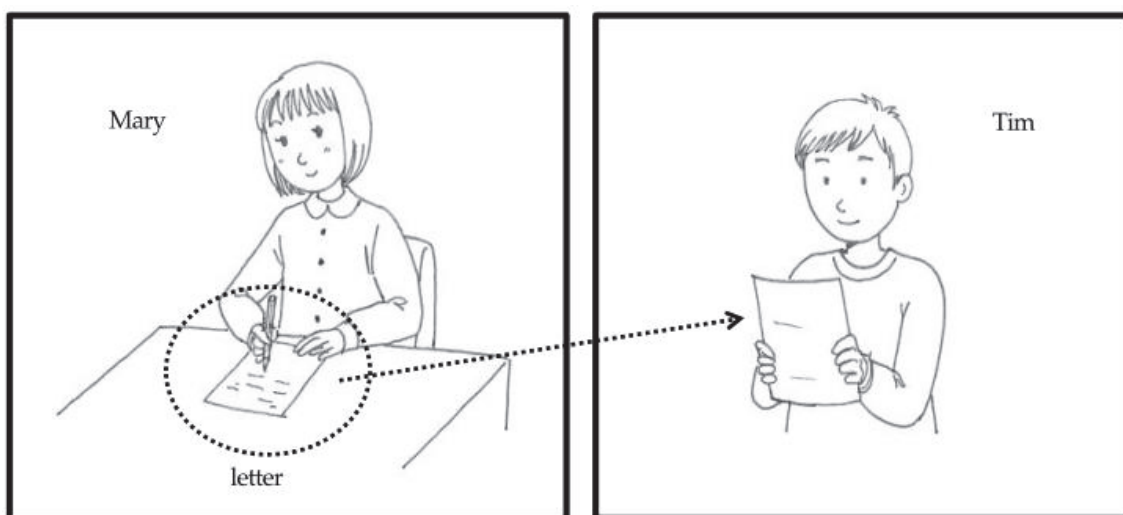
Mary wrote a letter to Tim.

13.



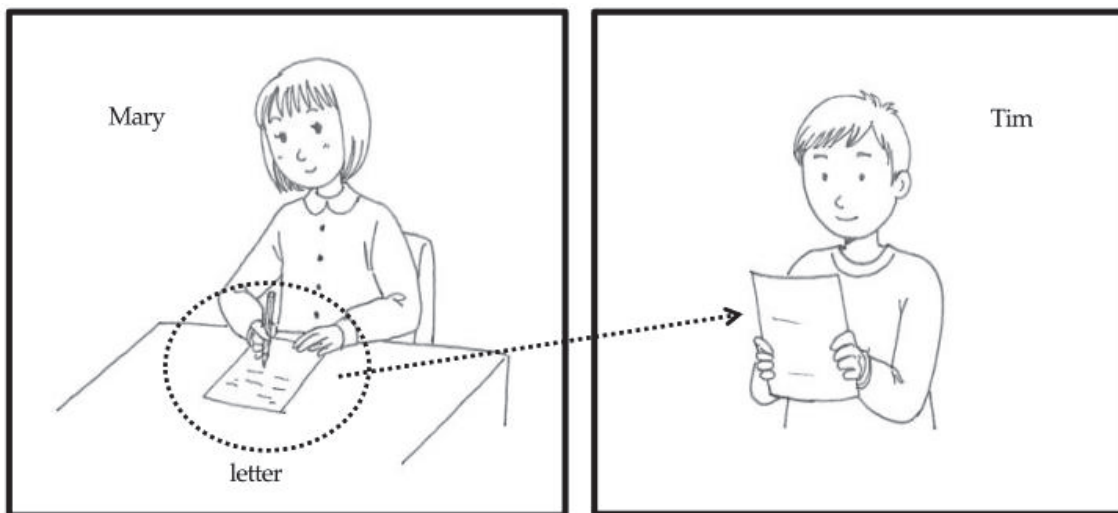
Mary wrote a letter for Tim.

14.



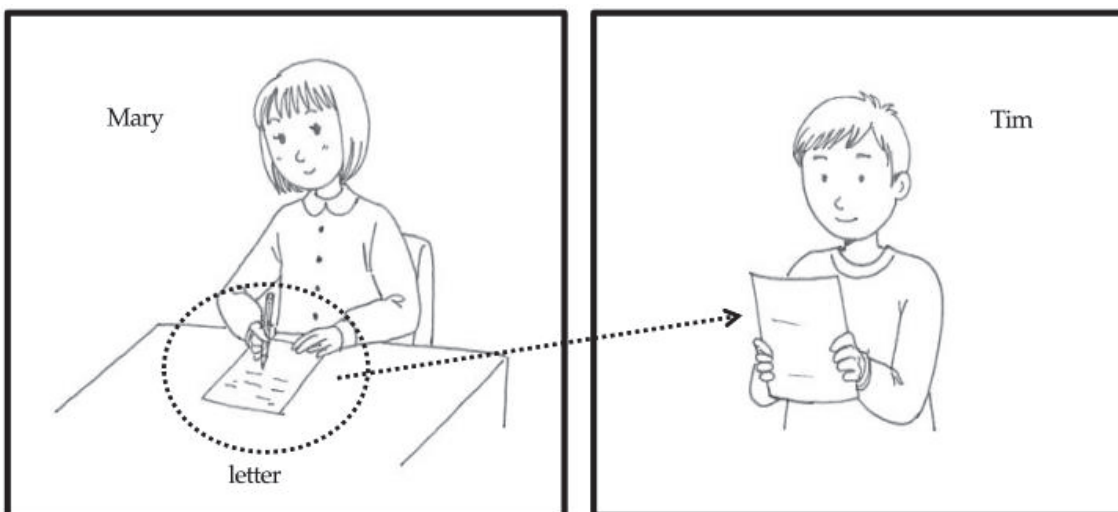
Tim was written a letter by Mary.

15.



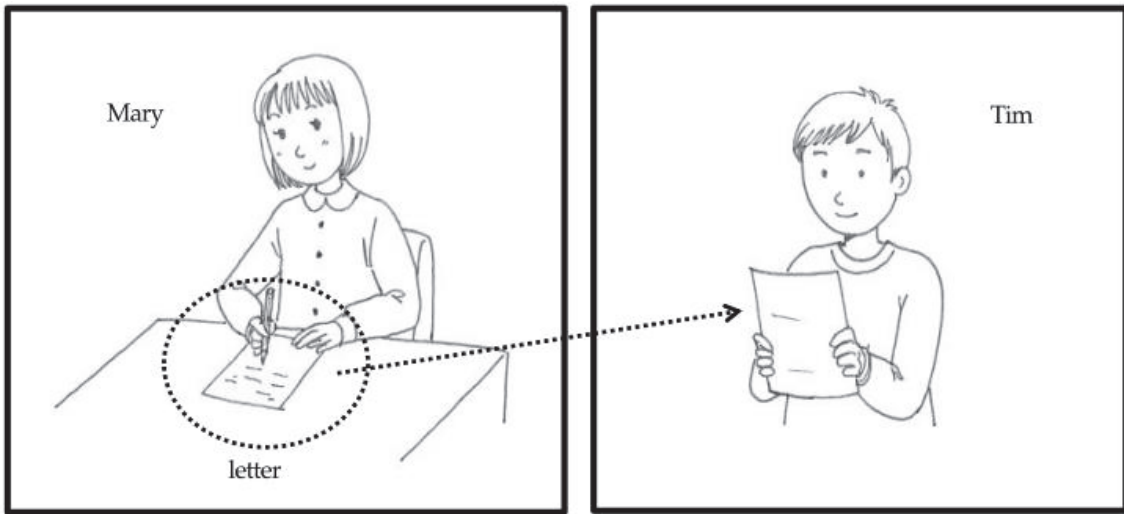
A letter was written to Tim by Mary.

16.



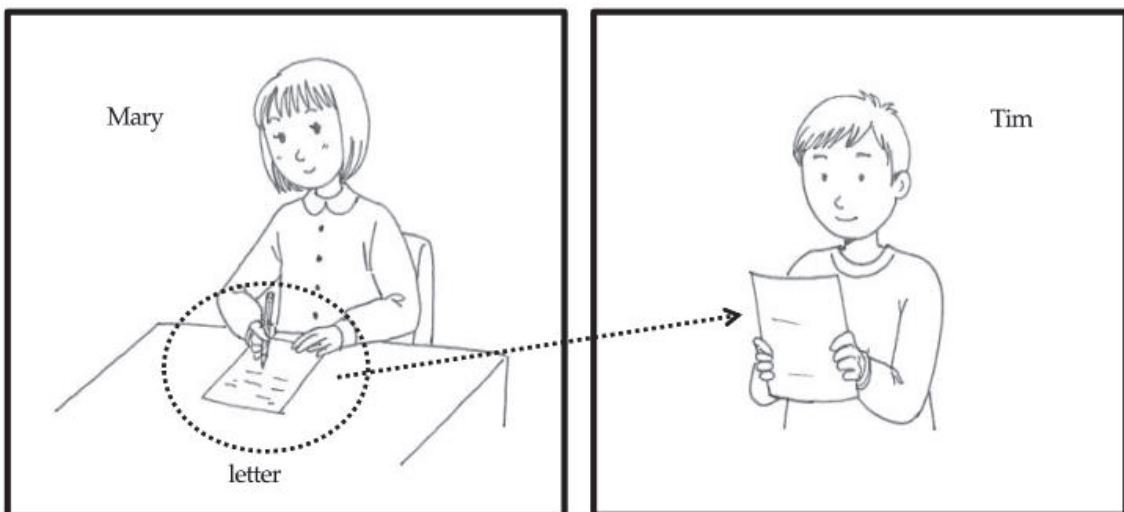
A letter was written for Tim by Mary.

17.



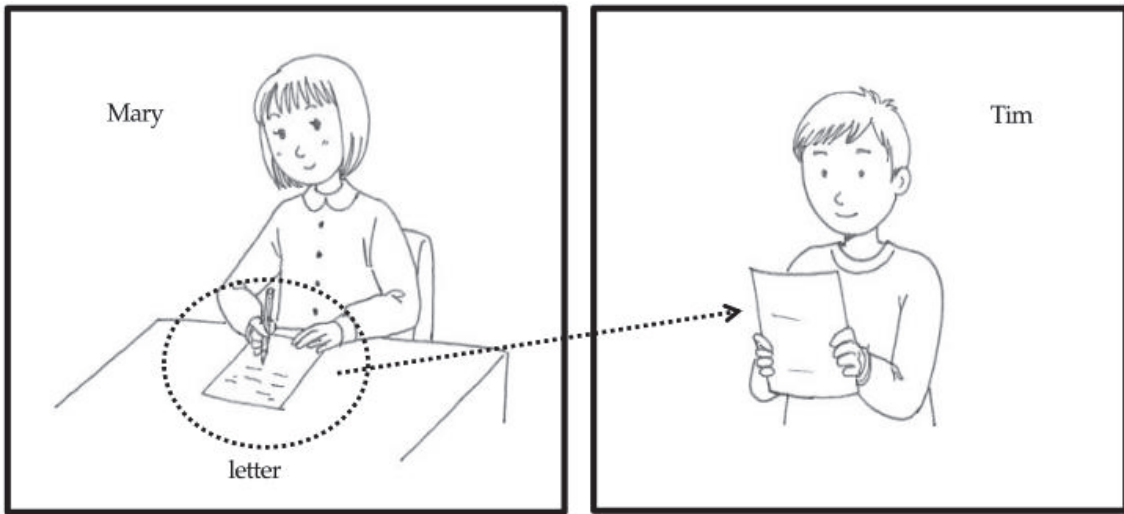
Tim read the letter Mary wrote.

18.



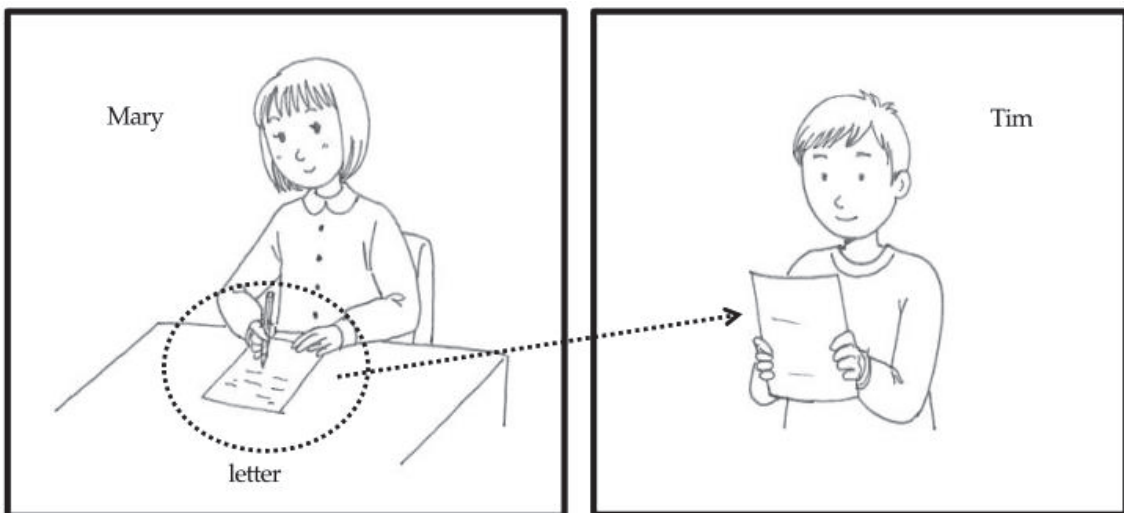
Tim read the letter written by Mary.

19.



Tim read the letter which Mary wrote.

20.



Mary wrote a letter and Tim read it.

Appendix 5

計算問題のタスク

1.

$$x + 357 = 52x$$

$$x = \underline{\hspace{2cm}}$$

(Z) 答えが分からない。

2.

$$15 \times 6 = (x + 9) \times 5$$

$$x = \underline{\hspace{2cm}}$$

(Z) 答えが分からない。

3.

$$x \div 14 + 5 = 11$$

$$x = \underline{\hspace{2cm}}$$

(Z) 答えが分からない。

4.

$$24 \times 3 = (x + 6) \times 8$$

$$x = \underline{\hspace{2cm}}$$

(Z) 答えが分からない。

5.

$$15 \div 9 = 27x \div 81$$

$$x = \underline{\hspace{2cm}}$$

(Z) 答えが分からない。

6.

$$34 + 40 \times 3 + 15 = 13x$$

$$x = \underline{\hspace{2cm}}$$

(Z) 答えが分からない。

7.

$$95 - 9x = 8 \times 4$$

$$x = \underline{\hspace{2cm}}$$

(Z) 答えが分からない。

8.

$$(x - 6) \times (16 - 7) = 63$$

$$x = \underline{\hspace{2cm}}$$

(Z) 答えが分からない。

9.

$$1000 - x = 660 - (220 - 230)$$

$$x = \underline{\hspace{2cm}}$$

(Z) 答えが分からない。

10.

$$3 = (x - 29) \div 2$$

$$x = \underline{\hspace{2cm}}$$

(Z) 答えが分からない。